THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿七年　第十號

第二百八十三號

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

鹿野千代夫先生編

乃木大將言行錄

乃木大將肖像筆蹟
高貴寫眞數葉挿入
正價壹圓
特價八拾錢
送費八錢

嗚呼！軍神逝けり矣

其志や忠誠其意氣や壯烈、日本國民の典型として、我が武士道の權化として、公明正大の偉人格と、世界史上に赫奕たる偉勳功業と、永く萬民崇憬の中心となれる乃木大將は、嗚呼明治天皇の聖靈に殉ひまつりて、大君に捧げまつれる最後の恪勤を全ふせられぬ。國民は不幸にも、更らに新たなる涙に咽ばざるを得ざりき、本書は此の仰ぐべき大將が光輝ある人格閲歴頽と、模範とすべき逸事言行とを傳へて現時の敗せる士氣を作興し、兼ねて國民が人格修養の鍼となせる一大好著にして、日本國民たるものが、必ず一讀すべき好記念書也。

◉黑岩周六先生『乃木大將の自殺を聞きて』と題する長論文附添

(前十の一)

東京市神田今川橋大通　東亞堂　振替東京一七一一番　電話本局八四八番

信用なき店舗及び卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

學講義錄

本講義の特色

政治經濟科は吾邦唯一の獨習機關にして立憲國民たるの修養を與ふるを主眼とし一面各種受驗者及經世に志す者の參考たらしむ**法律科**は公私諸法に涉り斬新の法理を極めて實際的に解說す就中擔當講師には司法官、辯護士、高等文官等各種試驗委員を網羅したれば隨て此等受驗者を益するや大なるや必せり**文學科**は世に定評ある本大學文科の學課に準據し兼て教員檢定試驗の準備に必要なる諸學課を參酌して成れるもの、是亦本邦唯一の講義錄なり（各科共十八ヶ月の短時日を以て卒業せしむ）

▲卒業者は本大學入無試驗・入學及上級の編入・特典あり▼

見本つき規則書無代送呈

言語原理及批判　文學士　藤井健治郎
教育學　文學士　大瀨甚太郎
教授法　講師　樋口勘治郎
哲學概論　文學士　紀平正美
普通心理學　文學士　雀部顯宜
文學概論　教授　島村瀧太郎
歐州近代文藝思潮　講師　相馬昌治
國文學發達史　教授　永井一孝

西洋美術史　本間久雄
國語學通論　文學博士　金澤庄三郎
應用支那文典　講師　廣池千九郎
古事記選釋　文學士　千秋季隆
萬葉集講義　文學士　岡田正美
近古文評釋　松井簡治
大鏡增鏡選譯　種村宗八
源氏枕草子選釋　教授　永井一孝

俳句評釋　文學士　阪本四方太
四書小學講義　教授　牧野謙次郎
左傳講義　教授　松平康國
史記講義　教授　松平康國
唐宋文評釋　文學士　丸井圭治郎
唐詩選釋　教授　桂五十郎
支那時文講義　教授　青柳篤恒
科外（文學科初學須知、講義錄辭解及研究）（法、檢定試驗問題擬答、創作評論等）

早稻田中學講義（貳年修了）

早稻田商業講義（壹年半修了）

上記二種の講義錄亦此際新に校外生を募集し入學者には第一號より配本す希望者は速に申込るべし

詳細規則書申込次第送呈

東京牛込早稻田
振替東京一一二三番

早稻田大學出版部

國家青年

東亞之光編輯主任 浦谷熊吉編纂

定價金九十五錢 郵稅金八錢

眞面目に我が國家の現時勢を知り、自己を反省し、而して自己及び國家の將來を思ふの青年は勿論、亦先輩の能く當に一讀すべき書也。

東京小石川原町八十七 淡海學舍發行 ◎ 東京神田表神保町 東京堂大賣捌

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

萬代不朽の記念

太陽定期號

御大葬記念號

口繪及插畫

○御大葬印象（結城素明謹寫）＝原色版○御大葬鹵簿＝當夜拜撮の寫眞十六種を特撰し、居ながらにして眞光景を拜觀するの思あらむ。
▽二重橋畔の篝火＝二色版……▽森嚴なる青山葬場殿……▽桃山御葬列＝十四種を特撰して謹載す、最も鮮明にして壯嚴。……
▽靈柩列車沿道御着の光景……▽櫻田門外の弔砲禮……▽御大葬御道筋＝口繪及插畫數十種……
▽列國特派大使紀念撮影……▽各種奉送團體（數十種）……▽各國捧献の花輪……▽其他刷込寫眞挿畫無數……

正價 四拾五錢 郵税四錢

紙數 普通號一倍半

●御大葬參列所感

……姉崎博士、國府犀東、末松子爵、阪谷男爵、坪谷水哉 諸氏謹記

▽靈轜奉拜の記……笹川種郎
▽特種奉拜の記……巖谷小波
▽明治天皇と武事……船越男爵
▽桃山奉送の記……小川煙村
▽諒闇の涙……池邊義象
▽皇室と叡山……不二門智光
▽千古の哀感……大岡育造
▽乃木大將の自刄……淺田江村

▽大葬の鹵簿を拜し奉るの記……遲塚麗水
▽御大喪に現はれし日本人の特質……關直彦
▽明治の回顧大正の警策……建部博士
▽馬術の御研究と御練達……藤波子爵
▽先帝の御倹徳を偲び奉る御逸話……多田好問
▽聖德記念の根本問題……平沼淑郎
▽御陵參行戸田大和寺……記者
▽御大葬儀式場の構造……市井逸士

●政局の近き將來

……安達謙藏、堀切善兵衛、秋元子爵、曾我子爵、林毅陸、岡崎邦輔、井上角五郎、尾崎行雄、……其他諸氏談、

○鹽原入浴記……坪谷水哉
○成上り者（史論）……三浦博士
○氣紛れ日記……内田魯庵
○乃木大將……南木摩天樓

○內閣の異說と人心の傾向……穂積博士
○ソローベル……金子筑水
○無用なる憲法論……浮田博士
○教育の權威と教員待遇（再論）……建部博士

小說

醉漢……正宗白鳥
都會……小川未明
路傍……田山花袋

東京 本町 博文館

信用ある大店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載謝絶はす

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

御大葬記念寫眞帖

御大喪儀 絶好記念

■明治天皇御大喪葬列御道筋大觀……
■御轜車及び正裝したる牽牛……
■御大葬當夜東京御葬列の盛儀……
■御大葬當日宮城附近青山祭場の光景……
■富士山麓を汽走の靈柩車……

■青山祭場殿を三方面より見たる光景……
■大葬參列の外國特使肖像及旅館……
■御大葬當日拂曉の青山葬場光景……
■奉送者早朝より青山大通集の鷹光景……
■御道筋沿道兵士整列奉送の光景……

▼明治天皇の皇室及皇族御系統寫眞圖 先帝、今上を始め奉り各皇族六十六方の御肖像

■御葬儀御道筋奉送者謹粛の光景……
■女官及び神官奉送の光景……
■外國人沿道奉送の光景……
■大葬御道筋の裝飾……
■英、獨御名代殿下の來朝……

■嗚呼！十箇月前の御雄姿……
■特別大演習御統監の先帝陛下……
■明治天皇御着用大元帥の御軍服……
■明治初年京都御所内の御有樣……
■先帝陛下の御散歩ありし御苑……

▼大附錄 明治天皇御眞影（原色三色版刷額面大形）

定價金二十二錢 郵稅二錢

東京南紺屋町 實業之日本社 振替貯金口座東京參武六番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



中央公論第廿七年第十號號目次

▲公論

▲說苑



デスクの上を整理すべく萬年筆の最も必要なるは勿論也、
然れども萬年筆の愈々缺く可からざるはデスクを離れたる時、
外出したる時、旅行したる時、從來の筆硯を携帶する能はざる場合、
或は特に机に向ふ能はざる時に益々顯著也。

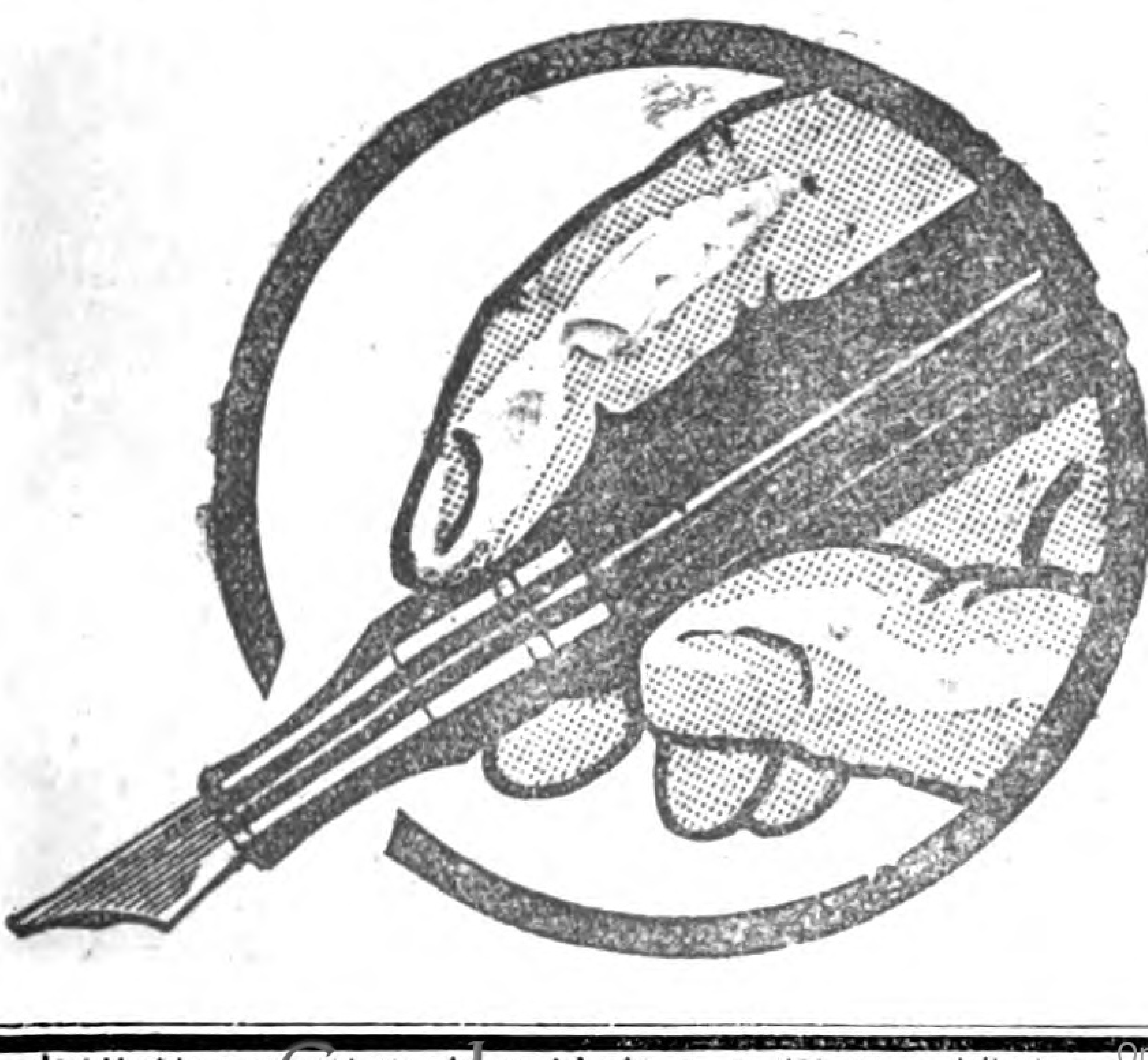
オノト萬年筆
飾無きものは金六圓以上
飾有るものは金七圓以上

オリオン萬年筆
飾無きものは金貳圓八拾錢
飾有るものは金參圓廿五錢

ウォーターマン萬年筆
飾無きものは金五圓以上
飾有るものは金七圓以上

東京、大阪、京都

丸善株式會社



WALTER HAMPEL



"MISS TANGUAY"

中央公論



第二十七年
第十號
第二百八十三號

再び日露同盟論

（一）

桂公後藤男等が歐行の途次先づ露都を訪はんとするや、端なくも日露同盟說喧傳せられ、頗ぶる歐洲の外交界を動かしたりしが如く、頃者露國ノヴオ、ヴレミヤ新聞の外報部長エゴロフ氏來遊し、一夕日露協會の催ふしたりし小宴の席上に於て語つて曰く『同盟といふも協約といふも、他の一方之を破らんとすれば、直ちに一片の反古紙と做し得べし、唯だ國と國との利害相一致するとき、精神的に相結ぶもの最も強く且つ堅し、今の日露兩國の狀態は正さしく是れ也、また何ぞ成文の同盟條約を要せんや』

露國大使マレウイチ氏が其の半ヶ年の賜暇を四ヶ月に切上げ、匆皇として東京に歸來するや、實に重

要なる使命を齎らせるが如し、支那の動亂に關し、露國政府は斷然たる措置に出づるに決して、先づ之を日本に謀らんと欲せるも、万一日本政府の腰弱くして、之に應ずる能はずんば、其の提議を爲さゞるの內意をマレウィチ大使に含め、大使をして取敢へず日本政府の强弱を窺知せしめたりしが如し、然るに有力なる助言者の日本政府に忠告するあり、政府は其の同盟國たる英國の意向を確めたる後、斷乎たる態度を以て露國の提議に應ずるに決し、數次交渉の末、竟に去る七月を以て露國と內協商を終れるが如し、其の內容は素より多く傳ふ可らざるも、常に外交上に機敏なる報導を供するを以て特色とする墺國のノイエ、フライ、プレッセ等の報ずる所によれば、日露兩國は、滿蒙に於て其の勢力範圍を限定し、共に自由行動を執るに一致せりといふ

近時露國が蒙古方面に歩武を進め、且つ支那に對する外交の甚だ强硬なるに視、殊に英國が西藏に對して斷乎たる措置を執れるに徵するに、此の間の消息略ぼ推知すべきものあり、蓋し日英同盟の所謂支那領土保全主義なるものが、支那本部に止まりて外藩に及ばざるや明らか也、是れまた支那の秩序を保全して列國の利權を防衞するに於て已む可らず、今日支那本部の領土保全すら容易ならざるに方つて、更に廣漠なる外藩をも保全せんと欲するが如きは、徒らに事端の輪廓を擴大して關係國の力を分つに過ぎざれば也

日露の新協約が主として滿蒙を目的とし、而して英佛二國が之に同意せるは事實なるも、是れ唯だ外藩の處分に止まり、最も必要なる支那の本部問題に就ては、未だ確然たる取極めあらざるが如し、是れ

吾人の頗ぶる不滿足とする所、玆に一歩を進めて再び日露同盟論を主唱せざるを得ざる所以也

（二）

今の世界には三大禍源地あり、其の一は北阿弗利加にして、獨佛伊土の列國互ひに利權を爭ひ、曩には獨佛の間交渉太だ必迫して幾んど砲火相見んとし、今や伊土開戰中にあり、延きて土耳其とブルゲリア其の他バルカン半島との紛爭となり、露墺また或は無事なるを得ざらんとす、歐洲列國を惱ますものは實に是れ也、其の二は西北亞細亞にして、波斯、亞非加斯坦の如き、英露獨の競爭激しく、往々にして表面無事に三國互ひに輯睦するが如きも、內實の鬪爭斷ゆる時なし、其の三は言ふまでもなく支那にして、其の土地宏く人口多く、世界有數の富源たるに於て、禍根の盤掘最も深しとす

今の支那政府には、統治の實力なし、吾人は素より彼の國の政體の何たるに頓着なし、君主政可なり、共和制可なり、要は政府として統治の實力を有し、能く其の國內の秩序を支持して平和を保全すれば則ち足る、然るに今の中華民國政府なるものは、徒らに形式に流るゝも統治の實力なく、其の財政に於て自から支ふる能はざるのみならず、能く四百州を鎭御すべき武力を有せず、威信を有せず、僅かに列國相牽制して分割に手を染むるなく、而して其の人民一時の平和を欲するが爲めに、姑らく小康を保つのみ、若し事を好む梟雄一たび出てゝ亂を唱へん乎、而して革命亂に募集せられたる軍隊中、之に應ずるものあらん乎、支那の紛亂は實に名狀しがたきものあらんとす

抑も支那現在の軍隊の多數は、苦力其の他浮浪の徒にして、僅かに軍人たる威を挾みて庶民に傲り、

且つ稀薄ならざる賃銀を利として軍役に就けるのみ、蓋し古來支那兵の强さは、亂に乘じて財貨を掠め、婦女を凌辱する無制限の自由を有せしがため也、若し法令嚴肅にして秋毫も犯さずといふが如くんば、其の兵や目的の大部分を失ふて必らず弱し、今の支那兵また此の類のみ、之に臨むに文明國軍隊の作法を以てせらるゝが如きは、彼等の到底永く堪えざる所也、故に支那の內亂は、早晩必らず軍隊より發すべし

何ぞ況んや、民國政府財政に窮し、動もすれば兵士の賃銀をすら十分に支拂ふと能はざらんとするをや、且つ彼等を今のまゝに養ふも、訓練して精兵と爲すに足らず、一時の傭兵、素より年齡體格敎育に一定する所なければ也、而して永く之を養ふて多　の賃銀を支拂ふが如きも、亦支那政府の堪ゆる能はざる所のみ、然れども之を解散せん乎、一時に豐かなる給與を爲さゞれば直ちに散じて鹵掠四出するの虞あり、而して之を豫防するがために、豐かなる給與を爲すが如きは、素より支那政府の能くせざる所なるを奈何せん

故に支那の禍根は軍隊にあり、支那の借欵に應ぜんとする列國資本家にして、其の借欵が主として生產的方面に投ぜられ、由て以て支那の富源を開くべしと信ずるが如くんば、過謬是より甚だしきは莫し、何となれば支那の財用の最も多くを要する所は、實に不生產的なる軍隊の濫費なれば也、列國資本家若し一たび之を悟らば、皆支那に對して其の財嚢の口を緘すべく、支那は爲めに財用に窮し、其の結果、軍隊の給與斷絕となりて、茲に亂緒を發すべし

亂緒一たび發すれば、之に乘じて貨財を掠め婦女を辱かしむるもの軍隊のみに止まらず、苟くも恒産なきの徒皆然らん、北京騷亂の際、妙齡なる支那婦人が路上に狼藉たりし衣帛を褫へりといふを看ずや、古來支那の戰亂は、斯の如くにして竟に大なる慘劇となるを例とす

今の支那政府は忠良にして精銳なる軍隊を有せず、是れ最大弱點也、又堅實なる徵税の權力をも有すとなし、必要なる租税を課せんとするも、支那人の多數は之を好まず、苟くも免租減税にあらざれば、今の共和政府をも咒詛するや必然にして、而して是れ亦梟雄の乘じて以て亂を唱へんとする所なり、而して支那政府は素より課税を强制すべき實力と威信とを有せざる也

支那の前途、殊に今の中華民國なるものゝ前途に暗黑多くして光明の少き、識者を俟たずして明らかなるのみ

(三)

支那にして亂れん乎、誰れか能く之を收拾すべきや、竟に中心點たるべき大人物なく、所在に變亂相生じ、民生相掠め相屠りて、到る處狼籍たらば、秩序の紊亂其の極に達し、外國人の居留するもの其の堵に安んずる能はず、利權悉く蹂躙せられ、通商全く杜絶せらるべく、而して其の平和回復の期得て豫測す可らざる也

是れ列國の堪ゑざる所にして、殊に近く隣接し、最も多くの通商關係を有する日本の耐ゆる能はざる所とす、列國たるもの茲に至つては勢ひ其の自力を以て居留民を保護し、利權を防衛せざるを得ざるべ

し

事苟くも斯の如くならん乎、支那の分割實に已む可らざる也、然れども列國をして支那を分割せしむるは、斷じて日本の利益にあらず、列國をして近く支那に強大なる威力を畜へしめば、日本は其の均衡を保つがため、過大なる負擔を免かれずして、或は竟に自から弱むるもまた測る可らざれば也、少くも日本の地位をして極めて不安ならしむるものなれば也

日本は努めて支那本部の分割を避けざる可らず、之を避くるがためには、單に英國とのみの同盟にては尙ほ十二分ならざるの憾みなきにあらず、英國は海上に世界無敵の强國なるも、陸上に於ては露獨佛墺の孰れにも及ばされば也、即ち支那大陸に於て十分なる威力の効果を收めがたければ也、是れ吾人が更に進んで日露同盟を唱ふる所以なりとす

（四）

歐洲列國をして、他を顧みるとなく、專心に北阿弗利加の問題を解決せしめよ、而して西北亞細亞の問題は、英露兩國をして主力を擧げて解決せしめよ、而して支那問題は、日本をして獨力之を解決せしめよ、是れ日露同盟の骨子にして、實に世界の三大禍源を根絶して、以て地上に偉大たる平和を齎らす所以なりとす

日本が獨力を以て支那問題を解決せんとするは、敢て支那を自國の領土若くば保護國と爲す野心あるが故にあらず、彼の四億の蒼生のため、秩序平和を維持して、其の生々を娛ましめ、嚴に列國の機會均

等主義を恪守し、列國の利權と通商とを重んじ、以て支那の領土を圓滿に保全せんと欲するのみ、斯くして東方亞細亞を平安無事ならしめ、專ら通商貿易を發達せしめて、以て世界と齊しく其の利を享けんと欲するのみ、是れ啻だ日本自身の利のみにあらず、實に支那四億餘萬人のため也、否、世界人類のため也、世界の人道を重んずるもの、如何ぞ之を否とす可けんや

且つ支那をして斯の如くならしむると共に、歐洲列國は北阿弗利加に於て最善の解決を下し、英露兩國また西北亞細亞に於て其の一切紛爭の種子たるべき問題を一掃し、其の平和と進歩とを謀らば、全世界の平和は玆に保障せらるべし、然り、少くも東半球の平和安全は確保せられて、列國の其の利を享くる實に至大なるべし、吾人は人類の開發進歩の爲め、敢て之を切望せざるを得ざる也

支那の平和秩序を支持せんには、素より十分なる武力なかる可らず、是れ我が日本の敢て當るを辭せざる所、日本は適當なる支那の政府を援助して、以て其の統治を完くせしむべし、若し支那が將來或は世界の禍たるを憂慮するものあらば、豫め之を防止するの手段を執ると易し、始めより其の軍事上の施設を制限するが如き、殊に太だ容易なれば也

若し列國協同して支那問題を解決せんとせば、却つて多くの紛爭を生ぜざるを得ず、列國の欲望一ならず、眞に平和を欲するものと、機を窺ふて分割其の他の慾を成さんとする野心を懷くものと、素より一致するを得されば也、彼の借欵に應ぜんとする六國資本團の行動にも看よ、僅かに資本を下さんとするにも、六國の意向一致せず、動もすれば拔駈を爲さんとするもの出て、今や辛ふじて一致を保つの狀

態にあらずや、若し支那の平和秩序を保全するがため、軍事財政其の他百般の要務に就て、一々列國の協議を爲すとせば、列國の意向一致せずして徒らに事を遷延するに止まらず、其の間隙に乘ずるもの亦往々にして出づべく、幾んど煩に堪えがたかるべし、是れ寧ろ支那を擧げて一大禍根と爲すもの也、支那をして第二のバルカンたらしむるもの也

此等の禍弊を避くるがため、日本主として支那問題解決の衝に當り、單に同盟國たる英露と内協議を爲すに止むべし、眞に支那の平和秩序を保全せんとせば、素より然らざるを得ざるのみ、是れ吾人が敢て再び日露同盟論を主唱し、英露兩國と豫め大方針を協定し置かんとする所以也

（五）

桂公、後藤男等が露都行に何等公然たる使命を佩びざりしは事實也、隨つて兩國政事家中に同盟條約を訂結するの準備なかりしも事實也、エゴロフ氏の談によれば、ノヴオ、ヴレミヤ社中にも尙ほ排日の一派あり、時に頗ぶる窮するとありといふ、最も進歩したる思想を有し、且つ大勢に明かにして利害に敏なるものは、素より親日主義を懷抱して、同盟また辭せざるの決心を有すべしと雖も、之に反して今尙ほ依然として排日方針を固執し、一種の復讐戰を夢想するものも少からざるべし、國大にして而して人多ければ、勢ひ自から然るのみ、何ぞ況んや露國の手を歐羅巴より封するがため、專ら意を東方にのみ注がしめ、日本に對して必らず復讐戰を試みしめんとする一種の煽動者あるをや、日露同盟の談何ぞ容易ならんや

然れども日露同盟は兩國の最大利益にして、又少くも東半球の平和進歩のため偉大なる貢獻を爲すべきもの也、吾人は今より之を主張して、露國々民を促がし、大に覺醒する所あらしめんとを期せざるを得ず、彼のノヴォ、ヴレミヤすらも、一年餘の前には熱烈なる排日論を唱へ、曾て乃木將軍の到らんとするや、堂々乎として非歡迎説を主張したりしも、今や態度を一變し、現に其の外報部長として有力なるエゴロフ氏の如きも、日露協會の幹事として、專ら兩國の親和を圖れるにあらずや、其の君國に忠實なる露國官民をして、擧げて日露同盟に賛せしむる、必らずしも望なきに非ざるのみ

乃木大將夫妻の殉死

(一)

明治天皇御大喪の當日、少しく詳らかにいへば　天皇の靈柩を奉載せる轜車が宮城を御發引あらせられし九月十三日午後八時、學習院長陸軍大將從二位勳一等功一級伯爵乃木希典並に伯爵夫人靜子の夫妻、赤阪新阪町の邸に自刄す、蓋し明治天皇に殉せる也、中外擧げて感動せざる莫し

其の死前の從容として迫らざる、而して其の死狀の古武士の典型に違はずして潔く且つ完全なる、幾んど人の及ばざる所、此の夫にして此の妻ありといふべく、正さしく日本人の眞面目を發揮し得て、無限の光彩あり

（二）

彼れの一代を回顧するに、頗ぶる興味なきに非ず、明治十年の役には、彼れ第十三聯隊長として急行熊本城に入らんと欲し、途次賊の大兵に要撃せられて部下多く戰死し、彼れ亦負傷して聯隊旗を賊に奪はれたりき、彼れ則ち死を決して之を奪還せんとしたりしも、再び疵を被りて人事不省となり、竟に病院に入る、瘡痍僅かに癒ゆるや、彼れ聯隊旗を奪はれたる責を請ふ、政府許さず、然れども彼れ自からは之を以て終生忘るゝ能はざる恥辱と感ぜしが如し、自刄の際の遺書に、冒頭先づ之を記せるは其の證なり日清戰役には、彼れ旅團長として旅順攻擊に參加し、山地中將の部下として頗ぶる饒名を馳せ、膽勇人を驚かすものありき

戰役後臺灣總督に任ぜられ、家を提げて任に就けるが、彼れの母は、台地の瘴癘に中られて死したりき、彼れは之を台地に瘞めて更らに其の職分に鋭意せしも、行政官は素より彼れの適材にはあらざりき明治卅七年一たび休職となり、那須の野に歸農せるも、露國との大戰役起るに及びて、彼れは軍司令官に擧げられ、露國の精鋭を粹めたりし旅順の要塞を力攻すると半歲餘、竟に之を陷ゐる、露の司令官ステツスセル海陸軍を擧げて降伏す、當時彼れの之に處するや、勇氣、寬容、仁愛の諸德著るしく發揚したりしを以て、彼れの名聲は嘖々として全世界に傳はり、歐米僻陬の兒童走卒と雖も、殆んど乃木大將の名を稱せざる莫きに至りて、彼れは全く世界的大英雄の一人となりぬ

然れども彼れは此の力攻中、多くの生靈を喪へるを痛惜して樂まざりき、彼れの掛替なき二人の子は、

陸軍尉官として共に俱に此の役に戰死したりき、彼れは之を以て多く陛下の赤子を殺傷せしめたりし責任の一部を盡し得たりとして、悲痛の間聊か自から慰さむる所ありしが如く、而して世界を擧げて亦悉く彼れの心事に同情し、深く彼れの精神の純潔なるに信服したりき、彼れの凱旋して、國民歡呼喝采の間に迎へらるゝや、杳嗟咏嘆、自から諷ふて曰く『皇師百萬征二驕虜一、野戰攻城屍作レ山、愧我何顏看二父老一、凱歌今日幾人還』嗚呼何ぞ其の心事の悲しきや、一將功成萬骨枯は古來の例なるも、彼れ一人は實に忍びざる心を以て其の胸を塞がれし也

彼れは其の名聲の中外に籍甚にして、全く世界大英雄の一人となりしに拘らず、寸毫も之を恰ばずして却つて憂心忡々たりき、若し彼れをして當時其の身を自由に處分するとを得せしめば、彼れ或は已に自刄したりしならん、唯だ彼れの仕ふる　明治天皇あり、彼れは其の心と身とを此の唯一の大帝に捧げて、其の心と身と共に彼れ自身のものに非ずとせり、而して彼れの唯一の主たる天皇は、彼れを責めずして、却つて優詔を賜ひて彼れの勳業を稱擧し玉へり、次て彼れを學習院長たらしめ、華族子弟の薰陶を擧げて彼れに一任し玉へり、彼れ死を欲するも如何ぞ死す可けんや、故に彼れは其の一身を犧牲として其の職分に恪勤したりき

彼れの夫人も亦女大學型に薰育せられたる純乎たる貞女にして、平生質素自から持し、其の愛兒を失へるも悲みて傷らず、王事に斃れしを以て其の分を盡したるものと信じ、一點の私情を挾むなく、古スパルタの賢婦と雖も及ばざりき、彼れ彼女を化せし乎、彼女彼れを化せし乎、彼れも彼女も、洵に日本人として純の純なるもの也

（三）

殉死は古來の國禁たり、然れども人の自由は之を奈何ともす可らず、忠義の形式に拘泥して殉死を強ひ、且つ強ひられて殉死するが如きは、人道上の罪惡なるが故に、國法之を禁ぜしのみ、眞に其の君を思ふの餘り、其の一命を捨つるものあるも、法は以て奈何ともす可らず、僅かに男女間の痴情のために死する者あるすら、法は之を抑へ能はざるに非すや、忠誠のために死する者の如きは、自他共に其の志を遂げしむべきのみ、彼の復讐の國禁なるが故に、赤穗の四十七士を非とするあらば、天下誰か之を嗤はざらん

彼れ乃木大將は、其の心と身とを捧げて全く一の明治天皇に献ぜしもの也、死せんと欲して尙ほ死せざりしも、一に天皇のためなりとせしもの也、然るに此の天皇終に崩御し玉ふ、彼れが茲に死處を得たりとし、且つ九天の上、九地の下までも明治天皇に隨從し奉つらんとせしは、實に忠誠の極也、人臣としての鑑也、誰か區々の國法を挾んて之を議す可けんや

（四）

彼れが忠誠純潔の人たりしは何人も疑ふ者なし、其の死すると死せざるとによりて、素より毫も增減する所なき也、然れども其の死によりて益々其の忠誠純潔を發揚するや蔽ふ可らず、蓋し其の光を布帛もて掩ひ包めるが如し、彼れ病によりて死するも、世の彼れを回顧するもの多きに由て、彼れの光は著しく顯はるべし、何ぞ況んや殉死によりて突如其の布帛を拂ひ除けるをや、彼れの忠誠純潔なる光輝が燦爛として世上の耳目に耀く素より其の處のみ

此の光輝は猶ほ太陽の光の如く、一切の暗冥を除くべし、不良なる黴菌を滅殺すべし、人をして爽然として新たならしむべし、日露戰役以後、驕泰自から高しとして漸く浮靡輕佻に流れんとせる惡傾向も、之によりて强く覺醒せらるべし、文臣錢を愛し、武臣死を惜む流風も頓に沮せらるべし、凡そ彼れ夫妻の死によつて人心を感動せしむる印象の深き、之に匹似するもの多からざるべし

心あるものは、希くば益々此の光輝を發揚せしめよ、男女の輕佻なるハイカラ傾向は、玆に覺醒すべきに非ずや、武人の驕り且つ不眞面目なる流風は、由て以て著るしく沮止せらるゝを得ん、黃金を尊びて廉潔を卑む惡俗、奢侈を悦びて質素を憎む頹風は由て以て滅殺せらるゝを得ん、議論を好みて其の本を忘れ、例を外國にのみ追ふて國體の貴きを知らざる學者政黨の如き、物質に泥みて精神を捨て、忠孝道義を嗤はんとする輕浮者流の如き、亦三斗の冷水を浴せらるゝ心地して頓に省悟する所あらん、彼れの死や簡なりと雖も、彼れの人格と其の忠誠純潔なる光輝との齎らす敎訓や偉大也、嗚呼渺たる彼等夫妻の死の世道人心に關するの大なる、實に測る可らざる也、然り、忠誠無私の人を動かす力や、洵に思議す可らざる也

（五）

彼れの死は太だ簡明也、素より其の間に推測を挾むべき餘地ある莫し、然れども吾人をして强ひて一事を說かしめよ

明治天皇の彼れを學習院長に輔させ玉ふや、彼れ頗ぶる惑へり、彼れの親友石黑忠眞男彼れに說て曰く「足下の學識の敎育に適せざる、明君主豈之を識らせ玉はざらんや、知て而して足下を用ゐさせ玉ふ

は他なし、足下によりて華族子弟に授くるに精神教育を以てし玉はんとするのみ、足下一片耿々の精神則ち陛下の「聖鑑に適せるのみ」と、彼れ感奮して起ち、身を以て紈袴の子弟を率ゆ、凡そ一代の風氣の漸くにして溺れる、先づ上流より之を澄ましめんとする、是れ明治天皇の御志ならざらんや、彼れや之を體認し奉つりて蹇々匪躬の節を効せり、然れども天皇既に神去らせ玉ひて、而して彼れ亦漸く老ゆ、彼れは其の仕へ奉つれる唯一の天皇に其の一身を捧ぐると共に、亦併せて一死以て華族子弟を激勵せしに非ざらんや、彼れ或は思へるならん、華族子弟教養の任や重し、然れども餘命幾くもあらず、若し此の際心身を天皇に奉つらば、華族子弟等に及ぼす精神上の薫化或は不窮ならん、徒らに老驥の材を致すには優さらんかと

若し果して然りとせば、彼れが死を擇ぶの心も亦甚だ稱すべし、昔者楠公の湊川に死するや、其の子正行と一族とを河内に貽して以て南朝の天子に奉つりたりき、彼れには彼れの精神の外貽すべき何物も莫し、乃ち死して華族の精神を薫化し、以て天皇の倚托を完くせんとす、生死の撰擇の宜しきを得たるは論なく、其の心を用ゆるの忠誠なる、實に楠公と同じ、彼れが永く忠臣の鑑たる、また將さに楠公と同じかるべき也

× × × × × × × ×

偉大なりし明治天皇の御喪儀は終れり、此の時に方つて乃木大將夫妻の殉死するあり、また明治天皇聖徳の致す所、是あるに由て益々天皇の偉績を不朽ならしむ

ナポレオン論

福本日南

ナポレオン一世は廬山の山よりも多角形てある。觀る者と觀る處とに由つて、或は奇拔な高峯ともなれば、或は幽邃な深谿ともなる。從つて來論紛々、蓋棺後已に百年に垂んなんたれど、未だ底止する所を知らぬ。此多角形な大英雄を捕捉し來つて、單々たる一小册子に論斷せん事は、固より不可能の業てあるが、併ながら廬山は設ひ一面觀ても、其山を髣髴するもの無しともせぬ。それてナポレオン論の試業(エッセー)を試みる。他日或は機會を得ば、全幅の觀察に入る時があらう。

英雄は社會の變形委員

世人は動もすれば「英雄は時勢の產物」てあるといふ。如何にも其氣味が無いてもない。劉邦一たび豐沛から起れば、蕭何も出る、曹參も出る、周勃も出る、樊噲も出る。太閤一たび尾州から揚がれば、清正も出る、正則も出る、長政も出る、吉晴も出る。其の蕭何曹參等や、清正・正則等に就いて觀れば、時勢の產物たるに相違ない。が、劉邦・太閤に至つては、左樣廉價には方(かた)づかぬ。是れ此二人は好し隆治泰平の世に生れても、徒事にして了る徒輩てない。必らずや何等かの歷々たる印象を人類の歷史に留めるてあらう。それて「時勢の產物」たる者は、畢竟噲等以下の連中たるに過ぎぬ。少しく氣を負ふ者は、淮陰の韓信てすら『我は噲

等に伍するを恥づる」といつて居る。

さらば一等の英雄・眞の英雄は時勢と沒交渉・無關係てあるかといへば、亦決して左樣ても無い。全體此人間社會なるものは、申さば一の有機體てある。何れの世ても、何れの際ても、時々刻々に變形を求めて已まないものてある。進歩も實は此に托すれば、改善も亦此に托するのてある。處が何れの時代に於ても、其時代相應に前々から背負ひ來つた重力があり、又其惰力があつて、之に上から强壓せられ、振切り擲落さんと欲するも、滔々たる凡衆の手腕ては容易にそれを如何とも することが出來ぬ。是に於て一等の英雄・眞の英雄に待たねばならぬ。自分が目して英雄と爲す所の者は、社會から期待される此種の人物をいふのてある。それて英雄なる者は「社會の變形委員」てあるといふの最も適切なるを感ずる。今世の社會を準備し遺留したナポレオンは慥にイの一番に數ふ可き其委員の隨一てあらう。

彼の家系

今茲に彼を觀察し評論するに先だつて、一言せざるを得ないのは、彼の家系と彼の經歷てある。彼の英名は世界に耀き、吾國人ても之を知らぬ者は無い。併ながら同じ英雄ても、例へば豐太閤の如き國人中の英雄なら、其傳記は設ひ不正確としても、其の中村の土民から起つて、關白太政大臣に至つたまての蹟路の大略を諒知して居るから、いきなり其人の觀察に入込み、評論に入込んても、分りかねるといふ心配が無い。處がナポレオンに至つては、國人て無いだけに、其名の轟き渡つた割合には、我々の同胞は多く其經歷を知悉せぬ。それて知つて居る者の目から看れば、些と馬鹿臭いが、其家系・其經歷から雜と略敍せざるを得ぬ。

彼の祖先は伊太利のトスカーヌから出た。或時代にはトレヴィーズといふ極小邦の君主てあつた事もある。それからフローレンス、それからサン・ミニアート、それからゼノアと國內の處々に移轉して、其間次第に零落し、十六世紀の初葉、千五百二十九年に佛國領地中海の一島コルス（所謂コルシカ）に移住し來たのてあ

るから、其家が佛蘭西の國籍に入つて、ナポレオン一世が誕生するまでに、此島に於て早く二百年を經過したのてある。それでナポレオンは生れながら最早立派な佛蘭西人てあつたに相違ない。

併ながら根が伊太利人の血統、お負けに中世時代の戰鬪攻伐を生命として居た伊太利人の意氣・習慣を家財と倶にソックリ其儘、同船に載せて、コルシカ島に移住した一家族の後裔てあるといふ事は、最初に意識し置くの必要がある。處が此コルシカ島が亦ナポレオン・ボナパルトといふ棟梁の巨材を植長させるに、打つて着けの土地てあつた。兎いふは此島が地中に孤立したゞけに、十八世紀の中程に至るまで、依然として中世紀の意氣・習慣を繼續し、全島民擧つて動ともすれば一揆・謀叛・分離・獨立の旗を飜へす。申さば是れ亦戰鬪攻伐を以て生命とする人民てあつた。從つて復讎心などの强い事といつたら、當時の社會に殆ど類例を見ぬくらゐて、某の家と某の家とが三代續いて復讎の仕合ひをして居るなどゝいふのは、此島には珍らしからぬ事相てあつた。素質は好きなり・御意は佳しぢや。彼血統の子孫にして、此喧譁好きの畠に生れたのてあるから、他年一日彼が世界の征服者となり、古今獨歩の兵聖となつたのも其の偶然てないのが想ひ合されやう。之を明快に論じたのが、佛國の深刻な批評家テーヌてある。彼は曰く、

『伊太利は制服者が統御の下に、由來彼國人の特色てあつた市民の獨立―私黨の忿爭―政治上の冒險―簒奪者の成功―權力と詐術とに基いた諸小邦の制度等を久しく失ひ、永續の鎭壓―王家の規律―外觀上の秩序―一種の公安を新たに迎へた。是に於て中世紀時代に有力なる自由の樹液即ち滿々たる元氣と野心とを湛へた樹液を失つて、さしもの大樹も枯果てんとする時、蘖の分木は其時代に特有の元氣・習慣・感情等を其儘に維持しつゝ、土地も、土地、豪健なカラの空氣に尙ほ包まれたコルシカ島に根を卸した』

とは、下し得て適評てあらう。

彼の幼時

彼は千七百六十九年八月十五日、コルシカ島のアジャシオ市に生れたが、此生年からして、既に其前年即ち六十八年といふ説もある。恰も是れ大閤が天文五申年生れといふのと、翌天文六酉年生れといふのと兩說あるに類似するのも、一奇である。が、斯かる疑問の生ずるといふのも、畢竟其家の寒微にして、世に多く知られなかつた事を證據立てるのである。彼の父はシャルヽ・ボナパルトといひ、寒微ながらも、名門の一人、日頃辯護士を業としたが、同島貴族の代表者として、屢々ブールボン家の朝廷に召された事もあつた。それから母はレチシヤ・ロマリノと呼び、コルシカ切つての美人と稱せられた。父も中々氣概ある人であつたが、母はそれ處で無い。男優りの女丈夫で、同島に於ける内亂・外寇の爲にあらゆる艱難を嘗めたが、更に之を事ともせず、銃砲の轟く裏・劍戟の閃めく間に、ナポレオンを生み、ナポレオンを育てあげた。後にナポレオンが此母を稱して『損失―疲勞―困苦―飢渴、是等の艱難は一も吾母を打摧くを得ず。母は悉く之に耐へて來た。極々手短かに吾母を概言するならば、女性の胴に、男子の首を接いで居るともいはう歟。是が即ち吾母である』といつて居る。それで彼ナポレオンはボナパルト家固有の遺傳性に加ふるに、男優りの克氣な母の豐富にして壯烈なる感化を多く享けたのである。

從つて彼は小供の時から、非常な腕迫て、兎もすると兄のジョゼフを凌ぎ、或時は打ち、或時は噛着く。其都度兄が母に訴へに行くと、何時も小ボナパルトは兄より先きに母に告口をして居るから、ジョゼフが母の前に出ると、未だ口を開かぬ前に、母から散々小言を聽かされた。彼後年の大英雄が勇猛・徹捷・多智・辣腕は、早く既に此際から見えた。

千七百七十九年、彼始めて十歳の時 コルシカ島都督マルブーフの保護に由つて、ブリエンヌの陸軍幼年學校に送られた。此頃からして早く數學に特能を示したのである。在學五年にして、同校を卒業し、千七百

八十四年、撰拔せられて、巴里の陸軍士官學校に入學を許された。此頃からして彼は夙に大志を抱いて居たらしい。而うして古の英雄の多くが好んで誦したやうに、彼も亦「ホーメル」の愛讀者であつた。彼が此ブリエンヌ幼年學校を出てゝ、巴里の士官學校に赴く途上から、コルシカに在る母に贈つた手柬の一節が實に氣に入つた。彼はいふ、

『兒はホーメルを懷にし、長劍を橫たへて、世界縱橫の征途に上る』

と。獅子は生れて三日にして、早く呑牛の氣ありとかや。彼が落々たる雄心は、此簡單なる一語にほの見える。

彼の出身

千七百八十七年、數へ年からいへば十九歲にして、彼は士官學校を卒業し、砲兵士官に任ぜられて、彼の生鄕コルシカ在勤となつたが、其より先き二年、彼の父は巴里へ赴く途中、モンペリエーにて客死した。之に就いても、言ふ可き事がある。後年ナポレオン得意の時代となつて、モンペリエーの有志者相議り、同地出身の內務大臣を介して、彼が亡父の爲に、同地に一記念碑を建設したいと請願した。すると彼は其好意を謝しながら、

『好意は實に好意であるが、死者の安眠は妨げてはならぬ。遺骸は永く靜謐にして置きたい。自分は生中に曾祖父及祖父をも彼世に送つたが、之に對しても、何等の盡す事も出來なかつた。是を一つ考へねばならぬ。若も吾父を昨今失つたのなら、新たなる哀悼の意に副ふだけの追弔を表するに、相當の記念物を以てするのは、適當でもあり、自然でもあるが、最早十餘年の昔である。亡父の死が斯世と何の關係も無い以上は、今更之を談ずる事は休めて置かう』

といひながら、終にそれを聽許しなかつた。蓋し彼とて父を追想せぬては無かつたらうが、世間にも多く聞えぬ者に、曉々しく紀念碑などを建設するを、片腹痛く感じたのであらう。此點に就いても、彼は亦吾太閤

と似た處がある。太閤は關白太政大臣となつた時に、生存せるお袋には、其光榮を頒たんが爲に、大政所の榮稱の恩命を受けたれ、終に一語の父に及ぶ無く、一切御贈位などを申請けるなどの擧に出なかつた。是も畢竟虛僞の眩耀を嫌つたからてある。二英雄の二英雄たるは、是等微細の點ても見える。彼の德川家光が自家の所出を中宮に納れたからとて、朝廷の上に何等の忠節も貢献も無い外祖父淺井長政に正二位大納言の御追贈を强請し取つた一件などは、嘔が出る。

千七百九十二年、彼方に二十三歲、當時英國に欵を通じてコルシカ島の實權を收めたパオリーに反抗したので、同島から放逐され、母及妹と倶に、初はニスに流寓したが、其處にも落着かず、乃ては馬爾塞にさまよひ來つて、親子三人食ふつ食はぬつの境遇に呻吟した。

一起一仆

記臆す可き千七百九十三年は來り、內には革命黨が王制を破壞して、一國の擾亂となり、外よりは列强の軍、海から・陸から國境を來り侵すに至つて、落魄失意の少壯士官に、好機の神は擁護の眥を垂れた。同年、彼歲二十四にして、大尉となり、英國に黨した馬爾塞攻擊軍に派遣せられたが、當時上長官の缺乏に會し、自ら砲兵を督して、一擧に攻擊の目的を達した。すると人が只は置かぬ。忽ちツーロン攻圍軍の司令官に擧げられた。是時に當つて、ツーロンは英國に占領せられ、英國艦隊の一根據地になつて居た。彼は好機を暫時も逸脫せぬ。一戰に其地の要塞エグイエットを陷れたから、頑强の英軍も其地に堪まりかね、終にツーロンを此年壯司令官の手に附して退いた。

此功に由つて、旅團長に昇進し、千七百九十四年には、伊太利征討軍の砲兵司令官に擧げられた。彼は方に二十五歲、ピレネー山南に赴いて、到る處に敵軍を破つたので、其名聲は隆々として起つたのてある。既にして彼は召喚せられて、巴里に還つて來た。是時に當つて、彼は地位を得て、其身を立てるに急てある。

從つて彼は策士として、諸黨領袖の間に周旋した。初は小ロベスピエールの軍事顧問となり、彼等の爲に畫策する所があつたが、熱月(テルミドール)の變後は、形勢の一變を看て、早く彼等と絶つた。併ながら是等の關係から、休職を命ぜらるゝの已むを得ざるに至つたのである。是が爲に彼は一時無資産・無收入の身となつた。噂(うはさ)に由れば、彼は格の廉い割合には廣い一家屋を借入れ、其半分を更に人に貸付けて、生計の助けにしやうとしたのは、是時であつたとの事である。それは如何であつたか知らぬが、彼は本國では所詮志を得そうにも思へぬ處から、一友ポンテクーランが當時軍政に當つて居たのに相談し、土耳其政府に交渉して貰ひ、同國に高飛びして、砲兵の組織を擔任して見やうとまでしたのである。其失意も亦想像す可しだ。

是時に至るまで、彼が無形の心頭は幾變化したか知れぬ。或時は時勢の風潮につれて、革命黨に傾き、或時は又出身が出身だけに、王黨たらんかと思つて見た事もあつたらしい。併ながら彼には別に皮英雄の眞骨頭を認む可きものがある。全體一國民が二つに分れて相爭ふ時に當つては、國民多數の意向は、甲に黨する歟乙に同意する歟、大概此二つから離れぬものである。彼ナポレオンも處身の必要上からは、現に革命黨の一將校として足を揚げて來た。されどそれは處世の一方便て、彼が頭腦中の秘衷に分入れば、彼は最初から王黨でも無ければ、革命黨でも無かつたのである。其證據には、革命以來、國内各地に王黨と革命黨との戰爭相次ぐを傍觀して、彼は嘆息の聲を漏らし、

『嗟乎氣の毒なのは、氣力ある地方の人民である。彼等は非王制・非民政の爲に、到る處に血を流して居るが、其の何れの黨派たるを問はず、一たび敗戰するが最後、千年間に勤勞・節儉を積んで現映し來つた幸福は、一朝にして亂兵の餌となるのみである』

といつた。是れ豈王者の言では無い歟。後年彼が機會を利用して、十年大統領となり、一轉して皇帝となつたのを看て、憎む者は單だ野心家の本色を發揮したま

てゐへど、同胞間に彼が如き爭鬪の繼續するのを悲んで、自家の大なる權力で之を遏絕しやうと欲するに出でたので無いともいへぬ。英雄の英雄たる所以は此に在る。是は獨り流血の慘を觀る場合ばかりで無い。天下後世、若も官僚主義と民黨主義とを以て、一國の裏に相爭ひ、其國政上には、是より以外に考量の餘地なしと思惟するが如き國民あらば、ナポレオンに聽いて、今一度考へ直して貰ひたいものと思ふ。

彼の勃興

それで彼は革命黨に屬するも、最初から是非とも民主々義でなければならぬといふ者では無かった。千七百九十二年、王黨と革命黨との怨爭が方に頂點に達した時の事である。其歲六月廿日、革命黨が勢力を得てチュイルリーの王宮に押寄せると聞いてナポレオンは好奇心に驅られ、後から見物にと出掛けた。すると國王路易十六世も今は革命黨の勢力に抗することが出來ぬので、同黨の喜ぶ赤帽を頭上に戴き、王宮の窓前に立つて、今か〱門内に込入る群民に龍顏か蛇顏かを見せて居る處であった。之を望見すると、ナポレオンはムッとして、

『馬鹿奴が……』

と大喝した。が、次いで彼は又獨語し、

『何故に王は斯く此賤民を混入せしむる歟。砲彈一發、此奴等四五百を一掃すれば、其他は蛛の子を散らすが如く、逃げ去って仕舞はんものを』

と、傍若無人に揚言した。『己に賴めば、隙も手間も要らぬものを』といはぬばかりである。昔は楚の項羽、秦の始皇が行幸を浙江の渡頭に看て『彼、取って代る可し』と躍り出さんとし、近くは高杉晋作、德川將軍が天皇加茂の行幸に扈從するを望み『將軍出かした』と絕叫した。項羽・晉作が面目は、各、此一語に盡きる。ナポレオンの事業や廣大無量なるも、『馬鹿奴が……』の一喝、亦以て彼の總傳に充つ可きである。

彼の頭の火山中には恐る可き此ボルケイノーが潜在したが、此ボルケイノーは千七百九十五年の葡月(ヴァンデミエール)

十三日、反對の方面に向つて迸發した。それは當時國民議會と巴里市民との間に、大紛議が生し、同日叛民の群衆は議會を解散させやうと團々簇々として押掛けた。是は堪まらぬと、議會黨の一領袖バラーは之が防禦をナポレオンに委任し、便宜事に從ふを許すや否や、彼は三分間に決心して、其任を引受け、直ちに砲列をサン・ロッシュの前に布いて、砲彈を群衆に喫らはせ、一擧に數百人を其場に仆して、之を追拂つた。是れが抑々彼一代の大功業大功名の門出(かどで)の慘澹たる血祭(ちまつり)であつた。此功勳に由つて、彼は先づ陸軍中將・師團長・内地軍總司令長官といふ爲す有るの顯職を贏ち得來つたのである。功名亦手に唾きして取る可きのみ。

才媛との結婚

千七百九十六年、彼はボーアルネイ子爵の未亡人ジョゼフィーヌと結婚した。此女の亡夫ボーアルネイ子爵は、ブールボン朝の錚々たる貴族、其夫人ジョゼフィーヌは才貌雙絶といふので、當時の交際社會に持囃された。其中に革命騷動は起り、子爵は王黨に加擔したるの故を以て、絞首臺に登され、彼女も久しく囹圄の月を看た後、僅に一命だけ助かつて、二人の子女を相手に寂しく暮して居たのであつたが、風とした事が緣となり、互に想ひ・思はれて、遂に結婚するには至つた。

此機會に於て、ナポレオン一世が社會的生活の上に言及せねばならぬ。本論の初に申した通り、全體ボナパルト家は伊太利から出たので、ボナパルト姓は佛蘭西語で無い。伊太利流に正しく言へば、ブオナパルト即ち Buonaparte である。現に父のシャルヽの代は勿論、ナポレオン自身すら、最初は然く稱へもし・書きもしたのである。否な最初どころか、伊太利の前征までは殊に伊太利人に善く受取らせる必要もあつたかして、ボナパルト即ち Bonaparte と書かずして、上に擧げた通りブオナパルトと自署しつゝあつた。其れぐらゐてあつたから、巴里の名流社會には頓と好く引受けられず。謂はゞ歸化人の田舍漢視せられたのである。お負けに彼の傲岸にして、自信强(づよ)さ、敢て容易に人と欵曲

せぬので、彼の英物たることは次第に認められて來たもの丶、依然巴里では廣い交際が無かつたのであつた。然るに運命の向ひ來る時は、金石絲竹悉く合するの氣味がある。ジョゼフィーヌ夫人は赫輝とした貴族の未亡人である上に、當人自身は交際社會の一女王として、日頃人々に親愛せられて居たから、彼女はセッセと新良人を舊識の諸名流に結び着けたのである。其上に亡夫の豐富なる遺産はあり。交際上に事は缺かず。身心財産の一切を舉げて、ナポレオンに箔を着ける事に、浮身をやつした。是が爲にモッシュー・ボナパルトの名は、隆々として上流社會の間に起つて來た。異日彼が革命黨に合せ、王黨の人望までも、一身に收攬するに至つたのは、多くは此に胚胎した。

伊墺の征戰

ジョゼフィーヌと結婚の年、即ち千七百九十六年、彼春秋二十七。三月二日カルノーから伊太利征討軍の總督に任ぜられた。當時列強は同盟して、佛國の四境に逼る。就中墺地利は中歐の覇權を有し、謂はゞ連合軍の旗頭であつて、伊太利の如きは其領有に屬して居たから、敵は此方面からも佛國に逼つて來る。それで革命政府は此にも出兵して、防禦を策したが、軍紀は不統一な上に、給料すら不渡がちであつたので、兎角に兵氣も引立たなかつたのである。小壯總督は命を拜するや否や、直ちに任に臨み、軍紀を振肅し、士氣を激勵し、一大希望を其軍に與へたから、早くも全軍から非常の信頼を寄せらるゝに至つたのである。

時に墺國は墺地利軍と、墺領伊太利のピエモン軍とを發し、兩軍を以て佛蘭西軍を挾擊し、一擧に之を破碎しやうとの戰略であつた。之を看取した少壯總督は兩軍の未だ合せざるに先だつて、咄嗟其軍を進め、各別に之を打破るの策を決し、先づピエモン軍に衝突し第一戰は四月十二日モントノットに於てし、第二戰は同十四日ミールジノーに於てし、第三戰は同十五日デゴーに於てし、第四戰は同十九日ヴィコーに於てし、第五戰は同廿二日モンドヴィーに於てし、約半箇月間に

五戰五勝して、ピエモン軍を無抗力に歸せしめ、同廿八日に至り、同軍をしてシャラスコーの休戰條約を受くるの已むを得ざるに至らしめた。

少壯總督は片時も空過せぬ。彼は乃ち其軍を北進し、五月七日ポー河を渉り、同月十日、墺將ボーリューの統率し來つた墺地利軍を、ミランの附近ロヂーに於て、亦又擊破した。其勢は恰も洪水の曠野を呑んで來るに等しいので、墺國は而喫ひ、假に休戰條約を請ふ事となつた。此機を逸脱せず、彼總督は伊太利の全土を先づ定めんと欲し、一方にはトスカーヌ大公爵を强制して、五月五日同公國と條約を結び、他方には羅馬法皇を諷旨して、同月廿四日、フォリニョーの條約を爲した。是に於て由來國防上寧ろ守勢を取つて居た革命軍は、攻勢も攻勢、大攻勢の地位を占めて來た。是れ大ナポレオンを天下後世にまで紹介するの第一活躍であつた。

斯くて墺國との媾和談判となつたが、堂々たる歐洲の舊國・覇權國が共和國の一將軍而も申さば成上り（なりあが）の一少壯軍人に平和を强制せられては、悔やしくもあり、不面目でもあるので、更に復たび墺地利軍を發し、ウルスメーを將軍として、伊太利の北境に押出して來た。ナポレオンは又之に向ひ、第一戰は八月三日ロナトーに於てし、第二戰は同五日カスチグリオーヌに於てし、第三戰はロヴルドー、第四戰はアリアノーに於てし、第五戰と第六戰とは、九月の七八兩日に亘り、プリモラノー及バッサノーに於てし、次いで第七戰はマンツーに於てし、第八戰はサン・ジョルジュに於てして、是れ亦毎戰墺軍を打破り、同十五日には此最後の地にウルスメーを包圍した。其中に共和國の別軍振はず、將軍モローの退却・ジョールダンの敗績となつたので、ウルスメーは少しく氣を得、十一月十二日、彼はカルヂエローに一勝を得たりしも、ナポレオンは同十四日から十七日に亘り、自らアルコールに於て之を攻擊して此度も亦之に打克つた。

彼は新婚の年を、名譽の戰爭に由つて飾りつゝ、伊太利北部の陣中に送り、明くれば千七百九十七年の一月十四日、又新たに墺軍をリヴォリーに破り、二月

二日には、ファヴォリートの戰捷の結果、マンツー塢を降伏させた。是等の赫々たる戰捷の結果は、同月十九日、羅馬法皇をして重ねてタレンチノーの條約を締結せしむるに至つた。

そこで墺國は更に第四軍を起し、同國の名將カル、親王をして之を統督させ、來つてナポレオン軍に對抗させたが、三月十六日、ナポレオンは亦又之をタグリアマントーに破り、同十九日には、再たび之をタルウィスに、四月一日には、三たび之をヌーマルクに破り、益々北進して、墺國のレオバンにまで達した。是に至つて、墺國も閉口し、同月七日、休戰を請ひ、十五日から媾和會議を開いた。其間には伊太利のヴェニース即ち所謂ヴェニスに於て、捕虜佛蘭西兵鏖殺の事件が發したので、五月十六日には、一皷して同市を占領した。

戰勝既に此に至ると、漸くナポレオンの本色を露はして來た。兎いふのは、共和國の首長チクタトワルは墺國との媾和上に種々の注文を申越して、ナポレオンを掣肘しやうとしたが、最早發達したヂクタトワルよりも、發達されたゼネラルの方が手强くなつた。同年十月十七日に至り、彼は彼の欲するがまゝに、墺國を制して、有名なるカムポフォルミオ條約を締結した。此條約の結果として、ライン河の左岸に至るまて一帶の廣土と(一)、イオニーの諸島(二)、白耳義一國(三)を佛國の領土に收め、其上伊太利に於てシザルピン共和國の創建獨立(四)を認めしめた。此共和國の創建獨立といへば、墺國の手を離れ、伊太利の復活を意味するやうなれど、是れ亦其實權を佛國に取上げたのである。而うして墺國の爲には前に攻取したヴェニスと其所屬、それからイスリー、ダルマシー、サルズブルヒの三州を認めて遣つた。墺國は提灯・佛國は釣鐘、是れ其條約の實質てあつた。斯くして歲末に、少壯總督は戰捷赫々の名譽と桂冠を戴いて、巴里の都へ凱旋した。負けじ魂の佛國の人心が、翕然として彼に歸したのは、實に此前後からてあつた。

後年彼が聖ヘレナの月に嘯く時、人あり彼に向ひ『陛下の御半生中に、最も幸福と感じさせられたのは、閣

國の推戴に由つて、帝冠を着けさせられた時でありました歟。墺・露の列强を屈下して、大陸封鎖を令せられた時で御座つた歟。それとも萬國を巴里に朝せしめ、墺國公主と御大婚の盛典を擧げさせられた際でもおはしました歟』と問ふた。すると彼は頭を振り、

『否や〱、そんなものでは無い。自分二十七歳にして、伊太利征討軍の總督となり、亞爾布の山南に押した際である。戰へば克ち、攻むれば取り、數月を出でざるに、半島は大概吾經略に歸した。其時、世界は吾脚下に在るを覺え、此軀は一室内に坐して居ても、其室内冲を飛舞はつて居るかの感じがした。即ち自分一代の幸福は是れ此刹那、世界征服の大功業が吾雙眼に閃めき映じた際に在つた』

と答へて居る。如何にも左樣であつたらうと思はれる。

埃及遠征

彼は巴里に歸つてから、數月間、シャントレーヌ街のホテルに在り。つく〲天下の形勢を觀察するに、歐洲大陸は得て征服す可きも、海島王の英國だけは、如何ともすることが出來ぬ。彼が畢生の目的たる、世界統一の大業を成就せんと欲すれば、是非とも此英國を屈服させねばならぬ。それには彼の寶庫たる印度帝國を奪ふに若くは無いと決心した。是に於て乎之が實行の第一着として、先づ埃及の遠征を思ひ立つた。蓋し埃及は歐亞兩大陸の咽喉に當るから、之を吾手に占領すれば、印度と英國との連絡を中斷する。そこで彼は亢を扼して背を拊たんと企て、孜々として其準備を整へ、千七百九十八年の五月十九日、伊太利軍を率ゐて、本國を出發したが、其航路、英國艦隊の目を避けねばならぬので、六月十二日、彼はマルタ島に其軍を以て寄航し、好機を見すまして、七月二日、埃及國の北岸アレキサンドリヤ港に殺到し、同月廿一日、ムーラッド・ベキが率ゐる命知らずの蠻軍とピラミード塔下に血戰して、之を擊破したので、早くも首府改羅へ進軍の大道は開けた。彼は乃ち時を移さず、行く〱蠻軍を處々に破りつゝ、改羅府に攻入り、幾ほども無く、神

將軍のクレベル及デゼイと倶に、一國を征服したのである。

由來英雄の胸中には閑日月がある。彼は埃及を征服するや否や、後ろには英將ネルソンが艦隊を以て、ナポレオン軍と本國の連絡を切斷し、前からは土耳其本國軍が續々として現はれ來らんとするを目睹しながら、更にそれをビクともせず、早く改羅府に學術上の一淵叢たるアンスチチューを建立し、本國の學者を招徠した。埃及の古文字・考古學に燦たる光明を與へ、吾人人類の歷史をして七千載の上まで溯るを得せしめたのは、彼英雄が吾人に贈つた何よりの遺産と謂はねばならぬ。

此埃及の駐軍中には、面白い逸話が幾らもあるが、今其の一つを紹介しやう乎。全體北阿沿岸一帶に住する亞拉比人の後裔等が理想上の英雄は、昔の司馬遷が言つたやうに、其相貌・其身材、魁梧奇偉て無ければならぬ。處が佛軍の將師中にて、之に當る可き者は、クレベル將軍のみてあつた。それて此將軍だけは非常に畏敬したが、ナポレオンは寧ろ小作りにして痩肉てあつたから、當初は何としても彼を英雄として受取らなかつたが、如何なる有力な敵軍ても、彼に粉粹されるを視るに及び、中頃から魔法遣ひてあらうと疑ひ出したが、最後には軍神の出現と相場が極り、それから以降はシュルタン・ケビールと稱し、無限の尊信を捧げるやうになつた。

彼は何處までも當初の目的を達せんが爲に、此國に於て越年し、十八世紀の名殘の年、即ち千七百九十九年を此にて迎へた。時に土耳其は英國に同盟し、盛に埃及人を煽動したので、忽ち改羅府民の叛亂となつた。ナポレオンは乃ち時を移さず、一鐵椎を之に加へた後、叙里亞の方から寄せ來る土耳其軍に向ひ、一戰・再戰・三戰して、エル・アリク、ガザ、ジャファを攻取り、進んてサン・ジャン・ダルクの攻圍中に、ペストに見舞はれ、可惜無數の精兵を失つた。併ながら、四月十六日には、二千の兵を以て、二萬の土耳其軍をダボール山下に打破り、七月廿五日には、英國艦隊が掩護し來つて

上陸させた土耳其の第二軍を、アブーキールに於て亦又擊摧いた。

第一コンシュール

彼は斯くの如く着々として遠征の事業を成功しつゝあつた。折柄本國危急の報は、紫電の如く、彼が行營に落ちて來た。國内は革命黨の諸頒袖等が相互の排擠しやひに由つて、無政府狀態に陷らんとし、四外からは此機に乘じて、列强來り迫らんとする。內憂外患は同時に來つた。恰も是れ太閤が高松水攻中の陣營に、本能寺の變報到達したのに比す可き歟。英雄の愛國心と功名心とは一度に迸發せざるを得ぬ。是に於て彼は意を決し、遠征軍の司令權をクレベルに放委して、八月二十四日、左右と歸國の途に就いた。が、豪膽なる彼ナポレオンは、鵜の目・鷹の目で海上を監視する英國艦隊の間を巧みに潜つて、忽に本國に現はれた。

是に於て彼は公々然としてヂクタトワル政治に反對の態度を取つて、之に反抗し出した。するとヂクタツールの仲間で不平黨のシエイエス、ロゼー・デュコー、其他彼の弟リュシヤンなどが來附したのを手始めに、五百の議員・將校の多數が皆ナポレオン黨となつた。蓋し國難の頂上に達すること當時の佛國の如き場內に至れば、公等碌々人に依りて事を爲すの徒輩では追着かぬ。そこで擾亂に疲れ切つた一國の輿望は自然に彼に集中したのである。彼は乃ち是等の後援を收めて、ブツキラ棒にも有名なる共和曆第八年霧月（ブリュメール）十八日（千七百九十九年の十一月九日）のクーデターを斷行し、茲にヂクタトワル政治を廢止して、憲法を改正し、彼は一朝にして十年任期の第一コンシュールに擧げられた。否な擧げられたといふよりも、寧ろ自ら其地位に就いた。カムバセレーとルブリュンの二人、是れ亦彼が自ら推薦して、自家の副コンシュールに擧げさせた所であつた。斯くの如くして、當年共和國の大首長・後年大帝國の大皇帝の地位は此際から築かれた。

最初の諸成功

吾人を斯世に生み出した十九世紀の劈頭は、第一コンシュールのナポレオン・ボナパルトに由つて開場された。一千八百年、彼は方に三十一歳。十八時間繼續の執務に平氣で堪へ、三時間睡眠すれば疲困を醫するといふ、絕倫の精力と旺盛の元氣を以て、玆に大活動を發揮し來た。時に彼が埃及遠征中から引續いた列强の反抗は、愈〻佛國を危險ならしむる。彼は其聯合反抗の筆頭たる墺地利帝國を最初に叩きつけるの必要を認めたので、此の年伊太利征討軍を編制し、古代カルタゴのハンニバル以來、再試された事の無かつた亞爾布越を實行して、再たび伊太利の野に現はれたから、墺軍の驚愕は大方ならず。漢兵天より降るの思を爲した。斯くて同年六月十四日、有名なるマレンゴーの大勝を獲た。尤も此年巴威爾に攻入つた佛軍の總督モローも亦墺軍にホーヘンリンデンに克つた。併し墺國に取つては、矢張マレンゴーの大敗が致命傷となつたので、ナポレオンは翌千八百一年二月九日、リュネヴィールの條約を制した。

是が動機となつて、久しく睚眦の間に在つた英國も一歩をボナパルトに讓り、千八百二年三月廿五日、アミアン條約を受けるに至つた。此條約に由つて、佛國は其征服した伊太利の內から、羅馬・ナープルとエルバ島だけを除いて、其他の全部を版圖に收め、英國は錫蘭とトリニテー島とを除いて、其他の略取した植民地を新領し、西班牙・和蘭は主として英國の爲に失つた植民地方を恢復した。是に於て平佛對列强の第二回同盟は終を告げた。ボナパルトの武も亦多とす可しだ。

此前後ほど彼ボナパルトに建設の便宜を得させた時はない。彼の旣に志を得るや、日頃から遺憾に感じて居た王黨・民黨の忿爭を薄らげる事に力を用ゐ、一方には成るだけ溫和共和黨を擧げ、他方には出來るだけ脫國王黨を呼返した。後々までも彼が自贊の一つとして『自分は舊制度と新制度との調和者なると倶に、舊思想と新思想との折衷者であつた。斯くして佛國民の幸福を増進した事は實に多大であつた』といつたのは、强がち誇矜て無い。動機の源泉は之と同一であつた

らう。所謂坊主を憎んで袈裟に及ぼして居た革命黨が、僧徒及寺院征伐の爲に、佛國の無形界に大創痍を生じ、民心の歸宿を失ふを看て居た彼は、千八百一年中に、羅馬法皇とコンコルダ協約を立て、翌二年には尙ほ亦追加協約を結び、法權と政權との境域を明かにして、法皇の權力を再たび佛國内に認めたのである。思ふに此擧には、他日彼が大に爲す有る素地たらしめんとの權略も包含したてあらう。が、併ながら一國の統治上には亦必要にして不可缺なる事業てあつた。

之と同時に、そろ〳〵革命時代の諸制度に改正を加へ出した。而うして革命政府に由つて任命せられて居た裁判官等が、無闇に法權を振舞はして、人民の權利を奪ふのを、片腹痛く感じて居た彼は、治安裁判の權限に大削減を加へて、別に控訴院を新設し、此際所謂佛蘭西民法をも編纂せしめ、議會に問ふて、之を一國の成典とはなした。それから、彼は第一コンシュールに登るや否や、早く財政上の諸機關の設備に着手し、千八百年から佛蘭西銀行の中央銀行などをも興させた。

斯くして又一方には勳章などをも制定し、國家に忠勤なりといはう歟、寧ろ彼に忠實なる文武の官僚に、名譽の表彰を與へ出した。異日帝制の發端は此邊から見えて來た。吁是が僅に三十年代に上つたモッシュー・ボナパルトの施設てあつた。そこて彼は大威力、十年コンシュールに昇がつてから未だ丸二箇年をも經ざるに、千八百二年の八月二日には、早く終身コンシュールまて漕ぎつけた。

扨彼に對する當時の評判は如何てあつたらう。其頃の多衆は思惟した。

『超凡・英邁・人を治め・人に勝つ爲に造られて、斯世に生れ出てたる人』

といふのてあつた。一世の渇仰想ひ見るにも餘りあり。併ながら彼が蓄えた胸裏の干戈は、少なからず人の畏怖をゝ惹いたに相違ない。それは其當時彼の値遇を得た一外交官の言語が證明する。一日其人は一友人と談ボナパルトの上に及んだ時、

『君の知れる如く、自分は日頃コンシュール閣下を

崇拜する。併ながら彼人の相貌・彼人の堅忍彼人の膽勇・彼人の行動・彼人の性情を直言するならば、呼んで小虎(プチー・チーグル)と稱せざるを得ぬ」といつた。評し得て至當である。が、東洋語を以て、今一層適切に彼を評したなら、寧ろ乳虎といふの、尚ほ彼に幾きを覺える。

一代の帝王

千八百四年の五月十八日に至り、貴族院の協賛と衆民共認の決議案とに由つて、彼は玆に佛蘭西皇帝の寶祚を踐み、ナポレオン一世と稱號し、其年十二月二日、羅馬法皇ピー七世を巴里に迎へて、此に壯絶なる大即位式を擧行した。此際の事であるが、古來の慣例に遵つて、羅馬法皇は神明に祈禱を捧げた後、皇帝の寶冠を把つて、今かナポレオンの頭上に加へんとする一刹那、ナポレオンは突と猿臂を伸ばし、其寶冠を曳つたくり、自ら之を頭上に戴いた。自分は彼の本紀を讀む毎に、此に至つて快感を禁じ得ぬ。コルシカ土民の子から出て、一日大皇帝の位に即く。人が與へたのでも何でも無い。自ら之を取つたのである。大事なく此頭上、豈他人の加冠を許さんや。英雄の本領は此に在る。回想すれば吾太閤、未だ志を當世に得ぬ間は、平秀吉にもなれば、藤原秀吉にもなつて來たが、一たび關白太政大臣に昇り、政兵二權を併せて掌握すれば、源平にも非ず・藤橘にも非ざる新規新製の豐臣姓を奏請し、終に豐太閤の名を萬世に遺留した。今ナポレオンと豐太閤、相違は國體の相違のみである。十年コンシュールは平秀吉、終身コンシュールは藤原秀吉、一たび其意を當世に得れば、彼は帝冠を自ら被むる。是は新姓を自分て名のる。他人の事でも此快感に入れば、夏の暑さも何處へやら、團扇を揚げて舞ひたくなる。西郷の老爺が歌つた筈よ。

建業只期和華東。鬪爭獨希那破翁。半宵提劍望寒月。今古興亡在眼中。

我と吾腕を噛んで、つくづく人間が已めたくなる。扨も彼は自ら帝業を開創した。從つて之を築固める

の必要を感じたらしい。それで帝位に即いた其翌年には、カムポフォルミオ條約に基いて建立したシザルピン共和國を廢して、王國に改め、首府をミランに定めて、自ら佛蘭西皇帝兼伊太利國王となつた。

第三同盟の破碎

アミアン條約後、未だ一年を出でざるに、千八百三年から、英國との和親は復た破れた。それでナポレオンは伊太利國王に兼當する前から、英國親征の計畫を立て、英佛海峽に臨めるブーロニュに大軍を集中した。折から彼が伊太利王國を興して、自身其國王を兼ねたのが、列强猜忌の近因となり、第三同盟は成立して、亦又佛國に對する反抗とはなつた。是に於てナポレオン皇帝は英國を後廻しにして、ブーロニュに集中した軍を率ゐ、千八百五年、再たび墺國に向ひ、先づ第一に墺將マックをユルムに破りて、三萬の衆と倶に降伏せしめ、直ちに軍を進めて、墺國の首府維納を陷れ、十二月二日、有名なるオーステルリッツの血戰を用ゐて、墺露兩國の聯合軍に打克つた。是が爲に列强の第三同盟も亦又破壞せられ、同月二十日、プレスブルヒの平和條約とはなつたのである。此條約の結果は如何。カムポフォルミオ條約に由つて、僅に墺國の有となつて居たヴェニスの地方即ちヴェネチーの一帶は、新造の伊太利王國に附加へられ、ユルテンベルヒ、巴威附等のナポレオンに加擔した王國の獨立となり、將軍ミュラーはベルヒ大公國君となり、ライン河畔一帶の諸王公國を聚めて、ライン聯邦を起し、悉く之を皇帝ナポレオン保護の下に置く事となつた。此年只だ英雄の壯圖を一空ならしたるものは、トラファルガルの海戰に於て、英の提督ネルソンの爲に佛西兩國の聯合艦隊が破られた一事であつた。

併ながら是れ此一敗は、大陸の形勢に何等の影響をも與へない。其翌年千八百六年に至り、兩獅子里兼ナープル國王フェルヂナン四世を廢し、彼の兄ジョゼフ・ボナパルトを其國王に封じ、又彼の弟ルイ・ボナパルトを和蘭國王に分封した。是亦吾太閤が弟の秀長を大

納言に上せ、甥の秀次に關白を讓つた意に酷似する。要は多く藩屏を建てゝ、自家の帝業を鞏固にし、世界統一の地歩を進めるに便せんと欲したのである。

第四同盟の破碎

是等國域と主權の大變革・ハノーヴル問題に對する普國の不平・聯合反抗に就いての露國の應諾・英國からの軍費の供給等が、相依り相合して、列强の第四同盟は又亦形成せられたのである。今回の主力は露普の兩國て、平和は復たび綻びた。皇帝赫として此に憤り、先づ普國の征討から開始し、千八百六年の十月十四日、オーエルスタードとイエナの二大戰に於て、慘澹たる血戰を爲して、大いに普軍を打破つたので、伯林までの坦々たる大道は開けた。乘勝のナポレオンは長驅して此首府を衝き、一朝にして之を佛軍の手に占領したから、轉じて露普聯合軍を追窮し、翌千八百七年の二月七八の兩日に亘る大激戰の末、有名なるエイローの大勝を收めた。是て普國の方は力屈して、抵抗を擲つたが、露國は未だ閉口せぬ。それてナポレオンは尙ほ膺懲の手を休めず。同年六月十四日、フリードランドの大戰を以て、散々に露軍を打破つた。是に至つて第四同盟も亦、骨破微塵に碎たれたのである。それの結果がニーメンに於ける佛帝ナポレオン・露帝アレキサンドルの會見となり、終に七月八日、兩帝間に著名なるチルシットの平和條約は現出した。

扨其條約は何事をか規定した。第一には普魯西王國版圖の大半を削り取つて、ウエストファリー王國を分立し、第二には普領波蘭(ポーランド)にワルソヴィー大公國を創建した。而うしてウエストファリー國王にはナポレオンの弟ゼローム・ボナパルトを封じ、ワルソヴィー大公國は獨逸に於ける佛國の與國薩遜士の統轄に歸した。以上は其際公けにせられた所であつたが、別に兩帝間に約せられた秘密協約は、露國の利益としては、芬蘭・モルダヴィー・ワラーシの併合を認め、代りに佛國の利權としては、ニーメン以西を皆其領有に放委する事てあつた。若し之を斷言するならば、露國に認めた一

部分を除くの外、歐洲の大陸は、ナポレオン一世皇帝の宸衷のまゝに委せられたのである。

チルシット條約の効果は此外にもある。前にも述べた通り、大帝最終の目的は世界の一統に在る。處が其志業を碍げる奴の筆頭が英國である。佛國艦隊をアブーキールで撃壞したのも英國であれば、佛西聯合艦隊をトラファルガルで破碎したのも英國である。尚負けに其國の富力を利用し、莫大の軍費を大陸列强の聯合軍に貢いで、其軍を第一線に立たせ、帝に島國を窺ふの餘裕なからしむる者も、亦英國である。そこでナポレオンは一策を按じ、彼島國は大陸との交通を絕たるれば、存在し難い國であるから、交通遮斷・交易杜絕を以て、彼に致命傷を負はせて遣らうと思ひ立つた。それで昨千八百六年の暮、伯林占領後、十一月廿一日を以て、同地からして、有名なる大陸封鎖令を天下に發令したのである。併し其當時に在つては、露普兩國が尙ほ敵對行爲を續けて居たから、完全に封鎖令の効果を得なかつたが、今や露普兩國も戰敗上の制裁を受けるに至つたので、玆に露帝と約し、其れをして封鎖令の勵行に協力せしめる事にした。此政策の得失は別問題として、歐洲の列强といへば、世界萬國といふにも幾い、其列强をして設ひ一時なりとはいへ、一ナポレオン其人の命令を奉ぜざるを得ざるに至らしめた勢力は、偉とし大として崇せざるを得んやだ。

チルシット條約後の帝國

彼は其身佛蘭西皇帝にして、兼伊太利國王たり。兄のジョゼフは獅子里兼ナーブル國王たり。弟のルイは和蘭國王たり。次の弟ゼロームはウエストファリー國王たり。ライン聯邦は悉く帝の保護下に在り。墺・露・普・西等の諸强國亦皆帝の節度を受く。此機に乘じて、葡萄牙を取り、フレッシングを併せ、又其以前にはトスカーヌ大公國をも占領した。

外に向つて勢力の發展は斯くの通りである。さらば内に對するチルシット條約後の施設は如何であつた乎と顧みれば、是れ亦絕對の權威を振舞はした。即ち大

革命以來、根絶しやうと勉めて來た貴族制を復活して、自家に忠實なる將相の多くを公侯伯子男爵に取立てたのが手始めて、十四元帥を新任する。侍衞武官を環列する。宮内の官僚を增加する。加之、ブールボン家以來の舊貴族を多く宮中に出入させ、其夫人の多くは皇后に奉侍させ、此國の大御所時代即ち路易十四世時代に一層輪廓を加へた。蓋し彼の意を忖度すれば、是に由つて列强の王家帝室と帝王的交際を厚うし、帝業の安固に資せんと欲したのであらう。但しそれまでは尙ほ可なりとしても、同時に立法議會のトリビュナを廢止する。言論・刊行の自由を抑制する。此の處宛然たる專制君主の風があつた。

併ながら、彼は何處までも實際家である。それて大藏大臣にはゴーダンを用ゐて、大いに政府の財政を改善し、又陸軍大臣にはモリヤンを擧げて、軍資並に出師準備を整頓させたから、國家の財計は豐かてあり、何時何處に向つても、一本參られるだけのものは、チヤーンと整ふて居た。加之、彼は此平和の間隙を利用して、盛んに農・商・工業を奬勵したので、事業は段々勃興して來る。大革命以來負ふてきた一國の經濟的創痍も次第に快復する。それから彼は亦夙に交通上の發達に着眼し、運河の開鑿・道路の改修に關する大土功を計畫し、同時に巴里の煥美をも企て、トロカデロやマドレーヌ等の建築などをも興させた。尙ほ附加へて言ふ可きは、國民教育の普及にこそ跡てあつたが、大學なども彼の意圖から現出した。それてチルシットの條約だに永續するならば、佛蘭西帝國は何處まで繁榮する歟と、一般に想像せしめたのてあつた。

西班牙の討征

但だ其れ善く言へば、彼が絕大の希望、惡く言へば、谿壑の慾望は、其の止まる所を知らぬ。千八百七年の十一月葡萄牙を併合した後、西班牙王國までも兼併せんと欲し、翌千八百八年に至り、詭計を用ゐて、國王カルロー四世及其太子フェルヂナンをレイヨンヌに引着け、之を廢して、ナポレオンの兄にして、曩に獅子

里兼ナープル國王に封じたジョゼフ・ボナパルトを更に此大國西班牙の王位に即けたのてある。是が抑〻の失策て、西班牙國民は一齊に蜂起し、戰爭は又亦始まつた。帝が派遣した將軍デュポンはベイランに敗れ、同じ將軍ジュノーはヴィメイローに敗れ、何れも不名譽な降服を餘儀なくせられたのてある。

されど此歲、ナポレオン一世は獨逸の一地に露・墺の兩帝及獨逸聯邦の諸君主を聚めて、所謂エルフルトの會合を以て、平和の保證を重ねたから、東方の事は憂ふるに足らずとして、半島の親征と出掛け、チューデラに、ビュルゴースに、ソモ・シエラに、馬德里に、到る處西班牙軍を打破つた。が、是時ほど西班牙人の敵愾心を昂憤した事は前後に無い。從つて敗るれば、從つて起る。爾後ナポレオン部下の名將スールや、マッセナや、シューセーやが、非常な努力を以てしても、其戰爭容易に終局せず。此年千八百八年から・同十三年まて、六箇年間繼續したのてある。此戰役の結果を此の處にて綜括して言へば、凡そ此役に從事した佛蘭西・伊太利・獨逸・波蘭四國民の生命を殞した者、前後て四十萬人に上つた。實に無益な馬鹿戰爭と謂はねばならぬ。是が爲にナポレオン自身の人望とナポレオン軍の勢力とに尠からぬ損害を受けた。這般の金創こそバチルスの好んて着込む所てある。果せる哉是が第五同盟の成出と反抗を促がすの近因とはなつたのてあつた。

第五同盟の破碎

ナポレオン一世が高價を西班牙征服に拂ひつゝあるに乘じて、英國は大陸列强を煽動したので、千八百九年に至り、茲に第五同盟は又亦形成された。其筆頭は何時もながら墺地利てある。皇帝は又自ら將として、獨墺の境へと向ひ、四月廿日には、アベスベルヒに於て墺軍を破り、廿一日には、ランドスートを略し、廿二日には、エクマルに克ち、廿三日には、ラチスボンヌを占領し　連戰連勝して、墺京維納に攻めつけ、數日砲撃の後、五月十三日に至り、佛軍は又もや此首府に

侵入し、同時に維納の障屏たるダニューヴ河上のロボー島をも占領した。されど墺軍は尙ほ退京して、頑强に抵抗を續けたので、同月廿一二の兩日には、エッシングの戰となり、是れ亦佛軍の勝利に歸し、其翌六月五日が有名なるワグラムの大勝となつた。是に至つては、不名譽ながら、墺國は又もや閉口せざるを得ぬので、七月六日、スナイムの休戰條約を受けた。而してトヾのつまりが、同年十月十四日の維納平和條約とはなつたのである。其結果は如何と看れば、ナポレオンは墺國にイリーリイ及ダルマシーを割かせて、之を佛國の版圖に收めた。

且つ彼の手は此戰爭一つに撓められぬ。彼は墺國と以上の戰役を續けつゝある間に、和蘭王國を佛國に併合したのが、其一つ。それから羅馬法皇ピー七世を抑制して、法皇政府直管の諸州を併せたのは、其二つ。此他にオルデンベルヒ及獨逸北部に於ける商業同盟の諸市府を收めたのは其三つ四つてあつた。

ジョゼフィーヌの離婚

ナポレオンとジョゼフィーヌとは、想ひ・思はれて、結婚した。ナポレオンはジョゼフィーヌの爲に、彼女を孤寡の悲境から拔いた。ジョゼフィーヌはナポレオンの爲に、此良人が顯達の土臺を築いた。兩人の間柄は琴瑟啻ならず。ナポレオン一世皇帝の地位に登つても、此愛情は尙ほ久しく繼續された。それは彼が末路聖(セント)ヘレナの回舊談中にも『自分佛國に君臨した後も、彼女と晝は同室の裏(うち)に暮らし、夜は同床の上に眠つた』といつて居る。然るに年を經るに從つて、此に問題が起つて來た。ナポレオンが無形の心頭に問題が起つて來た。全體彼女はボーアルネイ子爵夫人であつた時に、男女二人の子をまうけた。女はオルタンス、男はユーゼーヌである。夫人は之を引連れて、ボナパルト家に再嫁したのである。勿論ナポレオンは此二兒を自分の養子養女にして、深く慈愛した。併し物足らぬのはジョゼフィーヌと結婚以來、一人の實子も出來なかつた事

である。凡そ智愚賢不肖となく、我兒の欲しいのは、人情の常である。况んや英雄彼の如き、自分の記念・自分の後身として、少なくも一人の男子を得たいと希望するのは、無理ならぬ。是が一つ。次にナポレオン家の帝制を永續させるには、皇儲皇嗣の必要がある。是が二つ。それで若し此の間に彼女が一男子を擧げて居たならば、或は夫婦の關係は永く繼續せられたかも知れぬ。それの無かつたのが、實にジョゼフィーヌの不幸であつた。其次は彼ナポレオンが人情・倫理を滅却する功名心の働きである。彼ナポレオンの大手腕には何人も驚殺され、列强は彼に反抗する毎に、痛い〳〵痛棒を喫はせられて來た。併しながら彼成金がといふ感念は、列强の帝王間に伏在する。それが彼に對する反抗の一因となるのである。列强同盟の幾度と無く成立する所以も、此にある。之を緩和する一手段としては、墺露の如き堂々たる帝國の一と婚を連ね、通家の關係を生ずるより善き事は無い。是が亦簇々と彼の胸裏に湧出たのである。されど斯かる野心は彼の而目上口外せられる事では無い。そこで彼は主として皇位の繼承者なかる可からざる事を理由として、千八百九年の十二月十五日に、彼女を離別したから、彼女はチユイルリーの皇居を出てゝ、マルメイゾンの離宮へと退いた。あれほどの武斷家も、此事だけには尠からず困んだと見え、皇后の退位を元老院にて決議させた上、宮中に歸つて來た時には、日頃蒼白な顏色が、一層蒼白となり、ジョゼフィーヌを見て、流石にそれと言ひ出しかねて、脣を顫はせた。其時ジョゼフィーヌは抑えるやうに、

「モー何も仰しやつて下さいますな。…… 疾つくに承知して居りますから」

といひながら、泣きくづをれられたといふ事である。其心情如何であつたらう。女性の心は女性が知る。近世の吾歌人で、殊に詠史の名人であつた税所敦子刀自が、此人の此境遇を想ひ遣りて、

　雲の上にすまずなりても世を照らす影はかはらぬ片われの月。

と詠ぜられたのは、絕妙好辭と謂つ可きてある。ナポレオン當時の事情から看れば、彼がジョゼフィーヌを離別して、婚を與國の帝室に連ねやうとしたのにも、又普通の人情から推して、實子を擧げたいと思つたのにも、寬假す可きものはある。是を以て彼の失德を責めんは深刻だ。併ながら富貴顯榮は草上の露に異ならず。彼が卓落の思を以て、少しく詩的に哲理的に猛斷し、設ひ後嗣は無からうとも、又政略には不便であらうとも、彼女と最後まで連添はゞ、聖ヘレナに横へた屍に何れほど光輝を加へたらう。是に至つて自分はいふ『最後の勝利は、德に在つて、力に在らず』だ。されど斯く言つたとて當世に娑婆たるコムマ以下の美人俊傑輩の耳の皷膜には、何等の反響も及ぼすまい。斯んな連中はセッセと墮落して、朽たばりたまへ。蛆蟲同然に斯世が葬る。

　但だ此場合に、內所て一言附加へて置かう。立派な靑表紙には、ナポレオンとジョゼフィーヌの關係は、此て一段落にして居るが、マルメイゾンと――チュイルリーとの兩間の線路には、其後も屢々彼英雄の馬蹄車輪が印せられた。此邊てジョゼフィーヌの不幸も、ナポレオンの嶮岨も、二十パーセントぐらゐは、減じて見る事が出來る。

マリー・ルイズとの再婚

ジョゼフィーヌとの離婚が決行せらるると、皇帝御再婚の議は、乃て宮廷に持擧がつた。候補の公主は墺國にも露國にもある。露國の方は、アレキサンドル一世の皇妹墺國の方は、フランツ一世の皇女であつた。當初は露國の方と交渉を開かれたが、宗教上の儀式の件て、一寸行惱みとなつて居る處に、寧ろ墺國側から内意を持込んだ。それてナポレオンの宮廷內ても、自ら二派に分れ、カムバーセレーなどは是非露國からと主張したれど、ユーゼーヌ親王等が墺國の方に左袒したので、終にそれと決定し、千八百十年の四月一日、ナポレオン皇帝と墺國皇女マリー・ルイズ內親王との大婚式は巴里に於て擧げられた。時にナポレオンは四十

一歳にして、マリー・ルイズは花羞かしき十九の歳であつた。此間に一寸面白く感ずるのは、前皇后ジョゼフィーヌはナポレオンよりも長ずること六歳であつたから、此年恰度四十七歳。之に反して、新皇后は皇帝より若きこと二十二年。それて前皇后が如何に才貌雙絶てあつても、深山木の姥櫻よりも、今咲出てた春の初花の方に、自然心が移つた歟、『新皇后はウブだ〱』といつて鍾愛した。此の處も亦吾太閤が北政所は政所として、若い淀君に打込んだ邊に似て御坐る。唯太閤當時の吾國の風氣は、側室として、別妻としても、それて通つたから、政所・淀君を並び寵する事が出來たのてあれど、十九世紀劈頭の歐洲社會ては、左様便利な譯に參らぬ。そこて前后を廢位して、新后を册立するに至つたのてある。此一事こそ彼是地を易へなば、皆然らんことと受合ひてある。

如何にも此新皇后はハプスブルヒ家の大宮廷に育たれたから、應揚てあつたに相違ない。それは前皇后のジョゼフィーヌは供御調度に就いて、一度もナポレオンに求められた事が無い。代りにドシ〱御用達に巨額の用品を申附けられたから、時にはナポレオンを困らせた事があつたが、新皇后のルイズと來ては、即時に代を拂はねば、物は一品も買へぬものと心得、何が無いといへば、良人に求め、箇が欲しいといへば、皇帝に強だるといふ風てあつた。其處が亦ナポレオンに少なからず氣に入つた。併し如何にウブても・應揚ても、ナポレオンの離宮マルメイゾン通ひだけは大嫌ひて、此御微行といふと、何時も夫婦間に風波が起り、如何に大英雄ても大いに閉口した事を、異日聖ヘレナの無聊中に、侍臣に向つて自白して居た。

斯くて翌千八百十一年三月十日に至り、マリー・ルイズは皇子フランソワ・シャルル・ジョゼフを分娩された。此際ナポレオン一世の悦は譬へんに物なく、之を抱いて、元老院に臨み、立てゝ皇太子と爲すことを承認させ、直ちに之を羅馬王に封じたのてある。其皇子の亦可愛らしさ、掌中の珠とは、眞に是等の謂ひてもあらう。帝制は壞れても、ナポレオンは惜まれても、

今に至るまで、此皇子のみは、「羅馬王」と稱して、上流社會の家庭には、其肖像が飾られる。

偖是時に當つては、ナポレオンの權勢は頂點に達し、佛蘭西帝國の管する所は、一百三十州の多きを數へ、歐洲大陸の帝王大頭領は君が馬前の塵を拂ひ、其一顰一笑に由つても、起伏興亡立ちどころに到つた。それて歐洲一般に彼を稱して、「王の王」にして、「帝の帝」と呼んだのてある。折柄皇太子の誕生となつたから、帝業の基礎は愈々磐石と想見された。が、高明の門には鬼の窺ふあり。彼の運命は之を頂點として、漸く陵夷の傾斜に就いた。

征露の失敗

彼が施設中の大失策は、大陸封鎖が第一てあつたらう。成程之が爲に英國も困るは困つた。併ながら其の英國の困難を分擔したものは、大陸列强てある。列强は此封鎖令以來、自國の製品の吐場を失つたと倶に、亦需用品の供給に事を缺ぐ。兎いつて之を破れば、獅子王の大軍は踵を旋らさずして、國境を壓して來る。それて內々何れも憤怨する。お負けに此頃から普魯士を中心として、北獨逸人民の國民的精神は勃興し來たのてある。而うして本國に於ても次第に怨嗟の聲が高まつて來た。殊に彼が立法議會にも議らずして、千八百五年に八萬人、同じく十年に十六萬人の戰員を徵集したのゝ如き、最も國民の反感を買ひ、加持力教徒や、自由主義の連中は、段々彼を國の寇讎のやうに見做して來た。

併ながら彼の意氣は愈々益々旺盛てある。千八百十二年に入り、彼は普墺兩國と各別に盟約を重ね、是から彼が當初からの目的たる英國壓迫に、一層力を入れやうとする矢先きに、波蘭處分に就いて、端なく露國との外交問題を惹起した。ナポレオンは露國に波蘭及ポメラニーを開渡せと要求し、アレキサンドルは之を開渡さぬと抗議した。此際てもナポレオンをして今少しく其意を下して、露國に交渉せしめれば、平和は尙ほ維持せられるのてあつた。されど彼の眼中には露國が

無い。六月廿二日に至り、開戰を布告し、三十萬の大軍を提げて、堂々として東歐に打入つた。依然彼の前には勁敵なして、ヴィルナに克つ。ヴィテブスクに克つ。スモレンスクに克つ。ボロヂノーに克つ。九月十二日には、露の神都莫斯哥府を占領した。唯だ其れ天運の轉移する時には、人力の豫め慮る所に非ず。一朝莫斯哥の大火となり、兵食の缺乏となり、退却の已むを得ざるに至りて、嚴寒と露軍との兩大敵に困みたるに、折も折、時も時、巴里に於て將軍マレーが謀叛の飛報は、彼が行營に達したのである。帝は退軍を諸將に委して本國に向つて馳還つた。後にはさしもの大軍も、ベレジナに於て潰亂した。

最初の退位

征露の大軍一たび潰亂するや、歐洲の形勢は忽ち一變し、大陸の列强、ナポレオンに對して、亦又反抗の態度を抗して來た。翌千八百十三年の三月に入り、普國先づ開戰を宣し、次いで瑞典之に連合し、八月に至りて、墺國も亦絶交を布告した。されど流石はナポレオンである。彼は更に軍を整へて、獨逸に入り、同月廿七日には、ドレスデンに普軍を打破つた。併ながら彼の元帥ヴァアンダンムはクルムに挫折する。元帥ネイはダンヌウィッに敗績する。すると巴威爾・ウルエムベルヒ・索遜なども皆反抗同盟に入る。遂に十月十八十九兩日に亘るライプチッヒの絶望戰となり、此十八年來常に攻勢のみを取つて、本國以外に戰つた彼ナポレオンをして本國に退却せざるを得ざるに至らしめた。

墺・普・英等の聯合軍は諸方面から本國に侵入した。それでも千八百十四年の初頭まで、ナポレオンは尚ほ帝位を保ち、城を背にして一戰するの決意を以て、親しく自ら戰線に立ち、今か潮の如く押寄せ來る敵軍をサン・ヂジエー及ブリエンヌに於て打破つた。其精力と手腕には、敵も身方も驚嘆した。それて列强も膽を奪はれ、二月五日、シャーチョンに交戰雙方の全權委員開議を催し、聯合政府の方から『佛國の國域をして千七百九十二年、即ち共和軍が未だ四外に打て出なか

つた當時の佛國の舊態にまて復する事を條件として、媾和條約を締結す可し』と提議した。それならば元々てある。之に同意をさへ表すれば、ナポレオンは依然皇帝たるを失はぬのである。處が自ら信ずること神の如しと謂はう歟、動かざること山の如しと謂はう歟、彼は前後左右内外に敵を受けながら、其頭を横に振つた。現在の國域を尊重せざる限りは、同意を表することと相成らぬと謝絶した。すれば乳虎の咆哮の依然たる可きは、何國の目にも豫見される。戰爭は再たび繼續した。強い〳〵。彼は尙ほ孤軍を提げて、シャムポーベールて克ち、モンシライユて克ち、ヴォーシャムて克ち、モントロー及メリイて克つた。彼は此勢に乘じ、敵軍を巴里の守備軍と自家の提げる軍にて挾擊し、狂瀾を既倒に回さんと策せる處に、巴里の守備軍は兩日の砲擊に堪へず、三月三十一日、將軍マルモン其守備を撤したので、巴里は敵軍に占領せられ、翌四月一日、元老院はナポレオン帝位の失權を決議した。是に至つて萬事は休した。彼は痛恨胸に充ち、毒を仰いて自殺しやうと企てたが、幸歟不幸歟死に至らず。同じく四日、フォンテーヌブローに於て、自ら退位を宣示した後、同じく廿日に、近衞の虎賁に別を告げて、玆に之を解散した。

自分は皇帝の本紀を讀んて、此に至る每に、未だ嘗て痛惜せぬことは無い。兎いふは、帝はフォンテーヌブローの宮殿に諸將を聚め、爰に最後の會議を開いた時、帝の意は尙ほ何處までも帝位を退かず、戰鬪を繼續するに在つた。が、會議に列席した諸元帥連は當時何れも王侯の地位に在つた。それて此に媾和に同意すれば、自家の富貴が維持せられそうに思はれるので、『今日に至つては、所詮勝算も見えませぬ。此上は最早國家蒼生の爲に、陛下の御引決を仰ぐの外は御坐りませぬ』と答へたので、帝も已むを得ず、退位に同意したのである。が、當時宮外に蝟集した佐官以下の將校は、何れも尙ほ「皇帝萬歲(ヴィーヴ、ラムプルール)」を山呼して、再戰を希望し居たのである。史家の一人は此後に附記して、『惜いは内外百歩の間てあつた。當時帝は宮内の一

室にて、金印燦々たる老將軍等と圖議するを休め、足を宮外數十歩の地に移し、活氣に充ち、死命を辭せざる、少壯多數の將校等に謀らせたらば、帝の運命は此時更に再たび轉回したるやも、未だ知る可からざりしものを」

といつた。吁是れ實に機を知るの言。看たまへ、吾明治天皇は『萬機を公論に決せん』と誓はせられて、帝國今日の隆運は遺させられた。當年のナポレオン・ボナパルトに從つて百戰し來つた貔貅の連中でも、老倒し來れば猫の如しよ。それから以上は閑話休題。先づ此邊にて止めて置かう。

最後の大飛躍

ナポレオン自ら退位を承認するや、フォンテーヌブローに是ける列強會議となり、彼を地中海の一島エルバに流竄する事に決定した。但し此際までは尚ほ彼に尊敬を捧げ、其島を彼が主權の下に置いたから、謂はゞエルバ王・否なエルバ皇帝であつた。彼は此名譽の俘囚となつて、上にも述べた通り、四月二十日、別を近衞の虎賁に告げ、此島へと赴いた。それて佛國は舊のブールボン家の王嗣たる路易十八世を巴里に迎へて茲に國王の位に復せしめた。是て列強も其兵を收め、嘗て彼ナポレオンの爲に放逐され・乃至留置せられた諸帝王も始めて舊位に安堵するに至り、久々振りに歐洲の天地に泰平の有樣を現出した。

が、路易十八世甚だ不評判。之に反して彼エルバ帝、專斷家てはあり・好戰家てはあつたが、彼が在位中の佛國の勢威と名譽とは、亦國人の忘れざる所。殊に軍人は彼を信ずること神の如く、今一たびの君臨もがなと、窃に念じて居たのてある。功名心の權化たる彼ナポレオン爭て永くエルバの小天地に蟄息せんや。亢龍雲雨を得れば、亦池中の物に非ず。在島約そ一年許り、機會の到るを待ち居たる彼は、翌千八百十五年の三月一日、海軍監視の透を窺ひ、八十餘人と一船に取乘り、佛國本土カンヌの附近に在るゴルフ・ジュアンに着船して此處に乘陸し、大膽も大膽、巴里に向つて北進した。

ソラ皇帝が歸られたとの報は、雷霆の響より强く、熱血國民の間に傳はつた。彼は沿道の兵營に、徒手空拳て立向つた。「朕と多年死生を俱にし、名譽を世界に輝かせた親友の將校・兵士、朕を失はんと思はゞ失へ。朕が一身の運命を爾等に一任する。佛蘭西の名譽を思はぬ歟。列國の脅迫に甘んずる歟」との彼の勅語に接する者、皆感激し、「皇帝萬歲」を唱へながら、到る處彼に景附した。最後にはシャル、十八世の政府から、彈壓の爲に差向けた官軍までが、銃を倒まして歡迎するに至つた。

それで彼は無人の境を行くが如く、僅々二十日間を費して、三月二十日には、早くも巴里に到着し、玆に帝政の復活を布告した。列强の驚きは市上に虎を出したのよりも甚しい。是に於て列强は第七回の同盟軍を起して、彼に當る事となつた。是より先きナポレオンが獨逸から退却し、列强の聯合軍が佛國に混入して來た時にも、一軍に將として敵軍に當つた國士カルノーは、此際彼に勸告するに、暫く守勢を取り、去る千七百九十二年、聯合軍の來侵を國境に防禦した其例に倣ふやうといふ事を以てした。蓋しカルノーの意は、已むを得ずして干戈を取る、即ち正當防衛であるといふ意を、外は列强に示し、内は更に國民の敵愾心を是に由つて激勵しやうといふのであつた。

が、氣早の英雄は之を聽かず、直ちに一軍を統率して、白耳義に討入り、六月十四日、リーニー及クートル・ブラに先づ普軍を破り、進んでワーテルローに英將ウェルリントン・普將ブリューセーとの對抗となつた。兵聖ナポレオン一世皇帝の戰略に遺算は無い。彼は戰の前夜から將軍グルーシーに一軍を授け、普將ブリューセーの軍を中途に迎撃さす可く出發させた。意は彼が得意の用兵即ち敵の兩軍を各個別々に破碎せんとするに在つた。時は六月十八日曉天から終日の血戰に、有らん限りの手を碎いた。其日の豫備隊をも用ゐ盡し、敵軍既に色めいて、勝機は脈々此方に向つてあつたが、彼が運命の盡きる處歟、グルーシーの一軍路に迷ひ、夕陽傾くまで、戰線に到着せず。折柄遙に戰敗の聲は天

の一方から聞えて來た。ソラ別軍の到着と、身方は喜び、敵は色を失つたのも、只一瞬間、其の來つて戰線に入つたのは、グルーシーに在らずして、普將ブリュセーが率ゐる新手の普軍てあつた。是に於て平大事は去つた。大帝は絶望し、幾たびか敵軍に突出して、快く討死せんと試みたれど、左右に擁止せられ、敗兵と倶に巴里に還り來た。

聖ヘレナ

六月廿二日、彼は皇太子羅馬王の爲に帝位を辭し、之をナポレオン二世として佛國に君臨せしめんことを求めたれど、志を得ず。彼は一たび米國に逃れ、後圖を爲さんと試みてみたが、海上の警戒嚴重にして、それも亦成らなかつた。彼は塒を失つた窮鳥となり、多年の讎敵たる英國に投じ、其國の客たらんと欲し、七月十五日、當時ロシュフォール港に碇泊の英艦ベレロフォンに身を投じ、列强の處分に命運を委した。列强の君主中ても、露帝アレキサンドルの如きは、此政敵に多少の好意を有したが、冷たい〳〵テイムス河畔の政府は、一滴の涙をも彼英雄に濺がず。强いて列强に同意させて、之が處分を自ら任じ、僅に彼の左右ベルトラン、モントロン、グールゴー、ラカーズ等數名の隨行のみを許して、瘴烟深き絶海の孤島聖ヘレナに流竄した。

島の一角ロングウードの狹隘なる一館舍、是が二十餘年間歐洲の天地を震動した大帝ナポレオン一世の最後の皇居てあつた。本島の太守にして帝の監視者たる英將ホドソン・ローウェー、是が亦情知らずの芋掘老爺、殘忍酷薄を以て末路の英雄に對した。が、彼は始終之と戰ひ、最後に至るまで大皇帝の尊嚴と意氣とを失はず。其間左右をして過去の政戰兩大事業の回想錄を修めさせ、千八百二十一年五月五日、五十二歳を以て此島上に殂落した。

アンヴァリードの寢陵

彼が列强との戰爭を續けた爲には、數十萬の佛國民

を死傷させた。彼が列强の憤怨を買つた爲には、其盛時に百三十州までを併合した代りに、敗後に佛國の版圖をして、戰爭以前よりも削小された。されどゴーロワが子孫の國民は、代を易へ・年を歷ても、彼を追慕して、其記憶から放脫させぬ。千八百四十年、然もブールボン家の王政時代にも關はらず、上下兩院の決議を以て、其年十二月十五日、彼を本國巴里に歸葬した。彼の寢陵は莊嚴を極める。金色燦爛たるアンヴァリードの大圓塔の下に長方形の而も紅綠色な大理石の巨棺を安置し、其裏に彼の遺灰を永眠させた。棺の下を看れば臺石の各面には、リボリー、ピイラミード、マレンゴ、オーステルリッツ、イエナ、フリードランド、ワグラム、モスクワ等、彼が大勝を記念す可き地名が深刻される。棺の上を仰げば、四壁の承塵には、彼が各處の戰場にて收め取つた列强の聯隊旗六十旒まで飾られる。此石彼旗は沈默の間に、大帝眞の英雄と又其一代の功名とを說明する。將に此廟に入らんとする入口の上には、帝が最後の遺言が題せられる。

"Je désire que mes cendres reposent sur les bords de la Seine au milieu de ce peuple français que j'ai tant aimé."

即ち其意は、

『吾灰をして佛國民の中央を流るゝセイヌの河畔に憩はしめよ。是れ吾寤寐にも忘れざる所の民なり』

と、一たび來つて此語に對すれば、脫帽稽首し、淚の坐ろに落ちるを覺えぬ。

自分曾て巴里に滯在中、好んで車夫・馬丁・土方・人足等の輿論を察してみたが、彼等の言草が面白い。

『私等の國では、危急といふ時には、必らず國民中から英雄が出る。羅馬が攻込めば、ベルセンゼトリックスが出る。英國が侵入すればジャンヌ・ダルクが現はれる。列國聯合軍が競ひかゝれば、ナポレオン・ボナパルトが出て御坐る。皇帝の崩御から最早百年、モー英雄の生れる頃です。それが今日の國運を挽回いたしませう』

といつて居た。佛國人の眞の輿情は、恐らく此邊に在

るてあらう。ナポレオンの神靈は今尚ほ彼が親愛せる佛國民の頭腦の底の底に托宿する。

事實を明かにせねば、理が聽えぬ。彼ナポレオン・ボナパルトの事業を雜と觀兵式的に觀察すれば、大略斯ういつたやうなものである。扨是からが評論であるが、下手(へた)の永談議は倦怠の種であるから、今回は是でお仕舞にする。何れ其中に又・・・。

御大喪について顯はれたる 新舊思想の衝突

石川半山

新舊思想の衝突は、一家の中で舅姑と花嫁と衝突する如く、何れの國にも在ることだが、急激なる進歩主義が、温和なる保守主義に依て、適當なる調和を得て往くのは、國の爲めに寧ろ喜ぶ可き事で有る、之れが爲めに國の基礎は益々堅實になり、健全なる進歩發達をなすことが出來るから、家に老人の必要なる如く、國に保守論者を有することも、全く無用な事とは謂はれないが、唯何分にも我が日本の舊思想に至ては、歐米各國に類例の無い、途方もない舊るいのが有るから、之れには恐れ入らざるを得ない、新思想と云ふても、近頃流行の所謂「新らしい女」のデカダン的新思想などは贊成することの出來ない如く、同じ保守的舊思想でも、飛び離れて古いのは、殆んど持て餘さゞるを得ない、特に明治天皇の御發病以來、此の古代的舊思想の原動力とも稱すべき、宮内省方面の連中が、宮中の御威光を笠に着て、色々な頑説を無遠慮に吐き散らすには、大分閉口して居る向も有る樣である、幸ひに皇太后陛下や新天皇陛下が英明に渡らせられ、二十世紀

の大勢にも通じ玉ひ、頑冥不靈なる舊思想の發言は、多くは御採用にならない樣だから、此點は大に人意を強ふするに足るけれども、何しろ近頃は大分此等の舊思想が跋扈して、中正公平なる新思想と衝突するのは、國の體面の爲めにも、餘まり喜ばしい事とは思はれない、

品川子、伊藤公、田中伯

故品川彌二郎子が曾て宮内省の官人中に、愚劣なる者の存する事を罵倒し、「彼等は開國進取の御趣意をさへ解せず、昔ながらの大宮人だから困まる」と言ッたことが有る、品川子は維新の元勳の一人で、純粋の勤王家で有ッたから、此人の言論はドノ位激烈に宮内省を攻擊しても、之れが爲めに叛逆人の寃罪を被ふることは無かッた、又故伊藤博文公も曾て宮内省の官人等の間には、往々にして濟度し難い者の有ることを嘆息せられて、「彼等は一世紀以上遲くれて居る」と申されたことが有る、公爵が皇室の柱石で有ッたことは隱れもない事だから、コウ云ふ攻擊が有ても、誰れも其の誠忠を疑ふ者は有るまい、前宮内大臣田中光顯伯さへも、大臣の任に在る間、諸種の方面から色々の愚論頑說を持ち込まれて、之を適當に制して往くに困まッたと云ふ話を聽いたことが有る、實際宮内省の内外には、殆んど度し難い一種頑固な空氣が有て、種々の愚論が集まる者と見える、先帝陛下が御聰明なりしが爲めに、此等の舊思想より來る頑說が、多くは勢を得ず、明治の大業を成すに大した累をもなさなかッた樣だが、今日と雖も尚宮内省の一部と國民の一部を通じて、大分途方もない極端なる舊思想の人が居る樣に思はれる、今最近に世間に發表されたる愚說の實例二三を指摘して、有識者及び國民一般の注意を促がしたいと思ふ、

第一　醫術に關する愚說

宮中に於ては我輩共の想像にも及ばない愚說が、醫術に關して現はれた、其の一に曰く

玉體を拜診する侍醫は、他の臣民の患者を診察して

はならぬ、臣民の汚かれた手を握ッた手て、陛下殿下の御脉を執り奉るは畏れ多い

陛下の赤子を穢多非人扱ひとするのが、抑も官的偏見て有る、而して侍醫が他の患者を診察しない結果、彼等は日進の醫術に遅くれて、一旦御大患が起ると自分だけて分らなくて、毎日他の患者を診察して居る青山、三浦の諸博士を聘さなくてはならない様なことになッた、平生澤山の患者を取扱ふて、醫術の經驗を積み、其の日進の治療法を研究したる醫師てなくては、貴顕の御病症を速やかに判斷して、直ちに適當の療法を案出することは出來ない道理だが、陛下の赤子たる一般臣民を汚れたる者と定め、陛下殿下を絶對の神體として取扱ひ奉らんとする舊思想は、侍醫を化して籔醫となし、遂に侍醫局員をして世間から幇間醫の譏を受けしむるに至ッた、我輩は岡侍醫頭が果して如何なる人物なるやを知らないが、兎に角アレだけの地位に上ぼッた位の人て有るから、確かに昔は第一流の醫者て有ッたろうと思ふ、然かしながら宮中の御用のみを承はッて、日進醫術の研究に遅くれたる爲めに、今回先帝の御大患に際して、諸方から攻撃を受くる様な事になッた、我輩は彼れを責むるの前、先づ彼れをして此に至らしめたる舊思想の罪を責めたいと思ふ、考へて見玉へ、今日青山、三浦、佐藤の諸博士にした所が、單純に侍醫として、玉體拜診を専門とし、他の患者を診察することを禁止せられたなら、五年十年の後には、其日進の醫術に遅くれて、最早や今日の名譽を維持することは出來ず、岡侍醫頭と同様の籔醫とならざるを得ないて有らう、然るに幸ひに皇太后陛下は御賢明に在しまして、先帝御大患の際、斷然此の舊思想を排して、毎日平民の手を握れる青山、三浦兩博士を招かせ玉ひ、新帝陛下亦新に青山、佐藤、三浦の三博士に宮內省御用掛を仰せ付けられたから、今日ては最早や臣民の汚かれた手を握る者は、玉體を拜診すべからずとの愚論は屏息した事と思ふが、是れ迄は隨分コンな分らない舊思想が跋扈して居たのだ、

其の二に曰く

玉體に注射を行ふが如きは、不敬の甚しき者にて、畏れ多きことなり

曾て宮中に於てヂフテリアに罹らせ玉ふたお方が有ッた時に、速やかに同病の特効薬を注射しやうとすると、此の舊思想の愚論が飛び出して、大反抗をなし、危ふく御大患にもならせ玉はんとしたことが有るさうだ、實に言語道斷の沙汰で有る、今回先帝御大患の際にも、此の種の非注射論が現はれたが、皇太后陛下、新天皇陛下の御英斷で、食鹽注射もカムフル注射も行はれたから、今後はコウ云ふ愚論は行はれない事と思ふが、矢張りコウ云ふ舊思想の發言だけは今後も時々は現はれ來る事と考へる、

其の三に曰く

位階なき者は如何なる名醫も、宮中へ出入せしむ可らず、看護婦も亦同様なり

此の如き愚説が宮中に行はれて居る事は、宮中のお爲めに宜しからざる事と思ふ、今後はコウ云ふ宦官的偏見は一切宮廷の外に排して、四民平等の御趣意に從ひ、五千萬同胞は均しく陛下の赤子なれば、必要なる場合には、位階の有無に拘らず、何人をも召し出されて、御用を仰せ付けられる様にしたい者だ、

第二　帝號忌避の愚論

先帝の御追號を明治とするに付て、大分反對論を唱へた者が有る、それは明治の號が商店、劇場、會社、銀行、學校等に用ひられて居るからイケないと言ふのだ、而して既に御追號が明治と確定した後に於ても、或る文學博士などは政府の權威を以て、明治座や明治生命保險會社や明治大學や明治商業銀行や明治屋等の類は、一切改號せしむ可しとの愚見を唱へて居ると云ふ事だ、之れは先帝陛下の汎く赤子を愛し玉ふ叡慮に背反し、新天皇陛下が斷じて明治と定め玉ひし御趣意をも辨へず、只管に我見を張らんとする不埒の言動と謂はなくてはならぬ、抑も帝號忌避と申す事は、我が皇祖皇宗のなし玉はざりし所で有る、初めて此の事の行はれたるは、元明女帝の和銅七年で、之れは支那か

ら傳來した者て有る、支那ては古昔から此の風習が行はれ、臣民は帝王の名を忌避し、新帝登祚した時に、其の名と同じ名を有する者は、悉く之を改めしめ、其の弊の波及する所、文學著書の上にも影響を與へ、漢の高祖は其の名が劉邦なりし爲めに、其の時代の書中に在りし邦字を改めて國字となさしめ、唐の太宗は其の名が李世民なりしが爲めに、書中の民字を忌避して人字に改めしめ、書經堯典中の敬授民時の一句の如きも、唐本以前は民時て有ッたが、唐本以後人時となッて居る、而して此の帝號忌避の弊風は最近迄支那に行はれ、現に近く清末の宣統皇帝の名が溥儀なりしが爲めに、唐紹儀君などは其の儀を忌避して怡に改めた、かゝる愚かなる風習は、支那に於てさへも、革命後の今日は最早や迹を絶ち、唐君の如きも、既に舊名に復して居る程だから、世界一等國の班に列し、東洋文明の先導者を以て任じて居る我が日本に於ては、よもやコウ云ふ愚論は存在すまいと考へて居た所が、豈圖らんや、頑愚なる癖思想の連中が、更らに一歩を進め、御名は申す迄もなく、皇帝の御追號迄も民間に用ひた者は、其の尊嚴を汚瀆するとなし、既定の御追號に對しては、民間に於て之を忌避す可しと論ぜんとは、其の頭腦の頑冥なる、殆んど濟度し難き者と謂はなくてはならぬ、全體我が日本の國體は、上御一人と五千萬民衆と父子の情を以て成立して居るので、君の民を視ること赤子の如く、民の君を視ること慈父の如き所に、我が國體の精華は存する事だ、されば我が日本の歷史上には功臣に對して、陛下の御名の一字を賜はッた事例さへも有る、歷代天皇の御追號の如きは、五千萬臣民が或は之を姓に用ひ、或は之を名に用ひて、何人も之を怪しむ者はない、一條、二條、三條、四條、六條、近衞、白河、堀河、鳥羽、高倉、龜山、伏見、正親町、嵯峨、醍醐、小松、村上等の姓に於ける、安寧、孝昭、景行、孝元、清寧、顯宗、元明、元正、清和、光孝、順德、仲恭、明正等の名に於ける、何れも民衆の間に用ひられて、曾て之に關して不敬問題の起ッたことを聞かない、是れは泰西に於てヴヰクトリア、エドワー

ド、ウヰルヘルム、ニコラス、レオポルド等、帝王の名を取て諸種の事物に附し、以て敬慕の意を表するに比すべき事て、今日に於て之を支那の舊式に改めて、忌避する如きは我輩共の取らざる所て有る、靑島に往て見ると、プリンツ、ハインリヒ、ホテルと云ふホテルが有る、之れは膠州灣占領の當時、其の軍艦に塔乘し玉ひし皇弟ハインリヒ親王の御名から取ッた者だ、日本の頑固連に此の事を聽かせたら、以ての外の大不敬と思ふ事で有らうが、苟くも二十世紀の新空氣に生存せんと欲する者は、最早やソンな昔の宦官的偏見を抱てはならぬ、我が英明なる天皇陛下は、英獨西諸國の皇族の來朝を新橋停車場に迎へて、親しく御握手を遊ばすと云ふ時勢てはないか、少しく世界の大潮流を達觀して、胸を廣くし、心を大にして、先帝も新帝も共に、「我れは國民の天皇なり、宮廷の專制君主に非ず、五千萬臣民と共に此の國を憲法的に發達せしめんと欲する立憲的君主なり」との濶大なる御意氣を以て、君臨し玉ふ此の聖世に適應する意見を定めなくてはならぬ、然らずんば折角忠君愛國の心を有しながら、却て聖旨に背戾する不忠不義の臣民と見らるゝ不幸に會するてあらう、

第三　殉死奬勵の愚論

玆に又殉死奬勵と云ふ、驚くべき古るい愚論が有る、既に忠良なる臣民の一部には、此の愚論の犧牲となッて、殉死を實行した者も有ると云ふ事だが、之れは飽迄も排斥しなくてはならぬ、

自分が奉事したる人の死を悲しみて、自ら之に殉ずるは、昔時より存する風習て有るが、決して奬勵すべき事てはない、其の心情に於ては諒察すべ點なきに非ずと雖も、要するに不心得の事で、我朝に於ては垂仁天皇の御宇からして、之を禁制せられ、孝德天皇大化三年の詔にも之を嚴禁せられ、詔に違ひ禁を犯かす者は、其の族を罪すと令せられて居る、武臣天下の權を弄するの時代に在ても、所謂追腹と稱する一種の殉死が流行して、其の弊滔々底止する所を知らないので、

武將は務めて之を排斥した、慶長十二年に越前秀康が薨去して、殉死の者多き由を聞て、德川家康が其の老臣に下命せし書中に致其死易、立其主難と諭し、中納言へ有忠鑑者、左樣の儀有之間敷候、子孫迄可有御絕申御意候也」と達したるが如き、其の後寬文三年の禁令の如き、何れも此の弊を戒しめた者て、特に寬文八年奧平忠昌の死に際し、其の家士杉浦右衞門兵衞が禁令に違ふて、殉死を遂げたる爲め、杉浦の遺子二人は斬に處せられ、奧平氏は其の封を削られて、宇都宮から山形へ移されたるが如きは、幕府が如何に此の弊風打破に務めたるかを證する者て有る、此の如く日本に於ては、此の弊風打破に務めたるに、支那ては近代迄殉死を贊美するの風が有て、王族大官の愛妾貴嬪にして、其の主人の死に殉ずる者が有ると一鄉之を旌表して碑を立て、官は之を朝廷に請ふて金品を與へた者だ、現に我輩が北京滯在中にも、馬玉崑將軍の死に殉じたる彼れの愛妾が、滿洲朝廷から一代の烈婦として表彰されたのを目擊したが、コウ云ふ愚かなる風習は、決して我が日本に流行せしめたくない者て有る、

ドウも生存競爭が盛になッて來ると、世の劣敗者中に自殺を企つる者が多くなるを免れない、彼等は死して此の人生の苦痛を免れたいと希望して居るが、さて死する方法に付て、又種々の工夫を凝らして居る、故に誰れか一人奇拔な自殺法を案出して、それが新聞紙などに於て、評判にでもなると世の自殺希望者は、我れも〳〵と其の法に倣ふて、それが一種の流行となる、例せば藤村操が華嚴瀧に投じて、其の巖頭の感が一代を動かすと、續々と此の瀧に投ずる者を生じ、巡査を立番させて投身者を取締らなくてはならない樣になッたことがある、されば殉死などと云ふ事は、決して褒めてはならぬ、若しも之を褒めよう者なら、ソレこそ生命の惜しくない、自殺希望者が盛に此の殉死を始めて、一種の流行を起すに違ひない、之れは決して先帝陛下の御偉德を發揚する所以に非ずして、却て之を傷くる意味になるのだが、所謂頑冥不靈なる舊思想の面々は、「追腹を切るとは感心な者だ、流石に陛下の御偉

德の然らしむる所だ、イヤ士風頽敗と思ひの外、日本の士氣は未だ衰へない」などと、途方もない殉死奬勵論を吐いて居る、若し此の如き議論が宮廷に勢力を占めて、山縣、桂、大山、松方、井上の諸元勳を初め、土方、田中、渡邊諸伯以下宮内省に奉仕したる大官の面々、悉く追腹を切て、藩閥は根底より一掃され、宮内省の肅清が一時に行はれると云ふ事なら、本論も敢て一考するの價値が無いでもないが、民間の忠良なる臣民中に、コウ云ふ途方もない事を流行せしめ、それを士氣鼓吹策どと許するのは、誠に不都合を極めたる事と謂はなくてはならぬ、今日に於て殉死奬勵論を試むる者は、其の識見の劣等なること、千九百年前の野見宿彌にも及ばざる者と斷言せざるを得ない、

其他の愚見

其の外近頃舊思想の愚論の向ふ所を見るに、兎角天皇陛下を偶像扱ひにせんとする傾向が有る、之れこそ最も畏れ多い話だ、我が神聖なる天皇陛下を、向ふ横町の稻荷大明神などと同格に取扱ふとは、不埒至極の沙汰て有る、ヤレ陛下の御姿を拜めば、罰が中ッて目が潰れると云ふ者が有るかと思ふと、又一度陛下の御姿を拜み奉れば、自分の病氣が平癒し、我が家庭に幸運が舞ひ込むと考へて居る者が有る、コウ云ふ維新前の愚夫愚婦の迷信的舊思想が、今日然るべき地位ある人物の頭に殘ッて、此の信仰個條に背反する者を捕へて、無暗に不敬呼ばりをなすは、誠に穩やかならぬ話て有る、先帝陛下の御大患中に、二重橋外へ往て、宮城に向て祈禱を凝らした臣民か、毎夜毎夜多數て有ッたが、彼等は果してドウ云ふ心て、祈禱をして居たのて有らうか、或る人は之を解釋して曰く

昔時天照大神が怒らせ玉ふ事が有て、天の窟戸へ隱くれ玉ひ、天日光を失して、四方暗瀆たり、ソコて臣民は大神の再び出てさせ玉ふを祈らんが爲めに、天の窟戸の前に集まッたが、今回の祈禱も同じ意味て、陛下を神と見奉り、陛下が此の臣民を捨てゝ去り玉ふを、御袖にすがり尙暫らく此の國を知らし召

さんことを祈り奉るの意て有ッたらしい

若し此の解釋にして眞なりとすれば、之れこそ以ての外の心得違ひて有る、我が仁慈なる陛下が我等臣民を捨てゝ去り玉ふ如き御心の有るワケが無い、陛下の御大患御平癒を伊勢大廟に祈り奉るとか、或は國民が各自信仰せる神佛に祈ると云ふのは、分ッた話だが、二重橋外へ往て、陛下に向て此地を去り玉はぬ樣に祈り奉るとは、矢張り陛下を偶像扱ひにし奉りたる所爲と謂ふの外は有るまい、彼等の誠忠の心事は、我輩と雖も之を諒することが出來るが、其の方法に至つては穩かなる者てはなかッた、

全體陛下を偶像の如くに考へる臣民を生じたのは、專制時代の惡風を遺傳した者て、極めて不健全なる舊思想から來て居ることだ、之れは陛下と人民とを隔離して、自分が其の間に介在して、陛下の御威光を笠に着て、自分等の威福を伸張せんとする、所謂社鼠城狐の類が企てたる惡計から來たことだ、昔の宦官はコウ云ふ風にして、私利私福を謀ッた者て、專制時代に於ける罪惡の記念と謂ても宜しい事だ、伊藤公爵の所謂「一世紀遲くれたる人」や、品川子爵の所謂「昔ながらの大宮人」の狹まい量見では、コウ云ふ風に陛下を偶像にしないと、何か御威光が薄い樣に考へるかも知れないが、之れは非常なる心得違ひて有る、維新の大業を開き玉ひし先帝陛下の大御心は、常に民と共に此の國の榮へを樂しまんと遊ばされた者だ、數々の御製にも現はれて居る如く、陛下は國民の皇帝として、此の國に君臨し玉ふ大御心て有らせられたる以上は、最早や昔の宦官などの如く、之を宮廷の一隅に祭り上げ奉りて、五千萬國民と隔離すると云ふ舊思想は、全く其の迹を絕つことにしなくてはならぬ、國民全體を健全なる光輝ある新思想の上に立たしめ、以て皇祚の無窮を祈り、以て帝國の發展を禱らしめなくてはならぬ、

此の新舊思想の衝突と云ふことに付ては、我輩近頃自ら筆を執て、新聞紙上に公けにし、國民の至誠に訴へたる點もあり、又講壇に於て親しく所見を發表した所も有るが、更らに此の有力なる中央公論の紙上を借

りて、國民の一考を促したいと思ふ、我輩は決して急激なる改革を望む者てはない、保守的思想が進歩的思想と調和して、健全なる進歩を望む者て有るが、近來の極端なる頑說愚論は、徒らに世界文明先進國に嘲笑の資料を與ふるに過ぎないから、國家の體面上からも之を排斥しなくてはならぬと考へた次第である、

附記

本篇は九月十一日起草せるなり、十三日午後乃木大將自殺せり、大將は先帝陛下に殉死せりとの說あれども、武勇一世に卓絕し、武士の典型として國民の敬愛する同大將にして殉死を行へりとは信ずる能はず、或は他に何等かの動機あるべしと思ふ、而して若し大將にして殉死を行へりとするも、我輩は殉死其者を贊成する能はず、却て大將の爲めに深く之を惜しむ者なり、尙事實の眞相を確かめたる後、我輩の「乃木大將自殺論」を公けにする機會ある可し、(十四日牛山附記)

所謂官僚派の運命

法學博士　戸水寛人

好んて歴史を讀んて居る人の頭腦には斯ういふ考がある。世の中の大勢といふものは到底一人一個の力て左右さるゝものてはない。事實の底には何時ても、其事實を支配する大潮流が流れて居る。其大潮流即ち大勢てあると。之はもう極つて居る話だ。手近な例をいつて見ると、古の書風と今の書風とはどうしても違つて居る。之は一人一個の力てどうすることも出來ない。例へば六朝とか、唐とか、或は明清とか皆夫々違つて

居る。如何に巧みに六朝を眞似して見ても眞の六朝とは見えない。只よく眞似したといはるゝまでてある。晉風已に然りてある。又詩一つ見ても同じ事てあつて唐の詩と宋の詩とは自ら區別がある。其他萬般の人事悉く然りて、時代〳〵には其時代特別の思想といふものがあり、其思想が根本となつて事實が現はれて居るのてある。之は好んて歴史を讀む人が誰ても認むる所てある。

此等の事實を支配する精神は、獨逸人の所謂ツァイト、ガイスト（Geitgeist）即ち時代精神てある。ツァイト、ガイストの存在は昔から知られて居つた事て、西洋人も認め、支那人も認め、又日本人も認めて居つた事てある。ツァイト、ガイストといへば新らしい事のやうに思はるゝけれども、昔からさういふものてあつた。日本の歴史に於て徳川家は久しく政權を握つて、殆んど其極點に達した。そこてそれが又倒さるゝといふのは自然の數てある。王朝が永く權力を振ふを得ずして志あるものが之を慨くこと久しい。然らば明治維新になつたのは決して偶然てない。矢張りツァイト、ガイストに支配せられて斯くの如きものが起つたのてある。

此明治維新の起つた時に薩長土肥が大いに能力をあらはしたのてあるが、それが爲めに所謂藩閥なども出來た。けれども此藩閥なるものが久しく其勢力を持續するといふ事は時勢に反して居る。前に用ひた言葉を以ていへばツァイトガイストに反して居る。即ち澤山の事物の底に流れて居る暗流に反對して居るものてある。世の中が段々進歩して、國民の思想といふものが土臺になつて、國々が其特性を發揮する時代に於ては、其國の一地方のものが全國を支配するといふ事は出來ない、之は明かなる事實てある。今日の時勢已に斯くの如き時代に達して了つたのてある。だからして薩長土肥の中、土肥は先づ以て勢力を失ひ、薩には人傑の士輩出したるに拘らず、今日に於ては其勢力見るべきものがない。今日存する所の藩閥なるものは只長の一閥あるのみてある。長にあつては山縣公爵の如き大勢

力を有する人がまた儼然として存するから、長の勢力が今日まで持續せられて居るけれども、公爵百年の後は其勢力を承け繼ぐ人ありや否や疑はしい。桂公爵は其後繼者であると目せられたけれども、今や已に宮中に入つて内大臣の職を奉ずる以上、政治界に私力を逞うするを得ざること是亦止むを得ぬ事である。而して寺内伯の聲望遙かに山、桂二公に若かざるを以て見れば、大勢の上に於て長閥なるものが久しく命脈を保ち得るものと考へられない。兎に角藩閥が勢力を維持するといふ事は時勢に反して居る。國民全體が中心となつて日本國の特性を發揮することにせねばならぬ。長閥のみが之を支配するといふ事は考へることの出來ない事である。之を要するに長閥が其勢力を持續するといふ事は時勢に反して居る。時代精神と相容れざるものである。萬般の事物の底に流るゝ暗流に反して居るものである。而して所謂官僚派なるものは何物であるか。之れは長閥の影たるに過ぎない。藩閥があつて初めて斯くの如きものが生じたのである。故に大勢の上からいつたならば所謂官僚派なるものは政治界に於て長く其の勢力を發揮することの出來ないのは論を俟たない。而して之に代るべきものは即ち政黨であるといふ事は恐らくは衆目の見る所である。

世の中には時としては流言がある。山縣公は官僚派の政治家を教唆して、政友會に代つて天下の政權を握らしめ、二回も三回も續け樣に議會を解散して、以て政黨の勢力を挫くに努むべしと。けれども之れ恐らくは齊東野人の語である。山縣公が如何に老いたりと雖も天下の人傑である。斯くの如き無謀なることの爲すべからざることは必らず知つて居ることゝ思ふ。議會の解散は法律に基いて成すことが出來るにしても、日本人民一般の反感を如何にせんとする積であるか。だから右の如き風説は誰か爲めにするものゝ爲す所で、事實あり得べからざることゝ觀察する。

今上陛下には總て舊思想を排除して、新思想に基いて立憲政體を擁護せらるゝのであるから、今後政黨が甚だ盛んなるだらうといふ觀察を爲すものがあるが、此

言も亦誰か爲めにする所あつて爲すものであつて、深く信を措くに足らぬ。何人も　今上陛下の聰明を疑ふものはないけれども、時勢を論ずるに當つて忽ち皇室を引合に出して累を皇室に及ぼすのは日本人民の爲すべからざる所てある。私は大勢の上より論じて藩閥の命脈は久しく持續すべきものてないといふ事を信ずるのてある。

右の觀察をして大いなる誤なからしめば、今後必要なるものは政黨の改良てある。政黨の内にも自ら所謂黨閥なるものがある。其の黨閥なるものは斷乎として之を排除せざるべからず、新進氣鋭の人物が成るべく澤山政黨に入つて政黨内の惡弊を速かに芟除あらんことを切望するのてある。

行政整理、豫算案、增師問題

松山忠次郎

今后の財政の事は申すまでもなく行政整理及び其既定繼續費の繰延、此二つに大關係があるのて、行政整理が旨く行くか、或は繰延が餘程澤山てあるとかいへば、後の財政計畫が容易くなり、日本の財政が安固になるのはいふまでもない話てある。之に反して此整理繰延といふ事が出來なければ、若くは出來ても不滿足てあるといへば、來年以後の豫算編成は餘程困難になるし、政友會内閣の壽命にも大影響のある譯てある。之はもう何人も疑はぬ所であるが、今日ては此二つの肝腎なものがまだ未定てある。從つて今后の財政がどうてあるとか、政友會内閣の壽命がどうてあるとかいふ事を今日に於て豫言するのは少し不穩當てある。が然

し、政府には行政整理特別委員の手て行政整理の原案が出來たやうてある。勿論發表になるまてには色々變つて來るだらうし、案丈け立てるのは容易くあつて實行は六つかしいのてあるからして、今后果してどうなるかはよく分らないが、其案ては行政整理による歳出の節約額が、一般會計て二千萬圓といふ話てある。それから又一般會計に屬する既定繼續費の繰延が一千萬圓。合計三千萬圓のユトリが出來る譯てある。之が果して其通りに實行されるかどうかはまだ未來の問題てあるけれども、若し其通り實行さるゝものとすれば、今后の財政計畫は決して樂てはないが左程悲觀すべきものてもないと思はれる。

取り敢へず一般會計の中て最も肝甚なる經常部について今后の歳出入を豫想して見たい。蓋し經常部の歳出入さへ相當ることが出來れば、外の方は餘程容易いと思ふ。て一般會計の財源に如何なる影響があるかといふ事を計算して見るのに、前記の如き行政整理の二千萬圓、それから歳入の自然增加といふ者も大分ある。と見てよからうと思ふ。まだ四十四年度の決算は公けにならないけれども、今日までの原計によつて見ると、經常歳入千五百萬圓豫算よりも多い事になつて居る。そこて四十四年度の實收額を以て本年度即ち四十五年度の豫算に比べて見るのに、前者は後者よりも約四百五十萬圓多い。さうして見れば來年度の豫算には今年度の豫算より餘程澤山に見て然るべきてある。然らばどれ位見積つてよいかといふのに、近年税法を改正せずに自然に歳入の增加する額が先づ七八百萬圓から一千萬圓の間てある。然るに昨年度の原計は本年度の豫算よりも四百五十萬圓多いとすれば、來年度の豫算は本年度の豫算よりも一千萬圓位多く見て差支ないと思ふ。殊に本年度の豫算は山本大藏大臣が昨年の秋に之を編成する時に、餘程手堅く見積つて居るといふ事は何人も認むる所てある。此點に於て本年よりは千萬圓餘計の財源を見積るのは決して危險と思はない。第三に行政整理案の中には既定繼續費の繰延が一千萬圓あるといふ說てある。夫れ故に以上三つを合計すると

來年度に於て本年度豫算よりは財源が四千萬圓多い譯てある。

然らば之に對する歳出はどうてあるかといふに、今まて一時的の臨時費として計上してあつて、事實繼續費の性質を有つて居るものがある。之は桂内閣以來出來たものてあるが、今日のやうに繼續費と認むる以上は之を明かに繼續費として計上せねば誤魔化しになる。從つて此點に於て二三年來大分批難があつたのてある。而して之を繼續費と見積れば來年度以後に約三百萬圓歳出が殖える譯てある。それから海軍擴張。之が昨年の案て約九千萬圓を五六ヶ年間に支出する譯てあるが、初めは額が少くて、段々既定の繼續費が少くなるに隨つて新要求の額が增加するやうになつてゐるのてある。だからして之が爲めに毎年現在よりどれ丈け歳出膨脹するかは一寸分らないが、大藏當局者の說によるといふと、來年度に於て八百萬圓增すといふ話てある。それから電話擴張費てある。之は年々擴張するに從つて加入申込者が多くて申込に應じ切れないのてあるが、已に政府が之を獨占事業とした以上は、どうしても申込に應じ切る丈け擴張する義務がある。況んや電話事業は儲かるのてあつて、入れた資本金に對して一割以上の利廻りに當るのてあるからして之は思ひ切つて擴張すべきものと思ふが、聞く所によれば先づ年々五百萬圓位づゝの繼續事業だといふ話てある。それから最後に他の新事業がまたいろ／＼要求されるだらうと思ふ。此要求は、實は應ずればいくらでも出て來るのてある。近年は毎年五六千萬圓位の年額の要求てある。而して之に全部應ずることの出來ないのはいふまてもないのてあるから、矢張り不急の事業に向つては之を拒絕し、隨分必要な事業ても所謂無い袖は振れないて抑へ切る外はあるまい。それても抑へ切れない要求の新事業があるに極つて居るから之に對しても矢張り五百萬圓位見積つて置く必要があるだらう。さうすると來年度に於て膨脹すべき歳出額が約二千三百萬圓てある。

以上の如く財源としては四千萬圓あり、そして歳出

の避くべからざる膨脹が二千三百萬圓とすると千七百萬圓程餘裕が生ずる譯である。が然し西園寺内閣は昨年以來國民に約束した義務がある。それを果たす爲めには大分金が要る。其義務は即ち税制整理である。減税を意味する税制整理である。之についても國民の希望を言はすれば幾らでも希望があるであらう。又政府の方でも減じ得るならば成るべく減じたいに相違はない。そこで此程度も豫言することの出來ないものであるが、聞く所によれば大藏省の案では千五百萬圓輕減するといふ話である。即ち所得税、營業税で八百萬圓、米麥の輸入税で三百萬圓、鹽專賣で三百萬圓、之れ丈け減じたいといふ話である。成程前記の計算から見れば此丈け位の餘裕を生ずる譯である。少しも差支ないらしい。が、まだもう一つ問題となるのは陸軍擴張である。陸軍を二個師團擴張する爲めに臨時費も大分かかるが、臨時費は之は臨時の財源で構はぬから大した問題でなく、或は剩餘金でも出來るが、經常費もどうしても四百萬圓かゝる。朝鮮に二個師團擴張するとすれば前記の行政整理事業、繰延案を旨くやつた所で財政が少し困難となる。だから二個師團の擴張が大分の問題である。それをやらなければどうか斯うか行くと思ふが、若しそれをやらうとすれば行政整理を今少し奮發してやらなければ足らぬ事になりはしないかと思はれる。尤も以上の行政整理は一般會計の上のみであつたが、特別會計でも大分整理すべき餘地があるだらう。現に臺灣の如きは財政獨立といつても、實は獨立ではなくて、間接には餘程本國の世話になつて居る。現に守備兵の費用の如きは本國から出して居る。砂糖消費税の分配も本國が割りのわるい事になつて居る。さうして臺灣の財政が頗る豐かなることは事實である。のみならず大分贅澤して居るから、臺灣から一般會計に少し金を繰り込ますとか、或は本當の獨立にさするかすれば大分餘裕が生じて來る。そんな事でもしなければ陸軍擴張は餘程六つかしからうと思ふ。が要するに餘り悲觀したものでないと思ふは、歳入が年々増加することは西園寺内閣にとつて非常に仕合せてそれ

が無ければ困難てあつたが、之あるが爲めに當局者の努力次第ては左程六つかしくなくなつた。從つて今の所西園寺内閣の財政が、破綻すると豫言することは出來ないのてある。

已に申した如く以上は一般會計ばかりてある。一般會計の中ても經常費ばかりてあるが、臨時部てもなかなか少からぬ金額の出入が生ずるのてある。現に四十四年度の豫算ては實收の方が千五百萬圓多かつた。又別に歳出の方ても豫算に計上した丈け要らなかつた。そして千五百萬圓の不要額が生じて居る。隨つて四十四年度丈けの歳計からいつても剩餘金が三千萬圓生じて居る譯てある。之と同時に四十四年度の豫算編成の時に豫期しなかつた費目が續々起つて來た。一例をいへば大葬費てある。來年にはまた即位費がある。それから昨年以來淸國の事變て大分金が要つて居る。今後も亦要るかも知れぬ。臨時部ても大分豫算に狂ひがあり、財源にも大分の金が出來、又いろ／＼其入用も歳出も生じて來たが、之は大勢の上からいつては問題にならぬ。大勢の上からいへば矢張り經常部の歳出入丈けてある。

財政の計畫は以上の通りて、今後も甚しい困難とは思はないが、計畫ばかり立つても、立てた計畫の實行が出來るか出來ぬかゞ一問題てある。現に借入金の始末てある。毎年豫算を見ると少からぬ借金をする計畫になつて居る。之れは其大部分は將來の利益を産むものてあつて、必ずしも借入金をやつてもわるいのてないかも知れない、從つて其計畫を批難することが出來るか出來ぬかは第二の問題てある。假令計畫がよいにしても實行が餘程六つかしいのてある。現に昨年度と今年度とて借入金をしなければならぬ高が一億九千萬圓になるのてある。其中九千五百萬圓丈けは大藏證券及び鐵道證券を發行して、あと一億圓足らずはまだ發行してゐない。之をどうする積てあるか。借入の目的は惡くないにしても借入が出來なければ何にもならぬ事だ。目下の金融狀態て見るといふと、此借入は餘程困難てあらう。大藏省當局の話として新聞に出た所を

見れば本年內には此上餘り發行する必要ないといふ見込てあるけれども借入金の必要は來年度限りて終になるものてはないのてある。鐵道建設費の爲めには今後毎年少くとも三千萬圓づゝ借金せねばならぬ。それから朝鮮の行政費の補充として今、一千二百五十萬圓を出して居るが、之は當分繼續するものと見なくてはならぬ。從つて本年は假令此上發行する必要なくても、來年以後段々重つて來る事になる。之をどうする積てあるか、外債を起せば借り得ない事はなからう。多少高い利子を拂へば借りらるゝに極つて居ると思ふが、山本大藏大臣は外債を募集しないといつた。此上外債を募集すれは、日本の經濟界をして變調ならしめ、又紊亂せしむるものだといつた。之は理屈としても最もてある。一旦斯ういつた山本藏相が外債を募る譯にも行くまいと思ふ。さうして內債は更らに困難てある。今や金融界は段々金融逼迫の傾向になつて居るのてある。いろ〳〵の新事業が目論まれて已に半期に五億圓近くあるけれども拂込には資金の需要がある。一方には輸入超過も決算しなくてはならぬ。內地の金融界の前途は先づ餘程逼迫と見なくてはならぬ。從つて分外な利息を拂へば兎に角、安い利息ては到底も借り入れることが出來ると思はれない。若し高い利息を拂つて借り入れるとすれば前に四分利附を背負込んて居る銀行屋が反對するに極つて居る。此處分がまた頗る問題てある。

之を要するに來年以降の豫算計畫を立てることも餘り容易てはなく、可なり六つかしいけれども、計畫は先づ左程てなく、一旦立てた計畫を實行することになると、其困難一層甚しからうと思ふ。世人動もすれば、財政難といへば、財政計畫の困難といふ事と同一視するが、今ては如何に之を carry out (實行)するかがそれ以上の大問題てあると思ふ。

乃木大將の殉死を評す

乃木將軍及び夫人の自刄に就ての感想

在小田原　東條英敎

我輩が乃木將軍及び夫人の自刄せられたることを聞たのは、東京に於る斂葬式の翌日、即ち、十四日の晝ごろのことであつた。て、我輩がこの瞬間から、この事件に就て懷いた種々な感想を順次に述べて、以て貴問に答ふることゝしようと思ふ。

我輩は嘗て將軍の部下にも屬したことがあるので、將軍の誠意は昔からよく知つて常に敬服して居たのであるが、この度の將軍の壯烈なる一擧を聞くに及んで。我輩は更らに又新たな言ひ知れぬ敬虔の念に打たれて思はず、頭が下つたことであつた。而して「アヽ神の如き乃木將軍よ」とは、この時我輩の念頭に浮んだ第一の感じであつて、我輩は最初、眞にこの感じより外何物も持たなかつたのである。それから引き續いて、我輩は、「アヽ惜しい人を失つた」といふ感じを持つた。のみならず我國の將來を思ふて我輩はこの時心細くなつて來たのであつた。何故であるか。即ち、今日世間は滔々たる拜金の潮流に誘はれて人心は日に腐敗し、敦厚醇朴の風は日に地を拂つて、去らんとし、悖德汚行、唯利にこれ走るの輩が、誠意忠實の假面を被つて世に時めくの時に當り、將軍平素の秋霜烈日も只ならぬ侵す可らざる行狀は、從來不言の間に、此等の怪物を警醒して、多少、憚る所あらしめ、依つて以て、幾分でも

世の風教を維持し得たのであつて、將軍は、この點に於て、今の世に、殆んど掛け換へのない人物であつた。即ち、我輩が、此に將軍を失つて、將來の我國に思ひ到り心細く感じたのは、全くこの爲めである。而して、曩に吾人臣民が衷心賴み奉つた所の先帝を失ひ、我輩は、當時恰もその大葬に參列して、無常の感は頻りに腦裏に往來し、又將來を思ふて、左なきだに心私かに寂寞を感じつゝ在つた時なりしが爲め上述の感想は、尚更ら、甚深に我輩の頭腦を衝たことであつた。

併し、我輩が斯く感じたのは、一少時のことであつて、暫時にして、我輩は腦裏に「今や吾々は生ける將軍を失つたが、將來限りなく、死せる將軍を得たのてあるとの觀念を持ち來つた爲め、將軍の無くなつたのを惜む念慮も、將來に向つて心細い感想も共に雲散霧消して仕舞つて、寧ろ、心强く感ずるやうになり來つたことであつた。抑も、將軍は、今や、齡六十を超へて居る。て、今から、天然の壽を保たれた所で、たかゞ、十年か、二十年に過ぎぬのである。この短時日間に於て、將軍の摸範的行狀が、假令、多少世人を警醒し得た所で、その效果には限りがある。然るに、今回の將軍の一死が、如何に現今及び將來の國民を感動せしむるであらうか。彼等を覺醒して忠君愛國の道に入らしめ、懦夫を立たしめ、武士道を既墜に回らすの效果に至つては、世間學者の幾千萬本の筆や幾千萬枚の舌の及ぶ所ではあるまい。而も、その人を感動せしめ、人を感化するの力に至つては、彼の和氣清麿や楠公父子の如く、將來千萬年の久しきに亙つて滅すべきものではない。現に我輩の如きは、將軍今回の壯烈なる一擧に打たれ、德行から言つても、精神から言つても、蠢爾たる自己の人格に省み、深く、慚愧の念に堪へぬのであつて、吾々の分際として、世の德義を論ずるすら、後ろ暗きことのやうに感ぜざるを得なくなつたのである。而して、我輩は私に、世間我輩とこの感を同じくするものが多々あらうと思ふ。乃ち、將軍のこの壯烈なる一擧が人を感化する力の如何に偉大であるかは、我輩自己の身に感じて明らかに分かるのである。

それ故、將軍の死その事は、一旦は、悲むべきも、深く將來の我國の利益を思へば、寧ろ、喜ぶきことてあつて、吾人はこれを將軍の永久の賜ものとして、感戴せねばならぬ。而して、將軍の死に就ては、我國の前途の爲め、決して、心細く感すべきものてはない。

それから、次に、チヨット、我輩の頭腦に閃いた一事があつた、他てもない、それは、殉死問題てあつた。抑も、殉死は誰も知つて居る如く、往古にはその風習もあつたが、中古以來今日までも、國家の禁制となつて居るのてある。て、世間ては、多分將軍の誠忠はこれを美なりとして賛するてあらうが、將軍がこの禁制を破られ今更ら、又、殉死に俑を作られたことに就ては、彼是れ議論する者があらう、これは、將軍の爲めに、惜むべきことてあるとの感想が我輩の心に浮んだことてあつた。だが、この感想は起るると同時に、忽ち、消えて仕舞つたのてある。イヤ、假令一瞬時間たりとも、斯る卑低なる議論を頭腦に置て、將軍のこの神聖なる擧を視たことに就ては、自ら、忸怩たらざるを得なかつたのてある。思ふに、將軍の死に對しては、斯る凡俗なる議論を容るゝの餘地がなく、寧ろ、將軍の今回の擧の如きは、俗間普通の議論以外に超然として立つて居るのてある。蓋し、國家、殉死の禁制を要する所以は、後世、殉死を人に强ゆるの弊を生じたからてあつて、將軍の如き誠忠無二の人が、此界に出てたからとて、區々たる禁制に當て篏めて論ずるは、所謂杓子定規てある。縱し、將軍が新たに復た、俑を作つたからとて、將軍の如き立派なる擧に出づる人が、さう困るほど多く顯はれるものてはない。縱し又、多く顯はれたとしたら、その世の中の風敎上、實に、慶すべきことてある。思ふに、人或は、死その事を將軍に眞似るのは易いてあらう。而も、誠に將軍の死を眞似ることは、實に、難いのてある。蓋し、將軍平素の行があつてこそ、初めて、殉死に意味があるのてあつて、若しも、平素にその行なくして殉死ばかり眞似たからとて、それは狂人に近からう。それ故、人、若し、眞に、將軍の殉死を眞似んとならば、須らく、平素將軍の行を

以て、行とすべきである。而して、斯る人格は實に千古稀れなものである。その他宗教的見地から、彼是れ言ふものもあらうが、要するにそれ等は、人間普通の理窟に過ぎまい。斯んなことを以て、我國の眞の武士道的擧動を律することは、誠に、見當違ひと言はねばならぬ。

斯くして、將軍は、忠誠の摸範を永く、青史に止めて、我國將來の國民に遺し、夫人は、將軍に殉して、貞操の鑑例を世の妻たる人に遺したのであつて、一は、國家の人として、一は家庭の人として、共に誠に、極美の行爲てある。て、我輩は、將軍夫妻のこの壯烈なる一死に對して、崇敬の念より外、頭に何等の評論も、理窟も持たぬ。而して、我輩は、一方に、この事件が、我國將來の風敎上に、如何に、偉大なる効果を顯はすかを見んとして、私かに樂んて居るものである。

顧れば、我國の社會は、從來この正格なる將軍を容れて充分なる働を爲さしめ得なかつ程に卑低てある。例すれば、嘗て、臺灣總督としての將軍が、俗物どもの排斥に會して罷めるに至つたのを見ても分かる。その他、將軍が、大小の官吏や公人等が、君主あるを忘れ、國家あるを忘れ職責あるを忘れ、私利これ圖るに汲々とし、藩閥朋黨相卒て私を營むを見ては、居常、如何に、苦々しく感ぜられつゝあつたてあらうか。又、學習院長としては、華族及び富豪の諸家庭の懦弱なる風習から、その子弟等に對し、自己の敎育の効果の、思ふ如く、擧らなかつたことを、平素如何に、憤慨せられつゝあつたてあらうか。此等のことは、實に、想像するに難からぬのてある。併しながら、我輩は、將軍の死を決した原因が、此等平素の不平に在るとは言はぬ。只、我輩は、この世の中が將軍をして何れの方面に對しても一日も愉快なる日を送らしめなかつたことを、深く、遺憾とし、この關係に於ては、我輩は今日腐敗に陷れる我國の社會を深く怨まざるを得ぬのである。

將軍が、親戚に書を遺して後事を托したの外には石黒軍醫總監に書を遺し、遺骸の始末を托したのと小笠

原伯爵に書を遺して學習院の後事を賴んだのみてある。ことは、實に、味ふべき價値がある。抑も、石黑氏及び小笠原氏と將軍とは、姻戚でもなく、特別に懇親な間柄とも聞かぬ。要するに、公人たる兩氏にその人相當なことを賴んだのてあつて、その同縣人とか友人とか、藩閥人とかいふ如き嫌らしい跡がない。抑も將軍は。人の知る如く、山口縣人てあつて、同縣人中には、今日世に時めく者が澤山ある。又その中に平素親交ある者も多い。然るに、將軍が此等の人を措いて、特に公人を擇んだことは、その心事の清潔にして公明なるを證して餘りがある。尠くも、同縣人や、藩閥などを眼中に置かぬ將軍平素の精神が、躍如として明らかに見えるのてある。これを見て愧死せねばならぬ者は現今世間に澤山あらう。

又回顧すれば先帝の崩御以來、將軍は口に、甚だしき悲嘆詞を漏らされなかつたやうてある。これに反して、嘗て、先帝の特別なる恩遇を蒙つたその他の連中内て當時自白した所に由ると、或は慟哭したる者もある、或は涕涙數晝夜に亘つて盡きなかつた者もある、或は悲みの極ものが言へなかつた者もある、或は靈柩前に拜伏して嗚咽禁ずることの出來なかつた者もある。思ふに、此等の忠臣は先帝の恩遇に感じ、その崩御に會して悲嘆に暮れる精神に於ては、恐らく、乃木將軍に劣らぬてあらう。只その殉死の擧に出てぬのは、國家の禁制を重んずるの餘に在るのてあつて生きて　新帝陛下に仕へ奉り、忠義を盡して、以て、先帝の恩遇に答へ奉らんとするの決心からてあらう。乃ち、この決心は人間的に穩當にして、取る所の道は異ると雖ども　先帝に忠なる所以に至つては、決して、乃木將軍に讓らぬのてあらう。而して、その慟哭たり、涕涙たり、悲哀たり嗚咽たる、決して、一時の感情からてはあるまい。て、此等の諸氏は、宜しく冥土に於ける先帝のお供は乃木將軍に仕て貰つて、自己は今より一念發起し、長く生き殘つて、而も、殉死した心得を持ち、全く私念や閥念を去る、私利や閥利を捨て國家の爲めを思ひ、至公至誠の心を以て　今上陛下を、輔弼し奉り、以て、

大正の御代をして、明治の御代にも立ち越へて隆盛ならしむるの覺悟を取るべきである。思ふに我六千萬の同胞中一人としてこの事を希はぬ者はあるまい。乃木將軍の在天の靈は此に於て乎初めて、喜ばれることてあらう。而して、諸氏が生き殘つて先帝に報ひ奉らんとするの一念も亦此に於て乎初めて完きを得るてあらう。（大正元年九月十六日稿）

大將の殉死について

文學博士 法學博士　加藤弘之

誠に人格の高きに感服の外なし。

唯更に再考して新帝に盡されたらば此上のことはなかりしならんと遺憾に堪へず。

大將の心事を明かにせばあらゆる方面に好影響を及ぼさん

農學博士 法學博士　新渡戸稲造

乃木大將の殉死が世道人心の上に如何なる影響を及ぼすべきかといふ質問に對しては、私はあらゆる方面によい影響を及ぼすだらうと思ふ。但し之は乃木さんの心事を明かにすればの話て、若し臆測などを加へて解釋すれば或は其影響が望ましからぬ事があらうかと思ふ。臆測を加へるといふのは、あの遺書の外に斯ういふ考があつたらうなどいふ事て、例へば世を憤つたとか、人に當て附けたとかいふやうな事は皆臆測て、私は何處までも、あの遺書にあつたやうな、サッパリした、竹を割つたやうな理由てあると信じて居る。即ち昔熊本の西南の役て負けた事があつた。誠に濟まなかつた。殊に旅順の攻撃に於て三千の勇士を殺し、六千の士卒に傷けた。之れ誠に濟まなかつた。氣の毒な

事をした。自分の戰略が拙かつた爲めに、力量が足らなかつた爲めに、智惠が乏しかつた爲めに、お上にも充分の御奉公が出來ず、又部下にも濟まぬ事をした。此等について一身に非常に責任を感じられたといふのが、本當の大將の心事であつて、此心事から割り出して大將の殉死を解すべきものと思ふ。新聞などで見ると、世の輕薄を憤慨したとか、人の不忠を諷刺したとか、或は華族の子弟の教育が思ふやうに行かなかつたとか、恰かもお客さんが前にあつて、其れに當てつけてやつた事のやうにいふものもある。けれどもさういふ當て氣があることであれば、其影響は穩やかでないと思ふ。私は何處までも自分一人の皎潔な心事から起つた事で、萬乘の君に對して濟まない、部下のものに對して濟まなかつたといふ、義務の觀念、責任の觀念から起つたものと信ずる。此心事さへよく分つたならば、大將の死はあらゆる方面に風教上大變よい影響を與へるだらうと思ふ。或は澤山大將の死を眞似る奴が出るだらうなどいふ說があるが、人を殺すとかいふ事なら眞似るものが多いかも知れぬが、自分を殺すんだからなか〳〵澤山眞似るものはない。殊に自分を殺すにしても外の輕々しいのとは違ひ、あの通りの立派な理由を備へて自分を殺し得るものは澤山ない事は疑ひない。

それから一歩進んで、今度の事件は外國に對してはどう響くかといふ事を考へて見るに、外の人ならどうか知らんが、乃木さんは世界中に知られて居る。さう輕々しい批評は爲し得なからうと思ふ。又私の考ふる所では自殺といふものについての倫理的判斷は西洋でもまだ着いてゐないやうに思ふ。私は基督教徒であるが、自殺といふ事については一般の基督教徒がいふやうには考へられない。之は昔の野蠻的思想が殘つて居る爲めかも知れぬが、私はどうも疑問として居る。勿論聖書の中で、よい人で自殺した人はない。然し希臘羅馬あたりでは、よい人で自殺した人が可なりあつた。其點で耶蘇教は反對であつたのだらう。然し之を非であるとしたのは恐らく中古時代即ち所謂暗黑時代(ダークエージ)の思

想てないかと思ふ。プラトーなども自殺はわるいといつて居るが之を絶對にわるいといふ事は私の心ではまだ未決問題である。外國でも今の耶蘇教一方の人は、無論議論なしにわるいものといつて居るけれども、さうでない人は恐らく絶對的にわるいものと思はないやうだ。少くとも議論の餘地が殘つて居る。其處へ持つて來て、日頃から、人格の分つて居る大將の如き人が自殺したとなると、自殺の倫理的觀念が少し違つて來はしないかと思ふ。(勿論私は決して自殺を奬勵するのではない。自殺は絶對にわるいと一口にいはれぬといふのである）例へばある種の藥の如きもので平常飮んでは毒でも、時と場合によつては人命を救ふことになるやうな作用がありはしないかといふのである。

又乃木大將の死は武士道の見地から見ては如何かといふに、私は甞て武士道に關する小著を公けにしたが爲めに、世人動もすれば私を以て武士道の研究者若くは鼓吹者のやうにいふ人もあるが、私は到底も武士道を研究したなどいふ大袈裟な事はいへず、從つて武士道の奧義などいふ事は私には分らないのである。アレは只西洋人に向つて、日本にも道德がありますぞ、武士道といふこういふ一種の道德がありますぞといふ事を知らする爲めに書いた本で、引例なども餘り適當ではないものがあり、又間違つて居るものがあるかも知れぬ。詰り私は武士道といふものを斯う考へて居る。アレは世界的のものでない。一國の道德である。而して一國に於ても其精神は各階級に通じて違はぬにしても、形式は時代を限つて、又階級を限つて行はれたもので、道といつても場所と時とに限りがあるものと思つて居る。而して此限りある範圍の武士道といふものから見ては乃木さんの死は實に一分の餘地も殘さぬ實に立派なものと思ふ。世間には隨分立派に死んだといふ人の中にも段々調べて見ると、酒を飮んで頭をわるくして居つたとか、借金が澤山あつたとか、或は人を恨んだとかいふ事があるものだが、乃木さんの場合には何にもない。盡く赤誠の塊りである。此心事さへ明かにせば大將の死は如何なる方面より見ても必らず好影

響を與へることゝ思ふ。

大將の死を惜む

慶應義塾々長　鎌田榮吉

乃木大將の今回の擧は悲慘の極であつて、批評所てない、語れば只涙あるのみである。大將の人格の高く心術の皎潔なること、何人も認むる所であつて、誠に日本武士の精髓であると思ふ。

然し乃木大將のあの生命といふものを、もう一度千軍萬馬の間に働かしめて生命を捨てるといふ事になればもう一層エライ事が出來やしなかつたか。今日の日本といふものはまだなか／＼平和を樂み得る時機に達してゐない。東洋の天地はまだ／＼殺氣に滿ちてゐる時であるから、大將の如き名將は失ひたくない。大將も亦國家の將來を思へばあの生命をもつと其儘にして置かねばならぬといふ事を考へて貰ひたかつた。大將の心事を思へば誠に氣の毒で堪らぬ、然し自殺といふ事は此場合に於てせなくても、夫れ以上もつと國家に大關係ある場合があつたらうと思ふ。今日まだ遺書が公けにならぬから、其死因は今深く知る譯に行かない、が、自殺を以てエライと思ふのは大いに疑を挾まなければならぬ。若し續々エライ人が之に倣つて自殺すれば、國家の不利なるは明白な事で、極端をいへば國家が亡くなるといふ事になる。然し大將は所謂一人身を殺して天下に仁を爲すといふのであらう。我々は只之を惜むのである。誠忠無二の人であるから先帝に殉するといふ志の起るのも最もであるが、然し新帝に仕へて忠節を勵み、又乃木大將の如き人格を以て青年の薫陶に當られたならば、國家の爲め、更らに利益であつたらうと思ふ。(十五日)

乃木大將の心事明々白々

子爵　曾我祐準

乃木大將の殉死について何か感ずる所を話せとの事

てあるが、其の遺書も已に發表せられたる今日、其殉死せる心事が極めて明々白々であり、殉死についての感想といつても、もう世間で盛んにいつて居るし、私の感じも別に違つた事はないから、殆んど何にもお話する程の事がない。まだ遺書の發表せられざる前に新聞社の方からも、貴誌の方と同様の依頼を受けたが、私は其時いふには、乃木の自殺については漫りに憶測してはならぬ、大將自ら遺書を書いて而して遺書が近い中に發表になるといふから、大將をして自ら語らしめた方がよいてはないか。只吾輩は乃木のは憤死でもなく狂死でもない事は斷言して憚らぬというた。

今日に於ては最早乃木の遺書も公にせられて其心事には一點の疑を挾む餘地が無い。私は外に何も云ふ事はありません。

希典

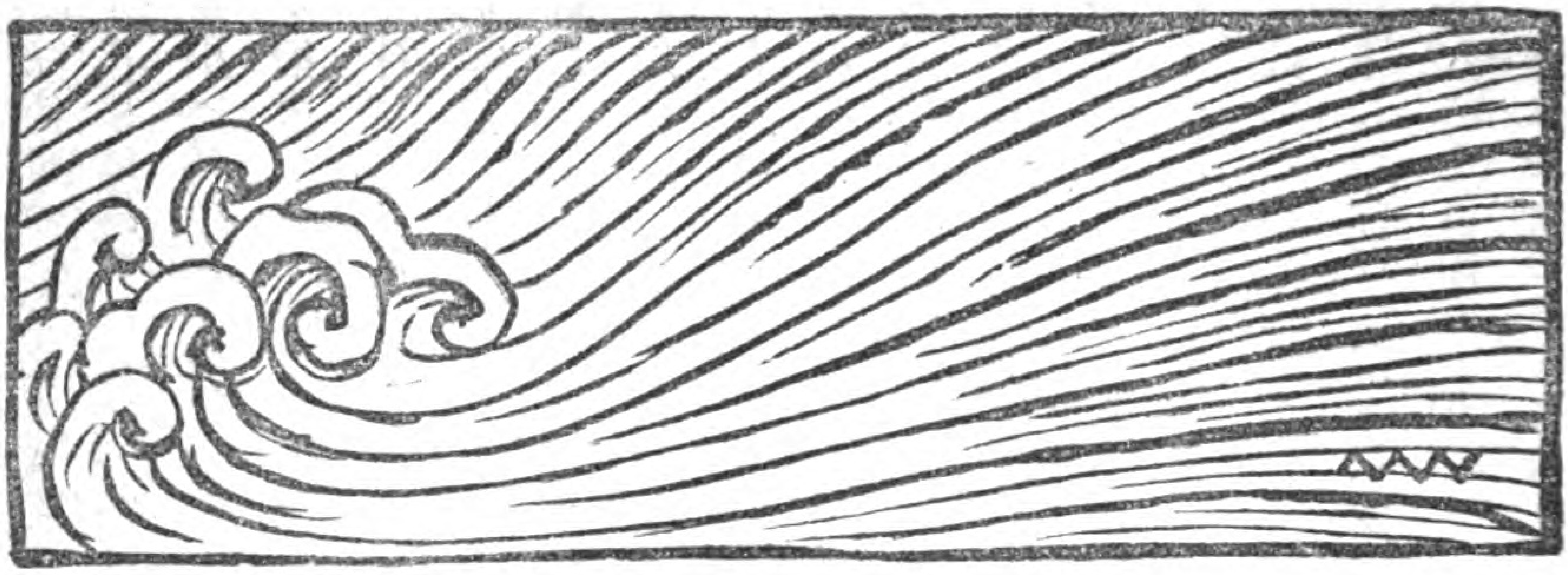
うつし世を神さりまし々大君の
　みあとしたひて我はゆくなり

同

神あかりあかりましぬる大君の
　みあとはるかにおろかみまつる

希典妻靜子

出てましてかへります日のなしときく
　けふの御幸に逢ふぞかなしき



數奇傳 補遺（絶筆）

田岡嶺雲

嶺雲氏の「數奇傳補遺」は今後數ヶ月間連載せらるべき筈なりしに、九月に入つて氏の病勢頓に革り、月の七日終に溘焉として不歸の客となられ、本篇は終に氏の絶筆となれり。氏は本號掲載の部分を書く前に今二回ばかり他の事件を書く豫定なりしも、此部分が却て早く書けたれば其旨を附記し呉れよと遺言せりと聞く。惟ふに嶺雲氏の半生を悩ませしものは「戀」の問題にして、殊に其一生の色彩の最も鮮やかなるものは「津山の女」の一節とす。氏の絶筆となれる本篇が「津山の女」の狂せるを聞ける條を以て畢る、何等の悲慘事ぞ。或は嶺雲氏自ら起ち能はざるを暗々裏に意識して、其胸中最も深く潜めるの感懷を洩せるか。親友笹川臨風氏の「嶺雲終焉記」、白河鯉洋氏の「弔文」を篇後に掲載して、謹んで哀悼の意を表す。（一記者しるす）

（一）

何事にも、想ふには遠く爲すに拙い空想的な予は、戀にも憧憬に早熟てあつたが、官能の上には晩成てあつた。夫れは性慾の飢に渇く青春の數年を、病に悩みて生理的に活力の衰へが有つた故もあらう、且つ自ら進んで、女の手を握るべき機會を作るには、餘りに怯懦な予は、廿歳を過ぐるまで、竟に異性に觸れなかつた。

女の足下（あしもと）に跪かんには、餘りに傲慢に、女の唇を求むるには、餘りに臆病な予の如き者が、女に觸れ得る機會は、唯受動的であるより外には無い。包むに

餘る思ひを、猶振りの袂に嬌羞を噛む乙女からは、そんな事は望まれない。動もすれば、怯れ却く予等の首を引寄せて抱く者は、媚を賣る女、笑を賣る女、貞操を捨て、恥を捨てた女に待つより外は無い。

半は好奇心から、友人の誘ふに任せて、潜つた娼家の暖簾、厚化粧の汚れた女から、予は肉慾の洗禮を受けた。何の歡喜も興味も無い薄い酒を飲んだ程の、酔心地をさへ留めなかつた。

但、此の以後、從來「懐かしさの怖れ」と「恥づかしさの侮り」とを以て女に對した小鳩のやうな童貞の眼が、猝に瞠かれて、男子としての强みの自覺、女子に對する征服の誇りを感じて、今迄は其前に立ちすくんだ女の眼の光に、酬ゆるに無關心の冷淡を以てし得るに至つた。

此の汚れた肉慾の世界に、再び足を蹈み入れるには、餘りに純潔な、餘りに熱烈な戀の事件が、恰かも此頃予が心を占領した。

穢れた女の息吹に汚れた身て、亦思ひ慕ふことを一種の冒瀆と考へた程、予には神聖な、其人の名をさへ知らず、我獨り狂ほしくも思ひ惱むのみにて、此の戀も果敢なく、空に終つた。

（二）

貞操を商品とする職業的の女以外には、予の戀は常に我のみ思ふ片戀であつた。

併し、其の職業的の女から贖ひ得るあくどい媚は、憧憬の愛に渇く吾等には、餘りに現實的な、餘りに乾枯びたものであつた。

されぱとて、乙女の淸い胸を射るキユーピツドの征矢を放つには、吾等の手は戰ひ慄のく。

折れば折らるべき野に捨て咲きの、花の蕾の塵に汚れぬ香を懐かしむ。然り唯香を懐かしむのみが、せめての予の心遣りであつた。

蕾は折るに痛ましい。花が開けば人が折る。吾等は覺に戀の上にも、傍觀者である、劣敗者である。

不忍の辨天の境内て、乞食に錢を施す少妓を見て、しほらしいものと思つた其女が、扇を三味に代へた時、

其女はやがて人の有となつてゐた。

「更へたれど衣に重き我が戀」遣瀨なき思ひを句に寓せた其女は、色の白い眉の黑い、稍々寂しい顔立の女てあつた。袂の振りが詰まつて裾を長く曳くと、間も無く此れも人の家に移し植ゑられた。

燃ゆるやうな唇と、活々とした眼をもつた水戸の女に、我が其時の情を訴へた。其れは、既に他日の邂逅に昔語りとしてゞあつた。

ふと出會うた女、たまさかに行き會うた女、そんな一瞥にも過ぎぬ女をさへ、胸は記憶に抱いて、夫れを空想の羽翼の下に煦める。斯くして、我戀は脂に燃え盡くす蠟の様に、自からの想像の火に惱み焦るゝ、常に空なるものてあつた。

（三）

トーマスマンの小說「トリスタン」の主人公は、子持ちの若い美しい肺を病む夫人を見て、肥え太つた俗物な其の夫を、人生の冒瀆者として咒ふさうだが、自分にも其れに似た經驗がある。

何ても水產傳習所を出た夏てあつた、國から上つて來た母と共に、其頃下總の馬橋に奉職してゐた母方の叔父を訪ねた歸りてある。帝釋天のある柴又の邊てあつたと想ふ、蕭疎として人通りの疎らな道に、珍らしくも擦違うた車がある。深々とおろした透し幌の陰に、其日は確か曇つてゐた、浮いた様に白い顔、唯一瞥てあつたが、大理石にて刻まれた女神の様な其の眼鼻立を、歷々と見た。其の手には生れて間の無いらしい嬰兒を抱いてゐた。

産後の窶か、稍々伏目の眉のあたりに、憂ひの翳みがあると見た。

咄嗟に胸を衝いた予の想は、若くして母となつた女の、傷ましさてあつた。

懷姙に伴ふ膨んだ乳房や、せり出した腹のペンギン鳥に見る様な不様さが、女の美を害ふ傷ましさを想ふほど、當時の予は現實的てなかつた。

固より出產が若い血を瀝んで、老と衰とを女に與へ、何時迄も玉と麗しかるべき其の人の、唇よりは艶を、

眼よりは輝きを、早くも奪ひ去る其れを悲しとも思うたらう。

併し其時の予が心には、吾識らぬ別の念ひが潜んでゐたと思はれる。

人の母たるを傷むは、即ち人の妻たるを妬む心ではあるまいか。

如何なる奇しき運命の戯れを以てしても、永久に再び還らぬ處女の純潔を、其の人の夢みる誇から奪うて、物質的な永久の汚點を、雪の如く白い女の「インノーセンス」の上にしみ附けた或る人が、我より外に、我より先きに存在することに對する妬みもあつたらう。

美はしい犠牲を其の獸慾の爪にかけて、其の肉をも、其の血をも、其の心をさへも、己れ一人の擅まゝな貪りに供へて、勝ち誇つた舌舐(なめずり)をする夫れを、他所に見ねばならぬ堪へられぬ嫉(にく)みもあつたらう。

（四）

予の戀は常に一面に空想的たると共に一面に觀照的であつた。空想的であるから從つて「實行」から遠ざかつた距離に立つ、現實の熱鬧に卷き込まれない冷靜を以てするとき我自身も亦觀照の對象となる、我は分裂して爲す我と觀る我と對立する、此時我は第一人者であると同時に第三人者である、我の外に我が立つて我と我を客觀の爼上に上(のぼ)せる、自からの行ひを自から批評し自から嘲り自から笑ふ、第一人者としての我が感情の激調に狂ふときも第三人者としての我は冷かな理智の眼を以て之を覗く、全人格を一事(あること)に打込むといふことは予には出來ない。

華やかな賑しい歡樂の讌宴(うたげ)の場でも其色彩と旋律と共に融け得ぬ寂しい吾がある、縱まゝな耽溺――他目(よそめ)には身も心も空呆(うつけ)た樣に見える時でも自から責める詫しい我がある、女の頸を手に抱く其の刹那に於てすら醜い影を顧みて其行ひの「何故(なぜ)」を疑ふ悲しい我がある、予は戀にも死に得ぬ男である。

嘗て此ういふ事がある。

我は貧に惱み女は義理に搦まれて窮迫の極に達した

時てあつた、夏の夜も已に更けた露臺の上の灯もない中に唯二人言葉もなく手をとつて泣いた、見下せば地は黑く闇に遠い、蒼い高い空の封じられた寂默の裡には秘密を目くばせする樣に星が瞬く。

「寧そ死なうか」

抛出すやうに予は斯くいつた。

死の甘さを人にそゝるやうなしつとりと靜かな四圍の光景に覺えず釣り込まれたのでもあらう、解くに途なき運命の縺れにじれた自棄の捨臺詞ともいはれやう、予はかくいつた瞬間迄自分の念頭にも死といふ語を思も寄らなかつた、唯咄嗟に湧いた感情が誇張せられて口を銜いたに過ぎない、而して斯く言ふと同時に心の底では窃かに此絶望的な言葉が感動さす戲曲的な結果を女の態度に待ちもうけた。

予は死といふ言葉を弄んだのだ。

女は案外落着いてゐた、死ぬるといはなかつた、死ぬると思つて今の苦を堪へやうといつた、此女の戀にも醒めた理性があつた。

此女が發狂したことを十五年後の今日に聞かうとは夢にも想ひよらなんだ。父ならぬ父の前に其子を護る人には言へぬ永い苦心に此女の心の奥に包んだ理性の光りも竟に磨り滅されて盡きたのであらう。

嶺雲終焉記

笹川臨風

數奇傳補遺の最後を載せるにつき、嶺雲臨終の前後を書いてくれとの依頼である。嗚呼余は遂に此新愁の爲に筆を執らざるべからざるか。

明治四十五年七月二十一日小石川茗荷谷の嶺雲居に

白河鯉洋と會して三人會食した。明日暑を避けんが爲に嶺雲は日光に出立するのてある。食後嶺雲の勸めるにまかせて鯉洋と余とは一浴する。嶺雲が浴するのを見ると、著しく其の痩せたのが目に立つ。元來痩せた方てあつたが、此頃は凄じく痩せて居る。思はず黯然とする。

翌二十二日朝、嶺雲の日光行を上野に見送る。女中三人書生一人、一等室に横臥して行く。丸て御大名だと云て鯉洋と一笑する。日光着後は宿所の知らせがあつたのみて、其他の消息は讀賣新聞の『日光より』て承知するばかりてあつた。

大正元年八月二十八日、雲と大書した一封の手紙が屆いた。開けると斯う書いてある。

明日又は明後日吾は吾が憐なる吾兒を見るべし、彼は其の父ならぬ父に導かれて吾が前に來るべし、發狂せる母、病みほうけたる父、呪はれたる運命を有する吾兒が吾と會見の印象や如何。

二十七日

余は喜びを以て此書を見た。東京てあつたらば鯉洋と余とて其兒に會見するてあらうと云ふ意味て返事を出した。此書を受取た時、彼の病が重くなつたのは夢更知らなかつたのてある。

九月四日の夜、大阪なる鯉洋の許より急電が到着した。嶺雲急變、委細知らせと云ふ文句てある。余は嶺雲の近狀に就ては全く知らなかつたのてある。翌朝彼の令兄木村氏に電話をかけて問合せた。すると木村夫人からの返事は斯うだ。去月二十八日木村氏及夫人が日光に見舞に往た時に恰も彼の憐れなる兒が來て居たから彼と會見させた。會見後彼の神經は亢奮したか、病勢が大分進だ。しかし一兩日にして快復したから、木村夫妻は歸京する。すると間もなく彼は下痢を病みて、二日頃には一時危篤に瀕したとのことて、木村氏は又日光に電馳したとのことてあつた。依て其旨を鯉洋に打電し、余は明日日光に見舞ふべく用意して、小柳柳々、藤田劍峯へも此旨を通じた。すると其夕方、木村氏から大分快方になつたとの電話がかゝる。丁度

取急いで居る用事があつたから、そんなら一日延引しやうかと思た。

六日の朝、山本氏日光から來り、大分宜くない、貴方に會ひたがつて居るとの知らせてある。そんならばと、其日の午前十時半の汽車で日光に向た。曉來の小雨は發車頃には大分霽れたが、鹿沼に着した頃から本降りになる。日光に入ると一面の濛雨、山も河も杉も家も雨の中に包まれて居る。先づ車を小西別館まで走らせて此に宿を取る。木村さんは御出てかと聞くと在宿とのことてあつたから、遇て嶺雲の模様を聞取る。

雨を冒して大谷川に沿ひ、板挽町の寓居に着する。居は川岸と一筋道を隔てゝ少しく高臺になつて居るが、大谷の急流は眼下に見える。屋を繞て嵐氣雨氣が漂ふ。峯巒は前を壓して立つ。嶺雲は其二階に寢て居る。昨夜痔が痛んだ爲に一晩眠られなかつたから今日は眠いと云ふ。忙しいのに能く來てくれたと云ふ。苦しいかと聞くと、いゝえと答へる。此間は一塊肉が來たさうだねと云ふと、窶れた顔に笑を浮べて首肯く。如何にも眠むさうてあるから、余は餘り語らずに其側に默然と坐する。余と對して女中が病人の手をさすつて居る。此頃は東京から來た女中三人と宇都宮から看護婦が一名來て居る。大阪の令兄の所からよこした書生が一人居る。女中の話に依ると此二三日は大變よいとのことだ。殊に今日はよいと云ふ。それはいゝ鹽梅だと思ふ。眠りから一寸醒めて葡萄酒を小さなコップに一杯と葛湯を一杯飮む。腹が減ていけないと云ふ。腹は減るが消化は殆ど出來ないさうてある。其うちに木村氏が來る。七時過雨中小西へ引返す。

此夜大阪から彼の長兄田岡典章君が來る。木村久壽彌太君と三人で晩餐をしたゝめて、余は余が室に戻て寢た。

七日の朝早く女中が余を起しに來た。しかしそれは人違ひてあつて、奥山さんを呼びに來たのてある。奥山さんと云ふのは東京から昨夜來た醫者てある。すると少し様子が惡いかと思て起きた。

女中に聞くと、模様が善くないので今朝田岡木村二

氏は出かけたと云ふことてある。余は顔を洗ひに下に往くと、宿の番頭が唯今田岡さんから電話が參りまして、今朝四時に御亡くなりになりましたからお知らせするとのことてあつた。余は愕然とせざるを得なかつた。其儘茫然としてそこに佇立した。

顔を洗て歸ると、昨夜鹿島櫻巷が來て尋ねたと云ふ。其部屋を尋ねて往くと、櫻巷と報知の森氏とが居て、櫻巷は寢床から首を出して原稿を書いて居る。今朝嶺雲は死だぜと云へば、今聞いたところだと云ふ。櫻巷と森氏とは昨夜遲く着いて、すぐ嶺雲を尋ねて十二時頃までそこに居たと云ふことだ。嶺雲はそれまで途切れ／＼に機嫌よく話をしたと云ふ。彼は死に至るまて一度も人事不省や昏睡狀態には陷らなかつたのである。

食後雨を冒して嶺雲居に往く。北向に枕して靜に彼の屍は橫はる。白布を取て一禮すると、彼は穩かに永久の眠に就いて居る。十九年の交友も此に終たかと無言の儘そこに坐る。

彼の最後は甚だ平かてあつた。三時三十分頃咳こんて來たから、看護婦や女中がさすつて、いつものやうに少し體を起したが、其うちに咳がやむ、同時に呼吸がとまつた。それが三時四十五分てあつた。書生は驚いて小西へ驅けつけた。二人の令兄と奥山さんとが驅け着けて來た時には彼は冷かなる屍てあつた。

彼の死は時の問題てあつた。日光の醫師はもう十日もたぬと云ひ、奥山さんは七日位と云た。しかし今曉の死去は意外てあつた。彼れ自らも今度は十分に覺悟して居たが、七日の曉嵐とともに散るとは少し早過ぎた。昨夜は彼が待兼ねた大阪の令兄にも遇た。其以前には彼の思てあつた一塊肉にも逢た。彼の張りつめた氣は此に弛だのてあらう。彼は氣て生きた男てある。

午後小柳柳々東京より至る。四時頃小西に歸る。夜十二時、田岡木村二氏と柳々と四人、霧の裡を冒して嶺雲居に向ふ。夜は更けて大谷の急流が咽ぶ。一面に鎖した濛雨の中に金谷ホテルの燈が煌めく。今夜は故人の爲にお通夜をするのてある。薄暗い部屋の中て夕

顔の花のやうに彼の面を蔽ふた白布がほんのりと白い。

夜とゝもに語り明して、五時過小西へ引揚げる。いばらき新聞の渡邊鼓堂が來る。午後又出かける。彼の屍は今や棺の中に横て居るのである。三時頃神官が來て棺前の祭がある。四時前に大阪から來た白河鯉洋が着く。最後の訣別をなして棺は釘てうちつけられる。大谷川を渡て茶毘所に赴く。茶毘所は含滿ヶ淵の上て鳴蟲山のほとり、素麵瀧の下てある。鳥徑樵路を攀ぢ、谷川に臨だ所に小やかなる石が積み重ねてある。雨は霽れて白雲が搖曳する。嶺雲が一片の烟となつて、彼の嶺上に徂徠するには恰好な處であつた。火を移すとともに下山した。

翌曉柳々と余とは歸京した。此夜彼の遺骨は兩兄及鯉洋等に圍繞せられ、彼が片身の一塊肉に出迎はれて東京に歸たのである。彼が骨となつて日光から歸らうとは誰しも思ひ設けなかつた。

翌十日午後四時、谷中の齋場て祭典が營まれた。此時麻の着ものを着た彼の一塊肉を見て思はず暗涙を催した。彼や今年十五とは云へど、十六七位に見える。如何にも悧巧さうて丈夫さうに見えた。此兒が生れて後二年ばかり過ぎて、彼の母が寄せた手紙には弱くて困るとあつたが、今はいゝ子になつて達者さうだ。此夜劍峯鯉洋等と會した時に、鯉洋から今夜此兒の母が夫と子供たちと一所に上京すると云ふ耳新しい報知を聞いた。

十一日も雨、午後外出する。歸ると余が家の前に車が二臺ある。今朝木村氏から電話があつたから多分田岡氏か木村氏が來たのてあらうと思た。玄關に入ると婦人と小供と今一人男の客があるらしい。奥に入て聞くと、天野さんと云ふ方だと云ふ。はゝァ讀めたり、嶺雲の云ふ月見草のやうな女てあらう。

坐敷に往くと、往事匆忙もう十五六年を過ぎたから、途中て逢たとて容易に判りはしない。當時は二十ばかり、今年は三十七だと云ふ。尤も嶺雲とて余とて、當時は二十六七てあつた。其時は津山一だけあつて色も

白く奇麗であつたが、今は六人の子たる母であるから、相貌は全く一變したと云ていゝ。其頃は肥り肉であつたが、今はひどく痩せて、色も黑い。殊に近年の病氣のせいだと云てゐる。唯其聲だけは今も昔も異らぬ。昔話をすると彼女は啜り泣していじらしくあつた。殊に木村氏から附添ひの人も來て居るから、余も多くは語らぬ。子供は女の子で終から二番目だと云ふことだ。其うちに今夜大阪に歸る鯉洋も來た。鯉洋は此婦人に對しては初對面である。鯉洋の話によると今日嶺雲の靈前に於て父ならぬ父を父としたる彼の兒に始めて父子の名乘りをしたさうである。

彼女が發狂したとは嶺雲が茗荷谷に居た時の知らせてあつた。彼は最後まで爾か信じた。如何にも彼女の精神に或異常のあつた時代もあつたが、今は全く快くなつたのである。此ことは嶺雲の生前に知らせてやりたかつた。

嶺雲の一生は數奇のやうであつたが、是れ皆彼が好て求めたる運命である。しかし運命の神は決して彼を見棄てなかつた。彼の仰臥五年は如何にも困難には相違なかつたが、彼が病氣でなかつたならば、彼の所謂數奇は猶より以上に數奇であつたらう。此ことは我等同人だけ善く之を首肯することが出來る。

彼は十六七年の昔既に嶺雲搖曳の序に於て嶺雲子命數奇と稱して居る。彼は數奇と云ふことをひどく好み、誇り、自らそれに向つたのである。彼の一生は我等同人中最も出色で、波瀾萬重で、逸話に富て居る。彼はどこまでも詩人的議論家であつたから、爲すこと云ふことが皆詩的であつた。而して其一生は遂に詩的生活であつたのである。

嶺雲は極めて同情に富て居た。又善く天才を識認する天才であつた。初めて泉鏡花の天才を認めて之を紹賞したのは彼である。今日こそ一葉女史の名が明治文壇に嘖々たるが、文學界に『たけくらべ』が連載された時、其天才を讃嘆したのは實に彼れ嶺雲であつた。文學界は初めて一葉の作を紹介し、嶺雲は初めて一葉を天下に紹介したのである。德富蘆花の不如歸が一顧を

値ひせなかつた時に之を推賞したのは堺枯川てあつた。嶺雲の一葉に於けるも亦同樣てある。しかし世間は嶺雲と枯川との此事柄を殆ど知らぬてあらうと思ふ。德田秋聲が其才筆を初めて認められたのも亦嶺雲に依てゞある。

嶺雲の癇癪は昔からてあるが、是は彼が淸き正直なところ、又氣の善くつく所から起るのてある。しかし彼は人に小言を云て置いてひどく氣の毒がる。病中は殊に激しく女中などを叱りつけたが、又常に感謝して、こんなに世話になるのは氣の毒だが、因緣だとあきらめてくれと云てゐた。女中は彼の死後に於て淚ながらに之を物語る。

彼は恐しく氣前がよく、あればあるだけを使てまだ足らない。それに情に脆く、まことに多情多感てあつた。漢學育ちてあるから經世濟民と云ふ思想があつたが、固より詩人氣質てあるから、其經世濟民も常に詩人的空想てあつた。

病後の彼は兩兄からの豐富なる仕送りに依て極めて安樂てあつた。馬車に乘て東京見物をするし、夏は暑を避け、冬は暖地に移る、溫泉に海岸に保養する。常に二三の女中と書生を一二人置く。滋養物を飽くまで取り、贅澤は出來るだけする。健康ならば素寒貧たるべき彼の嚢中は病後いつても裕かてあつたのてある。彼の病中の著述は多少兩兄よりの仕送りを氣の毒に思て自ら助けんとする考もあつたらうが、其主なる原因は彼れ自ら退屈なるに依りて好きな文筆に閑を消したのてある。又病後の彼が色々の新刊書を丸善から購て讀破して勉强したのは驚くべきほどてあつた。晩年の窮境などゝ云ふ說は大間違てある。

彼は洵に心の淸い美しい男てあつた。余が交友中彼ほど淸い心のあるものはたんとあるまいと思ふ。而して淸き彼を繞れる親戚故舊も亦淸い人達てあつた。田岡木村兩兄が、其愛弟に盡したる情は殆ど世間に類の少いものてあつた。病氣となつて性來の我儘が一層嵩じたのを斯ほどまでに深切に十分出來るだけ保養させたのは、實に此兩兄の賚てあつた。又木村夫人が親身

の弟以上に彼を慰め彼の機嫌を取り面倒を見たるは實に美しいことてあつた。彼が情種てあつた津山の女の今の夫なる天野氏が男氣あり、爲すところ總て俠義的なのは是れ亦窃に敬服する所てある。又月見草のやうなと彼に云はれたる女の眞心は確に彼の情種を作るだけのいはれがあると思ふ。最後に友人として白河鯉洋が彼に盡したる所も余はひどく有がたく思ふ。余の如きは多忙の爲に日夕彼と往來することは出來ず、常に念頭にありながら疎濶になり易くあつた。鯉洋はひまだとは云ひながら、晩年に於ける彼が唯一の慰安者てあつた。鯉洋夫人も亦善く彼を音づれ、日光移居後にも三日間滯在して彼を看護したのてある。其の逝くを聞くや、鯉洋は新に大阪日報社に入れる身を以て急遽訃に奔り、頗る盡すところがあつた。彼が谷中齋場に於て朗讀したる友人總代としての弔文に依れば、鯉洋死さば、其分骨を日光なる嶺雲分骨塔の傍に葬られんことを依囑したと云ふことてある。今日友誼日に薄きの時に斯くの如きを見たるは、世道人心の爲にも心強く感ぜられる。樗牛に於ける嘲風、春草に於ける大觀、嶺雲に於ける鯉洋、余が友人中には斯くの如き友愛の情に篤き知友の少からぬを見て、余は眞に心から感謝し、又自らを祝福して居るのてある。

嶺雲を弔す

白河鯉洋

噫、吾が嶺雲は竟に轗軻數奇の短生涯を終へて靜かに山紫水明の郷に眠れり。此の日君の親戚故舊皆咸く集まり、茲に君の靈を祭る。思ふに君が在天の靈は明かに之を知るべし。

余の君と相同じからざりしものは鄕貫と甲子とのみ。其の思想を共にし、其の學問を共にし、其の性情を共にし、其の命數を共にし、于今既に殆ど二十年。其の間君は津山に余は東京に、君は水戸に余は神戸に、君は岡山に余は福岡に、君は蘇州に余は南京に、東西相畔ける亦少なからざりしと雖も、毎に必ず相往來して久しくも半歲に涉りて相見ざることなかりき。君は余の爲めに病を冒して獄に臨みたることあり、余は君の刑せらるるに坐して法禁に羅せられたることあり。小房に共棲して薪水を同じくしたることあり。高樓に買酒して流連に耽けりしことあり。舊夢偲び來れば無限の感懷緒の如く紊れ湧く。其の今日あるべきは固より夙く互に相期したる所にはあれど、幽明界を異にするに至りて人寰頓に寂寥たるを覺ゆ。余の兄弟皆既に早世して在らず、余の生を享くるも亦知るべきのみ。加ふるに君を失ふてより意氣頗る衰ふ。思ふに君に追隨する亦甚だ久しからざるべし。されど君が曾て病床に語りし如く、人一日の生ある一日の努力なかるべからず。死は固より願ふ所にあらず、力めて哀愁を寬うし、勉めて攝養を奉じ、以て益々君と余との事を怠らざるべし。君請ふ安んぜよ。而して時に際し事に臨みて余は明かに君の思ふ所と言ふべきものとを知る。即ち亦君と爾今長く相語り相簡するに於て必ずしも途なしとせず。

余の馳せて大阪より日光に至るや、君は既に此の世の人にあらざりき。棺を開いて君に最後の永訣を叙せしとき、君が顏容の極めて平靜にして一點の苦痛煩悶の痕だも止むるなく、三五年來余は斯くの如く君が和暢なるに接したることなかりき。多年君が權力と戰ひ因襲と戰ひ、困苦と戰ひ、病魔と戰ひ、戰うて其の全力を擧げ、矢盡き刀折れて我が事畢れり我命來れりとして安らかに眠りに就きしを看取し得たり。君は死して毫も遺憾なき也。

君の二兄は君を扶養するに於て至らざるなかりき。而かも君が死して余に語らるゝ所を聞くに、尙ほ以て太だ足れりとなしたまはず。君は斯くの如く友愛仁慈の一門を有して、其の晩年を全うし、多感多情のまゝ

に動きて少しも抂ぐる所なく、四十三年の一生、其足未だ嘗て一たびも權家に曲げず、狷介の性を抱いて狷介の行を遂げ、加ふるに心に鬪りし其人とは生前一夕相會するを得、而して遂に君が二兄と親友と子弟との厚き看護の下に眠れるに至りては、君は必らずしも不幸の人にあらざりき。死するの前夜、君は次兄木村氏の間に答へて又遺憾なしと言へりと聞く。余亦君の爲めに些の遺憾なし。

君の遺骸を荼毘に附せし其地は、鳴蟲山の麓、一水北より來る潺湲に臨み、樹緑りに谷幽に、一に是れ君が生前望みし所に外ならざりき。君は其の名の如く且つ其の最も世に行はれし最初の著書の如く、君は化して搖曳たる秀嶺の雲となれり。君の喜び想ふべき也。

君の遺骨は之れを郷里に送るの外、其の一部を分ちて日光淨光寺の塋域に埋め、余自から筆を援りて嶺雲處士分骨之標と記し置きたり。處士を以て終始するは君の志なれば也。而して日光は君の最も愛せし處、三たび四たび遊びて淹留し、詩思を養ひ、病軀を養ひ、竟に永眠に就きし處。君が倜儻の氣宇と日光峻爽の景象とは自ら宿縁ありといふべし。二荒山を望み、大谷川に臨み、樹立物古りて苔蒸したる處、君の靈は山川の靈と日夕相交歡しつゝあるを疑はず羨やむべき也。余亦今より家人及知友に托して余の君を追ふ日、亦余が分骨を君の側に葬るを遺囑したり。請ふ君他年其の交歡に余の入り來るを許せ。

余は君の友人總てを代表して誄詞を述ぶるを托せられたりと雖も、余は今多くは余の私情を陳べざるべからざりき、言はんとする所は綿々として盡きざれど文字辭章をなさず。且や君と余とは互に一切を相知り盡す。亦多く云ふの要なし。生前時に姑らく袂を別つことあるもたゞ一揖するに過ぎざりしのみ。今永訣に臨むも亦豈多く言はんや。たゞ遺憾なき君の臨終も恐らくは將來に向つて一事の尙ほ懷に介然たるものありしならん。他日余は笑つて君が手を地下に把らんか。而して君が喜びを頒ち得んことを庶幾ふ。尙くは饗けよ。（大正元年九月十日谷中齋場にて）

奉天訪書談

文學博士　内藤湖南

▲奉天行の目的

私は本年三月十三日に京都を出發して五月二十三日京都に歸着する迄、約七十日間の旅行をして來たのであるが、此旅行の目的は、京都大學の依賴を受けて、奉天の宮城内にある貴重なる古文書の撮影にあつたのである。なにしろ支那人を相手にしての仕事であるから、成功するかどうか極めて冒險的な企てゞあつたけれども、兎に角目的の大部分を遂することが出來たのは非常な幸であつた。私の撮影して來た寫眞の數は殆ど壹萬枚に上り、之を仕事した日數の約一ヶ月に割り當てゝ見ると、一日三百枚以上になるのである、恐らく寫眞職工としても、專門寫眞家のレコードを破つた事と思ふ。此撮影した寫眞を整理する丈でも、此夏休み一ぱいを費さねばならず、此古文書を研究して其結果を發表する迄には少くも四五年はかゝらうと思ふ、今は大體奉天に於ける仕事振りと、其古文書に對する概念丈をお話して置かうと思ふ。

前にも申した通り私が京都を出發したのは三月の十三日で奉天に着いたのは三月の二十三日であつた。それから五月十七日まで奉天に居つて仕事をしたのであるが、行く時は京都文科大學講師富岡謙藏君と一緒に參り、後からはやはり京都大學の講師羽田亨君が加はつた。羽田講師の奉天に着いたのは四月の八日であつた。私は此兩講師の幇助を得、又彼地に居る同文書院の卒業生の助力を得て今度の仕事を遂行したのである。

私は明治三十八年三十九年に北京の方から奉天へ廻つて、いろ〳〵調べて置いたものがある。三十九年には稻葉君川君初め其他の人々と奉天に於ていろ〳〵の書物を見て置いたので、機會があつたらどうかして手に入れたい、若し全部日本に持て來ることが出來れば尙結構だが、さういふ譯にも行くまいから、成るべく寫し取りたいと思つて居つたのである。奉天にあるもので寫取りたいと思つて居るものは非常に多數であつて今度寫したのは其の中の極く小部分に過ぎないのであるが、一體支那の官吏程當てにならぬものはないのであつて、今年は非常に工合が好いと思ふと、翌年はガラリ様子が變つて少しも仕事が進行しない。然らば將來も亦さうかと云ふと、さうでもない、又いろ〳〵の便宜を得ることもあるので、今度行くに就ても豫め支那の官吏の機嫌を見てから行くといふ譯にも行かぬから、實は行き當りバッタリで、運を天に任せて行つたのである。勿論何處にどう云ふものがあるかといふやうなことは、既に調べて知つて居るが、愈々やつて見て出來ないと言つて、無手で歸つて來るのは面目もない話であるから、其點に於て平生暢氣の私も少しは心配を致したのであつた。

▲撮影の目標とした古文書

今度目的として行つたものは二つある。第一の目的としたものは滿文老檔と云ふものと、實錄戰圖と云ふもので、第二の目的としたものは五體淸文鑑である。是だけが出來れば宜いと云ふ覺悟で參つた。所で今度出來上つたのは其中第一の目的とした滿文老檔と、第二の目的とした五體淸文鑑である。實錄戰圖と云ふ方は少しの都合で出來なかつた。そこで此御話をするには、どうして私が之を目的としたかと云ふことを少しく申さなければならないと思ふ。

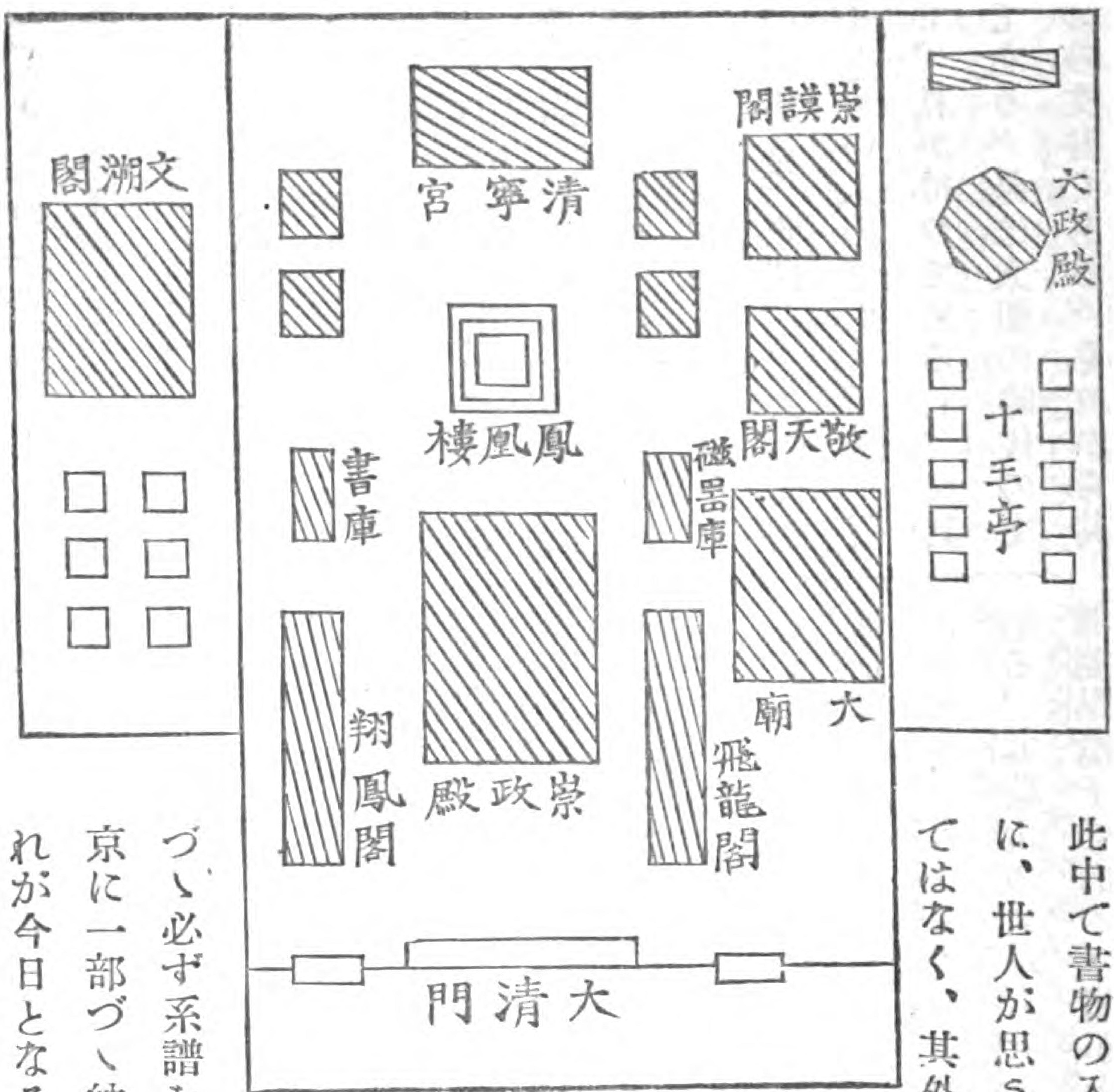
▲奉天の宮城と奉天にある書物

然しそれを話す前に一體奉天にはどんな處にどんな本があるかと云ふことを、ざつと一と通り言つて置かなければならぬ。奉天といふと少し支那の事情を知つて居る人は、誰しも文溯閣にある所の四庫全書と云ふこ

とを直ぐに問ふ。四庫全書には素より古い書物が澤山あるが、今申した三種の本は何れも四庫全書以外のものである。それを話すに就て先づ奉天の宮殿の様子を概略述べて見やう。之を圖にあらはせば、(下圖參照)

大體こんな位置て、左右に小い門があり、中央の門を大淸門といつて、其門を入つて右に大廟、飛龍閣といふのがあり、左に翔鳳閣といふのがある、其奥に崇政殿と云ふがあり、其後ろに鳳凰樓と云ふ三層樓があり、其奥に淸寧宮と云ふのがある。それから左右に區劃があつて、左の方に文溯閣、右の方に敬典閣と云ふのがある。それから崇政殿の左に書庫、右に磁器庫がある。

此中て書物の入つて居るのは何處かと云ふに、世人が思うて居るが如く文溯閣ばかりてはなく、其外の書庫にも本がある。四庫全書と云へば誰も知つて居る如く北京の文淵閣、杭州の文瀾閣熱河の文津閣にあるのと同じて、是は誰も知つて居る通りのものである。敬典閣には玉牒と言つて天子並に皇族の系譜が入つて居る。是は淸朝ては十年に一遍づゝ必ず系譜を編製して、奉天に一部と、北京に一部づゝ納めることになつて居る、それが今日となると積んで非常な大部のものになつて居る。此玉牒も縦劃の分と横劃の分と二通り



奉天宮殿略圖

になつて居る。即ち横に線を引いて、横に系圖を並べたのと、さうてなく縱に書いてあるのと二通りの系圖がある。さうして帝系宗室の系圖は黄色の表紙になつて居り、覺羅の系圖は赤い表紙になつて居る。それから崇謨閣には實錄並に聖訓が主に入つて居る。實錄は太祖太宗以後歷代の實錄てある。尤も宣統帝の實錄はまだ出來て居らぬ。それは滿洲文と漢文と兩方て出來て居る。それから聖訓と云ふのは天子の詔勅て、是も歷代の分が滿漢兩文て出來て居る。それから崇謨閣には其の外の或る種類の本がある。それは即ち私が撮影の目的として滿文老檔と、實錄戰圖てある。それから其外に漢文の舊檔と云ふのがある。此檔と云ふのは記錄と云ふことて、或は檔子ともいふのてある。漢文舊檔は既に三十八年に寫して、私が持つて居るし、又其寫は東京帝國大學に納めてある。是は太祖の時代の文書の寫て、主に朝鮮と交渉の文書てある。それから其外に其時分明朝から降參した者共が、太宗に對して明を取るの策を上つた奏疏の寫などもあつて、隨分貴重の材料てあるが、それは既に三十八年に寫取つたから、今度は滿文老檔と實錄戰圖とを寫す目的て參つたのてある。

▲滿文老檔の話

それてはどう云ふ必要があつてそれを寫すのかと云ふと、此滿文の老檔は、前にも一通り見て置いたけれども、今度愈々寫すに就て調べて見た處が、清朝の太祖、即ち一番最初の太祖奴兒哈赤(ヌルハチ)と云ふ人、並に其次の太宗の時代の滿洲文の日記の寫てある。此原本は今何處へ行つたか分らぬが、乾隆頃まで反古にして突込んて置いたものを整理して清書したものてある。さうしてそれは二通りになつて居る、一は無圏點檔子、一は加圏點檔子てある。滿洲文と云ふものは、最初は蒙古のアルハベットに依つて、滿洲語を書取つたものである、其蒙古のアルハベット其儘を使つて書いたのが無圏點檔子てある。所が太宗の時に有名なる達海(ダハイ)と云ふ學者が、どうも是までのやうに單に蒙古のアルハベット其儘ては、滿洲語の眞の發音に對しては不完全て

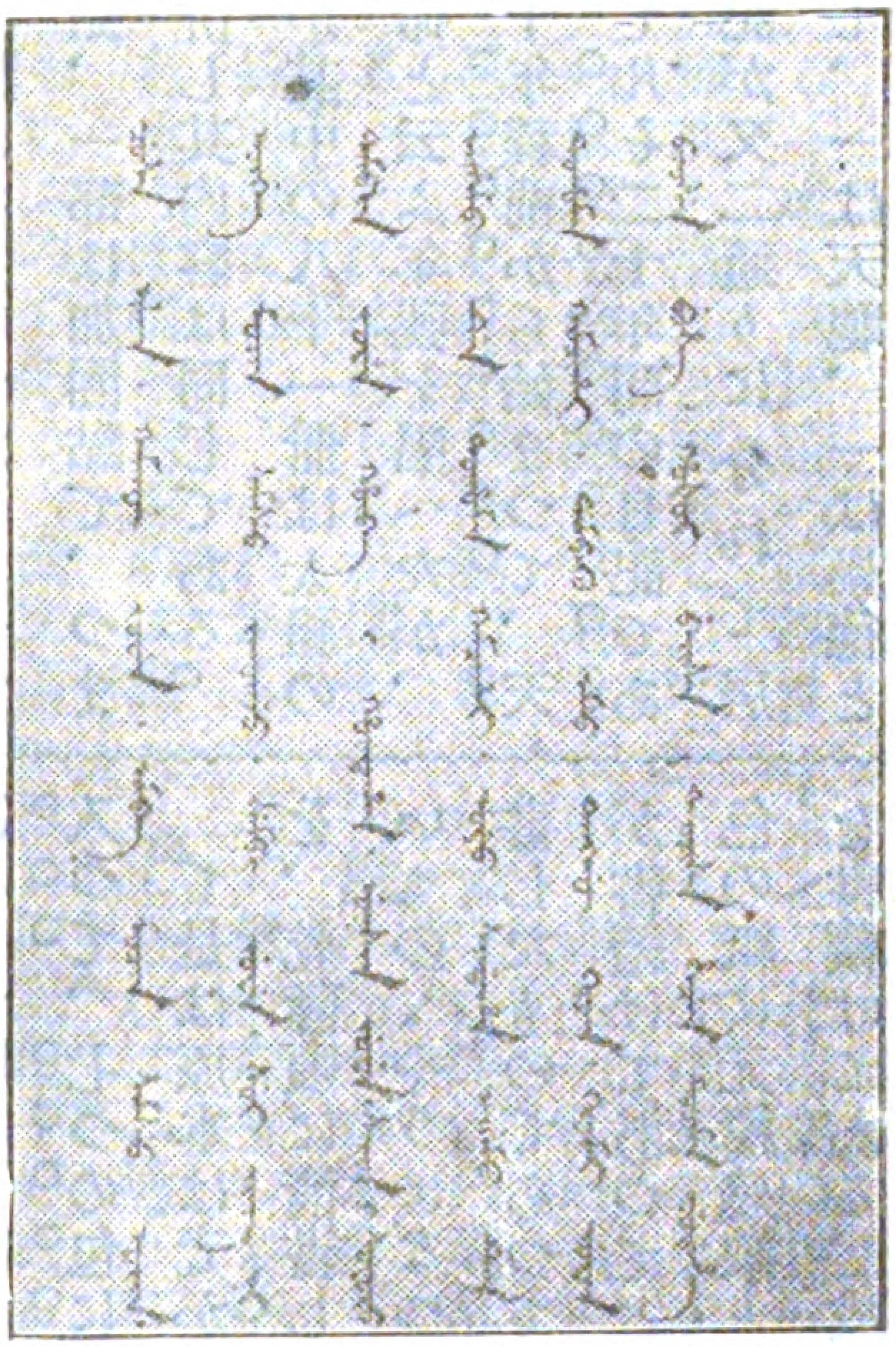
あるからと云ふので、蒙古の文字に點を付けたり丸を加へたりして、恰度日本でハヒフヘホに點や丸を加へてバビブベボ、或はパピプペポを現はすやうな工合にして、蒙古字に圈點を付けて十分滿洲語を寫出せるやうにしたのである。之を加圈點といふのである。て此滿洲文の老檔が一部は無圈點、一部は加圈點で、つまり二通りに分れて居るが、併し其内容は同じである。是は全部で百八十冊であるが其中の八十一冊は太祖の時の日記である。太祖は天命と云ふ年號を唱へたが、其天命と云ふ年號を用ゆる十年程前から始まつて、天命の最終即ち天命十一年まで凡そ二十年間の日記である。それから太宗の時の日記が又二通りに分れて居る、太宗の年號は二つあつて、一は天聰、一は崇德といふ。天聰は八年までゞ、九年目に崇德と變つた、それで日記のあるのは天聰六年までゞ、其六年間の日記が六十一冊、それから崇德と云ふ年號になつてからの分は、是は元年一年分丈しかない。處が其崇德元年は事柄の非常に多い年であつて、此年に始めて太宗が自ら皇帝と稱することになつた、それまでは汗と稱して居つて、つまり謂へば北狄の稱號を維持して居つたのであるが、此時始めて皇帝と稱するやうになつた、其他種々の事柄が多かつた爲に、此崇德一年丈で三十八冊になつて居る。都合百八十冊で、それが十六秩の中に入つて、七つの包になつて居る。

て是は原本は元から斯う云ふ日記になつて居つたのを、乾隆頃に淸書したものと見えて、紙も何も皆新しいものゝやうになつて居る、然しそれは餘程鄭寧に淸書したものであつて、殘缺の所は、ずつと上から文句が書續けてあつて、それから其殘缺の所へ來ると、黃色の紙に元檔殘缺と書いた札を貼つて、それから又下を書續けてある、或は年月の不明な所、日記であるから年月が順を逐つてあるべきであるが、多くの中に日だけあつて年月のないのや、月の不明なのやいろ〳〵のものがあるけれども、さう云ふ所を少しも棄てずに之を殘したものと見えて、太祖一代の日記の中には凡そ九冊だけ無年月の日記がある。それから太宗の方の

日記にも無年月のがあるけれども、之は僅か一冊丈てある。それて私が枚數などを調べた時に、どの卷が何年何月までの分、どの卷が何年何月までの分と云ふことを調べて、目錄を作つた、さうして寫眞に撮つた譯てあるが、其紙數が四千百枚程あつた、其外に表紙があるので、全體の寫眞が四千三百枚程になつて居る。其原本が一頁七行づゝになつて居つて、悉く滿州文て書いたものてある。

▲滿文老檔の史的價値

それては是はどう云ふ値打のあるものかと云ふと、それは先きにも云つた通り四五年も研究した後てないと、之を一通り讀むて内容を知ることが出來ないから、詳しいことを云ふ譯には行かぬが、其價値のあると云ふことは數の上から積つて見て明らかであらうと思はれる。即ち太祖一代の實錄と云ふものは、滿洲文の方ても漢文の方ても同樣てあつて、是はどちらも八卷しかないのてある。所が滿文老檔の方は太祖一代のことが實に二十卷、八十一冊になつて居つて、殆ど十倍の紙數になつて居る。さう云ふ次第てあるから自然其記事も非常に詳しからうと云ふことは想像し得るのてある。それて寫眞を取らせて居る間に、處々を開いて見て居る間に見出したことてあるが、何か事件のあつた時に、太祖が詳しい詔勅を滿文て發して居る、さう云ふものは是まて見た漢文の實錄ては殆ど見たことが無い。さう云ふ譯だから滿洲に關する史料としては恐らく之に越した精密なものは他



(滿文老檔)

に無からう、殆ど是は根本史料と云つても宜い位であるから、歷史上大變な價値のあるものであらうと思つて居る。太宗の方は是は太宗實錄と云つて、漢文も滿文もあつて、何れも凡そ六十卷程になつて居る。是はつまり天聰が八年崇德が八年、合せて十六七年ばかりの間が書いてある。所が滿文老檔に於ては天聰が六年までと崇德が一年、つまり太宗の治世十六七年の中の七年間の日記が九十九冊に上つて居る、是丈で見ても其記事が如何に綿密であるかと云ふ事が推測られる。殊に此中崇德元年のことなどは一年間で凡そ三十八冊と云ふ非常な數に上つて居る。それから其外に太宗が一大敵として苦んだ明の將軍毛文龍が朝鮮の椴島といふところに立籠つて、背後から滿洲を襲ひ、絕えず太宗を苦めたことがある、それに關係した文のことが毛文龍事件と云ふので二卷別になつて居る。さう云ふ所を見ても、如何に貴重のものであるかと云ふことが推測し得られるのである。さう云ふ次第であるから、尙之を十分に研究したならば、實錄などに未だ曾て現はれざることが澤山にあらうと、私はそれを樂しみにして居る。勿論以前から價値のあるものであらうと思つて居たけれども、實際之を寫取つて見ると、實に豫想以上の貴重の資料たることに驚いた位である。で私の最初の豫想では枚數が二千枚內外だらうと思つて居た所が、實際計算して見ると四千二百枚餘に上つたやうな譯で、寫眞などの豫想も大分狂つたが、兎に角是は一枚殘らず全部寫取つて來た。

▲實錄戰圖の話

それから失敗をして寫取ることが出來なかつた實錄戰圖は、太祖實錄同樣八卷あつて、是は滿文のと漢文のと、蒙古文のと三樣になつて居る。此本の面白いのは處々に繪を挿んであることであつて恰度日本の繪本太閤記とか云ふやうな風で、太祖一代のことを繪解きにした本である。其內容は大體に於て實錄と同樣である、併しそれなら實錄と全く重複して居つて値打が無いかと云ふと、さうではない。私は元來實錄に就ては疑を懷いて居つたのである、日本には清朝の初めの三代實

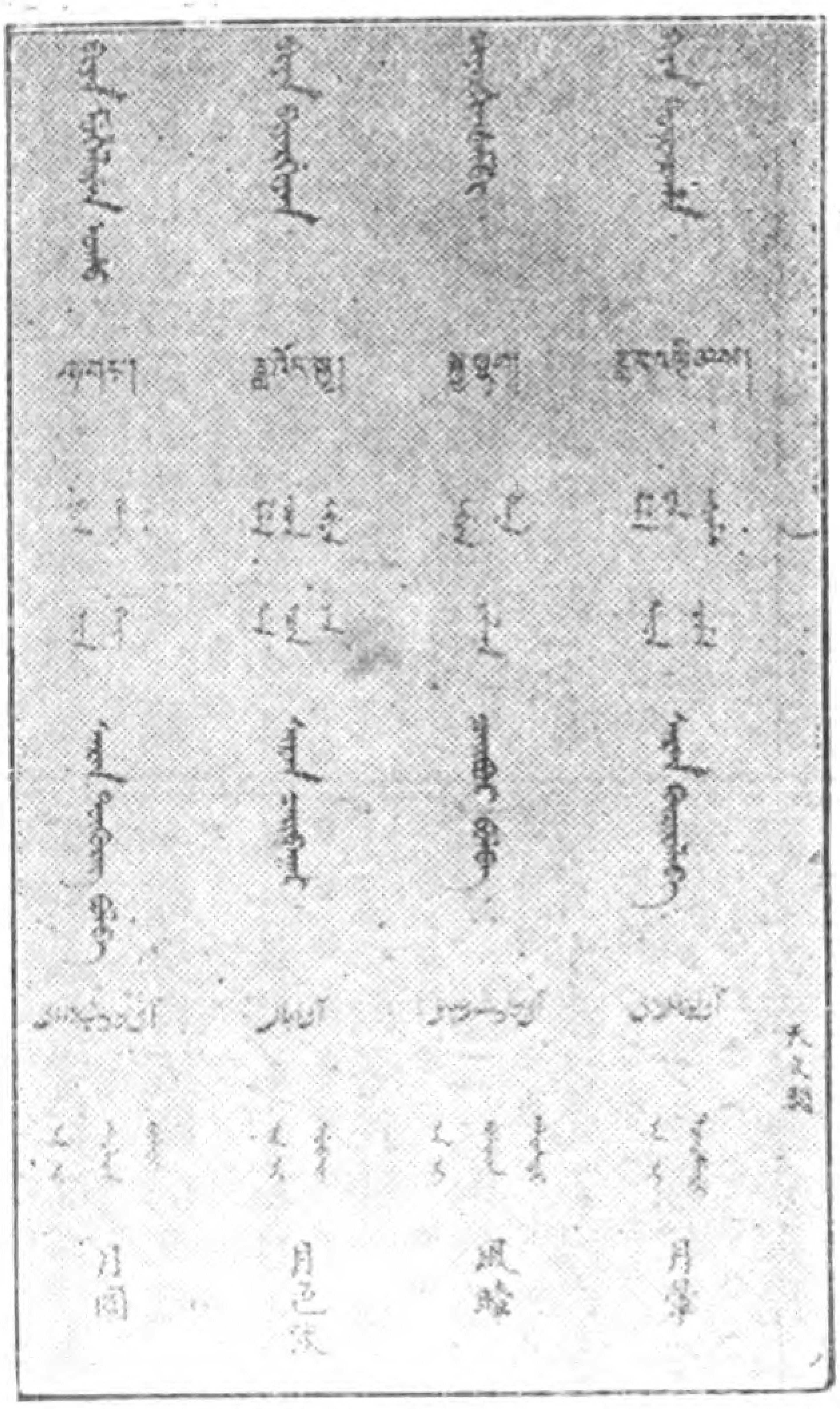
錄と云ふのが傳つて居つて、太祖の分はやはり八卷になつて居るが、それを讀むで見ると、支那の方に傳へてある記錄とは違つて居る所がある。支那の方に傳つて居るもので、通例吾々が見ることの出來るのは東華錄と云ふのであつて、是は清朝の實錄の主要な所だけを書拔いたものであるが、此東華錄も太宗一代の分は書拔いたのではなく、實錄が殆ど全部出て居ると言つても宜い位である。所で此東華錄と、日本に傳はつて居る實錄とを對照して見ると、時々相違がある。今其著しい點を云ふと、太祖は六十八歲で亡くなられたが、其時分に大きい方の子供は四十に近い人も大分あつた、現に太宗も三十以上の人であつた、所で其太祖の奥方、即ち皇后は極めて若い人で、其の時確か三十六であつた、此人は大變太祖に氣に入られて居つて、其腹に出來たのが北京へ行つて攝政親王と言はれた有名なる睿親王である。其太祖の皇后に對して腹異ひの大勢の息子達が寄つて集つて殉死を勸めた、隨分亂暴な話であるけれども、大勢の息子達が、太祖が死んだからあなたも一緒に死ねと言つて殉死を勸めた、皇后はそれを厭がつて餘程拒んだが攻め立てられて據ろなく殉死をした、其死ぬ時に、自分の生んだ睿親王は未だ年が若いから、行末を心配して、自分の死んだ後は宜しく賴むと云ふやうな遺言をして死んだのである。其事は日本に傳はつてあるけれども、東華錄には載つて居らぬ、所が今の繪本太閤記流の實錄戰圖には其事がやはり載つて居る。そこで段々考へて見ると、日本に傳はつて居る實錄は、康熙帝の時に出來た實錄で、現在支那に傳はつてある方の實錄は、恐らく乾隆の時に出來たものであらうと私は考へる、それは種々の點から推測されるが、先づ諡からだけでも知ることが出來る。太祖の諡は初めは何とか云ふやはり大分長いのであるが、之れに康熙、雍正、乾隆頃には一代に太祖の諡を二字づゝ增してある、所で日本にある實錄には、支那にある所の東華錄にある太祖の諡より四字少ない、是はつまり雍正、乾隆の二代に增した所の諡が足らないのであらう、故に是は康熙年間に出來たものだ

らうと、斯う云ふ想像が付くのである。それで今支那にある實錄は乾隆頃に手を入れたものであると云ふことが分つた。さうして其時に太祖の子供が大勢して自分等の繼母に殉死を强いたと云ふやうなことを削つたのであらうと、斯う云ふやうに考へて居つたのである。それで今度行つて奉天の庫にある所の實錄戰圖を見ると、果して私の想像通り今支那にある所の實錄は、東華錄同樣母に殉死を迫つたと云ふやうなことが削つてあることが分つたので、茲に其疑問は明瞭になつたのである。さう云ふ譯で此實錄戰圖と云ふものは日本に傳はつて居る所の實錄を證據立てるに屆竟の材料てあつて、史料として極めて必要のものであるから、是非之を寫したいと思つたが、つい故障が起つて、此方は寫して來ることが出來なかつた。それはつまり崇謨閣の中にある書物である。

▲五體淸文鑑の話

それから第二の目的とした五體淸文鑑、是は翔鳳閣の中にある本である。此翔鳳閣と云ふのは、一體書物を藏して置く所てはない。是は乾隆帝以後、嘉慶、道光兩帝などが屢々北京から奉天及淸朝の起つた興京の離宮などに行幸になつたのてあるが、さう云ふ行幸の際に、奉天のみならず、沿道の駐蹕所などに飾付ける所の調度品を入れて置く庫てある、從つていろ〳〵の御手許品の中には多少書物などもある。それらの書物の一部分に五體淸文鑑があつたのてある。此五體淸文鑑も一枚殘らず寫眞に取つた。是はつまり淸朝が支配して居つた各民族の語の大略の辭書であつて、第一は滿洲語、第二は西藏語、第三は蒙古語、第四は土耳古語、第五が漢語の五種の辭書てある。辭書てはあるが、アルフハベット順になつて居るのではなく、天文とか地理とか云ふ風の部門別になつて居つて、後から段々增して行つたものらしいのである。て私が此五體淸文鑑を寫して來たと云ふことが新聞に出た所が、中には思ひ違ひをして居る人があるやうてある。現に水戸の彰考館にも淸文鑑と云ふ本がある、それは今度寫して來たのと同じてはないかと言つて、態々葉書て知らせて

呉れた人があつたけれども、それ位のことは私も承知して居るし、又私も從來清文鑑とか、滿洲語、蒙古語、西藏語、漢語の四種の清文鑑は私も備へて居るから、それ位のものならば何も此樣な馬鹿らしい苦勞はしないのである。所で此清文鑑は最初康熙年間に出來たのである、それを乾隆の初めに增補してある。て一番最初は滿洲文と漢語と對譯の爲に出來たのであるが、其後乾隆四五年頃に蒙古語を加へ、其後西藏語を加へて四種の清文鑑が出來た、さうして是は版本があつたが、五體清文鑑には版本はないのである。今度寫して來た五體清文鑑は非常に鄭寧に寫した寫本であつて、まるで御手許本と言つても宜い位に出來て居る。是は奉天の庫に一部ある丈で、外にはないものである。白鳥博士は曾て是と同樣のものを巴里で見られたと云ふことを聞いた事があるが、若し果してそれが是と同じであるとすれば、それは英佛同盟軍が北京の圓明園に侵入した時に持つて行つたのかも知れぬ。それから北京には今一部位同じのがあるかも知れぬが、其外にはある見込はない。それ故に大變な面倒を掛けて寫して來たのである。是は本の形が少し大きいので二頁を一遍に取ると云ふ譯に行かぬので、一頁を一枚の寫眞に取つたが、此紙數が二千六百枚、寫眞の數が五千三百枚餘である。



(五體清文鑑)

▲どんな風にして仕事をすたか

で今度寫眞に取つたのは滿文老檔、是は合版と云ふ

ので取つたので、其數が四千三百枚、それから五體清文鑑の方が五千三百枚、兩方で約九千六百枚であるが、實際寫眞に取つたのは、取り損ひなどもあつたから一萬枚以上に上つて居る。それで實際仕事をしたのは四月十二日から始めて、五月十三日にはすつかり荷造りまでも終つたのであるから、恰度滿一ヶ月の間であつた。それで支那の官吏の狀態が前にいつたやうな風であるから、果して事が思ふ通りに運ぶかどうか頗る疑はしいので、餘程心配をした。三月二十二日に奉天へ着いたが、恰度伊集院公使が來たので、領事館なども二三日は非常に忙がしかつたので、それが濟むでから奉天總督に交涉することを賴んで置いた。それから私は元來現在の總督趙爾巽と云ふ人とは知合でもあり、又其下に居る交涉使、つまり外交事務を取扱ふ所の孫といふ人も知つて居るから、領事館から申込むと云ふ事になると同時に私は先づ交涉使を訪ねて、私相當の贈物をし、又趙總督にも會つてやはり相等の贈物をし、表面は總領事から依賴するのであるが、貴方とは豫ての御知合であるから特に私からも御賴みすると言つて賴んだのである。それから歸つて返事を待つて居た所が、二十九日になつてから返事が來た、領事館には二十八日に來て居つたのですが、私の所へは二十九日に來た。其總督の返事は、內藤と云ふ人は自分も前から知つて居る、あの人が奉天にある書物を見たいと言つて來たのは歡迎する、出來る丈便宜の取計らひをすると云ふ意味であつた。そこで私も大に喜んで、早速京都大學に電報を打つて寫眞の種板を送つて貰ふことにした、併しどれ位要るかと云ふことを言つてやらなければならぬから、三十日と一日と二日掛つて計算をして見た。それで最初の日には半分ばかしか計算は出來なかつたが、凡そ三千五六百枚位だから、先づ三百ダースの種板を用意したら宜からうと思つて、それで電報を打つた、所が翌日又行つて調べて見るとそれでは足らない、どうしても四千枚以上と云ふことが分つた、是はつまり實錄戰鬪と兩方をやる積りてあつたから、先づ種板を四百五十ダース用意して來るや

うにと云ふ電報を打つた。之だけの種板を一時に拵へると云ふことは、京都では容易に出來ない、大騷ぎをして大坂まで駈歩いて漸く揃へて、早速羽田君がそれを携帶して來るといふことになつたさうである。

其間に私は寫眞を取る準備をした。で是は元より知つて居る人ではないが、奉天で寫眞屋をして居る人で、其人が二人の弟子を連れて來て吳れた、それからそれに羽田講師が加はつてやつたが、それでも手が足らないので、もう一人、やはり同文書院の卒業生で、恰度彼地に遊んで居た人があつたので、其の人々とて愈々滿文老檔の寫眞を取ることになつた。勿論初めてであるから豫定は分らぬ、分らぬけれども三十九年に多少の經驗がある、僅か二三時間であつたが、多少經驗があるので、一時間に二三十枚、一日に二百枚は行くであらうと云ふ大體の見當は付いた。併し一時間に二十枚として、一日十時間少しも休みなくやるといふことは困難だらうとは思つたが、それは慣れゝば今少し手早く行くるだらうと云ふ考で、凡そ五千枚の寫眞を取るに二十四五日と云ふ豫定であるが先づ一月仕事と思つた、それでいろ〳〵の準備をしたのである。

で先づ暗室を拵へねばならぬ、そこで恰度巡査の交番のやうな格好をした暗室を拵へて、それを宮中に持込むと云ふことになつたのである。所で其時分には向ふの官吏が皆好意を持つて居つたから、萬事が大變都合よく運んで、初めは此方も遠慮して、宮中の囲ひの外でやつて居つて、崇謨閣から一々往復して居つたが、崇謨閣の官吏達が、監督をするのに自分等が面倒であると云ふ所から、暗室を奧まで持つて來いと云ふことになつたので崇謨閣の直ぐ前まで暗室を持つて行つたので大變便利を得た。それで四月十二日から始めたが、最初の日は準備やなどに暇が要つて、漸く一時間ばかりしか出來なかつたので僅か四十七八枚寫した丈であつた、それから其翌日もいろ〳〵面倒の事があつて、半日ばかりで百三四十枚しか出來なかつた。併し此二日の經驗で、どし〳〵やつたならば一日に二百枚は樂に出來ると云ふ見込が付いた。それから十四日は日曜

て、十五日から始めた。十五日には十時頃から始めて四時頃までに三百餘枚出來た、其翌日は四百餘枚出來た、所が其翌日はいろ／＼故障の多かつた日で、三百八九十枚しか出來なかつた、先づ一日に四百枚は出來ると云ふ見込が立つた。それから其後は四百二三十枚平均に寫せた、或日には四百九十何枚か取れた日もあつた、實際寫したのは五百枚以上になつて居つたが、やり損ひなどがあつたので、其れを除いて四百九十六枚か取れた。

さういふ風て寫す方はずん／＼進んで行くが現像が迚も追付かぬ、そこで寫すばかりさう寫しても仕方がない、是は寫眞屋から二人來て、私と、羽田君と、もう一人の助手と五人てやつたのてあるが、寫眞を取る方はずん／＼進んで一分間も掛らない、一時間平均八十枚位は裕に出來るが、それに追付かないのは種板の取換てある、今のやうに小さな暗室、まあ一人しか入れぬ二人入るには無理しなければならぬと云ふやうな暗室で取換をやるのであるから、是がなか／＼困難な仕事である。所がそれをするのは羽田君より外に無い、私は本を取出してやる、滿洲文の本ですから拋つて置いて誰にでもやらせると云ふ譯に行かぬ、私が順に本を出して渡す、それから三人が一枚々々に寫して行く、さうすると種板の取換は羽田君がやらなければならぬ、所が是が一番厭やな役だ、朝から晩まで日の目を見ずに眞暗の中で働くのだから隨分厄介なことてある、其上に其暗室は非常な急造であつて、板の合はない所には紙を貼つて、それに澁のやうな厭やな臭のあるのを塗つたので、何とも云へない氣持、普通ならば傍へ寄るのも御免を蒙るのであるが、妙なもので愈々入込んでしまうと臭さも忘れて仕事をして居る、兎に角午前十時頃から午後四時頃まで、其臭い暗室へ立籠つて種板の取換ひをすると云ふことが一番厭やな役である、それを羽田君が一人で引受けたのである。何しろ長い間暗い所に居るので、目が變になつて、外へ出て來ると暫時目をパチクリやつて居る。所が私も一日其中で仕事をしなければならぬことになつた、それは

羽田君が折惡しく風邪に罹つてやれなくなつたので已むを得ず私が其暗室に立籠つて種板の取換をやつた。そんな眞暗な所に入つて仕事をして居ると、一日が大變長いであらうと想像されるが、仕事に逐はれて却つて日が早く暮れた位に感じた。そんなことて結局滿文老檔の方は四月二十五日に出來上つた、始めてから凡そ三週間て全部寫眞に取れたので、一安心を致した。

▲滿鐵本社の好意

所が其時に現像がもう二千枚以上も遲れて居るのて、どうしても一偏休んて現像をして、それから次の實錄戰圖に取掛らうと云ふことになつた、そこで二三日休んだのが大失敗で、それが爲に實錄戰圖はとうとう出來ぬ事になつたのである。それは一方に現像もしなければならぬし、それから其前に大連の滿鐵本社から私に講演をして呉れと云ふ注文があつた、自分は非常に忙しいので迷惑てあつたが、此度は非常に滿鐵の厄介になつた、現に吾々が居つた宿舍も滿鐵て貸して呉れ、炊事は隣の盛京時報と云ふ日本の新聞社てやつて呉れ、又寢道具から何から一切貸して呉れたので、費用も餘計にかゝらず、萬事に便利を得たのである。さう云ふ譯てどうも斷る譯に行かぬのと、それからもう一つは滿文老檔の寫眞が意外に早く出來たので、實錄戰圖の外に五體淸文鑑も寫さうと云ふ希望を起したのである。それは羽田君は土耳古語に通じて居る、日本には恐らく土耳語では羽田君に及ふ者はなからうと思ふ、それて私は交涉して羽田君の爲に此の五體淸文鑑を借出したのである。すると羽田君は大變喜んで、晝間隨分疲れて居るのも意とせず、毎夜十二時頃まで此中の土耳古語丈拔書して、一週間程やつたが、厚い本が三十六册になつて居る、其中の一册少し餘しか出來ぬ、是には羽田君も非常に苦勞して、或時などは寫して居る間に坐眠をした位だと自分でも白狀して居つたが、何しろ容易な事ではない。そこでどうか是も寫眞に取つて置きたいと云ふ希望が起つたので、早速京都大學へ手紙て交涉をしたのだが、それが許された所て種板の用意がしてない、それなら奉天て間に合ふか

と云ふに、奉天では間に合はぬ、どうしても大連へ行かなければならぬ、それから又大連で其種板を買ふにしても費用が要る、其金は一時滿鐵からでも借りるより外に仕方が無い、幸ひ滿鐵から演說に來て吳れと云ふのだから、そんなことも話して見たいと思つて、非常に忙しい際であつたが二十七日に大連に行くことにした。

奉天城から停車場へは一里以上もあるので二十六日は一日休んで、其夜は停車場の近所に泊り、二十七日の朝の汽車で大連に行く部合にした。それで急行列車だと奉天から大連まで八時間で行けるから、朝五時に出掛けると午後一時に着く筈であつた。所が其前夜は四五年此方滿洲に無いと云ふ非常な大風で、宿屋に寢て居ても戶の間から砂が吹き込んで、夜中に目を覺まして見ると自分の着て居る夜具から頭から眞白になつて居つた位であつた、さう云ふ大風の爲に汽車が大變に遲れた、何でも途中で餘り風が甚しく、迚も進行が出來ないので、一時間程停車して、客車の窓を悉く開放して風の通しを良くし、漸く轉覆を免かれたと云ふことであつた。そんなこんなの爲に丁度一時間と四十分程遲れて奉天に到着したので、約束の時間に遲れるだらうと私は大變に心配したのである。それから後も汽車は段々に遲れて、午後三時二十分に大連に着いた。其時に羽田君は未だ旅順を見ないからと云ふので旅順見物に一緒に行つたが、何しろ二時間以上遲れたので、旅順へ行く汽車に間に合はなかつた。それで私は午後四時から一時間半ばかりやはり滿文老檔の話をし、六時から御馳走を頂戴した、其御馳走の席には岡松理事、久保田理事などが見えたので、早速五體清文鑑の一件の談判を開いた、實は斯う云ふ譯で凡そ六百圓程金が要るが、京都から來るまで一時立換て貰いたいものだと言つて相談した所が、直ちに承諾して吳れた。そこで私は大に喜んで其の晩八時過ぎの汽車で奉天へ引返した。さうして一方には京都の大學へ電報で金は一時滿鐵で借り、寫眞の種板も大連から送つて吳れることになつたから、許して貰いたいと言つてやつて、

それから其本を奉天の四軒の寫眞屋に分けて寫眞に取つた。是は本が借りて來てあるのだから非常に早く出來て、五千三百枚程の寫眞が十日間ばかりて出來上つた。斯う云ふ譯て五體淸文鑑を寫取て早速荷造りをし持て歸つた次第てある。

◆實錄戰圖を寫し損ねた原因

それから大連へ行つて來た間に、一方滿文老檔の現像が終つたから、今度は實錄戰圖の寫眞を取らうと考へて、三四日休んでから行つて見ると、宮中の模樣がガラリ變つて、何だか愚圖々々言つて此方の言ふやうにならない、そこで私は總督に會はうとしたが、總督は會ふのを厭やがる樣子、それから交渉使に會はうとしたが、やはり會ふのを好まない。そこで總督の秘書、是は日本の留學生て、日本の女を奥さんにして居ると云ふやうな譯て、又非常に美男子てあつた、私は何も美男子だから會つたと云ふ譯てないが、其男に會つて話して總督に傳言を賴んだ所が、さう云ふ込入つたことなら間違があつては可ないから書いて行つて呉れと言ふ、そこで私は書いて渡して來たが、其日私が歸らぬ先きに其秘書が私の所へやつて來た、併し私が居なかつたから何も言はずに歸つたさうですが、それは別に聞かなくとも不成績であると云ふ事が分つた。其中に今度は交渉使の方から可けないと云ふ手紙が來た。勿論可けないと明に斷つてあるのではないが、いろいろ苦情があるから寫眞を取ることを暫く休んで呉れと云ふのである、併しそれは可けないと云ふ斷りてある、其使に來たのは早稻田の留學生てした。そこで可けないと云ふなら仕方がない。それは仕方が無いとして、今まで取つた滿文老檔の寫眞を一通り揃へて見ると、四千三百枚程の中て二百枚ばかりやり損ひがあるので、それだけやらせて呉れと言つたが、やはり愚圖々々言つて居る。そこで私は、一體寫させないと云ふのは誤つたことを外國に傳へられては困ると云ふからださうではないか、それを斯うやつて今まで寫眞を取らせながら、今になつて取らせないと云ふならば、仕方が無いから間違つた儘持て行くが宜いかと談判した所が、

二三日してから、それなら其取損ひの分だけは取らすが、他のものは一切取つてはならぬと云ふ、甚だ怪しからぬ譯であつたが。併し其場合喧嘩をして了ふと二百枚ばかりのやり損ひも取られぬと云ふことになるから、我慢をしてそれだけ取り直すと云ふことにした、所が何しろ大急ぎて一日の間にそれだけのものをやつて了つたのだから、後て現像して見ると、又二十七八枚程やり損ひがある、そこて又やり損ひがあるからと言つて賴むのも工合が惡い、何か良い方法はないかと、又考へたのてある。

所で斯う云ふ風の故障の起つた原因も、其時には略々分つて居つた、それは其事を扱ふ長官が新になつたと云ふことも一つの原因てあるが、つまり言へば私の方に手落があつたのてある。それは宮中の內務部の役人は大抵私は知つて居るし、さうして其主なる人には夫れ々贈物をしてあるので、皆喜んで好意を表して、別に見せて呉れと言はないものまでも、どし／＼出して見せて呉れたと云ふ風てあつたから、大變に都合が好かつたのてある。所て其後內務府へ行つて見ると、從來の官吏の外に見知らぬ人が三人奧の方て何か仕事をして居る、それに氣付かなかつた譯てはないが、何だか書き物などをして居るのだから、さう上官でもあるまい、先づ其方は宜からうと思つて抛つて置いた。所が後になつてそれは新に北京から來た大官だと云ふことが分つたけれども、苦情が起つてから何か持て行くと云ふ事も面白くないから、其儘にして置いた。それから其外に故障の起つた理由は、私が寫眞を取つて居ると云ふことが北京に傳はつて、新聞なども日本は奉天の宮中で寫眞を取つて居るさうだが、あれは滿洲をどうかする爲てはないかと云ふやうな記事を揭げたことなどもあり、又もつといけない直接の原因は、私の宿と隣り合つて居た盛京時報に、內務府の一番上役の惡口が出て居つた。それもちよつと一日位ならば兎も角、五日間も續けて廣告欄に、やれ彼は誰某の田地を橫領したとか何をしたとか彼をしたとか、非常な惡口を書いてあつたから、私は少しもそんな事には氣が付か

なかつたが、さういふことが其人の感情を害して、故障を言ひ出すやうになつたのである。所が二十何枚かのやり損ひがあるので、それをやり直す爲に今度は其一番惡るい故障を言つて居る男に打付かつて見ることにした、そこでちよいとした贈物を持て會に行つたのである。尤も其前にも一度會つて置いたが、支那人は少し位感情を惡るくして居つても、表面はさう惡るい顔はせぬ、早速會つたのである。それから私は國華社で出版した王羲之の卷物を贈つた、さうして實は此間二百枚程寫直させて貰つたが、まだ二十枚ばかり落ちて居つたから、それを寫させて呉れまいかと言つて頼んだ所が、其男は多少書畫に趣味のある方と見えて、私の贈つた物が餘程氣に入つた樣子であつた、そこで早速私の頼みを聽いて寫すことを許して呉れた。斯ふ云ふ樣な有樣で私のちよとした手落から實錄戰圖の方は寫して來ることが出來なかつたが、滿文老檔の方は完全に寫して參つた。それから五體淸文鑑の方は、是は借り出して置いたので、默つて知らぬ顔をして十日間ばかりの中に寫して返したので、是は向ふでは知らないのである。

で此滿文老檔にはどんなことが書いてあるかと云ふやうなことは、支那の官吏などもよく知らぬ、總督でも一向に知らぬ、何か滿洲文の書物を寫して居るさうだ位にしか思つて居らぬ、所が日本人が宮中へ入つて寫眞を取つて居るといふことが八ヶ間敷なつたので、どうも默つて居る譯に行かぬ、そこで急に態度が變つて來たのであらうと思ふ。

▲寫字生の同盟罷工と支那人氣質

それから一方寫眞をやつて居る間に寫字をやつた、それは文溯閣にある四庫全書、是は前にも借り出したから、今度も借り出しを申込んだ所が、是は直ぐに貸して呉れた、そこで之を寫取る爲に支那人を雇つた所が、同盟罷工をされたやうな事があつた。最初之を寫さうといふときに、どうか人はあるまいかと盛京時報の人に話すと、それは新聞に廣告したら直ぐに得られる、それは此方で募集して上げても宜いと云ふことで

あるから、一切を盛京時報の方に任せた、て廣告したところが、十人位しか要らないのに四五十人も申込んで來た。そこて試驗見たやうなことをして、其中良さうなのを十人程選んだ。それから寫字料は千字四十錢位の積りてあつた所が、募集して見ると餘り應募者が多いので、盛京時報の方て少し方針を變へて千字三十錢でやれと言つた、するとそれては少ないとか何とか言つて苦情を言ふ者もあつたが、何しろ四五十人も應募者があるものだから、さう強くも言張れないと見えて、結局千字三十錢てやると云ふことになつた。それからやらせて見ると、是てはどうも安い、役所の仕事ても七八十錢呉れるのに餘り酷いとか何とか言つて頻に苦情を言つて居る、所が夕刻になつてあまり苦情を言ふから、それなら御前達は寫字をしないのかといふと、しないと云ふ者もあり唯だ愚圖々々言つて居る者もある、其中に支那人流の煽動者が出て來て、皆して斷然やらぬから今日だけの金を拂つて呉れと言ふ、そこで此方も負けることは出來ないから、金を拂つてやる、彼等はそれでその儘歸つて了つた、さあ斯うなると明日からは一人も來る者が無いので、實は内心弱つて居つた。所が翌朝八時頃になると、一人の者がやつて來て寫字はしないのかと問ふ、寫字はするのだ、するのだが御前達の方て厭やだと言ふのだから仕樣が無い、昨日の約束でするなら、させてやらうと云ふと、其男はそれて宜いからやらせて呉れと言ふ、それから其男が一人てやつて居ると、外から二人ばかり覗いて居つた者が又やつて來て自分達にもやらせて呉れと言ふ、それなら昨日の約束通り千字三十錢て宜いか、宜しいからと云ふので、其日に五人程になつた、それから又其奴等が自分の友達を連れて來て、十三日ばかりの間に全部を寫終つたのてある。

此寫した中て禮部志稿といふのはどういふものかと云ふと、即位の禮や、皇室の禮や、或は官吏登用試驗、即ち科擧の事やいろ〳〵ある、其中の主客司と云ふのには外國に關係した先例と云ふやうなものがある、之には星槎勝覽、西洋朝貢典錄などにも載つて居らぬも

のまでも載つて居る明代の寫本であるが、四庫の中に入つたから版本は一もない、で是は四庫の本で寫すより仕方がないからやつた。其他二三種の本を寫したが、一ヶ月ばかりの間に本の數が百六七十卷冊數にして六十八冊ばかりを寫した。此寫字の方は富岡講師が監督から何から一切やつて呉れたのであるが、彼等に金を拂ふだけでもなか〳〵の大役で、其には五日に一遍或は十日に一遍拂つて呉れと云ふものもあるが、中には他の地方から來て居るものは毎日拂つて呉れと云ふ者もある。それに七八十錢から一圓五十錢位の額を勘定してやる。而も毎日價格の變動のある支那の金に換算して渡すのだから、非常な面倒で、五日或は十日目毎にまるで銀行が取付けに遇つた樣な騷ぎをやるのである。それで富岡君は彼方に居る間、晝は監督をし、夕方には今の銀行が取付けに遇つたやうな騷ぎで、少しも外へ出ることすらも出來ず、歸つて來てからリヨウマチスを起すやうなことになつたのである。

▲奉天程よい所はない

それから寫眞の方は歸つてから羽田君が毎日學校へ出て整理をして居る。それはつまり寫して來たのを今一遍水洗をして、其上で燒付をするのであるが、何しろ九千六百枚の多數だから、是までに三分の一も出來て居らぬ。それから乾燥させるのにも奉天でやつた時には半日で十分乾いたのであるが、京都では一日半位掛つても十分に乾かぬ、東京へ持て來たら多分三日も掛らなければ乾まいと思ふ。さう云ふ譯で奉天は斯う云ふ仕事をするに大變都合が好い、それのみならず奉天と云ふ處は萬事に善い所で、私は實に奉天程結構な所はないと思ふ。歸つて來たら大變縮りして來たなど、人から言はれるけれども、私の方では七十日ばかりの旅行は實に早く經つて了つて、少しも縮りしたとは思はぬ。段々歩いて見ると日本位面白く無い處はないので、奉天に居ると、支那の土地とは謂ふものゝ、兎に角日本の疊の上に寢、日本の飯を食ひ、不自由ながらも大連から氷詰にして魚類なども來るのであるから、さう云ふ處は日本に居ると少しも違はぬ。それから日

本よりも良いことは、自分が少し贅澤をして見たいと思へば、幌馬車でも箱馬車でも、一回出るに二圓位で自由に雇ふことが出來る、それから汽車に乘つて歩いても日本の汽車より結構で、どうかすると只で乘せて吳れたりするので尙結構である。それから朝鮮へ來ても京城などには馬車も自由に備へるのでまだ宜い。それから京城から此方の方へ來ると汽車は惡くなる、尤も此頃は滿鐵の汽車が釜山まで來るやうになつたので餘程宜い、それから聯絡船はまだ結構であるが、一たび下ノ關に上陸すると、汽車は惡るい、ボーイは不親切、何でも彼でも氣に入らない。日本人は內地では不愉快に暮して、さうして有りもしない金を殖民地へ持て行つて使つて居る、是等は善い事か惡るい事か知らぬが兎に角私は奉天は大變に好い處だと思ふて居る。

▲奉天の古書畫

私の話は略ぼ之で盡きたのであるが、尙序に奉天の宮中にある古書畫の事を一言して置かう。是は今度初めて氣が付いたのであるが奉天の宮中に古書畫が四百五十點程あつた、それは翔鳳閣の二階にあつたのである、て翔鳳閣は前にも見たが、二階は見せなかつた、私は此二階には何があるのかと聞くと、何も無いと言つて見せなかつた、後て聞くと翔鳳閣の二階には古書畫や金銀などが澤山にあつたのを、團匪の亂の時に大分散亂して、殊に金銀などは大分無くなつた、それが爲に係りの官吏は譴責されたと云ふやうなことがあつて、それて外國人には二階を見せないと云ふので私にも見せなかつたらしい。所が昨年其整理をしたと云ふことを聞いたから、今度見せて貰つて來たが、なかなか澤山あつた。滯在中に二日程見たが、一方の寫眞の方の仕事が忙しいので、古書畫などを樂みに見て居るやうな暇が無いのでよくは見られなかつたか、先づ其目錄を得たいと思つて、目錄があると云ふ話だから見せて吳れないかと言つた所が、宜しいと言つた儘どうしても貸して吳れない。それから其中にどうか言ふ事て目錄を調べたと云ふ男が私の所へ尋ねて來て、自分は其目錄を持て居るが、今他に貸してあるから、返し

て來たら見せると言つて居つたが、なか〳〵持て來ない、其中にどう云ふ積りであつたか極く大略の目錄を持て來た、本當の目錄には題跋なども詳しく書いてあるさうだが、單に名だけ書いた目錄を持て來て見せた、而もそれは全體が揃つて居るのではなく、終の方は缺けて居つて、四百五十點ばかりの中三百五六十しか書いてない。それを持て來て見せたから、ちよつと貸して置いて呉れと言つて夜なべ仕事に二時間ばかりの間に寫してしまつた、さうして拜見した難有ふと云つて返したが、支那人は手が遲いから、さうちよつとの間に寫したとは思つて居ないやうである。で其目錄を段々に見たけれども、實際見たのは四五十點に過ぎないので、今どうと云つて御話をすることが出來ぬが、其目錄の中には本物もあるが勿論僞物もある、閻立本とか、戴嵩とか云ふ名があるけれども、其目錄だけでは何が何やら一向分らぬ、目錄を見て是は立派なものだらうと思つて出して貰つて見ると、眞赤の僞物であつたり、こんなものはと思つたに案外立派なものがあつたりして、一向見當は付かぬ、で見た中に閻立本の職貢圖と云ふ一卷があつた、是は定めて僞物だらうと思つたが、大きいものだからどんなものかと思つて見た所が閻立本では無論無かつたが、宋の徽宗皇帝の瘦筋書と云ふやうな字で書いてあるから、無論閻立本ではないが、南宋のものであると云ふことは確だ。さういふ風で稀にはなか〳〵立派なものがあつた。

それから驚いたのは蘇東坡の書である、蘇東坡の書は幾通りもあるが、其中でも治平帖と云ふ手紙がある、寸法も度つては見なかつたが、凡そ一尺五寸ばかりのもので、立派な紙に書いてあつて、其書がまた頗る見事なもので、恰度王羲之のやうな書き方で非常に立派なものであつた。さうしてそれには趙子昂、文徵明の跋が添へてある、此二つも亦極めて立派なもので、確に眞蹟である。さうかと思ふと似ても似つかぬやうなものもある、米芾のものも見、蔡襄のものも見た、それは皆な僞物だ。勿論全部見たのではないが、本物もあり、僞物もあり、玉石混淆して居る。それから趙

子昂の孝經の圖と云ふのがあつた、是も誠に美事なもので、從來私が見た子昂のもので此位立派なものを見たことがない。それから郭熙の觀碑圖即ち曹操が黃絹幼婦外孫齏臼の碑を見て居る圖、是は大きな幅であるが、果して郭熙であるかどうか判斷は付きかねるが、やはり南宋以上の書であることは確だ。さう云ふものが中には見付かる。又文徵明位の書畫は隨分珍らしくない、其他仇英などゝいふやうなものもある、又清初の人ては王麓臺などゝ云ふものもある。さういふやうに私の見たのは僅か四五十點に過ぎぬが、なか〳〵良いものもあるので、出來るならば寫眞に取りたいと思つたが、それが出來なかつたのは誠に殘念であつた。

▲寫眞屋に對して大威張り

要するに、私が撮影して來た書物に對する研究の結果は今數年後にあらざれば出來ぬ事で、只今の話は私は寫眞屋をやつて來たと云ふに過ぎないのであるが、其寫眞の速力が、寫眞屋の未だ曾て經驗の無い程の早さでやつたので、是だけは寫眞屋に對して威張れるのである、それて向ふに居た寫眞屋も私が斯う云ふことをやつたのを見て、素人てありながら斯ういふ事を考へるには驚いた、今度又何か思ひ付きがあつたら教へて貰ひたいなどゝ言つて居つた。兎に角私の今度の旅行は少くも寫眞屋に對しては多少鼻を高くすることが出來るかも知れない。(完)

明治博物館と日本版圖內の諸人種

理學博士　坪井正五郎

此頃中央公論記者瀧田君が來られ、世間に明治神宮の事を言ふ者は多いが、先帝を記念し奉る爲めの他の計畫に關しては意見の發表されたも

のが甚少い樣で有る、神宮固より結構の事では有るが、御偉業を仰ぐと云ふ點から云ふと企圖して然るべき事が多々有らうと思ふ、博物館設立の如きも其一と考へるが、何か說が有るなら聞き度いとの事で有つた。

自分は兼ねて明治五十年の催しの中に明治博物館の基礎を立てると云ふ一條を加へ度と考へ既に或る席で其事を話した位で有つて、今や思ひも寄らぬ事で其望みは水泡に歸して仕舞ひはしたが、明治時代記念としては、依然之が適當の事で有ると信じて居るので有るから、其事を述べて答へと仕やうと思ふ。明治時代記念は取りも直さず先帝御偉業記念で有るのは今更申すまでも無い事で有る。

明治時代の我が國の進步は實に目覺ましいもので有るが、版圖が段々と擴がつて來て其所に棲息する樣々の人種が日本臣民と成つたと云ふ事の如きは特に注意すべき事で有る。今日では北の方カラフトのオロツコ、ギリヤツクから南の方臺灣の生蕃に至る迄種々の體質、種々の風俗の者が等しく同じ國の人で有るのに大多數の內地人は彼等の事を好く知らずに居る。アイヌの名は誰も聞いて居らうがオロツコ抔と成るとどうで有らうか。臺灣の蕃人の事と土人の事とをチヤンポンに覺えて居たり。甚しきに至つては學校の先生が臺灣生蕃は人を殺して其肉を食ふと子供に話して聞かせたと云ふ實例さへ有る。版圖が廣く成つた、同國人中の人種の數が增した、と云ふ事に付いては國民たる者が確とした知識を有つて居る樣に仕度もので有るのに實況が斯樣で有ると云ふのは嘆ずべき事で有るが一方から考へれば、無理も無いと云ふ點が無いでも無い。

誰も彼もが日本中を步き廻ると云ふ事は出來る事で無し、諸書を通讀して實見に代へると云ふ事も廣く望む譯に行き難い。諸地方の自然界の有樣を始めとして、天產、製造品、住民の體質及び風俗等を示すのを主とした博物館を作る他に、擴大されたる日本國全體の事を誰にも解かる樣にすると云ふ方法は無いので有る。斯樣な博物館は啻に內地の人が南北西の端々の事を知るに必要で有るのみならず、南方北方西方の人が相互に離れた地方の事を知るに於ても必要で有る。內地人に取つては國が廣がり民が殖えたと云ふ喜びが明治時代と云ふ事に結び着いて居るので有るが、新に日本國民と成つた者に取つても、舊來の日本人と一樣の國恩に浴し、舊來の日本人と共に斯かる國の民で有ると云ふ名譽を擔ふに至つたと云ふ喜びが矢張り明治時代と云ふ事に結び着いて居る筈で有る。前述の如き趣旨に從つての博物館は實に全國の人の爲めに明治記念として最も適當のものと思はれる。斯かる博物館は又外國人に對して日本を示すにも缺くべからざるものと考へられるので有る。

十月一日から上野で開會する筈の拓殖博覽會は丁度此趣旨の一部を實現する樣な催しで有るが、自分は之を常設のものとし、不足を補ひ陳列法を工夫したならば博物館の基礎に成る事と思ふ。建て物は一時假りでも宜しいが、兎に角集められる丈の物を集め、一ケ所に列べて置き、本館落成の際夫れ等を此所に移す事と仕度いのである。建築は出來たが置く物が揃はないと云ふのも、品物は集まつたが入れる場所が無いと云ふのも、共に好ましからぬ事で有るから、一方に於ては陳列品蒐集に着手

し、一方に於ては陳列館建築に取り掛かる樣に仕度いと思ふ。斯樣な設備は一ヶ所に有りさへすれば宜いと云ふのでは無い。小規模のものを方方に作るのも好いが、模範たるべきものは東京に置く事に仕度いので有る。資金の事は大問題だが、夫れは他の適任者の立案を待つ事とし、自分は内容に付いて一言仕て置かうと思ふ。

明治記念として集めて置くべきものは色々有らう、無論是を主要のものと仕なければ成らぬと迄主張するのでは無いが、新附の諸種族に關する事は宜いもの丶一には相違無いので有る。今は之に付いてのみ云ふ事とする。

年代の順では、第一、北海道アイロ(明治二年)、第二、琉球人(五年)、第三、カラフトアイヌ(石狩への移住者)及び千島土人(八年)、第四、小笠原島住民(九年)、第五、臺灣在住漢人及び臺灣蕃人(二十八年)、第六、カラフトアイヌ、オロッコ、ギリヤック(三十八年)、第七、朝鮮人(四十三年)と七段に成るので有るが、陳列上の便宜から云ふと、地理に從つてオロッコ、ギリヤック、カラフトアイヌ、千島土人、北海道本島アイヌ、朝鮮人、小笠原在住ヨーロッパ種族、臺灣漢族、臺灣蕃人の部を立てるのが然るべき事と思ふ。各部は壁で仕切るとも陳列棚で區劃するとも、何にしても行儀の好い四角形を作し、四方にもせよ、二方にもせよ、隣りの部への通路は境堺の中央に付けて有ると假定すると、先づ各の部の中央には實大の人形を置き度いので有る。此人形は容貌、膚色、姿勢共眞を現す樣に作るべき事固よりで有る。身體裝飾品衣服持ち物等は總べて實物を用ゐる。少くとも夫婦一對と子供一人は置く事に仕度い。人數が多ければ無論夫れ丈好いので有る。各部の一半には寫眞、模型、繪畫、日用品、地圖、表等を列ねて其種族の體質風俗を明かにし、一半には彼等の製作品、及び彼等の住する地の自然の物産と、其地に於ける人工的物産の見本とを列ねて需要、供給兩者の參考に資する樣に仕度い。

各部に付いて夫れ〳〵の考へも有るが大體を云へば先づ斯んな事で有る。完成の時期を限る事は難いが、どうか早く端緒なりと開く樣に仕度いと希望するので有る。

九州より高野山まで

長塚　節

左に掲ぐるは「土」の作者長塚節氏が夏目漱石氏に宛てたる私信なれども、九州より高野山に至るまでの名刹古蹟等の記述もあり、又氏の藝術に對する態度なども仄かに窺はる丶所ありて面白ければ、夏目氏の許諾を得て左に掲ぐること丶せり(一記者しるす)

先生へ手紙を差上げなければ成らない〳〵と思つて居ながら一寸機會を失した爲に全く申譯のないことに成つて仕舞ひました、私の出立したのは少し後れたといつても月が瀨の梅の稍がまだかなりに白かつた頃で山の櫟の林は枯葉がしつかりとしがみついて居ました、長く成る時は仕方のないものです、京都の大學病院に友人が二人も助手をして居る樣故

から折角の勸めに背く譯にも行かないで即時入院して手術を受けました、以前惡かつた處を大分に切斷してしまつたのです、釘拔のやうなもので挾んで無理に捥ぎ取るのですがそれが專門學校出か何かの介補とかいふ名義で見習して居る醫員なので實際下手なのでせう少しばかりのことに二時間半もかゝつて舌を自分で引つ張り通したのがなか〳〵の苦痛でした、到頭こんなことで卅日ばかり九州行が後れました、其の爲二度目の吉野の花見もしたのですが福岡へ行つたら此の仕方はつまらないことのやうでありました、私も失敗だと思つて居ます、第一根岸の養生院に長く居つたのも失敗であつたと思ひます、今に成つて見ると病氣を知つたら直ぐに久保さんの處へ尋ねて行けば非常によかつたのでしたが、何も知らずにに只がつかりして居たんですから仕方がありません、福岡では久保さんには非常に御世話に成りました、大學に助手をして居る知人の手から少しばかり御禮をしたら何にも要らないといはれた位だ相です、だが兎に角收めて頂いたのです、さうしたら一夕私を料理店へつれてつて博多節を聞かせてくれました、おくさんも一緒です、私は大に恐縮しました、病院へ通つて二ケ月も居ました、最初電氣で三回ばかり其切斷したあとの處を燒きました、疼痛は少しもなくて電氣を强くすると少しふうつと烟が出るのを知りました、器械の先が電氣のために眞赤に燒けます、其眞赤に成つた處でこするやうでした、其後は只藥をつけるだけですが二ケ月居る間に少し新な腫れなどが出來た樣でしたが大變なことはないといはれました、其後より江さんにも數回お訪れして逢ひましたが、何でも私が思つてる程は惡く無いんだといつて居られる、聞いて實際さうなんだらうかと思ひました、四月の末でしたから京を出る時にはは有りませんでしたが安藝から周防の山間を汽車が通過する時には山櫻が意外な邊にほつかりと咲いてるのを見ました、それ處ではなく福岡で診察を受けて直ぐ鹿兒島方面へ見物に行きましたが肥後から日向の一端をかすつて大隅へ越える處に矢嶽といふ隧道ばかりの處がありますが其處にも櫻がちらほらと見えました、其邊山には藤もあるし、燒いた處は草も靑く、櫟の若葉が軟かに彩つて居ました、さうしてもう大變鹿兒島は暑からうと思つて案じて居たら袷羽織にセルの單衣ではとても堪へられないので袷を一枚襲ねた位です、然し開聞嶽の附近へ行つたら麥が一帶に黃色に成つて菜種がすつかり枯れて居ました、處が福岡附近はぐるりと長崎まで廻つて歸つて來てもまだ少し菜の花がありました、私は禁を犯して開聞嶽へ登りました、開聞嶽へ行く船の甲板で私は天草の賣春婦の博多節を聞きました、單にかういふと只厭な人間に逢つたことに成りますが、それが其汽船の終點の山川といふ港へ近く成つた時には甲板には其女二人と私と丈に成つて畢つたのです、私はふつと氣がついたら手すりに靠れながら女が唄つてるのです、それも咽喉で緊め殺してるのが機關の音に交つて來るので如何にも快いのでした、私は遂何だと聞いたら女は博多節だといつたのです、女は最初客のあつた時は夏蜜柑を三つ四つ入れた袋を枕にしてみんなの中央に寢て居ました、唄ふやうに成つてから束ねた砂糖もろこしの幹を引きぬいて口で皮をむいて心

を喰んで白い波の上へ吐き出しました、さうして又唄をつゞけるのです私は只面白いと思つて見たり聞いたりして居ました、肥後の三角から天草の港々を經て長崎へ渡る船で浦鹽へ出稼の若い女の群を見ました、皆平氣な顏して一寸長崎へでも行つて來るやうな容子ですから私はちつとも氣がつきませんでした、それを船中で知つた天草の時計屋に長崎の商人宿へ連れ込まれて種々なことをきゝましたが、其人から出稼の人間であるといふことを知つたのです、其少女等は一本の丸太を橫へてぞろつと其丸太を枕にして甲板へ寢て居ました、何時の間にそんな風に成つて寢たか私も橫に成つて居たから知りませんでしたが、見た時には私は驚きました、私の今度の長い旅は身體を勞はるので餘り樂をして歩きましたから何にも獲物は有りません、若し何か書くと成れば開聞嶽への汽船の甲板と長崎へ渡る途上のことです、其他にはないといつていゝ位であります、筑前なども見るのはかなり見ました、私は佛像を見るのが大變好に成つたものですからぐる／＼歩いて筑前でも四十體近く國寶を見ました、梵鐘を四つも見ました、

愈博多を立つて其日耶馬溪へはひつたのはよかつたのですがうつかり彥山へ行つて次の日登山してそれから雨にふり込められたので中津へもどつたのは九日目で身體を大分惡くしました、其の爲別府で四五日休養して伊豫の高濱へ渡りました、松山の市中で先生のお出に成つたといふ家の前を通りました、だが以前先生のお住ひの頃とは違つて大變手を入れたといつて表のあたりは格子が新しく成つて居ます、伊豫でもかなり佛像などを見ました、寺のいゝのも有つて愉快でした、宮島では山の頂から展望を恣にしました、松山で勸められたので伊豫の大三島へも渡りましたが神社には武器の國寶に成つたのゝ多いのにはびつくりする外は有りません、甲冑では全國の國寶の八割が此の一社で占めて居るんだ相で天下一品が恐ろしく有る相です、義經の寄進といふ緋縅の鎧の拗切れて殘つて居る縅の少しも褪めずに眞赤であるには驚かされました、

讃岐では縣廳に私の親戚が居るので大に便宜を得ました、屋島へ登つて壇の浦へおりた時に其處が那須の與一の功名した場所だときいて成程と思ひました、一體あの靜かな優しい瀨戶內海は平家と非常によく調和を保つて居ると思ふのです、淸盛が宮島へあんな立派なものを殘したのも唯ではないと思はれます、私は音戶が瀨戶も淸盛が堀割つたと信じたいのです、讃岐には十二日も居ました、さうして十日に立つて岡山へ出て播州の書寫山へ登りました、卅二年に寶庫がすつかり燒けたからでもありませうが書寫には何も見るものがなく實にあはれなものです、唯下山の途中姬路の城を見たのは愉快でした、白鷺の城とはよくもいつたと思ひます、其日は加古川といふ處へ泊つて十一日の朝に鶴林寺といふのを訪ねました、聖德太子の時の建物が太子堂といつてそつくり殘つて居たりします、百濟の鐘が國寶に成つて居ます、和尙さんに勸められて高砂の尾上の鐘も見ました、此も國寶です、其日は大阪を通過して和歌山へ出て紀三井寺で鐘を見ました、一日の內に國寶の鐘を三つも見ることを得たのはほんとに勿體ない位だと私は思ひました、十二日に此の高野

へは登山しました、其日から昨日まで此處では盆だといつて昨日は牡丹餅の馳走に成りました、つぶし餡ですが粒の儘の小豆が大分くつゝいて居ます、寺のことだしそれに私の風采が惡いからでもありませうが食物などは恐ろしく粗惡なもので今朝などは汁も何もなくて漬物の刻んだのがたつた一皿です、それでも今日は若い坊さんが各寺院の目ぼしい處をつれ歩いて本尊樣などを見せてくれたので大に滿足します、平日は什物は寶庫へ入れてあるから見ることは出來ませんが、いつも出て居る本尊樣はそれでもぽつ／＼見られます、私の泊つて居る寺の書院の襖十枚は大雅の畫で日本一だと誇つて居ます、然し私には南畫の先生達に少々疑問を抱いて來ました、蕪村などでも誰々の筆意に倣ふなどゝいふのが見えますが私は筆意だの筆力だのといふことがどういふものかと思ふのです、あの優秀な佛像だの佛畫などに成ると刀法だとか筆意だとかいふものを先に立てゝ居るのではなくて精神の傾注されて居る處はもつと大切な處に在ると思ふのです、南畫の人達にけ華山の如きでさへ私には多少の輕浮な分子が含まれて居るやうに見えます、巫山戯て居るといふことは南畫の通弊のやうに思はれるのです、私は應擧といふものは先年京都で特別展覽會に出會つて存外つまらぬものと失望したのですが琴平神社の書院の山水を見て私は自分の誤りを悟りました、京都へもどつたら丹波の寺に在る波の圖を見たいと思ふのですが、どうも應擧には雄大な處があります、それにふざけた處が見出されません、こゝらの處は切に誰かの說をきゝたいと思ひます、うつかりこんなことを書いて甚だ差出たことでありますがどうかおゆるし下さい、私はインキなどを用ゐてこんな粗雜な手紙を書く積はなかつたのであります、其爲め今日まで後れたといつていゝ位なのであります、だが筆で書くと成ると何だか億劫に成つて遂一度も手紙を差上げることが出來なく成るかも知れないと思はれますし、それに今夜はふと書いて見る心持も出ましたし、明日は下山しますから日毎にかなり身體を疲れさすことゝ思ひます、さうなれば猶更もう申譯ない事にならなければならないしゝますから失禮なことは知つてこんな紙へ書きつけました、此から下山して奈良も京都も今少しよく見たいと思ひますから東京へもどるのは來月にはひつてからと思ひます、あとはお目にかゝつて申上げたいと思ひます、實は五月中私のために長い序文を書いて頂いた時御禮を申上げれば成らないのは承知して居ましたが私には何と申上げていゝか分らなくて獨で苦んで居ました、其内に機會が過ぎたやうな鹽梅に成つて畢つたのです、明日の朝眠くても困りますから此で御免を蒙ります、

かさね／＼粗末な手紙を差上げなければ成らなのを恥ぢ入ります、

八月十五日夜　　長塚節

夏目先生
侍史

明治の油畫及び油畫家（上）

黑頭巾

其一

●吾輩、つねに、明治文運の發達を攻究し、而して文明と藝術とを結び付けて觀察し、明治の油畫を評論せんことを思ふこと久し。明治天皇の御大葬を青山葬場殿に拜觀するの翌日、初めて稿を起すに當り、先帝の盛德を思念し、感慨殊に深し。

●明治は未曾有の盛運にして、油畫は、日本の、藝術史上に於て、明治の偉大なる產物の一に屬す。則ち油畫は、先帝を紀念し奉る所以の一藝術たらずんばあらず。

●先帝の御肖像は、輓近、種々のもの世に出づ。然れども、其の最も威儼ありて、如何にも、先帝の風格を想望するに足るものは、『御下賜の御寫眞』像ならずんばあらず。此の御風貌は、深く、七千萬人の頭中に刻みこまれ、先帝を思ふときは、則ち此の御肖像を想ふ。

●『御下賜の御寫眞』は、御寫眞に非ず、實は、油畫の御肖像を、御寫眞に爲したるもの也。これ、伊太利人キヨソネの筆に成り、深く聖鑒に協ひしものにて、形似の外、能く、御人格を象徵し得たるもの也。

●先帝の御肖像が、油畫を以て描かれたることは、油畫が明治天皇を紀念し奉る所以の、絕好の紀念にして、また非常の光榮なりとすべし。

●此の御肖像は、明治廿一年、キヨソネが、御寫眞に據りて描きたるものにして、御前にて、親しく畫筆を揮ひしにはあらず。而して、能く、其の形似の外、神似を得たるは、描寫の伎倆の外、恐くは畫家の淸潔なる人格の力に待つものあらん。

●キヨソネの事、吾が明治の油畫史に特筆すべき一恩人也。彼は、伊太利の油畫家。銅版下畫の畫工として紙幣寮に招聘せられ、退職の後、鎌倉に棲居し、娶らず、子無く、唯だ畫と彫刻とを以て生命となして日本に沒す。御肖像を描き奉りしは、在職中、明治廿一年の事也。

●キヨソネは、ミランの官立文藝學校に教授となり、

熱那美術大學の名譽會員に推薦せられ、明治八年日本政府の聘に應じて來り、紙幣印刷に於ける、圖案及び版面彫刻法を一新し、又々電胎及び整版等諸般の計畫を爲し、紙幣製造に一紀元を劃せり。紙幣寮は今の印刷局也。彼は、官及び同僚の信望を博し、廿四年任期滿了の後、政府より年金を下賜せり。

◉彼の鎌倉別莊は、由井ヶ濱の、約中央、少しく材木座に近き地點、砂山の上に在り。彼の生活は清白にして、兼ねて孤獨、其の沒せしとき、彼の本國にも、遺産を讓るべき人無く、擧げて其のコックに留與せり

◉彼の遺産とても、實に、書籍美術品の外、何等のものもある無し。是等のものは、すべてコックには、猫に小判なれば、コックは、間も無く、一切を、横濱商人に競賣したり。其の中には、珍本等もありしならんに、惜むべし、新道の一恩人の遺物は、街上の塵と同じく、名も知れぬ人の懷に飛び入りたり。

◉吾輩の聞くところを以てすれば、彼の遺物の中に、十八世紀の銅版を集めしスクラップ、ブック一部ありて、頗る珍とすべきものなりしが、今、其の所任を失す。

◉キヨソネは、體格魁梧、風貌高雅、其の遺像に對すれば、哲學者の面影あり。其の人、謙讓にして寡默。また以て尋常藝術家に非ざりしを知るべし。

◉彼が、清白、山僧に似たるの生活を爲せし如きは、日本の藝術家に、殆んど稀に見るところたり。此の人にして、『御肖像』を描き奉りしは、略ぼ、其人を得たるに庶幾かし。

◉彼は、命を蒙りて、御正服並に、御軍服の御肖像を描き奉りし外、三條、岩倉、木戶、大久保諸公及び、大將川上を描きたり。岩倉公實記の卷首に載する岩倉公の肖像は、則ち彼の筆なるべし。

◉是等の肖像は、彼は、皆、寫眞に據りて描き、一も、其の人に就き親寫せしものはあらず。而して如上のものは、油畫にはあらず、インキとペンとを以て、銅版の下繪のように描きたる也。

◉キヨソネは、麴町の平河町、今の子杉孫七郎の並びに住居せり。當時、彼に逸話あり。彼の邸の向ふ側に、田中賢三郎と川南某の宅あり。川南の老人、キヨソネが、伊太利より取寄せし香木といふを、一本、讓り受けて珍重せり、何の樹といふを知らず。唯だ、其の葉、香氣あり、且つ之を牛鍋に入るれば、臭氣を去るといふとキヨソネより聞きて知りしのみ。他日、之を人に

示して、月桂樹たるを知る。

●明治の油畫の發達は、外國人の力に待つもの少からず。フォンタネージ。キヨソネ。ワグマン。ゲリノー。サン、ジョバニイの如きは、其の巨擘を推す可き也。今、明治の年號の絡結せしに當り、明治天皇を追頌し奉り、先づキヨソネを擧げたる也。

其二

●史書の中、明治の油畫を記するものは多からず。博士藤岡の近世繪畫史及び博士横井の日本繪畫史は、其の大要を說くと雖も甚だ簡略に過ぐ。其の餘は、殆んどこれ無しといふも亦た可也。

●明治四十一年三月、有志者相集り、洋風美術家を追彰するの事あり。此の時、追弔紀念として、洋風美術家小傳の一小冊子あり。これを近世繪畫史に比すれば、人物を擧ぐること頗る精、同日の談に非ず。然れども、記事また甚だ粗略。未だ先輩の面目を髣髴せしむるに足らず。其の功績を錄する所以に至つても、未だ足らず。

●今日に於て、油畫は、未だ日本畫の全盛に及ばず。然れども、其の駸々として進んで已まざるの勢は、見る可きもの無くんばあらず。

●汪洋たる大江の行末を見る者は、樹下を潛ぐりし源流を想像して、趣味を感ずべし。洋畫の流は、甚だ遠からず、創業時の先輩、尙ほ存する者あり。吾輩、豈、自から能く畫を知ると言はんや。唯だ、今に於て、洋畫の源流を窮め、其の一點滴よりして、現時の千波萬波の壯觀を呈するに至るの逕路を明かにす可きの好時機なるを信ずるのみ。

其三

●文、展は、本月の中旬を以て、例に依り、上野の竹の臺に開設せらるべし。今年の文、展は、御大喪中の一異彩ならずんばあらず。諒闇の世は、すべてのもの皆、黑味を帶びて陰欝たり。此の時、藝術の精華を見るを得るは、喪中の花ともいふべし。

●此の夏の光風會の展覽會は、明治に於ける、最後の油畫展覽會にして、其の御買上は、又た、最後の御買上たり。而して此の時、特に新進畫家の作品を御買上品に採用せられしは、帝室の、油畫に對する態度の、一變して、ます〳〵深厚を加ふるものありしを徵するに足らずんばあらず。

●今上、叡明文武。まさに先帝の宏謨を繼承し玉ふべし。則ち、今後の油畫に對する奬勵の聖旨のほども亦

た淺からざるものある可し。敢て、天意を推測し奉るといふには非る也。

其　四

◉今秋の文、展は、五人の注意す可き油畫家を海外に有す。此の五人者は、悉く、出品す可きや否や。曰く、滿谷國四郎。和田三造。小島虎次郎。山本鼎。石井柏亭。いづれも將來の洋畫界に貢献することある可き也。

◉小島は、一個の異才、白馬會系に在りて、三造と併稱せらる。今、白耳義に在りて、未だ甚だ世人に知られず。山本は、油畫を學びしも、版畫に重鎮たる可し。

◉柏亭の才、得易からず。太平洋畫會に「方寸」の一派ありて、彼は其の首領たり。彼は才に富み、趣味に富み、洋畫界に在りて、尤も前途に富める一人たるべし。彼は、好んで日本畫をも描くと雖も、其の得意は油畫にあらず、水彩畫に在り。水彩畫は、彼の理想と趣味とを表現するに、尤も適合せる畫形ならずんばあらず。

◉輓近、勃然として大名を爲す者は、三造と、鳳と、松井須磨子と也。其の中、三造は、逸早く、歐洲に去つて、空しく歸來の日を、世人より期待せらる。

◉柏亭の歐洲に於ける畫は、趣味の磅礴することと洋行前に若かざるものあり。恐らくは、彼が煩悶しつゝあるの結果ならん。吾輩の知るところを以てすれば、滿谷も三造も、共に、煩悶して、稍、生氣を失ひつゝあるものに似たり。

◉滿谷は、黑田、中村、鹿子木等に比して、デッサンに於て弱味ありとせらる。彼は、今回の歐行中、竊かに、此の方面に、實力を蘊蓄するの意あり。而して一面に於ては、また、新進畫家に向つて、新味を競はんと期するは勿論なり。抑も、彼が、此の兩途に戰ふ所以の途は二にして、一に非ず。畢竟、彼は、二兎を追ひつゝあるに非ずや。

◉煩悶を排するは容易の事に非ず。藝術は、一面、煩悶に依つて進む。然れども煩悶に捕はるゝは藝術家の本意に非ず。要は、當面の煩悶を打破して進むに在り。

◉或はいふ、畫家、往々、禪を好む者あり、而して三造は好んで碧巖錄を讀むと。碧巖錄は、以て、彼の煩悶を排するに足らざるや。

◉蓋し、碧巖錄は亂麻の如し、讀んで解く能はざる者に對しては、愈、其の心緒を紛糾せしむるに足る。或は藥劑にも譬ふべし。藥、能く、病を醫するには非ず。病を醫するは、能く藥力を現はさしむるに足るの自力に在り。三造は、試みに、卷を掩ひて冥想一番、以て

心眼を開け。

其　五

◉明治の代に、東京の年中行事の變改せられしもの少しとせず。其の中、新に加へられし藝術的の一事は、則ち、秋の文、展也。

◉油畫の展覽會は、文、展以前に、美術協會あり。美術協會の事は、世人多く、之を知れども、油畫展覽會の嚆矢に至つては、殆んど世人に忘れらる。

◉吾輩は、文、展開設の時機に際して、油畫展覽會の嚆矢を語り、併せて先輩の苦心を傳へんことを思ふ。

◉維新前には、書畫會ありと雖も、未だ展覽會とす可きもの無し。吾輩、嘗て、宮島の繪馬堂を以て、常設の展覽會と爲す。然れども、其の作品たる、一も之を取換ふるに非ず、唯だ、蓄積の一途あるのみ。寧ろ、之を博物館といふ可きに近かし。

◉明治油畫の祖師を川上冬崖とす。然れども、彼には、未だ展覽會の計畫無し。彼は、油畫を創業したるも、歐米に往かず。彼土の畫界を見ず。油畫の展覽會を始めたるは、當時、新歸朝の國澤新九郎也。

◉明治の油畫家にして、最初に洋行し、彼土の藝術を直傳したるは國澤新九郎とす。彼は、明治七年歸朝して、麹町の隼町に彰技堂を開き、門人を養成し、旁ら、展覽會を開きて、油畫を鼓吹す。七八年の交、彼は、屢、之を開設したり。

◉國澤の展覽會は、銀座通りの竹川町に、人家を借りて開設し、二階家にて、到處の壁に、油畫を掛けて陳列し、採光も不十分なれば、陳列法とても、別に見る可きものは有らざりし也。

◉當時の油畫は、大作無く、之を、近來の文展の作品に比すれば、寧ろ小品ばかりなりしといふも亦妨げず。

◉展覽會は、作品の集まるを待ちて、開設し、目錄も無く、勿論、入場料を徵收するなどは思も及ばぬ事にして、唯だ、一人たりとも來觀者の多からんことを希ひしのみ。主唱者より寄々に來觀を勸誘したるのみにして、特別に案內狀を頒布したるに非ず。大臣參議等、貴紳大官の來觀したる者は殆んど無く、僅かに公伊藤一人ありしのみと傳ふ。

◉展覽會の地點は、今、明らかに記憶するもの無し。多分、舊岩谷天狗の近邊なりし乎といふ。

◉展覽會の作品は、國澤及び其の門人の作品に限るに非ず、苟くも油畫を描きし者は、何人も出品したり。而して出品者の中に、橋本雅邦、川端玉章、荒木寬畝

等の油畫ありし一事は、頗る奇聞に屬し、また以て、今の人を驚倒するに足らずんばあらず。

◉國澤に次いで、展覽會の開設に盡力せし者は高橋由一とす。高橋は、天繪社の創立者、また明治油畫に於ける、鬱然たる一大先輩也。

◉天繪社は、濱町一丁目に在り。高橋は天繪社に展覽會を開き、或は、附近の人家を借り、或は屢、藥研堀の藥師の境内に開設したり。

◉油畫の創業時に於ける展覽會は、實に松篁時節に於ける慈雨たらずんばあらず。高橋は、人に語りて、展覽會一會毎に門人增加すといへり。

其六

◉明治の畫界に於ける、油畫も、日本畫も、ともに盛衰の二大運命に遭遇せり。維新當初、西洋文物、盛んに輸入せられ、舊物の破壞せらるゝとき、日本畫は壓迫せられ、日本畫家は悉く油畫を學びたり。雅邦も玉章も、寛畝も。唯だ、赤貧に處して本壘を堅守せしは芳崖ありしのみ。

◉フエノロサは、日本畫復興の曙光也。彼、日本畫の復興を唱へ、芳崖の天才を賛嘆し、政府また其の議に聽き美術學校を創設するに及びて、日本畫ははね反すやうの勢を以て復起し、油畫を壓倒し去りたり。

◉蓋し、保守主義の興隆は、泰西文物の激甚なる輸入に對する反動の大勢也。フエノロサの議は、此の潮流に乘じたるのみ。而して此の以前の日本畫家は、油畫の前に屈して、すべて顏色を失へり。

◉油畫の逆境時代には、現時の大家も、皆、貧乏の中に雌伏し、黑田淸輝、久米桂一郎、岩村透等、富貴者の子弟の外、油畫を以て生計を爲すは極めて困難事と思はれたり。和田英作の如きは、何松とかいふ雅號を以て、久保田米僊の門人となり、或は、終に日本畫家となり畢はるべくやとも疑はれし程なり。當時の油畫家は、悉く晩婚ならざるは無かりき。

◉玉章は、日本畫に資せんが爲に、油畫を學びたりと言ふ。然れども、世は、雪舟が僅かに七圓、應擧のは三圓位の時節なるを、彼の書名未だ揚らず、日本畫を賣りて家を爲すに由無し。彼は、眞に、油畫家たる可く、油畫を學び、其の事、他日、幸に、彼の畫論の地を爲したるのみ。

◉明治の初年、日本畫は壓迫せらると雖も、文人畫ばかりは流行の盛を極めたり。維新の豪傑、多くは當年の漢學生にして、漢詩を弄び、閑時、乃ち詩酒徵逐を

事とし、酒席、雅讌、席書を以て感興を煽り、隨つて文人書の全盛を來たし、上の好むところ、一時の風を爲す。此の如くにして、日本書家は、油畫と文人畫とに夾撃せられて、全く立つ瀨を失ひたる也。

◉玉章は、高橋由一、五姓田芳柳等に謀り、ワーグマンに就て油畫を學ぶ。ワーグマンは、英國の新聞通信員にして、横濱に在住す。元と素人畫家たるを免かれずと雖も、當時、日本に在つて、油畫の描法を知り、且つ之を實地に示せし者は、唯だ一の彼ありしのみ。川上冬崖と雖も、彼に就て描法を學びたり。彼も亦明治油畫の一恩人也。

◉實を言へば、冬崖と雖も、未だワーグマンの外、一の外國畫家を知らず。玉章も雅邦も寛畝も、冬崖と五十歩百歩の差あるに過ぎざるに似たり。然れども三人者と冬崖との作品の、月鼈の相違ありしは、油畫に於ける藝術的良心の厚薄の太甚しき逕庭あるに依らずんばあらず。

◉畢竟、玉章等は、糊口の爲に油畫を學びたるのみ。彼は、日本繪の版下を描くと雖も、一枚の報酬僅に二三錢。夜々の食料、只だ鍋燒饂飩一杯に過ぎず、二杯を得ることは容易に非ず。彼は、乃ち「覗眼鏡」を買ひ、自畫の油畫を其の中に仕組み、鼻垂小僧、子守娘等を客として、一錢の見料を集む。

◉玉章の油畫説は、流石に取る可きものあり。彼はいふ、日本の風土氣候、輕く明らかにして、歐洲の沈欝たるに似ず。沈欝なる油畫は、恐らくは日本に適せじ。日本人の油畫を爲す者、沈欝を去り、輕明なる油畫を描きて、其の中に、日本趣味を寓するに若かずと。

◉雅邦が、他年、美術院に據りて、和洋折衷風の畫法を皷吹したるもの、また當年、油畫の修業に基くもの多からずとせず。

◉聞く、寛畝は當時、淺草、藏前邊に卜居し、下の店先には小間物乎、何かの商品を並べ、二階を畫室として、油畫の筆を揮ひつゝありき。彼が、不忍池を描き前面に、楊柳の大なるを添へしものあり。今、何處にか保存されて在るならん。

◉雅邦、寛畝、玉章の如きは、堂々たる大家。フエノロサ以前に於ても、其の手腕、固より頭角を拔く。此の如き巨匠ありて、これを窮地に措き、併せて日本畫の衰運を眼前に看過す。外國人、侃々諤々の論を爲すありて、始めて驚き醒む、外國人の説に非ざれば、重きを爲さゞるは、日本政府の不見識なり。然れども、

彼の時、尙ほ能く醒めたるは、また以て多とするに足る。

其七

◉上野の臺を中心とし、南は不忍池畔、及び根岸より北は田端、日暮里より駒込の動阪、神明町に及ぶ。南方に日本畫家多く、北方に油畫家多し。此の一帶は、東京に於ける畫家の國たらずんばあらず。而して上野は川上冬崖の時、既に油畫に因緣を結ぶ。彼の聽香讀書館は、日本に於ける最初の油畫塾にして、下谷の仲徒士町にありし也。

◉聽香讀書館の地點は、吾輩、今、之を明かにせず。當時、仲徒士町の一町目の東側の三十六番地に在り。屋敷の總坪數五百坪。町に沿ひて、長屋門を設け、母屋は二階建にして、玄關を入りて左右を塾生の部屋とし、此に、小山正太郎、松井昇、松岡壽等寄宿せり。二階を、冬崖の畫室に宛て、日當好き處にて、疊の上にて、坐して油畫を描きつゝあり。家の裏には、蓮池などもあり。

◉當時は、下谷邊は、茶畑、茫々として連なり、地價も甚だ低く、讀書館の五百坪の中の、三百坪は、冬崖が僅かに五十金を以て求め得たる位なりしが、今は、繁華の地となり、冬崖の家も移轉したれば、如何になりゆきけん、恐らくは滄桑の感あらん。

◉冬崖は、信州、松本在の人、其の家は氏神の祠官なるべし。十六歲の時、志を起して、脫奔して江戸に來る。

◉彼は、八百八街に知人ある無し。唯だ、上野東叡山の別坊に、鄉人の僧となれる者あり。彼は、雲を攫むように探索し、其人に逢ひ得て志を告ぐ。僧、歸鄉を勸むれども、彼、頑として聽かず。即ち、彼を以て、寺侍と爲し、僧に隨つて出入せしむ。

◉此の寺に、僧と昵懇の訪客に大西椿年あり。圓山派の畫家也。僧、乃ち冬崖に勸め、就いて畫を學ばしむ。彼、當時、椿年及び其の師南岳の畫を模寫せし粉本頗る多し。冬崖が他日、明治油畫の祖師となれる素地は、全く此の時に成る。則ち此の坊や、冬崖の發祥地といふも亦妨げず。

◉冬崖發祥の坊は、今、何處に在りや。東叡山に坊多きうちに、下寺町といふは、常盤花壇より下の方、淺草行き電車通りに沿ひ、今の溝が、稍、幅廣くして、塀を運らし、塀の中に、椎の木など見え、塀ばかりにて門無く、山內より往來するを得可し。今の停車場構內

は則ち、此の下寺町にして、花壇の下道は、東叡山中に籠められし也。知るべし、冬崖、發祥の坊は、今の上野驛なることを。

◉吾輩つねに論ず。明治は空前の盛運。其の史蹟は、宜しく、今の於て、十分、之を保存し、以て湮滅を豫防す可き也。輓近、史蹟保存會の如きも、德川時代に精しくして、未だ明治時代に及ぼさず。豈、一大遺憾事にあらずとせんや。

◉冬崖の聽香讀畫館は、明治油畫に於ける最大紀念地たり。油畫家も、史家も、共に、力を併せて、其の史蹟を表章せずんばある可らず。

其　八

◉吾輩は、明治の油畫及び油畫家を說くは先づ、冬崖を傳ふ可きを思ふ。若し、油畫創業の大家の銅像にても、上野に建つることありとせん乎。第一に冬崖、次に、國澤新九郎、高橋由一なる可く、外國人に於ては、フォンタネージ、キヨソネ、ローグマン等なるべし。

◉日本の油畫は、必ずしも冬崖に始まるに非ず。司馬江漢、亞歐堂二人者、外に秋田の小田野直賢の如きは、斯道の遠祖也。然れども此三人者の油畫は、明治の油畫と何等の聯絡を有せず。明治の油畫は、川上冬崖を以て唯一の源泉とは爲す也。

◉江漢、亞歐堂の油畫は、其の正流を汲む者は、市井の浮世繪師にばかり限られ、浮繪となり、維新前、則ち再變して泥畫となる。かくして斯界の上流に齒せられず。

◉北齋、北溪、廣重及び國芳、貞秀の徒、西洋畫法を用ひ、日本畫に新機軸を開くと雖も、油畫といふものは、終に、發達せず。流れて、「大道藝」となり畢る。此の間の消息、今、此に詳論するを要せず。

◉陰に、油畫の描法を採り、筆意に、新味を寓して、以て日本畫を改新する者は、概ね成功す。華山、容齋の如きは則ち是。

◉冬崖の畫脉は、寸毫も、江漢、亞歐堂に因緣ある無し。彼は、獨造にして、師受あること無く、時局の必要に應じ、蘭書を讀みて、油畫家となれり。明治油畫の祖師は、書道に於ては、獨立崛起の人たる也。

其　九

◉冬崖は、名は寬、字は子栗、號は冬崖、圓山派の畫を學びし頃は、岸太年といひ、油畫を始むるに及び、其の書室を無邊春色書屋といひ、其の家塾を聽香讀畫館といふ。

◉彼は、元來、時局に志あり。東叡山の坊中にて、書を學びし頃にも、時勢の變移を見、蘭學に非ざれば、將來、爲すあるに足らざるを思ひ、發憤して、晝夜、蘭學に沒頭し、後ち、蘭學を爲すは、幕府旗下の士たるを便なりとし、「旗下の株」を購ひ、川上氏を冒し、川上萬之亟と稱す。幕府、蕃書取調所を開設するに及び、其の出仕と爲り、後ち、開成所内に、畫學局を設けて、西洋畫科を敎ふるとき、彼は、其の頭取と爲り、西洋畫開拓の事に當る。

◉當時、開成所の人、一人の油畫を知る者無し。冬崖とても、毫も之を解するには非ず。唯彼は、かねて圓山畫の造詣ありといふの故を以て、任命を受けたるのみ。彼は、局に當りて、始めて西洋畫に志せり。彼が、當年、江戸に來りしは、畫家たらんが爲には非ざりしなり。

◉冬崖は油畫の描法は、これを蘭書に照見するの外、嘗て、來朝の一米人に質問したるも、未だ、外國人揮毫の實地を見ず。後ち、横濱在留のローグマンの書室を訪ひ、百聞不如一見の嘆を發す。

◉江戸開城の後、彼は、前將軍に隨ひ、靜岡に移り、後ち、沼津兵學校に敎師となり、東京に歸りて、文部省助敎となり、幾干も無く、又た去つて陸軍省に出仕し、兵學寮と參謀局とに兼勤す。兵學寮に於けるは蘭學を以て、參謀局に於けるは地圖の製作を以て也。

◉彼は、油畫の外、石版術に於ても、明治に於ける鼻祖たるの名譽を有す。明治五年、兵學寮に於て石版印刷を創業するに當り、唯だ、之を蘭書に徵して實驗し、意に適せざる所あり。偶、紙幣寮御雇の伊太利人に計り、稍、其の要領を得たり。すべて當時、創業の事、實驗者無く、一に、原書と、自箇工夫とを以て之を貫徹せんと欲す。男兒創業の事は、由來、意氣を以て爲す可き也。

◉彼が、參謀局に在るの間、始めて地圖の法を創定し、洋式の地圖を作る。これ參謀本部陸地測量部の起源也。

◉冬崖の事業、啻に、油畫のみならず、繪畫に干係ある諸般の事物に涉り、創始の名譽を兼有すること此の如し。彼の、油畫に於ける造詣の如何を問ふこと莫かれ。彼は、明治必傳の一大人物たる也。流石に、彼は、油畫の祖師たるに耻ぢざるの人格也。

◉彼は、外柔に、内剛なるの人なりし乎。少年、鄉關を去るの事、甚だ勇あり。然れども其の人に接すれば、溫然として玉の如く、極めて謙讓の美質を具す、或は、

内氣に過ぐるかとも思はるゝほどに、萬事控目に言語し、左まで勇敢の人とは見えず。弟子を愛撫し、事々、親切にして、人事に處して包容性に富めり。

◉彼は、體格魁偉、風采堂々たり。事々、極めて責任の觀念厚く、而して世俗の才は甚だ薄し。他年、彼が事に依り、責を引いて自殺するに至れるもの、世の、尋常人ならしめば、或は、死するにも及ばざりしならん。

◉吾輩は、大將乃木薨去の發表せらるゝの日、今、冬崖の自刄の事を記するに當り、武士道に於ける切腹は、極めて崇高なる意義を有することを、痛切に、感ぜずんばあらざる也。

◉明治七年、兵學寮廢せられ、士官學校の新設せらるゝに當り、冬崖は、御雇佛人ゲリノーと協議し、圖學、畫學の二科に關する諸事を制定し、十年に、始て内國勸業博覽會を開かるゝに當りては、美術部に關する施設は、多く、彼の計畫に出づ。

◉彼は、少佐木村信郷の後を承けて、陸地測量部の課長となるに及び、陸軍の地圖を支那人に賣りし者の疑獄起り、事、彼の職責に波及し、奇冤雪ぐに由無く、彼は恨を呑んて熱海の相撲屋に自刄す。時に、明治十四年五月十四日、享年僅に五十有四。

◉冬崖は、一面に、趣味の人たり、交友亦た隨つて朝野に遍ねく、殊に、西周、神田孝平、内田正雄、長三洲、福島柳圃、鷲津毅堂、奥原晴湖、安田老山等と親善し、屢、文雅の游を爲し、詩酒の莚、彼は文人畫を作り、其の畫、氣韻清秀、遂に、海内文人畫の泰斗を以て推さるゝに至る。彼の聽香讀書館に於けるは、油畫の外、文人畫の門人塾生も亦た多かりし也。

◉當時、新文明の初潮時に乘じ、油畫の勢、上流を傾け、大臣參議の家、應接室に、少くとも横濱舶來の雜畫を扁額とせざる無く、油畫の聖權、一に政府に在りて、冬崖これが木鐸たり、而して一面、文人畫に於ても亦た覇を稱せしかば、一時、畫壇の山斗は、冬崖に歸せし也。彼も亦た偉なる哉。

◉冬崖の文人畫は、江湖に存するもの少からず、殊に文人、畫家と合作のものを算すれば頗る多數に上るべし。吾輩も亦た其の一片を藏す。則ち片鱗と雖も、亦た以て、彼の氣格を窺ふに足らずんばあらず。

其十一

◉油畫の正法は國澤に始まる。彼に至つて、畫架に對し、倚子に腰掛けて筆を揮ひたり。唯だ、繪具に至り

ては、彼が歐洲より齎らし歸りしもの、固より限りあり。其の餘は、「間に合はせ」の日本繪具に待たざるを得ざりき。

◉國澤の時と雖も、特別の畫室の設備あること無く、旗下屋敷の明かるき坐敷を擇びたるに過ぎず。冬崖の創業時代は、油畫を描くといふのみにて、萬端の設備、畫架を用ゆるの外、日本畫に於けると、一切の相違あること無し。

◉冬崖の時は、工人、未だ能く畫架を了解するもの無し、冬崖も、門生の小山等も、自から工夫して畫架を作るに至れり。

◉彼等が尤も困難を感じたるは、油畫具ならずんばあらず。抑も、明治初年の頃、東京にて、油畫の材料販賣店は、唯だ、僅に二軒あるのみ、兩國、回向院前の嶋屋と、本町の鰯屋との二書肆にして、就中、嶋屋は、當代隨一のハイカラ書肆たり。鰯屋は稍劣る。

◉嶋屋にては、繪具の外、カンバスも販賣し、カンバスは五寸にても一尺にても、自由に、細かく、客の注文に應じて切賣したる也。かくの如く、カンバスは貴き事、金の如くなり。而して繪具も亦た、一本の小さきもの一兩に値し、書生輩の迚も、辨じ得るところに非ず。

◉繪具の貴くして高價なるは、冬崖等を促がして、代用繪具に想到せしめ、或は油畫具の和製を企てしめ、遂に、此の際に於て、始めて、江漢、亞歐堂等の油畫具加何に想倒せしめたり。

◉一塊の舶載荷物あり。舊幕の時、開成所の畫學局に到着し、未だ荷物を解かざるに、早く、維新の政變に逢ひ、此の荷物も亦た隨つて、沼津に移り、更に、開封せずして、再び東京に歸來し、終に、之を開けば油畫具也。

◉此の油畫具や、歐洲を發して、既に、五六年を經過し、硬化して殆んど石となる。小山、初めて油畫を學ぶの時、冬崖、其の一部分を携へて、彼に授けて曰ふ。此の繪具や、舶載の寸品、須らく愛惜す可しと。

◉小山、謹んで、此の繪具を用ゐんとするに、如何にするも流動せず。則ちアマニン油を以て融き、カンレイ紗を以て漉して用ゆと雖も、尙ほ砂を漉すが如く、往々、石礫殘留し、筆者を困倒せしむ。

◉油畫の材料を得るの困難、這般の如きものあるを以て、當時の油畫學生は、容易に油書を描くを得ず。如何なる大家と雖も、作品は甚だ少し。

◉冬崖の油畫の伎術に於けるは、猶ほ解說すべきもの無くんばあらず。彼は、油畫の基礎技術に重を置き、而して其の理論は純ら蘭書に據り、外人より實地の修練を受けざるを以て、往々にして畑の水練たるを免がれざるものあり。彼は、人體の描寫に解剖の智識を必要なりと唱へしも、其の材料は無く、寫景に、建築學の素養は必要なりとし、當時、用器畫の器械無きを以て、門人をして、日本大工の用具を用ゐて、切々として、家屋の圖を描かしめたる等の奇談あり。

◉國澤の歐洲より歸朝は、油畫の創業時代に一生面を開かしむ。恰も、後の黑田清輝の歸朝の時と髣髴たるものあり。然れども國澤の時は、材料缺乏し、唯だ、歐洲に於ける實地の進歩を口傳して、以て、吾が油畫家を啓發したる也。

◉聽香讀書館は、眞に、創業の時代。尙ほ、其の伎術の、一般に、甚だ幼稚なりしを證するに足るの一事實は、小山正太郎が僅かに十五歲の少年を以て、塾頭を勸めたるを以ても推知するに足るべし。然りと雖も、當時、十五歲の油畫家は、今の同年の少年に比す可からざるは勿論也。

其十二

◉冬崖の油畫の作品は、今に於て、存するもの甚だ稀也、生時に於て、既に稀也、況して歿後の事、察するに足るべし。

◉彼の鉛筆畫は往々にして存す。小山も亦た其の一枚を珍藏す。彼の、氣品と筆力とを見るべきものあり。

◉彼の油畫は、吾輩の知るところを以てすれば、二の紀念す可きものあり。ともに、彼が十年、三條、大久保諸公の東北巡遊に陪して歸り、途中所見の材料を以て、描きしもの。其の一は松嶋の風景にして、三條公は間も無く、他に贈與せられしと聞く。

其十三

◉冬崖の遺物散逸して、其の家にも、一物の存するものの無きは痛惜に餘あり。蓋し、名家の後、往々にして、這般の恨事を傳ふ。殊に、彼の遺物散逸に至つては、一幅の小說物語なり。

◉冬崖、既に死す。彼に子無し。彼の甥某夫婦を納れて家を嗣がしむ。而して彼の寡婦は、全然、無趣味の人にして、亡夫の遺物を尊重すべき所以を解せず。

◉冬崖の學僕に竹内といへる男あり、主に事へて勤勉に、また伶俐也。冬崖の遺族、彼を慰勞するに二百金を以てせんと議す。竹内固辭して曰く、大恩あり、寸

効無し。安んぞ贈遺を受くるに忍びんや。先師の粉本遺書等は、惟ふに、貴家に用無し。僕、之を拜受するを得ば、まさに之を愛護して、先師尚ほ生くるの思を爲すべしと。寡婦等、相議し、竹内の說を容る。竹内乃ち大八車を拉し來り、冬崖の遺書粉本一切を、搭載し、湯島天神下の寓居に向つて運び去る。

◉事聞す。門人等喫驚す。小山、竹内を訪ふ。彼、泰然として曰く、先師の遺族、一も書を解せず、僕、此を請ひ得たるは、敢て之を私せん爲に非ず。これを一纒めにして保存し、以て諸君と、これを活用せんことを期するのみと。小山等門人相謀りて、早晩、これを竹内の手中より取戻さんことを期しつゝあり。

◉人事は多く意表に出づ。竹内は、間も無く、品川沖に釣し、舟より落ちて溺死す。小山等其の事を聞きて、遺族を訪へば、遺族は、また、既に、竹内の遺物一切を道具屋に賣飛ばし、鄕里に向つて歸り去る。竹内もまた信州の人。

◉冬崖の遺物は、此の如くにして、沙場の灰となり畢る。或は、人間に散在す可きも、今、其の處を辨じ難し。吾が明治油畫の祖師の傳記をして、貧弱ならしむるものは、沙場の灰の拾ひ集む可らざればなり。

◉小山は、道具屋を廻りて、轉々、追跡して、僅かに其の二三品を得る。彼の珍藏しつゝある冬崖の粉本、岩角叫猿、仙姝彈琴群猿靜聽、青綠山水、女郎等の圖は則ち是。而して油畫及び其の粉本は一も無し。後年狩野友信、淺草の古書肆に得たる油畫二枚は、舶來品にして、冬崖の遺愛品なりと聞く。

◉近年、信州の田舍にて、華山の筆などゝ傳へしものを齎らして、小山の鑑定を請ひし者あり。豈計らんや、是も亦た冬崖の粉本也。これを以て見れば、竹内の遺族は、恐らくは、冬崖の遺物の幾部を齎らして都門を去りしならん。

◉吾輩は、他日、油畫家、相計りて、先輩の作品を陳列し、明治油畫史の展覽會を開き、併せて、廣く、先輩を顯彰するあらん事を期待す。是れ、恐らくは、現代油畫家の美しき義務ならん。而して冬崖の遺物を蒐集するは、其の第一著手ならずんばあらず。

其十四

◉國澤は、明治十年、僅に三十歲を以て早折す。沒するに臨み、門人本多錦吉郎を枕頭に招き、彰技堂の後事を托す。本多は、今、既に、白髮銀鬚、溫然たる老翁、孜々として彰技堂を護る。其の人格の淸高なるは、

明治の藝術界に稀觀の人たらずんばあらず。

◉本多の弟子に、吉田嘉三郎、丸山晩霞、小川芋錢等あり。嘉三郎は吉田博の養父。芋錢は、油畫を學びて、遂に、油畫を以て著聞せず。晩霞は、再び歐洲に遊び、今、新に歸朝す。彼は、油畫に於ては、閱歷、不折の下に出でず、一時聲名揚がり、近時、漸く沈滯す。新歸朝の土産は、人心を一新するものありや、如何。

◉芋錢は、嘗て、油畫の展覽會に出品せず。此度の文、展にも出品せざるべし。彼は、今や、全く油畫を描かざる也。然れども吾輩は、文、展にも、彼の作畫を出品させ度きものと思ふ。彼の半折畫は、恐らくは、文、展の一精彩たらずんばあらず。兎も角、彰技堂の門人中、傳へて趣味あるものは芋錢也。

其十五

◉芋錢の名、何んぞ奇雅なる。世間、往々、名奇にして、人凡なる者あり。然れども、芋錢の名を聞けば、吾輩は未だ彼を見たること無けれども、俳味、仙味、油然として、吾が眼中に浮ぶ。

◉聞く、彼は、丈低く、毛多く、鬚髯に目鼻を植ゑしやうの男也。風采に頓着せず、木綿の着物に、古るきトンビを被ぶり、奇才を抱いて、蓬々として行く。

◉彼は、明治年間、油畫家の最も奇古なる者也。彼は、全く、彰技堂を離れて、人格の清潔なるの一點の外、作畫と行動と、些の師友に似たるものを見ず。

◉彼の、油畫家に於けるは孤雁の群を離れて、遠天に孤飛するが如きものあり。其の畫品の神韻獨往する、眞に他人をして、藩籬を窺ふを得しめざるものありて存す。彼の畫品を以てすれば、彼は明治に於ける必傳の一大家也。

◉彼はスケッチを、田舍より東都に送りて、國民新聞及び、讀賣の日曜附錄を飾りつゝあり。東都幾百の畫才あるも、未だ彼の如く、超絕せる畫を作るを得ず。

◉彼は半折に宜しく、全紙にも宜し。それ以上の大作は、吾輩未だ之を聞かず。彼の生計を爲すは、半折以上の畫に在り。彼は無慾なるも、其の人格は能く幾多の崇拜者を吸收するに足るといふ。

◉去年、東西の三越に於ける、芋錢と未醒との半折畫展覽會を見る。芋錢は、ひとり絕類出群の態度あり、氣格自から未醒を壓す。未醒は、覇氣橫溢す。芋錢に比すれば人爲の臭、尙ほ紛々たり。芋錢は則ち稍、天品の域に入る。然れども、未醒の名と才とを以てして、つねに芋錢に兄事するは。吾輩、其の向上の勇を多と

せずんばあらず。

◉未醒は、斷じて席書を描かず。彼は、席書を以て、坐興を添ふるは、幇間者流の事と思へるなり。菱田春草も亦た、斷じて席書を描かざりき。席書を描かずといふは、書家の一見識なり。然りと雖も、時には、これを描くも亦た妨げざるの態度を見ることあり。

◉未醒と芋錢と、大阪に往く。懇親會の席上に、大阪の書家、北野恒富、赤松麟作も亦た來る。宴酣にして、形の如く、紙筆を運び來りて、席書を求む。未醒は、巖々乎として之を斥け、稍、峻烈の態度あり。坐客、轉じて皆、芋錢に集まる。

◉芋錢は寡默、謙讓の人、天成の畫人也。席書と雖も、必ずしも避けず。いはゞ、吾は畫人なるが故に、求めらるれば、描くは其の天職なりと信ずるものに似たり。其の態度の眞摯なる、未醒を感發せしむと聞く。

◉芋錢は牛久沼の畔に住む。彼は、舊土屋氏の藩士、其の町は昔の士族町にして、彼の家は、昔の家也。窓より牛久沼を眺むべし。吾輩謂ふ、今、牛久沼の名物は、ジユンサイと芋錢となり。

◉芋錢の畫は、古の武藏野の如く、到處、野趣あり。筆端、奇氣あり、逸氣あり。火食の人の手に成るとは思はれぬほどのものも、時に、無きには非ず。

◉芋錢は、往々、好んで河童を語る。彼は、河童の雜話を多く知る。河童に就いて新說あるには非ず。而して彼が、牛久沼附近を描けるものは、水を畫かずと雖も水あり。就中、河童を畫けるを尤も奇なりとす。牛久沼には河童の居るべく思はるゝところ、彼の畫を見れば、河童の、眞に居るを疑ふ可らざるものあり。牛久沼の沼氣の凝結して畫となれるものは、則ち芋錢にあらず乎。

◉不滅の志を抱いて、東京に生活するの人物、自箇の處世觀の發展の傾向如何に依り、往々、其の生活上に、反撥せる二種の主義を立つるに至る。其の一は、俗を趁ひ、俗化して、奮鬪的生活を營まんとするもの。其の二は、煩累を斷ち、市塵を掃ひ、都門を去つて郊外に隱棲し、農に歸し、孤獨的生活を爲して以て志を養はんとするもの。而して芋錢の如きは、第二者に屬するの人物也。

◉芋錢は、先年、東都に在りて、紅塵十丈の中、新聞に從事し、一旦、脫然として牛久沼に歸り、祖先傳來の武士の家に隱れて農を事とす。今日の彼は、畫の外、世事の其の心を動かすもの無かるべし。

◉芋錢の畫に於けるは、志、ますく高し。輓近、其の畫品の、年々に高きを以て、其の人を想望するに足る。彼は、牛久沼に隱棲して、不滅の畫人たるの抱負あり。

◉芋錢は俳句を好み、子規の流を汲む。子規、今、在らば、まさに掌を撫して彼の畫を賞するならん。

◉芋錢は書畫双絶也。其の書は、渾厚の筆致、古法帖を學び得て來る。不折、碧梧桐の、作爲の痕、尙ほ著るしきが如くならず、彼の書は、必ずしも油畫といはず。今の畫壇に逸品とすべきものなるべし。

其十六

◉去年の文、展、小杉未醒の「水鄕」人氣を集め得て、聲價、頓に昂がり、此の冬を以て、佛國游學の途に上るべし。今年の文、展は、彼の出品は、豫め、多大の興味を以て期待せられつゝあり。

◉未醒は、太平洋畫會の、將來の花形也。吾輩は彼の畫と人とを論ずるに先だち、其の師承を論ずべし。彼の筆致と才華と、彼、刻苦して自から開發するものありと雖も、其の早く興趣を涵養する所以は、師恩に待つもの無くんばあらず。

◉彼は、吉田、中川、滿谷等と同じく、不同舍の出身にして、小山の門人也。然れども彼の筆力は小山の感化を受けしこと多からず。細かに之を言へば、彼より避けたるに非ず、小山より力めざりし也。

◉不同舍の出身者、太平洋畫會の中堅たる人物、凡そ之を四期に分つを得べし。第一は、不折、爲山の時代、第二は、滿谷、石川。第三は、吉田、中川。第四は則ち高村眞夫及び未醒等の時代とす。而して小山の尤も努力し、不同舍の全盛と稱す可きは、第二の時代に留まり、未醒、眞夫の頃は、小山既に、稍、育英に倦み、彼が門人に及ばせし影響の見るべきもの殆んど稀也。

◉未醒は日光の人、山を出てゝ都門に入るの時、既に書才と畫筆とを携へ來れり。彼は、郷里に在りて、早く、油畫を五百城文哉に學び、師父の恩淺からず。彼は十六歲より、同村の文哉の家に寄宿し、文哉夫妻に子無かりしかば、文哉は、彼を子の如く養ひ、且つ教へ、滿腹の精神、筆力、趣味を、悉く彼に授けたり。未醒が、其の書室に、文哉の古めかしき生物畫を、神々しく揭げつゝあるは、舊恩を感銘するなるべし。

其十七

◉五百城文哉の事傳ふべし。彼は高橋由一の門人。後ち、淺井、小山の諸先輩にも學びたり。其の天分は必

らずしも大ならざるも、才筆を以て、頭角を天繪社出身中に拔き、畫壇に期待せられし所以のものも淺からず。

◉文哉は、熊吉、號は文哉、後ち、號を以て通稱とす。水戸の人、其の父は書生黨にして、天狗黨の爲に暗殺せらる。少時より苦辛を嘗めしも、流石に、水戸學の影響を受け、漢學の造詣もあり。而して實は、漢學趣味は、他年、文哉の活動を牽制し、其の萠芽を折きたるものといふ可き也。

◉文哉は、殊に詩を好み、尤も杜子美を崇拜す。時に、森槐南と應酬せし事あり。名利を厭ひ、隱逸を高しとするの風あり、日光山に寫生し、其の幽深なるを愛し、遂に都門を去り、廬を日光山中の字荻垣面に結び、霧降瀑に近し。其の草廬を腐草菴、或は蛟栞窟と稱す。

◉畫家の俗化するは厭ふべし。されど高尚を求めて、隱君子となるも、亦た必ずしも中庸の事に非ず。畫家に要するところは藝術良心の堅剛なるの一事に在り。俗化は、屢、藝術良心を損し易きが故に厭ふ可し。人心惟危、道心惟微の語は、移して以て畫家の俗化を戒む可きに非ずや。若しそれ、藝術良心にして健在ならば、塵に交るも、山に入るも、惟だ其の興趣の發する所に任かせて不可無からんのみ。

◉文哉は、隱君子を事とすれども、其の妻は、ソクラテスの妻の如し。彼は、既に山に入れるも、妻に促かされて、尙ほ、往々、營々として畫筆を揮ふの已むを得ざることあり。彼の作品は、十九年東京府工藝共進會に於ける田舍道、廿三年の勸業博覽會に於ける大作數幅の外、傳はるもの少し。割合に多く畫きしは、日光山中の風景なるべし。

◉日光風景の油畫を、初めて來遊の外國人に賣るは、文哉なり。彼は、後年、城數馬等と共に、高山植物に熱中し、遍ねく日光山中を探究せり。彼は、或意味に於ては、日光の一恩人也。三十九年六月、心疾を得て、草廬に狂死するとき、恰も「山奥に入り、岩角を模索して、高山植物を採集するの手付き」を爲しつゝ逝けりと聞く。

其十八

◉光風會の一游星を高木誠一とす。背水と號す。雅號は彼の人物を象徵す。彼は、近ごろ再び英國より歸朝し、伎術の進步、見るべきものありと雖も、未だ多く世人に知られず。彼は、其の閱歷、系統ともに、中澤、岡田、和田、三宅の諸人と同位の人たる可くして、而

して甚だ世評に上らざるは、其の人、餘りに奇にして、世才無ければなるべし。

◉背水は純然たる風景畫家也。其の畫風は、今に於ては稍舊るし。然れども彼の妙處も亦た此に在り。筆力の堅實なるは、彼の長處ならずんばあらず。クリスタルホールに出品せし風景畫は、彼の傑作の一ならん。

◉高木は、渾身すべて畫也。畫の外、一物あること無し。數字と世事とを解せず、辯才無く、財才無く、奇言奇行は則ち山の如し。彼は一錢と雖も、之を得れば、直ちに畫事に投ず。少年にして美術學校に通學せしとき、靴代を以て繪具を購ひ、靴無く、制服に跣足を以て登校す。彼の、世上に奇人といはるゝは、彼が「畫の人」にして、「世の人」に非ざればなり。

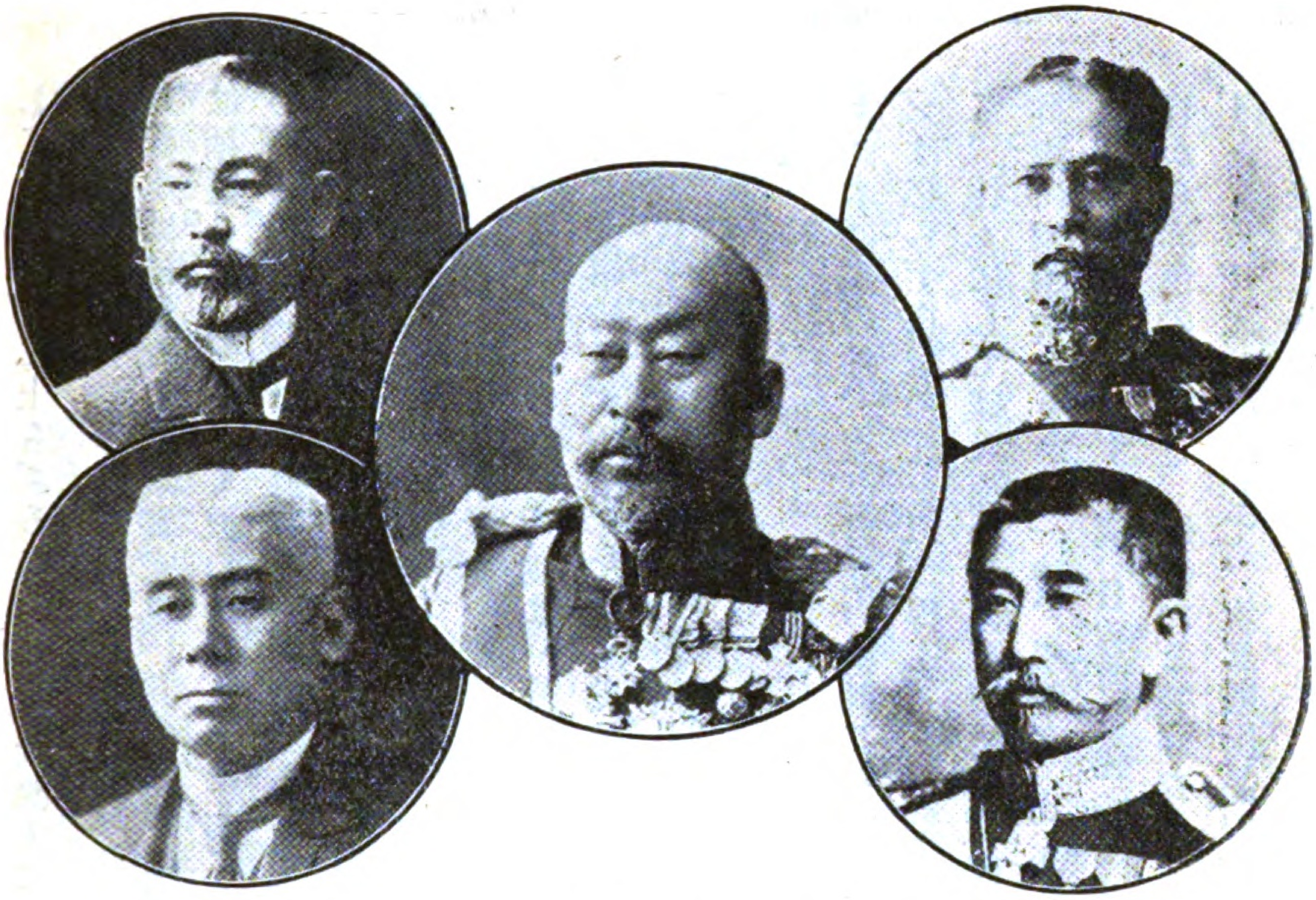
◉高木は畫の外、克己自立の精神甚だ强盛、自家のパンは必らず自家の汗を以て得んことを期す。これを以て、往々にして破天荒の奇事を演出す。彼の、先年、英國に留學せしとき、一時、學資盡く。彼、他の保護を仰ぐを屑しとせず、偶、日英博覽會の開設中に際し、自から赤色の肩章と、燦爛たる裝飾衣を著けて、ボーイとなる。此の如くして、水晶殿出品の畫家は、知人を喫驚せしめたり。

◉高木は風貌魁偉、堂々たる美丈夫なり。若し彼が端然してフロックコートを著けたらんとき、帝國ホテルの廊下にても逢著せんには、大臣次官の威儀ありといふも亦た過ぎたらず。彼は、恐らくは、光風會中の第一の偉丈夫ならん。此の人にして、極めて樂天的の氣風に富み、飄々として雲の如く行藏するあらんとは、殆んど一面識の人の想像し得ざるところなるべし。唯だ彼や、眞率、摯悍の氣、一見、人を打つ。其の耿々一片、九州男兒の眞骨頭を發揮するもの、則ち、吾輩の、彼に、敬意を拂ふ所以也。

◉吾輩、嘗て、高木を推稱して、佐賀武士道を代表せる藝術家と爲せり。且つ奇談あり。彼の昔の家は、今、佐賀市役所の所在也。

大原の竹樓の三階に於て此の稿を草す。雨後、草野の小蟲、燈火を慕ひ、四方より襲來す。障子を撲ちて、急雨の戸を叩く急聲を爲す。夜深けて、澎湃たる波響、枕頭に來る。

黑頭巾記



今后の政局と
寺内、山本、後藤、大浦、原

人物評論（三十二）

△寺内内閣と原、後藤、大浦の地位

田川大吉郎

◎本來ならば、山本、寺内と書くべき順序である、寺内、山本と書くべきで無い、それが、寺内、山本と書かれて、誰も怪まない時節になつた、寺内伯の得意を想ふと共に、名花零落雨中舞、志士凄凉閑處老、山本伯の、閑地に埋もるゝこと既に久し過ぎてることを思はねばならぬ、伯に言はすれば、蓋、韜晦して待つ所ありと謂ふのであらうが、僕は、伯の高くとまつて、棚から落ち來る牡丹餅を待つて居るかの間に、時代は明治より大正に移り、形勢は更に、轉移して、伯の胸算、漸く夢に歸せんとしつゝあるかと思ふのである。

◎一體、伯にせよ、政友會員にせよ、若くば國民黨員にせよ、餘りに山縣公を怖れ過ぎて居はしないか、或は、山縣公に壓へつけられ過ぎて居はしないか、兎角我黨攺の不振を説く者は、山縣公の頑冥を説く癖がある、即ち、山縣公が頑冥だから、政黨内閣が出來ない、文治内閣が出來ない、自由公明の政治が出來ないといふ癖がある、

僕等から曰へば、山縣公も普通の人だもの、そんなに怖がらなくても可からう、おびへなくても可からう、若し、諸君の立つことが、例へば、山本伯の立つことが、國家のために利益なりと見るならば、山本伯たる者、自ら進んで山縣公をやつゝけてはどうだ、政友會員たる者、進んで山縣公をへこましてはどうだ、國民黨員とても同じ事、若し國家のために自家の政見を有理なりとし、而して山本伯を此器局に立たしむることを、眞に、國家の幸慶と信ずるならば、自ら進んで、公々然、公の門を叩き破つたらいゝでは無いか、而して伯も之を爲さず、政友會員も之を爲さず、國民黨員も亦之を爲さず、只曰ふ、山縣公が頑冥だから、手も足も出ないと、即ち、山縣公を畏るゝ虎よりも甚し、意氣地なしの極では無いか、其意氣地なしに天下が取れるか、取れる、取れないは必ずしも論じない、意氣地なしの徒に、以て天下を托するに足るか、政友會員と國民黨員との事はこゝに且らく略し、僕は、山本伯の所謂韜晦待つあるの態度を、爲すあるべき政治家の當然の態度として、之を認識することを得ない、僕は、山本伯の時代は、惜いかな、既に去つた、たとへ、來るとしても、十月の戻り花、香艷、色澤の人を動かすものは有るまいとのやうに思ふて居るものである。

○寺内伯に、内閣を統御するの力量ありや、否やは、僕にはよく分らない、けれども、山縣公全盛の時代であるから、伯の内閣を組織する時代は、やがて來るだらう、僕は、其時代は、そんな遠くの後ではあるまいと思ふて居る、勿論、これは僕よりも世間が、既にそう思ふて居るのである、現に伯の門前には、人馬織るが如く、未來宰相の權勢威望は、今日、早や、其門前に輝いて居るとの噂である、僕は、一代の流れを趁ふて、塵を揚ぐるに過ぎないのである、

◎寺内、山本二君は、謂ふ迄も無く武將としての代表者、他の原、大浦、後藤は、齊しく文臣である、而して二人が、揃ひも揃つて、總理の候補者たるに對し、三人が揃ひも揃ひて、其脇役たるに過ぎないのは、口惜しい次第である、敢て三君のためにのみ惜まない、實に我が文明政治の爲に惜む、我國は、まだ〱戰爭の餘波が收まらないのであるか、軍人でなければ、國鈞が執れないのであるか、文臣では、威望が足りないのであるか、口辯のやうだが、此事を惜み、恨まざるを得ない。

◎諸氏の離合は、益々以て測りにくいが、原氏は、寺内伯にもよく、山本伯にもよき人、現に、現内閣は、半薩の内閣と稱へられて居る、而して其半薩と曰はるゝ薩の代表者は、大山公で無く、松方侯で無く、況して閣臣たる牧野、長谷場諸氏で無く、確に山本伯唯一人である、其連鎖を爲す者は、矢張、原氏と見ればなるまい、寺内内閣起るの日も、僕は、原氏が政友會を率いて、其帷幄に馳せ參ずべきを想ふ者である、山本伯によく、寺内伯によし、然らば、罷り間違つて、桂内閣が出來たらどうか、其際は、流石の原氏も、失脚するかといふに、そうで無い、原氏の狡猾なる、桂公に對しても、尙十二分の情誼を存して居る、そこが、原氏の原氏たる所だ、其やり手たる所だ、同時にその喰へない所だ、僕は、器品の高下大小は合いて、今の際、朝野第一の手腕家は、原氏であることと

を、淡泊に承認し、而して其手腕を較々偉なりとする、

◎寺内々閣起るの際、後藤男は、得意か、不得意かに就ては、二様の觀察がある、一は、大いに得意なるべし、男は、其内閣の參謀長たるべき因緣があり、力量があると爲すものと、二、そうでは無い、辛ふじて内閣の員に列するのみ、伴食たるを免がれずと爲すものと、此二說の中僕は、前說を信じ兼ぬる方である、若し、原氏が無ければ、かゝる地位は、後藤男のものかも知れぬ、後藤男は、かゝる位地を占むるに、相應の手配りをして來て、而して相應の才幹が既に現して居ると認めればならぬ、然しながら、かゝる場合に、原氏の器量は、必らずしも後藤男の下では無い、寧ろシッカリした、頼母しい、男らしい所もある、其上に政友會といへる多大の勢力を率ひて居るのだから、此點は、原氏に一段の利のあるだけ、後藤男に數段の不利だ、左りながら、後藤男もさるもの、其縱橫湧くが如きの才智は、此場合に於ても、ムザ〱、人後に落ちるやうな事はしまい、たとへ、一旦は落ちるとしても、そこに、何かの新手奇手を案じ出すであらう、僕は、後藤男が、此場合、更に隱忍して、徐ろに其器を磨かんことを希ふものである、後藤男は、あらがねの如し、磨きさへすれば光りを放つ、今日に於ては、怕らく、其磨き方が未だ足りない、而して原氏の才は、今日、其練達の妙境に達して居る、

◎大浦子は、政治的にいへば、寺内伯に似た人だ、同類相集るといへば、子は、どうしても、寺内々閣の一人で、而して其有力者であらねばならぬ、然しながら師團長であらう、軍司令官であらう、而して參謀長ではあるまい、其人間の手堅い所、子は伯と同型の人である、其性質の親切な所、子と伯とは同型の人である、其思想の頑固な所、子と伯とは同型の人である、只それ信ずる所が固い、從つて戰ふに人一倍の勇氣がある、政黨を作れといへば作る、議會を解散せろとなら解散もする、向ふ見ずにものを言へとなら、隨分言ひもする、人が、笑はうが、けなさうが、頓着しない、そこに愚な所もあるが、確な所もある、頼母しい所もある男らしい所もある、立派な所もある、又綺麗な所もある、此等の點に於て、大浦子は、寺内伯と同型の人である。

◎寺内伯が、内閣を組織すれば、略ぼ以上の如くにして、原、後藤、大浦、三人とも内閣の中の人と爲る、山本伯が、内閣を組織すれば、三人とも、打揃ふて其内閣員と爲らうとは信ぜられない、そこに、誰が落つるかは、今、約言の限りで無いが、三人とも揃はないことだけは、先づ以て確である、それだけ、それが、寺内伯有望の因を爲す、山本伯の網は、どういふ譯か、どこと無く狹い、山本伯の器量が、寺内伯より小さいとは、決して謂はない、寧ろ、其局量見識は、海軍の人が、陸軍の人よりも廣きが如く、山本伯のが、寺内伯のよりも廣い所があると謂ひたい然しながら、其從來の系統、閱歷、因緣は、寺内伯の方に廣く出來て居る、山本伯の方は狹く限られて居る、山本伯たるもの、其雄心未だ灰せないのなら、更に大いに努むる所が無くてはならぬ、

◎山本伯が、内閣を組織するなら、陸軍に於る寺内伯の關係は、左程氣

にすまい、寺內伯が、內閣を組織するなら、海軍に於る山本伯の關係を氣にするに相違ない、故に、前者の場合に於ては、寺內伯の陸軍に於ける勢力は、幾分か輕くなる、後者の場合に於ては、山本伯の海軍に於る勢力は、依然として持續する、此點に於ては、山本伯は、寺內伯よりも强い所がある、寺內伯は、山本伯よりも弱い所がある、强る者は恃む、弱い者はあせる、此點に於て、寺內伯は、內閣の組織者たる望みが深く山本伯は、依然として、どうでもいゝといふ態度を執る、そんなものゝ所に、內閣のお鉢は廻らない、且、惰氣滿々の世の中である、卽ち、勢力の拮合の世の中である、山本伯を首相とすれば、寺內伯の勢力は落つるが、寺內伯を首相とすれば、山本伯の勢力は落ちないとすれば、其世話人達は、寺內伯を擧げて、其勢力を持續させようとするに極つて居る、それが時代の思想である、今日の通弊である、僕は此樣な見地から、お次は寺內伯の番だと信じて居る、

◎寺內伯の時代は、憲政厄難の日の如く思ふ者もあるが、僕は、それ程迄に伯を買はない、今日に當り、立憲の大潮を喰ひ止め得るものは、世界に無い、寺內伯は無論其人で無い、それから、一二度の解散は、それは、どうでもいゝ、問題次第では、僕でも解散はやり兼ねぬ、只、無事平穩に、年期奉公をさせるのみが、憲政の進步でも、常道でも無い、而して寺內伯之をやるとすれば、其やりよう如何は別とし、それを、又憲政の進步の資に利用するのは、僕等の任である、僕等にはいつでも其覺期がある、多分、國民にも倘其覺期があるであらう、

△今後の政局如何

寺內、山本、後藤、大浦、原、

石川半山

當代政界の低氣壓の發起點たりし桂公が、突然宮中へ舞ひ上がッて仕舞ふたので、今後の政局如何と云ふ問題が、國民の前に現はれたワケかそれに付て寺內、山本、後藤、大浦、原の諸星の合縱連橫如何を豫測せよと云はれても、それはなか〲困難て有る、特に我輩は五年間支那に漂浪して居て漸く此程歸ッて來たのだから、支那の事なら少しは話も出來るが、日本の近來の事情は、頗る迂濶で殆んど分らない、然かしながら以上の五人は、敢て新人物と云ふワケでもなく、矢張り古るい顏觸れで、其の性行經歷に付ては、多少知て居る所も有り、昔の學者の言ッた樣に「骨に生じたる蟲は、肉の外に出でない者」とすれば、最近五年間に以上の五人物が、飛び離れて變化をして居ない限りは、我輩と雖も敢て之に對して話をすることの出來ない事も有るまい

山本伯爵は河童なり

第一に山本伯から我輩の所見を述べて見るなら、先づ政治上に大野心なしと謂て宜しい、彼れは本來河童(かつぱ)で有る、故に河童の分限を能く心得て、水の權力を確かに掌握するの外、他念を有して居ない、河童が陸に

上がッては働らきが思ふ樣に出來ないことを自覺し、一生河童で押し通す積りの樣に思はれる、彼れの恐るゝ所は、水上に於ける彼れの權力が衰へて、所謂河童の河流れにならんことのみだ、故に常に注意して自分の權力を確實に維持することに務めて居る所は、流石に悧巧な者で、今日に於ける彼れの希望は、其の女婿たる財部次官を、一日も速やかに大臣にして、自分が組み立てた帝國海軍の方針を少しも變更せず、着々として河童の領城を進めて往くことに在る樣だ、實を申すと此の山本伯に高島鞆之助子の抱負を加味させて、其の多年貯へて居る財力を放散して、大政黨を作らしめ、彼れを大宰相に推し立てゝ、帝國の運命を其の双肩に荷はしめて、果してドレだけの仕事をするか、やらせて見たら、少くも長閥に一泡吹かせるだけでも面白いと思ふが、ドウも此の本尊にソレだけの野心がない樣だ、薩派の若かい元氣な連中の間には、コウ云ふ計畫をした者も有り、國民黨あたりにもコウ云ふ見當を附けて、多少は小當りに當ッて見た者も有る樣だが、お爺さん、なか／＼悧巧で其の手を喰はず、先づ當分見込みは附くまいと思ふ、若しも彼れが松方侯爵の如きお人良しで、目先きの見えない人だと、誰れか辯舌の達者な奴をさし向けて、口車に乘せて引張り出して見ても良いかも知れないが、彼れの性格は人の煽動に乘る樣な男でないから、先づ此の人の落ち着く先きは元帥府で、一生大河童水力大明神と見奉るの外は有るまい、此の本性を解せずして、ウカ／＼近附くと、政界の策士共がアベコベに尻を拔かれて、海軍擴張の提燈持ちにでもされるが落ちだ、

大浦、後藤、原、

大浦、後藤、原の三君は、當代野心家の三傑で有る、三人共に先づエラい人物だ、敵には隨分惡るくも言はれる、又惡るく言はれるだけの缺點は具へて居るが、何しろ三人共に力量の有る連中だ、所謂働らき者だ腕達者と云ふのだ、大浦、後藤兩君は山縣、桂兩公に屬し、原君は井上西園寺兩侯に屬し、それ／＼に親分の睾丸を握て居て、そうして又それ／＼に子分も有り、子分からは崇拜もされて居る、又崇拜する奴等には相當に利益を與へて、親分たるの義務をも盡して居るから、各々一方の大將に立てられて居る、此の三人は三人共に仲が良くないが、それは三人共にエライからで、互いに智惠を戰はし、機略を戰はし、勢力を爭ふて居る所は、頗る面白い、此の三人の中で誰れが一番早く驅け拔けて、横綱となり、誰れが一番早く衰へて落伍するかは問題で、之れは當人の運不運にも依り、親分との關係の變化にも依り、又各自の子分の努力如何にも依る事だから、決して一概には言はれない、先づ後藤黨、大浦黨原黨を以て自任する有象無象共は、今後油斷なく精々勉强して、それぞれ各自の親分を横綱迄推し上げる工夫をするが良からう

愚直なる寺内伯

若し夫れ寺内伯に至ては、以上の三君に比すると一頭地を拔いて居る啻に其の頭角が異彩を放て居るばかりではない、實際現今の聲望地位が

三人を後援して居るが、之れは何故で有るかと云へば、三君は藩閥への歸化人なるに、寺内伯は其の直系なるが故で有る、即ち目白の大御所の孫に當るからで有る、我輩は十年ばかり前に桂公を二代將軍、兒玉大將を三代將軍として許したことが有つたが、兒玉大將が將軍職を襲がずして死んだ爲めに、寺内伯が家督相續人となッたのだ、彼れは智惠に於ては、勿論原、後藤、大浦三君の小指にも及ばないが、唯正直な人だ、それから總べての事務を組織的に執ることの出來る人だ、佛國留學生で獨乙の研究者だから、歐洲大陸の組織的、規律的な所を能く呑み込んでナポレオン政治やマクマホン政治やビスマルク政治の飜譯は、チヤント出來る人だ、此點に於ては山縣公以上、伊藤公以上、桂公以上で有る、英米の政治と歐洲大陸の政治と違ふことは、誰れにも分かッて居るで有らうが、寺内伯は此の歐洲式政治のやり方を知て居る、それだけに政治に餘裕はないが規律の立つことは珍らしい者だ、或る人は彼れを許して「一見すれば愚直の樣だが、アレでなか／＼喰へない所が有る」と言ッたが、我輩は一見しても三見しても百見しても、彼れはドコ迄も愚直の人だと思ふ、機略もなければ餘裕もないが、然かしながら決して惡人ではない、喰へないと云ふ人物ではない、群雄を駕御すると云ふ大器量はないかも知れぬが、自分の信任する人と共に手を携へて、國家の爲めに一身の利害を忘れて、御奉公をすると云ふだけの眞面目な心を有する人だ、愚直だから世間の毀譽褒貶に頓着せず、時として政治家に有るまじき、馬鹿な見當違ひの事をやるかも知れぬが、其の眞面目な所を取るとして、先づ宰相としての人格は具へて居る人と思ふ、至誠を以て君國の爲めに盡すと云ふ一點から言ふと、當代では寺内伯か平田東助子などで有らうが、兩君共に時として馬鹿な見當違ひなことをやるので、コウ云ふ人に智惠の有る政治家が附隨して、其缺點を補ふ樣にしたら、先づ當分の所は内閣總理としてお茶を濁して往くことが出來るかも知れない、されば西園寺内閣の次ぎは、多分世間の評判の如く、寺内内閣を見るで有らうが、之に對して彼の原、大浦、後藤の三傑が、ドウ云ふ風に連絡を取るかが、一寸注意を要する所だ、ヒヨツトすると此の三傑が、一時に同じ内閣へ混入して、内閣會議に於て、一騎打ちの白兵戰をやる樣な珍現象が起らぬとも限らない、

政治の大局

そこで政治の大局如何と云へば、先づ當分は依然として藩閥跋扈時代で政友會も崩解せず、新政黨も大勢力の者は起らず、小智惠の廻はる小政治家が、彼れ是れと小策を弄して、一時を糊塗して往くばかり、國家の大計は立たず、國民的大發展は覺束なく、内政混亂、財政窮乏、國民塗炭、外交不振、政界の情弊は益々甚しくなつて、國力は疲弊するばかり、やがて國民の大覺醒を促がすべき大刺撃が來る迄は、先づコンな情態で進むことゝ思ふ、

新人物が出でないと云ふて、世間は嘆息するが、天保弘化の古臭さい元老が、政治の權力を壟斷して居る、不愉快極まる空氣の中には、新人

物の出づべき餘地はないから、將來各方面が腐敗の極、内からか外からか何れかの方面から、大刺擊の大鐵槌が來る迄は、先づ當分は早稻田の元氣な老伯爵が、其の晩餐の好下物として藩閥攻擊をやつて居るのを、未だ世間の混濁に感染せざる無邪氣の青年共が、唱和して喝采して居る位がセメて當代が悉く腐敗しない證據の一とする位の者で有らうと思ふが、諸君、ドンな者だらう。

△第二の山縣、第三の山縣

南北星

一

桂の宮中入りと云ふ事ほど不思議に政界の人心を聳動した事件は近來稀である。一體桂と云ふ人がそんなに大騷する程偉い男なのか、夫とも夫を兎や斯う大騷する方が衆愚揃ひなのか、何れにしても異常な現象である。

抑も桂が第二の伊藤氣取りで外遊の途に上つた時に、餘り賢ならざる我が政界の有象無象は、何か一大事でも起るかの如く、又彼の外遊に何等か重要の意味でもあるかの如く、無闇に騷ぎ立てた。此の騷ぎ樣が尋常でなかつた所から、事情に迂濶な外國新聞の通信員などが又ホンの想像のみで誇張した通信を本國に送ると云ふ樣な譯で、在野の一老政客たる日本の桂は一時世界の視聽を集めた。倫敦タイムスでさへ妙に奥齒に物の挾まつた樣な論評をするかと思へば獨逸の半官報は又いやに媚て上げた樣な歡迎の辭を並べる。そこで桂は自分の知らぬ間に恐ろしく男を上げて居やうと云ふ譯にもなつたのだ。實際露西亞の騷ぎ樣と云つたらなかつたが、あれも實は世界の騷ぎ方が膨脹なしにア、させて仕舞つたのだ。

斯の如き豫備的而も世界的の大騷ぎがあつた直後に、急轉直下今度は飛び放れた雲隱れの幕を見せられたので、看客は思はず狐につまゝれた樣な意外を感ぜざるを得なかつたのであらう。桂の宮中入りが不思議に政界の人心を聳動したのは、實はこんな劇的脚色の自然に齎らし來つた所で、謂はゞ曩の外遊當時に馬鹿騷ぎをやつた其の騷ぎの續きに外ならぬのであらう。若し桂が曩の外遊一件も何もなしにあの儘靜まり返つて居て、先帝登遐と云ふ絕大事件を切掛けにスルりと宮中に入ると云ふ事であつたら、政界の人心も眞逆に此の樣な激動は示さなかつたらうと思はれる。尤も外遊一件がなかつたら、今度の宮中入りと云ふ一幕は或は仕組まれずに濟んだかも知れないが、それは又自ら別問題である。

兎も角も桂の宮中入りと云ふ事で、政界には種々の問題が提供された僕等には桂一人の去就が、我國の政界にとつて夫程の大問題だとも思はれぬから、これに從つて起り來つた種々の問題についても、夫で重きを置いて居ないし、從つて又興味を感じて居ない。畢竟山縣であれ桂であ

れ、それがよし日本の政界から沒交渉なものになつて仕舞つたにしろ、我が政治界の心得方が今日の狀態に留まる限り、第二第三の山縣たり桂たるものが相繼いで出て、何時迄行つても大した變化の起り樣はないと思つて居るからである。況や桂が宮中に入つたと云つて、何も死んで仕舞つた譯でもなければ、又未來永劫政治に携はる能力を去勢されて仕舞つた譯でもない。一旦彼等に必要な場合が生じて來れば、何時蘇然として還俗將軍にならぬとも限らぬ。少くとも府中に政を聽く位の事は何時でも御座れだ。ツマリ今迄大手に山縣が大御所で頑張つて居たのに加へて、今度は搦手に桂の大御所がモー一人鎮座ましますことになつた迄の事だ。之を見て直に官僚系が天子を挾んで政治を私するものだと思ふのも悲觀し過ぎた話だが、又或る一派の樣に、これぞ官僚系沒落の兆で、政友會內閣萬々歲だ、などゝ浮かれ出すのは、誠にお目出度い話と云はざるを得ない。

二

然らば第二の山縣既に雲隱れしたとして、第三の山縣たるものは誰であらう。と云ふ所であるが、それは大御所が既に二柱も控へて居ての事であるから、遣らせ樣によつては誰にでも出來る。が又桂だけに自力で鮮かに切り廻はし得るものは一寸見當らぬ樣だ。

所謂山縣派と稱せらるゝものゝ中から物色して見ると、差當り最も選れそうに思はるゝ者は淸浦であらう。彼はその出身の順序から云へば勿論寺內毅よりは遙に先輩で、桂を山縣系中の武斷派の頭目とすれば、淸浦は一時その文治派の首領を以て目せられたもので、而して桂よりは稍先輩格である。但だ彼は松隈內閣の時に始めて司法大臣になつたので、第二次山縣內閣に桂と並んで再び司法大臣にはなつても、山縣のお覺えはどうしても桂の方がよかつた上に、山縣が時の憲政黨と所謂肝膽相照すに於て、政黨操縱の上には桂が最も一種の手腕に長じて居たので、益々重寶がられると云ふ風な關係もあつたらう。加之、桂は抑も三十一年の第三次伊藤內閣に入つて初めて陸軍大臣になつてから、憲政黨內閣にも第二次山縣內閣にも、又その次の伊藤の政友會內閣にも、ズツと居据はりに陸軍大臣の職に居たので、淸浦の出たり入つたりして居たのよりは遙に內閣術にも通ずれば幾らか貫目も附くと云ふ樣な譯になつた。そこで伊藤の政友會內閣を突き壞した跡で、山縣始め元老連は誰と云つて進んで引受け樣と云ふものゝない場合、それじや皆な總がゝりで守り立てゝ遣らうと云ふ樣な始末から、先以て桂を跡目相續にし、淸浦を相談役兼後見役に附けて遣らせて見る事になつたのが第一次の桂內閣であつたのだ。それが日英同盟やら日露戰爭やらで飛んだ役德に有り附いて時の總理大臣たる桂はしたゝか偉い者にされて仕舞つたが、平閣員たる淸浦は小村や桂の樣に惡くも云はれなかつた代りに、一向後見榮もなく、謂はゞ伴食並みに見做されて過ぎて仕舞つた。これが淸浦の失意の始まりで、又桂の奔運の强かつた所である。斯うなつて見れば、桂が第二次の內閣を組織すると云つても、眞逆に伴食扱ひに甘じて、おめ〳〵と入

閣する氣にもなれず、その儘埋れて今日に至つた譯であるが、その内に桂はドン／＼拍子で公爵大勳位、天晴れ大元老に成り済まして居る。此方は不相變貧乏して、樞密院に若年寄りと云ふのだから、運不運は妙なものサ。

何も先輩だから偉い後輩だから偉くないと單純に斷じ去らうとする譯ではない。幾ら先輩だとて土偶の坊は何時迄も土偶の坊であるが、爰に桂と清浦とを並べて見る時には、桂が清浦よりどれ丈多く伎倆あり才能があつた爲に今の地位に上り得たか、僕は所謂運鈍根以外に餘り多くの理由を見出し得ぬのである。但し清浦は既に久しく權勢を離れて居るので、今ではモー大した野望をも有し得まいし、假令本人に十分の色氣があつても、一寸受て座頭を勤めると云ふ事には、差向き外の役者が納らないであらう。

三

寺内々閣と云ふ評判はモー隨分久しいものだが、僕等には皆目その意味が分らない。一體寺内と云ふ男が自ら首班となつて内閣を組織すると云ふ事の出來る柄だらうか。いや尠くとも一國の政治の大體が分つて居るのだらうか。それからして が僕には餘程の疑問である。僕等の見る所では。あの區々たる黨派根性で固まつた偏狹なる度量、重箱楊枝式のせゝ細しい態度、我執のみ强くて人言を容れ得ない固陋の性癖は、どう見ても未だ腐儒根性を脱し得ざるものである。丁度斯う云ふタイプの行き場所に出來て居る今の日本の陸軍なればこそ、割合に長く大臣も務められ、而もそれが或る意味に於て成功の大臣たることを得たのであらうが、これが若し他省の一珠に伴食ながらも姑小姑の澤山な文部省邊りでゞもあつたら、平の大臣ですら、さう無事には勤め負せなかつたかも知れぬと思はれる位である。但だ今の日本の、極めて馬鹿氣た官制のお蔭で、陸海軍大臣たるものは、内閣の交迭と殆ど沒交渉に、其の居据はる樣になつて居たが爲に、桂と同じ樣に彼も亦前後十年も陸軍大臣の地位に居て、モーメンタムが自然大きくなつて居るかの如くに思はれる。これが數年來寺内々閣と云ふ噓の樣な評判がたん／＼高まり來つた所以かも知れぬ。何にしても寺内と云ふ男は所詮總理大臣など云ふ柄ではないが、今では清浦などよりは却て多くの强味がある、と云ふものは、十數年來嘗つて權勢に離れずに居た事と、長州出の軍人で而も山縣の今では無二の寵兒であることゝ、それに桂退いての今日となつては、彼に攀緣せんとするものゝ割合に多い事と、即ち是である。されば差當り適當の人物の無い山縣系では、或はこんな男でも不得止守り立てゝ、結局端から物にしてやる樣な事にならぬとも限るまい。その場合には後藤などは先以て直參格で、得意になつて政黨操縱係り位承はるであらう。大浦は後藤と兩立しない樣に云はれて居るが、僕等の考ではそれも單に桂を中心にしての御殿女中式確勢位のものでしか無いから、兄分格の寺内に對してならば、さう角突き合ふ程の事もなく、枉げても一所に行くに違ひない。蓋し後藤と云ひ大浦と云ひ、斯うでもしなければ所詮權

勢に有り附き様がないのだから、此の場合少々位の見えや體裁に構つては居られない譯だ。

寺内々閣の評判に連れて、原の名前が屡メンションされる様だ。原と云ふ男中々腹黒い策士で、政黨員とは云ひながら元來が役人の畠から出た男だけに、官臭が骨迄浸み込んで居るのだから、或はソツト寺内などに款を通じて居ないとも限るまいが、さりとて寺内の首相の下に外様として列する様のヘマは眞逆にようすまい。よし自分は遣り兼ねぬにしても政友會と云ふ身代(しんだい)が正可(まさか)原一人の持參金たるに甘んずるものではないから、假令原が寺内とソロ〳〵肝膽相照らしつゝあるとするも、それは唯だ桂が寺内に乗り換へる丈の話で、不相變妥協盲從の貢物を容れて、幾年かの後には又ソツト内閣を借り受け様と云ふ位の魂膽に過ぎぬのであらう。併し乃木大將でなくとも、正直忠亮なものは憤死しそうな世の中に、何時〳〵迄もそう天下泰平の芝居が打てるかどうか、國民も大抵にして本氣になつて貰ひたいものだ。

△政界五人男

鵜崎鷺城

今後の政局は何うなるか一寸斷言し難いが、結局の問題は西園寺内閣が倒れて寺内が出るか、それとも西園寺内閣が長く續くかの二つに外ならぬ。山縣の心では寺内が可愛くてならぬから一日も早く内閣を組織させて色々世話を焼いて見たい、處が桂は果して山縣の如く寺内の出るのを衷心から喜んで居るか疑問である。

世間では山縣と西園寺とが相談して桂を宮中に敬遠したなどゝいふ説を立てるようであるが、山縣も幾ら寺内を世に出したいからといつて丈程桂を邪魔にする譯はない、殊に、西園寺はそんな策を廻らす人でない。實は策がなさ過ぎるからいつも官僚派の人々に仕てやられるので、政治家としては餘りに上品に鷹揚に出來て居る。尤も山縣、寺内の桂に對する感情は昔しのようでない、桂が公爵の手盛をした時にも一言山縣に相談しない、而も山縣が公爵になつた時よりも却て偉いことになつて居る。寺内もアレ丈け朝鮮で働いたのに伯爵では引合はぬと大分不平であつたらしい、そんな事で二人とも面白く思つて居ないようであるが、併しこれは内輪の話で外部に對しては團結して居ると見なければならぬいざとなれば桂も宮廷の奥から援けるで有らうし寺内も大恩ある桂の差圖を仰かぬ譯に行かぬで有らう。さすれば此次は寺内の内閣であることは既定の事實で、唯だ殘る處は時(タイム)の問題である。

寺内は總理大臣として何うであるか、成程陸軍だけは自由にならうがそれ以外には餘り勢力が延びて居らぬ、それに例の調子であるから巧く閣僚を纒めて行けるか隨分怪しいものである。尤も寺内も近頃は餘程三角頭の角が取れて實業家の機嫌をとつたり新聞記者にお世辭の一つも言ふようになつたとのことであるから、親分の山縣や兄分の桂が守立てゝ

行たなら彌ら案じたもので無からうといふ者もある、それはそうかも知れぬ、又實際寺内は頭が堅い丈けに正直で桂のようにヌラクラと誤魔化しをやるまい。曾て阪谷が大藏大臣になつた時井上、澁澤といふ二大後見役が附いて居たので大藏大臣が三人あると笑はれたが、將來寺内の場合にも三人總理大臣が出來る譯だ。

後藤の將來は疑問である、桂の洋行のお伴をして居る間にシッカリ桂の睾丸を握り、第三次桂内閣が出來たらマンマと副總理位の格に昇る積りであつたか何うだか知らぬが、飽まで桂の勞ひに縋つて政界に事を爲す意志であつたことは言ふまでもない。然るに本尊の桂が天一以上の早變りをしてドロンと宮中に雲隱れをしたので後藤も多少失望したであらう。後藤は貴族院に於て別段勢力ありと見えぬ、却て大浦、小松原、關の方があるかも知れぬ。衆議院の方にはこれまでから後藤系と名の附く者はないではなかつた、政友會にもある國民黨にもある。今度の總選擧にも臺灣の成金や賀田金から運動費を貰つた者が大分出て居るが、これは無論後藤系と見て差支へない、が少し位そんな者があつたからとて後藤の勢力が政黨に扶植されてるとはいへまい。新政黨組も桂を引張り出す目算が外れたからといつてマサカ後藤を戴く程の勇氣もなからうしいくら不見轉主義の政友會でも西園寺の後釜として後藤に色目を使ふようなことは萬有るまい。

後藤の政治生命は金のある間は續くが金がなくなれば最後かも知れぬ。然し桂に逃げられたからといつて内閣道入りの望みが絶えたといへぬ、何となれば寺内と後藤とは決して惡くない、後藤を引立てた故兒玉源太郎は寺内の兄分で息秀雄は自分の女婿であるから、死んだ兒玉に對しても後藤を見棄てることの出來ぬ義理合がある、現に四十一年の内閣に桂から再入閣を勸められた時も後藤を遞信大臣にする條件で承諾した位ではないか、こんな關係であるから若し寺内内閣が出來たら後藤は必ず入閣するに相違なからう。

入閣はしても何の省に入るか分らぬ、後藤としては内心外務を希望するで有ろうが、コレには流石の寺内も首を傾けるだろう、假に希望通りになるとしたら何うか、さらでだに外國は色眼鏡を以て日本を見て居るのに、サーベル一點張りの寺内が總理といふのでいよ／＼侵略主義といふ感じを深くする、其上至つて口の輕い後藤が下手な横好きで無茶苦茶な外交を遣つた日には打ち壞しだ。

大浦は何うかといふと桂の宮中入りの爲めに最も困つて居る一人らしい。此男は政治道樂だけに表面でチョイ／＼策略を遣つて居るが、議會の現狀はナカ／＼打破出來さうにもない、國民黨の餓鬼連も大浦の子分になることは氣恥かしい、子分は愚か靴の紐でも解こうといふのは止せば好いに副議長の運動をして暗闇の恥を明るみに曝らした加藤斐天と大石入道の姿を世話をして小使錢を貰ふ鈴木ハーゲマン位の者だろう。大浦もいくらジタバタした處で小人數な中央黨だけでは離れ業も出來まいし、其中央黨も桂が居なくなつてからます／＼左前で現狀維持が難かしいといふ體たらくである。黒幕を切落したのは好いが、品川彌二郎は

との臨當も打てないとあつては大浦も案外詰らぬ男だ。

然し大浦とても一概にケナシたもので無い、桂でも後藤でも金を儲けることは巧いが、大浦は案外金に卑しくない、彼れ自ら人に向つて、若し自分が官職を利用するなら逓信大臣の時も農商務大臣の時も二十萬や三十萬の金を儲けるのは雑作もなかつたがそれは断じてしなかつたと云つて居るさうである。であるから後藤は金持だけれども大浦は大の貧乏である、若し彼に後藤程の私財があつたら中央倶樂部もモット人數が殖えたで有ろうし、非政友の形位は出來たかも知れぬ。唯だ惜しいことには巡査上りだけに學問が無い、ヘイ、ポリチックスを解しない、低能な議員を手に入れても學問見識のある人物を味方にすることが出來ぬ。後藤の學問も少々怪しいがソレでも政治は何うやるものか、國を何う向けたら好いか位のことは知つて居るらしい。

大浦も二度大臣になつたが、此儘葬られるのは残念で有ろう、といつで大浦が内閣を組織する時代はいつ來るか高島呑象でも豫言は出來まい いくら雞鳴狗盗の輩といつても官僚側では棄て難いから無論次の内閣に入るものとして好からろう、併し希望の内務大臣は容易に手に入るまい。

近頃チョイ〳〵山本權兵衛の名が世間で唄はれるようであるが、山縣や桂の勢力が蟠つて居る以上は断じて政治に頭を出さぬ、又山縣、桂の方でも權兵衛の出ることを好まぬ、況んや新政黨の亡者どもに擔がれて折角苦心して貯めた金を減らすような馬鹿な眞似をする男でない。權兵衛は腹の中で、今暫く海軍の地盤を守り隠忍して居たなら其中に時節到來するだらう位に思つて居るかも知れぬが、併し彼も最う好い歳である、今出場を失つては容易に天下は廻つて來ない、或は出ずに仕舞うかも知れぬ。アレだけ世間から唄はれ又實際傑物である割合に晩年に振はないこと此男の如く甚だしきはない。

さて寺内が出ることになると政黨關係は何うなるか、新政黨は迚も物になりさうにない、さすれば政友會に頼るの外ない、ソコデ誰か一人入閣させるだろうといふのは無理ならぬ推測である、政友會から入閣するとせば無論原敬で有ろうが、果して原と後藤、大浦と調和するであらうか、原の椅子は無論内務か外務で有ろうがソレで官僚側が承知するで有ろうか、又いくら虫の好い政友會も黨内で餘り評判の好くない原一人入閣したからとて政府を助けるで有ろうか、其處は其場合になつて見ねと分らぬが、鼻ッ柱が強いようでも悧巧な原は西園寺の政治生命が盡きるとなると桂なり寺内なりと結んでマンマと牛を馬に乗換へる積りで居るかも知れぬ、縱し何人も入閣せぬからといつて盲從好きな政友會のことだから情意投合以上の名文句を發明するかも知れぬから政友會を高く買冠らぬ方が好かろう。

△モノになる三人と、ならぬ二人

引退政客

政局の推移は且以て夕を測られぬ。身を政治舞臺の眞中に置いて、自ら其の主人公等と手を握り背棄を交へてすら、容易に其幾微は察しにくい況んや吾輩は今、政界を引退して、日々の新聞にさへ左程の注意を拂はない。それで某公某氏が昨今どうして御座るか、頓と其消息を知らぬ。で今後の政局がどうなるかといふ事は吾輩には分らないが、論題になつて居る五人男については平常多少の面識なしとせぬ。次にザット自分の觀察する所をいつて見やうか。

寺内といふ人は根は極く正直な人だ、寧ろ愚直な人だ。それで議會などでもムキになつて、藏原などを相手取つて喧嘩を買ふ。彼ばかりでなく、軍人上りの政治家は大抵さうだが、どうも眞の政治といふものをよく了解しない。民を治むる猶兵を率ゆる如しといふ間違つた考を持つて居る。之は詰り學ぶ所が悪るいからである。彼等は獨逸に留學して軍事教育を受けて來るばかりでなく、傍らカイゼル政治を學んで來る。カイゼルの政治が世界で一番エライんだと思ひ込んで來る。そして其れをその儘ソツクリ日本に應用しようと試みる。日本の人民もいゝ迷惑であれば、又彼等の馬鹿サ加減も驚かざるを得ぬ。それで寺内の政治家としての技量は、今日に於てはまだ〳〵怪しい。然し兎に角彼は長閥の秘藏子であつて、矢張り相續人のお鉢は彼に廻つて來さうである。又正直な、いゝ人であるからして、少し當り障りが多いにした所が、眞面目に國務には盡瘁しやう。只其學んだ所のカイゼル學を拋却して、「民を治むる兵を率ゆるが如し」の考を掃蕩して、眞の政治家として舞臺に立つて貰ひたい。

山本が果して政界に乘り出して來るであらうか。これが今日の政局に見物し倦きた人々が多少其眼を新たにせんとして期待して居つた所であつた。又山本其自身に於ても固より色氣がない事はない。或は寧ろ野心滿々と評した方が當つてゐやう。只彼が政界に乘り出すについては一つの大いなる缺點がある。彼は金錢に對して極めてケチである。金欲しがりの使ひ惜みである。金にケチで政界に勢力を振はふといふのは今日の日本に於ては無理である。一體薩摩人といふものはどういふものか金に汚い。金に奇麗なのは高島鞆之助位のもので其他は大抵汚い。エライ人のアラを拾ふのも餘り面白くないが、あの東郷大將ですら昔はいくらか其嫌ひがあつたらしい。何でも家を出る時に米櫃の中に尺を當てたといふ話もある。其點に於ては長州人の方がずつと金使ひが奇麗である。アの山縣ですら使ふべき時には思ひ切つて使ふ。餘り役にも立たぬ朝比奈知泉に向つて月々三百圓位つゝも隨分永い間與れて居つた。又乾兒分にもなか〳〵よく世話をする。薩の勢力が衰へて長の勢力が盛んになつた

といふ事は、一つは陸人が愚で長人が賢だといふ爲めもあるが、一つは此の金錢の使ひ方にもよるのである。それで權兵衞が政界に乘り出して來やうといふには、先づ以て金錢に對する考から改めてかゝらればならぬ。がそれは權兵衞には一寸出來ない相談であつて、此男は先づ〳〵モノにならぬものと見なくてはならぬ。

次には後藤、大浦。之はどうも比較にならぬ。大浦には智惠がない。豫備兵のない奴だ。後藤は絞ればいくらでも出て來る。例へば金でも紙入のを使ひ果たしたと思ふと、「イヤこゝにもまだある」といふて、腰の胴巻からも又內隱袋(うちかくし)からも出して來る。大浦と違つて豫備兵を繰り出せる男だ。それに大浦は考も多少古いから、此先きの政治的生命がチト危つかしい。後藤の抱負は一寸昔の大江廣元を憶ひ起させる所がある。人或は廣元の大義名分を辨へざるを難じ又其操守なきを尤むるものがあるけれども、それはチト無理である。少しは廣元の側に立つても其行動を見ねばならぬ。廣元の信ずる所では、どうも自分を措いて、他に日本の政治をなし得る人がない。自分が政治をやらねば日本の政治は滅茶〳〵である。斯ういふ確信から彼のすべての行動は割り出されたのである。當時王朝の力で政治をなす得べからざる事は誰でも明かな事で、止むなく彼は王朝の文書を携へて、實力の中心たる鎌倉に走つたのである。彼は唯實力の中心に立つて日本の政治をするといふ事ばかり考へて居つたのであつて、彼の眼中には、固より賴朝もなければ實朝もなければ又北條もない。夫れ故に賴朝が死なうが、實朝が殺されやうが、北條が源氏に代らうがピクともせぬ。唯日本の政治は自分でなければ出來ぬと思うてゐたのである。後藤に廣元位の見識と自信ありや。後藤は廣元位の人傑なりや否や。それはチト疑はしいが、然し後藤の才氣丈けは確かに當今に珍らしい。乃公の才氣は何人が局に當るも之を用ひざるを得ざるべし位の自信は彼にあらう。それで彼の將來は如何ほどまで有望であるか斷言は出來ぬが、彼が政界から足を踏み外すといふ事は容易にありさうにもないし、如何なる勢力とも結びついて矢張り相當に大きくなるだらう。

最後に原がどうなるか。事實に於て彼が政友會中第一の仕事師である事は何人も疑はない。彼も他年一日自ら政友會の首領となり、又內閣の首相にもなつて見たからうが、今日に於てはさういふ時機が來るか來ぬか疑はしい。彼はお天氣見屋で、相場師であるから、風向次第では、潮合次第ではどんな勢力とでも結びつくことを辭しまい。例へば此次に寺內內閣が出來たとしたら寺內と共に仕事をすることもするであらう。又桂も今では雲の中に舞ひ込んで、御下問に對して「左樣で御坐ります」「サア、如何のもので」位の言葉で、間接に其政治的意見を發露して居る位であらうが、若し萬一再び雲の下に舞ひ下りて來たなら、之と共に仕事をすることも辭しまい。相場師の頭の中には桂の下界戾りも亦多少計算の中に入つてゐやう。彼と後藤とは互に相場師であつて、どうも「性相剋す」といふ風に仲がわるいが、然し政界の事は時として意想外の變化があるから、二人共同じ內閣に入つてやることがなしとせぬ。

一體今日の日本の政治といふものは、まだ本當に立憲的に行はれて居らぬ。例へば英國のロイド、ジョーヂの如きは一つの立派なる政見を抱いて、其實行の爲めにアスキスの內閣に入つた。然し日本に於ては政治界に繩張りがあつて其繩張の中に飛び込まなければ何の仕事も出來ぬそれて理想が完全に行はるれば之に超したことはないが、先づ當分は「官僚プラス政黨」を二で割つた位の所で政治をするより外仕方がなからう。この議論は政黨者流からも官僚派よりも何れからも微溫(なまぬ)るい議論として受取られるだらうと思ふが、自分は近來さういふ風に考へて居る。先づ此れ丈の事で御免を蒙らう。

△國民の自覺と政界の革新

伯爵 大隈重信

政治界に働いて居る古い人を捉へて批評するといふ事は害あつて益ない事である。世人動もすると元老〳〵といふ。又其の元老に隨伴して働いて居る人々、所謂官僚なるものについて彼是れいふ。さういふ事はすべて百害あつて一利なき事と信ずる。全體一國の政治は其國民の反映である。今日は已に立憲政體の世の中であつて、國民各々自ら政治に參與するの權利を得て居るではないか。然るに世人の爲す所を見るに、どうも是まで勢力を得た人に依賴して事をしやうといふ風がある。元老とか官僚とかいふて平常之を攻擊して居る政黨が已に然りである。動もすれば勢力の中心に元老を置く。又元老に助けられて多少政治社會に名を知られた人に結び付かうとする。由來東洋人の大弱點は獨立の氣象がない事である。自信力がない事である。何か此一つの勢力が成立つと、其成立つた勢力を永久のものであるかの如く心得て、其勢力に縋がつて、依賴して事をなさうとする。元老が年を取れば、今度は其隨伴者共を相手にして仕事をしやうとする。かういふ國民に向つて、何時までも元老を批評したり、元老の隨伴者を批評したりして聞かせるのは、益々國民の獨立の氣象を失はしめ、益々國民の立憲的思想を消滅せしめる。それで吾輩の希望をいへば、そんな元老などの批評はもう罷めて了つて、國民を指導するといふ事に心を用ひて貰ひたい。今日は最早や寡頭政治の世界でない。又專制政治の時代でない。四民平等、國民全體政治に參與するを得る立憲政治の世の中である。元老とか官僚とかいふ少數の範圍の中からよい人が出てよい政治をして吳れゝばそれでよいといふのは、それは古い思想である。立憲政體の今日に於ては、國民が誰でも、力さへあれば彼等に代つて自ら政治に參與するの權利を有して居る。出版自由、言論自由、自己の政見主義を掲げて、政治を改革するの力も銘々各個が持つて居る。何を困んで元老とか官僚とかいふものゝみに依賴して事をなさんとするか。自ら政治に參與し得るの權利は憲法によつて保障せられて居るではないか。少數の權力を有して居る人に依賴して事をなすことを昔は嘆願といつた。今でも其嘆願の風習が止まぬ。税が高いから安くし

て貰ひたい。物價が高いから廉くして貰ひたい。丸で嘆願の形式だ。税を安くする力も物價を廉くする力も國民自身が持つて居るではないか。何を苦んで自ら其力を用ひずして、年取つた古い人にのみ依賴しやうとするか。立憲國の國民として實に理解すべからざる事である。

世間のいふ所を聞くに、今度桂さんが宮中に隱れた。西園寺内閣が代つたら、此次は寺内を引張るだらう。イヤ寺内よりも權兵衞がよい、八兵衞がよいなど〻噂して居る。全體之は何事だといふんだ、沙汰の限りだと我輩は思ふ。國民自ら自己の考を定めて、自己の氣に入らなければ自ら取つて代るといふ考を起させるやうにしなければ駄目である。さうなつて初めて本當に立派なる政治も出來、平常口を極めて罵つて居る官僚政治からも脱却することも出來、物價騰貴も重税負擔も皆之を救ふことが出來るのである。それを自ら爲さずして只人に依賴してやらうとするのは餘りに意氣地ない話ではないか。權兵衞だとか八兵衞だとか、もうお念佛でも唱へて居てもよい位の老人共の批評は吾輩大いに迷惑である。もう少し元氣を出してはどうか。今や國民を代表すべき筈の帝國議會、何處に威嚴があるか、何處に國民の尊敬に値するものがあるか、累々たる幾百の頭顱皆どこかの古い勢力に緣を引いて働かうとして居るではないか。そして旨く勢力に捉まつて働き方の上手なものが世間から持囃されて居る始末である。情けない事だ。東洋唯一の立憲國と稱する堂々たる大帝國民として實に耻かしいではないか。畏れ多くも先帝が維新の大業を開かせられて國民に向つて參政の權利を與へられた之をナゼ國民が自ら運用するの途を講ぜぬか。先帝は或は國民の意氣地なきを憂慮せられつ〻此世を去られたかも知れぬ。今にして眞に立憲國民たるの實を示さなければ、何の顏あつて、先帝の靈に對せんとするか又今上陛下の德に應へんとするか。最早や念佛を唱へるやうな老人などに依賴せずして、今少し國民の英氣を發揚せしめ、維新の大業をして益々恢弘ならしむるの途を講じたいものと思ふ。寡頭政治や專制政治の時代は已に遙かに過ぎた。國家は國民の集合したものだ。國民皆自ら覺醒せざる限り政治の革新は到底駄目である。老人の批評や區々たる政局の推移などは我等之を論ずるを屑しとせぬ。

△寺内政友聯合内閣乎

早川鐵治

今の所謂官僚派といはる〻ものが去年政權を失つてから、まだやつと一年しか立たない。けれども一體役人といふものは役人以外に仕事がないものである。あつても役に立たない。それで此頃は役人の民間に於ける相場が餘程下落して居る。正何位とか從何位とかいふ位がある。また伯爵とか男爵とかいふ爵がある。そんな爵位は會社なり商店なりの看板によいといふので昔は大分諸方から引張られた。が、彼等は何をさせても尻が重い、計數に暗い。事務に熱心でない。私も十數年役人をしてよく役人仲間の實狀を知つて居るが、要するに今の役人で私共のやうに熱

心に職務に盡すものが少い。大抵其日暮らしに仕事をして居る丈けで國家の前途などを顧みるもの多くない。けれども役人といふものは大抵氣位が高く、又品も餘りわるくないものであるから、役人を廢して、民間事業に從事しても、民間のものと伍して仕事をするのは役人の方でも不愉快である。民間にはどうも品性の劣等なものが多いからである。役人が官界から天降つて、此等の品性劣等な奴等と錙銖の利を爭ふことが容易ぢやない。出來ても面白くない。そこで此等の連中が政權を離れると只ブラ／＼遊んで居らねばならぬ事になる。恩給でもあるものは格別先づ貴族院にでも入つて燻々ながら若隱居になり濟まして居らねばならぬ事になる。それでどうも早く政權を握りたい、今一度政府を乘り取りたい。之が所謂官僚派の役人共の希望である。今の貴族院にはこういふ政權に渇した不生産的の人間が多いから、どうかして政府を乘り取りたいと焦せる。昨年の選擧法改正の問題などはどうだ。あんな風にして現内閣をイヂメルのなどは甚だよくない。大選擧區にするとか小選擧區にするとかは之は全く衆議院内の問題だ。之が國家の安危休戚にでも關する大問題といふなら格別、選擧區の大小などは全く衆議院に任せて置いてよい事である。それですらあの通りの邪魔をしたり、妨害をしたりして自ら快として居る。今年なども亦軍備問題で政府をイヂメルものが多からう。然しそれは時と時節を辨へぬ事で、大正元年と改元して　新帝御即位後の最初の議會に於て貴衆兩院の衝突を起すなどいふ事は甚だ面白くない事である。貴族院が永く今の如き態度を持して居るならば、遂には英國の如く權限を局限されはせぬか。一體豫算の權義は衆議院に先議權があるのであつて、豫算の問題で以て衆議院と貴族院と相爭ふが如きは實に非立憲の仕方ぢやないかと考へる。然し此等の連中は恐らくは相爭ふ積りであらう。が我輩は今は時節がわるく　新帝に對して恐れ多い事と思つて居る。

一體行政整理がどうなるか、立派に行くか。又軍備も或程度までは必要である。それをどこまで讓り合ふか。又減税といふ事もどういふ結果になるか。其等の事のやり方によつては貴族院のみならず衆議院に於ても批難が起るかも知れぬ。然しこういふ時節柄であるから整理が理想通りに行かぬにしても大抵無事に行くだらうと思ふ。

然し若し無事に行かぬとしたらどうなるだらう。桂は出られないから、官僚派が推すのは寺内といふ順序であらう。寺内ならば山縣系の官僚が之に服するであらうし、又政友會あたりの人間とも大分意志が疏通して居る。貴族院は大部分山縣のものであるから之も無論無事。衆議院の遣り方さへ宜しきを得れば先づ大丈夫であらう。而して已に政友會の一部分とは至極よく意志が疏通して居るから、之も大抵無難に行けるだらうと思ふ。かうして寺内内閣が出來ることになつたらどうなるか。其場合には後藤が入るかも知れず或は原が殘るかも知れぬ。又大浦は入るだらうか之は一寸緣が遠いやうにも思はれるが、然し大浦といふ人は非常に熱心な人で、此までの政黨操縱は後藤よりも寧ろ大浦の方が多くやつた。其大浦を無視するといふ事は無理かも知れぬ。さうすれば寺内政友連合内

閣といふやうな一種變な內閣が出來るかも知れぬと思ふ。

又貴族院の若隱居が考へて居るやうに、全く政友會を無視し、衆議院を無視し、豫算を否決し、解散に次ぐに解散を以てしたらどうかといふに、我輩はまだ新米だからよく分らんが、各地方に於ける政黨の地盤といふものがなか〳〵堅固なものである。議會の準備がされてから殆んど三十年になるから、政黨の地方的根據はなか〳〵確固である。我輩も若し無所屬であれば到底强敵福本日南を倒すことが出來なかつたらうが、倒すことの出來たのは政友會から出た爲めである。解散に次ぐに解散を以てしても出て來るものは矢張り同じ政黨の地盤からである。又憲法國に於て再三再四解散するといふ事は實際出來ない。那翁三世のやうにクーデターをやるなら格別だが、失敬ながら貴族院の若隱居連にな樣な事を爲し得るものが一人もない。彼等の多くは一旦政權を離るれば其存在さへも認められぬ人間ぢやないか。不肖早川鐵冶は十五年浪人しても一個の早川鐵冶として立派にやつて來た積だ。彼の久保田讓とか波多野敬直とかいふ、昔ては大臣になつた人間も杳として其存在が分らんぢやないか。況んや四十代で貴族院に入つて若隱居になつて居る人間に何が出來るもんか。彼等は政權に有り附いて初めて其存在を知らるるので、政權を離るれば木から落ちた猿も同樣で何も爲し得るものでない。斯樣な連中に那翁三世やビスマルクのやうな事は出來はせん。形式を眞似て見た所で猫を描いて虎と見せようとする丈けの事だ。眼のあるものの一笑にも値せぬ。それ故に今日政黨を無視して政治をなすといふ事は到底出來ない。一度解散すれば其次ぎには却て餘計に猛烈になる、尤も中央黨の如き人爲的のものは長く持てなからう。アレは大浦が死ねば解體するだらう。けれども自由黨から仕上げた政友會。改進黨から續いた國民黨の如きは地盤が決して薄弱でない。一度の解散決して恐るゝに足らず二度の解散恐るゝに足らず。解散すればする程當局者は只手古摺るだけである。衆議院を無視して政治の出來ない事は、貴族院を無視して政治の出來ないと同一であつて、今日何人も疑ふ事の出來ぬ事實である。そこで寺內內閣が曲りなりにも出來るとすれば政友會との聯合內閣――合の子內閣であらうといふ事は略ぼ想像し得られる。

今日後藤男はなか〳〵金を散らして天下の名士を集めて居る。乾兒も澤山出來た。惜むらくは其乾兒には虛業家が多くて實業家が少い。我輩は後藤男と親しいから直接此事を忠告しやうと思つて居るが、星一とか竹越與三郎などの連中が十人居つても廿人居つても天下は取れるものでない。之は明言してもよいぢやないか。矢張り相當の人間を收攬しなければならぬ。先づ後藤男は將來內閣を組織する望みがあるが、それ迄には一寸間がある。私はこの人は確かに總理大臣になれる人と思つて居る。が只、今日までのやり方はわるい。道樂息子や、小僧のやうな副々たる小才子を弟子にして喜んで居る、首の新渡戶稻造あつても、雜誌の販ひにはなるかも知れぬけれど、政治上に何の益する所あるか。仕事をさせて見玉へ。此早川の十分の一も出來るものぢやない。今日まで彼は天下に力を延ばすことをせずして、裏陰に仕事をした、其緣故のある實業

家などを保護して居る、然し其やり口はどうもよくない。尤も今の政治屋の大多數は利慾に渇へて居る。少し金さへ撒き散らせば何でもない。私が自ら衆議院に居つてこんな惡口をいふのは宜しくないが、全く事實だから仕方がない。後藤さんが少し方針を變へて、今少し天下の人才を集むることに力を盡したなら今後大いに見るべきものがあらうと思ふ尤も今日までは貴族院の方に力が延びて居らぬ。貴族院に於ては平田東助の方が上てないかと思ふ。

山本權兵衞、此人は立派に總理大臣になる資格がある。日本は不思議な國で、軍人を抑へる權力なきものには政治が出來ない。日本の海軍省は殆んど山本の海軍省である。權兵衞の意志はどんな事でも海軍省に於て行はれざるなしである。陸軍の方には權兵衞の力は勿論ちつとも及ばないけれども然し山縣、松方、井上などいふ所謂元老ともわるくはないから、總理大臣として立派にやつて行けるだらう。只彼は政治に金を出さない。無駄な金を使ひたくない。そして自分はぢつとして居つて向ふからお鉢が廻つて來るのを待つてゐるらしい。然し今日では孔明の出廬を仰ぐやうに、こちらから三顧するものはありはしない。そんな事では駄目だ。山本には相當の腕がある。又相當の經歷があつて、一つの大立物であるから、海軍省に閉ぢ籠るやうな態度を改め、交りを天下の名士に求むる事になれば、今日の如き政權に饑へた政治餓鬼共を御する事は譯がないと思ふ。それをするには先づ彼の狹い心から入り變へてかゝらねばなるまい、その點になると寺内の方が餘程よい。世間では只の一武將の如くいふものがあるが矢張り政治家だ。よく胸襟を開いて誰とでも語る。山本が多くの政治家に玄關拂を食はすのとは違ふ。寺内は山本に比べて智惠は落ちよう、腕の點も及ぶまい。然し寺内は天下を取るが山本は六つかしい。一人よがりでゐる今の有樣では山本の總理は先づ〱見込がない。

大浦は參謀長として働く人だ。自分が首領となつて政界を統御する人てない。又至つて智識が狹い。先年歐洲に漫遊して歸つた時に、處々で其土產話を聞いたが、皆古い事でちつとも新らしい事も面白い事もない大浦は教育がないから珍らしがつたり面白がつたりして歸つたらうが、教育を受けた我々から見れば實に氣の毒な程のものだつた。只あの人は物事に熱心て、人に對しても親切て、又非常の雄辯家であるから、餘り教育のない政治家などは大浦を崇拜するし、又我々も大浦の美點を認めて相當の敬意を拂つて居る。が然し政治といふものには多少の智識が要る。惜むらくは大浦は警察官上りであつて、氣の毒な程知識が足らん。農商務大臣をして居つた時でも、取締りの方はよくやつたが、殖產興業の方は一向に分らない。こういふ事は生れ變つて教育を受けて來なければ分らない。それが分る位なら誰も學校で勉强する必要がない譯だ。軍政とかいふ事もあるが、要するに軍人に任せて置いては改革が出來ぬ。軍人は技師たるに過ぎぬ。技師には妙に偏狹の考があつてどうも大體の事が分らぬものだ。軍政も矢張り世界の大局を達觀し得る政治家によつてなさねばならぬ。大浦は農相としては榎本の如き技師的でなくして、大臣風があつたけれども將來の大臣たるものはどうしてもよく大局のよく分る人でなければならぬから、大浦の如き知識の乏しい人では少し物足らぬやうに感ぜらるゝ(文責在記者)

慶應大學講師
戸川秋骨先生譯

エマーソン論文集

總クロース金文字入

◎上卷 正價壹圓四拾錢 郵税拾四錢
◎下卷 正價壹圓廿錢 郵税拾貳錢

十九世紀に於ける論文家を舉げば誰か先づ指をエマーソンに屈せざらんや。彼の思想は高遠なり、彼は體系を備へざる一大哲學者也。彼の文學は金玉也、彼を韻律を押さざる一大詩人といふも亦可、エマーソンの論文は洵に近代思想界の一大產物にして、之を知らざる者は以て文學を語るの權利なき者也。本書はエマーソンの心醉家を以て自任する戸川先生の譯に係る、其譯文の的確にして能くエマーソンの神髓を得たるものなること言を待たず、彼の曠世の哲人の風神に接し其の敎訓に聽かんと欲する者は須く一本を座右に備へよ。

(四版) 上卷 目次

(再版) 下卷 目次

發行所 東京神田雉子町 振替第七九九五 玄黃社 ●全國書店取次

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

天覽の光榮を荷へる

最新刊

装釘の華麗と卷中の挿繪は、絢爛眼を奪ふばかり、出版界稀に見る所の本書は、今次第四。第五の二卷を新刊し、特に『東海道の卷』と名く。由來東海道は山に水に深趣多興の勝地、而かも文學的ならず或は產業に。殆どあらゆる方面に、分布的絶大なる趣味を有する舊蹟也。著者同人は、一致奮勵二年に亘る熱誠を注いで、一擧二卷を刊成す。技巧精緻を極め毫も間然する處なく、前卷に比して其價格の廉なるを知る。敢て大方諸君子の清鑒を待つ。

▼▼上卷は目下印刷中に付十月中旬發賣◎但し特減價は十月末日限▲▲

日本名勝寫生紀行

東海道の卷

上卷 神奈川◎鎌倉◎江の島◎三保の松原◎辨天島◎蒲郡

毎册 金三圓五拾錢 送料各 内地十二錢 臺、樺、鮮、清、各三十錢

下卷 名古屋◎參宮◎琵琶湖

岡野榮
中澤弘光
山本森之助
小林鐘吉
跡見泰 合著

十月末日限 五册特價一部 金拾四圓也 内地送料廿四錢、臺樺鮮清三十六錢

第一册	日光、榛名、妙義、碓氷、淺間、善光寺、諏訪、木曾路、	金二圓五十錢	内地送料十二錢、臺、樺、鮮、清、卅錢
第二册	利根川、銚子、房總半島、箱根舊道口、伊豆、奥伊豆、	金三圓五十錢	同
第三册	京都の卷	金四圓五十錢	同

發行所 中西屋書店 東京神田駿河臺下 振替東京二八一六

各地 取次所 丸善書店・其他

信用ある店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

(中付一の四)

和歌

尾上柴舟達

○ 後藤むくろ

胸そゝる草の匂ひのうれしさよこのまゝこゝに死なむともよき

せまりくる愁ひをわれら抱きしめいづらゆかむや海もいたまし

かなしきがゆゑにわれはも歌へるや涯なき海の青にむかひて

すべもなきわが身ひとつをいかにしてなぐさめむかやおもひつむれば

○ 安井竹美

天が下率土の民のかなしみに天つ空ゆく日もくろまなむ

澄みとほるあきつの眸にはつきりとうつりて淋しわが小さき顔

しろがねの鏡にうつすわが顔も初秋なればしづかなるかも

秋のきてうしなはれゆく戀しさをとめなむすべのなきがかなしや

○ 捫垣青花

野菊咲き虫の音しげくなりまさりやうやくかろき心となりぬ

秋かぜやはなればなれになりにけるふたりのこゝろ思ひさびしむ

逢はずゐることもなれてはさびしからず戀といふにはあまりに恥かし

○ 内田月城

秋雲と青き岬とみつゝゆく伊豆の干潟のくれのあかるさ

山々の尾上を白く風わたる九月ゆふべのものゝしづけさ

風ふけば草の一列かなしみのいろになげうつ青き陰影

○ 大眉一末

薄荷酒（ペパミント）あをくそなたの唇にのこる夕べのりべりャの花

酒飲めど酔ひ頬にいでず蒼ざむるをとこの顔を

君いかに見しはやつきし酒のしづくをてのひらにうけてながめてわれを寂しむ

紫陽花のうすむらさきの吐息よりいつしか夏の夜の雨のふる

○　宮谷清

あえぎつゝ熱砂の丘を登りきて渺たる青の日本海見る

ほとゝぎす啼きつれ過ぐる京の窓あくればそよぐ月夜の一樹

柔らかきネルの着物の感觸をなつかしみつゝ夏に入るかな

○　田尻隼人

我戀のみだれしごときダアリヤの赤きをめぐる初秋の風

下町のかの青柳に灯のてればかはほりもきけかるき足音

こゝちよき雨ふりくれば八月の上總の海の白くさわげる

○　田村胡春

白けたるタンポポの花ゆく秋の風とも知らで咲けるさびしさ

水色の空の明るむ草にねてものを思へばこぼるる涙

わりなくもものを思へば創口のいたむがほどにさびしさのわく

黍のわか葉まひるの風に裏がへる秋としなれば山曇る見ゆ

○　藤村京

品川の干潟に貝を拾ひゐるかもめの羽の白きあけがた

あでやかに金蓮花咲く夜の部屋に三味を彈くらんわか少女はも

君が瞳に青くうるみて溶け入れる桐の若葉のうすひかりかな

○　打田沉雨

ちんちろりしばしときれてちんちんろり母のなき子に思はせてなく

何かしらある罪惡を冒したるようの思に滿ちて街へ

諏訪の森夕日にてりてかがやけば奧に生まれしわかきかな〱

○ 日隈萩泉

まなぶたを仄かに襲ふ灯のぬくみ赤酒の醉のやゝみだらなり

うちしける月の光の青き夜を踏みゝだしゆく白き爪先

つきぐさの花のむらさきまづ濡れて潤ひきたる夕べを歩む

○ 山本渚の貝

罌粟の花咲きてゐしことばかりおぼろに見ゆるその家の庭

灰色の砂おし上げてほの赤き晝顔の芽の見えぬかなしや

忘るともなく忘れ行く人となる君の姿のあはれなるかな

○ 井田葉歌

あの海に深くつかりてありなばや此の軀が溶けて消え失するまで

潮風がそゝる泪をこらへつゝ佇む夏の暮のわりなさ

ゆるやかに海鳴る夕青き灯を獨り對ひて酒まつ心

日毎とる匙ひいやりと秋は來ぬ何がな心うつし行くなる

○ 龜尾春醉

手にすればコップの冷も心よし朝の木の間を風渡る時

夏は來ぬ窓にあふるる明るさにひたりてあれば酒ほしきかな

はるかにも島山蒼う横たはる初夏の海に手をひたし見る

○ 尾崎青嵐

いふにだに愧づべきことを想うてはひとり笑みたる日をばかなしむ

君なくばわれいまいかに安からん君なくばわれいかにさびしき

玉蜀黍の青白き毛が夏の光吸ひ〳〵て日に紅くなりゆく

○ 中村紅夢

しめ〳〵と濕りし土を梅雨ばれの日の照しあり何か云ひたし

霧罩めし麥の家並火(ひ)を受けて玻璃窓光る朝の一時

伊藤　鉄

○
たゞひとり寂しき月の夜の原へなにおもふとてわれの來にしぞ
君よ君よ夜の河鹿が鳴きしきる暗き谷間をかへり給ふや
しづやかに鐘がねむる故郷の青葉の軒の瞳にうつるかな

中　里　富

○
大かはの夜のしゞまを漕ぎかへる船の明りに啼く鳥かな
兩國橋くれてまもなき夏のよひ灯影をさけて待つ人となる

渡　邊　紅　影

○
糸蘭の白いろい花がかつきりと浮きてるやうに咲きぬ小雨に
夕暮の欄子のそばに髮を梳くや君の腕が白くうごける

前　田　三　四

○
靜やかに歩む姿の病院の廊下にかげをひけるも淋し
淋しさは時計のふたをふとあけて吾が衰へし青き顏みる

馬　場　俊　一

○
カツエーの異國の酒によひをかる弱き心と誰がなせしぞ
埃及の葉卷莨のくすぼれるマジョリカ皿に崩の花ちる

林　黄　花

○
倒れしまゝうつとりとなる快き暮れ生溫き風の流るゝ
午後となれば曇るならひの山近き我家の晝の蒸し暑さかな

中　島　俊　雄

○
母もなし戀人もなしわれ遂に伏して泣くべき膝を持たずや
波引けば砂路に殘る水の泡寂し心をいかにすべきや

加　藤　夢　影

○
まろくまろく朱色の月があらはるる上總の山の青き陰影
アーク燈の白き吐息に柳葉は明るくみだれ川水にゆく

○ 野口清鳥

山脈の大なる影わが馬車を蓋ふとき吹く黄昏(くれ)の風かな

川のぼす長き筏ののめ〳〵と波にのまるゝ北國の夏

○ 嘉多紫濤

可愛ゆさよ少女の瞳野の草の青をうつしてわれを眺むる

棧橋の板のあはひに水光る月の夜ごろを飛ぶ魚のあり

○ 大木多喜男

うらさびし夜汽車の窓にふりかかる雨氣にしつゝ一人旅ゆく

何物かわが手を放れ失せしごと茫然として秋に入りけり

○ 草名をさむ

暮れて行く木立の影にひとりわが歌はむとしてふと恐く

たゞひとりなかまほしさに出てゝ來れば野さへ山さへ夏に光れる

○ 山崎天秋

ほのかなる疲れおぼゆる午過ぎの神經の上に痛くなく蟬

ほろ〳〵とこほろぎの鳴く曉の冷き床に目覺めしあはれさ

○ 越野花聲

おちつきし夏の夜の心ざまかの靜寂を思ふによろし

ぢつとしてもの待つごとき靜かさの園にさきたる月見花かな

○ 星野秋雄

明(あか)い灯(ひ)に一つ混れる青い灯(ひ)が氣まぐれものゝ僕の心か

○ 村上夕人

つと墓地にまぎれ入りけり墓守の男我をばあやしげにみむ

くろずめる柳を渡る風さむしかゝる夕を君と分れき

○ 安江華平

言少く別れし道にどくだみの花恐ろしく咲くあしたかな

○ 逸見紅夢

電球をつゝむ烟草の烟にも我がかなしみは流れ
けるかな
○ 竹村天双
裏山に赤くてる日を浴びて蟬鳴きしきり心さび
しき
○ 平島與志美
見まはせどわれの淋しきかげひとつ冷たきかげ
の廣がれるのみ
○ 橫田湖峰
このごろの銀座あたりの夜の巷處女のごとく君
あゆむらむ
○ 石井保
片瀬川潮のさしひくあさゆふに泣くよしもなく
なりにけるかな
○ 野々村淡霧
いつとなく都の父母をなつかしみ淋しき旅の終
りをぞ待つ
○ 岩井綠汀
停車場を風にふかれてたちいづる人をし見れば
旅をし思ふ
○ 栖川善之助

錢あらばかゝる夜こそ危ふけれわが心たゞ停車
場をおふ
○ 藤本登
くろ〳〵と湖水にうつる夕暮れの杜の中なる白
樺の色
○ 酒井靜村
雨ふれり百千の愁ひ泌みてゆく九月なかばの秋
の地のいろ
○ 中田夢十
藏前のとある小路に歌きける群集のうちに見出
てたる我
○ 淺井ゆき子
花瓦斯のかゞやく街の緣日に君のあるべき金蓮
花さく
月見草夜の空氣のやはらかき中に開きぬ君のや
うにも
○ 叶ちはる
やるせなき病後の瞳にもこゝろよく夕べとなれ
ば白萩の散る
○ 逆茂木白麥子
黒ずめる都會の底に植ゑられし柳を見るがいた

ましき朝

つゝましく山に育ちし女よな表情乏しき灰色の笑み

○ 石黒流花

河口の大酒倉の白壁に夕映えすなる夏の暮かな

○ 松尾貞

讀書にもあきたる心ひるすぎのつかれし瞳青空にやる

○ 二木登美

ぬれぬれて夜霧に匂ふたかはらの赤き灯をなく秋の旅人

○ 越野花聲

この朝をめてたきやうに思はせていと明るくも白牡丹さく

○ 叶ちはる

不安さは父と母とをいつはりし日のゆうぐれの夕月のいろ

○ 廣野鐘波

別れたる瞳にうつる夏の海青々として船ひとつなし

○ 戸田露葉

白光に名しらぬ花のつときさくねむたき夏の高原の朝

○ 大槻和三郎

うつむけば涙ながるゝかなしさに幾夜月てる空を見にけむ

○ 安江白雨

ものいはてわづかにいくるあはれさは磯の小蟹にはさみなきごと

○ 米田一雄

心ちよくてくびにふるゝ絹の袂夏のまひるを大通り行く

○ 葉浪快三

少女たち祇園の夏の夜の月を好みて長き袖ふりてゆく

應募和歌は 東京市小石川區原町百十四番地
尾上柴舟宛の事

俳句

秋の雲

高田蝶衣選

海滑る秋雲や鹽田歩りく鳥　月精
舟手入れの江の舸秋の雲暮るゝ　同
かゝる夕は竿忙しなど秋の雲見居て　同
炎帝の乗捨てし雲か秋のお山晴　同
秋の雲荷なりて一浴を懐しむ　同
秋雲や寺名皆詩によき思ふ　愛香
湖景殊に暮雲の秋ぞよかりける　同
心さながら水に似て秋の雲を見る　同
干絲を手繰ればとぶや秋の雲　芳葩
蒟蒻踏む背戸尻秋の雲冷えて　同
秋雲や山頂に路隠る草　同
薄き情の身に泌む日なり秋の雲　銀竹
秋の雲杜の樹香皆異れり　同
歌妓の戀淡かりし秋雲と消ゆ　同
宗論に劍も磨く秋の雲早き　双柊子

叛軍の大捷を秋の雲はとぶ　同
香具師の馬車に秋雲遠き水郷や　同
霧晴れに舟場藻の香や秋の雲　冲雲
札所巡りの出舟宿秋の雲流る　同
花賣の訪ふ井戸や秋の雲明り　同
一鳥を趁ふ眼搭得ぬ秋の雲　萩泉
忌に放つ鳥や夕づく秋の雲　同
秋の雲歸臥の身に友皆遠し　同
城の矢窓繕へり秋の雲仰ぐ　明兮
秋雲や海に向く漁家と眠り船　同
牧越えに山らしき雲の秋成れる　更二
便借りの渡海凪に秋の雲見つゝ　同
秋雲に前林の杉伸も見る　九天
干魚選る屋並秋雲暑く過ぐ　同
山中に病む供人や秋の雲　央水
二番豆腐濟めば草刈る秋の雲　同
秋の雲動くと見れば微風冷ゆ　竹梅
塚と積む馬糧干草や秋の雲　同
峯鷲の尾羽落す牧秋の雲　暘谷
羽白大鳥飛ぶ濤の果秋の雲　同
唄誘はれに轆轤を捲けり秋の雲　松葉

島觀音に潮强き詣づ秋の雲　同
歸養遅れて秋に立つ雲のちぎれ樣　東寧

臺灣季題押稻

雲のなびきに風知りて稻も押す間や　同
秋の雲枯木に孵り飛べる蟲　雨春草
女郎花の黄よりも秋の雲淡う　千森
笹高原に阪風が淋し秋の雲　旗々晴
老家長野に歴遊ぶ秋の雲　一寸江
砦築く下檢分を秋の雲澄みて　胡鬼子
湖よりの川長し秋の雲と會ふ　觀葉樹
浴場建てて秘めし加療や秋の雲　哭鬼哉
潰兵の越えし知る山秋の雲　耳山
秋雲の夕映えつ森は射朶ひゞく　三石
柴栗の虫熟れ峠秋の雲　天行子
秋の雲穗屋の芒の屑と見ゆ　刀水
遠望を雲纒ふ秋林の塔　雨霽人
秋め雲一二の出礁鷗とぶ　及山生
姙孕む寺の寂びれや秋の雲　思汀
餓孝者の供養鐘秋の雲に消ゆ　馬風
閑に居ての弄策や秋の雲の散る　國郎
秋の雲洪水あとの寺門施米など　百花

不時に咲く拓榴の花や秋の雲　象眼
鹽釜のとろ〳〵燃えや秋の雲　神風
秋雲や鳶の捨て魚草に光る　蒂姑
綿初穗摘みに宮道秋の雲　孤風子
挽歌かなし秋の雲行き行き交ふて　錦櫻

前號正誤

故實明るき翁。とあり七夕他より寂ぶ　碧外子
拾ひ貝にも書く歌や七夕海に來て　床○窓子

課題
霰　十月十日〆切
煤拂　十一月十日〆切

規定
一人卅句限△淡路假屋在高田蝶衣宛
用紙半紙　中央公論句稿と表記の事

新年號課題　新題の句○○○○（新年、冬、春）

投吟家諸君の見聞する年中行事名物其他の節物にして從來の季寄に漏れたるもの及新事物▲題數を限らず△各題別紙にし説明を附する事▲句數一題に付十句以下。

評論

英國政府黨苦境

近來英國政府黨の勢力は、俄然失墜し來れるの感あり、試みに昨年十一月以後行はれたる補缺選擧を見よ、着々として統一黨の勝利に歸せるにあらずや、

選擧區	前回の投票に於ける自由黨側の多數	新投票に於ける統一黨側の多數
オルダム	三六六八	一六三二
南ソマセット	四六七	一四八
北エルシャ	三五四	二七一
南マンチエスター	二四二五	五七九
クリュエ	一七〇四	九六六
西北マンチエスター	四四五	一二〇二

然かも最近殊に自由黨の膽を寒からしめたるものは、蘇格蘭ミッドロシャン（エデンバラー）に於ける下院議員補缺選擧となす、同區は例のグラッドストォンの根據地たりし所にて、自由黨にとりては、金城鐵壁も啻ならざりき、然るに九月十一日開票の結果は下記の如くなりき

統一黨員ホープ氏	六千〇二十一票
自由黨員ショー氏	五千九百八十九票
勞働黨員ブラウン氏	二千四百十四票

是何故ぞ、一は自由黨對勞働黨の軋轢に依り、一は强制保險法の不人望に依る、自由黨對勞働黨間の軋轢はハンレーに於ける勞働黨根據地に自由黨候補を立て、兄弟相爭ひたるに始まり、爾來到る所、自、勞、統三黨の競爭を見ざる無し、强制保險法反對は、醫師、實業家、勞働者間に齊しく激烈なるが、是その養老年金法と異り、保險料支拂其他の面倒あり、又英國の社會組織、獨逸と異り保險法の實施一層困難なるが爲めならん、然かもその理由は少焉らく問はず、自由黨政府が聊か衰運に向へるは、殆んど昭々瞭々たり、斯くの如きの時に當りて起り易きは、政府の內訌とす、知らず首相アスキス氏と藏相ロイドジョルジ氏と果して能

く誠意協力舊の如くなるを得可き矣、

遮莫、敵派統一黨を見れば、多士濟々たりと雖も、特に傑出せるの名材なく、黨首ボナー、ロー氏の如き、愛蘭ウルスターに於ける自治案反對暴動を敎唆せるの外、見る可きもの無し、是蓋し自由黨をして聊か其處に安んぜしむる所以なる可き乎、

勃牙利の開戰熱

勃牙利、マセドニア自治を以て土耳其に迫り、之を許與せずんば、宣戰布告せんと威喝す、其狀宛然他國領土を以て自國の物と見るに似たり、

是何故ぞ、他無し勃牙利人は、マセドニアの人口中自國民を以て最も多數なりとするに依る、勃牙利人カンチエフの統計に曰く

マセドニア人口總數二百二十四萬八千二百七十四

土耳人四八九、六六四　勃牙利人一、一八四、〇三六

塞爾比人七〇〇　希臘人二二二、一五二　アルバニヤ人一二四、二一一　其他二二四、五一一

然かも之に反して希臘人の統計を見れば希臘人六十五萬六千とし、勃牙利及塞爾比人双方を合して僅かに四十五萬とし、塞爾比人の統計を見れば、塞爾比人二百〇四萬八千、勃牙利五萬四千となす、百八十四萬四千と五萬四千と何ぞ其相距るの遠けきや、[illegible]

各國人の手に成るマセドニア人口統計、斯くの如く相異る所以は如何、他無し、自國人口を最も多きが如く天下に紹介して、土國分裂の際マセドニアを自領に合併せんとする列國の野心に出づるに外ならず、而して勃國今や此挑戰的態度に出づ、塞希諸國も亦畫策縱横、他日の地歩を造るに於て他の後に落ちざるなく、マセドニアの事、益々困難なるに至る可き也

秘魯新大統領

九月二十四日、アゴストオ、レギア氏、秘魯大統領の職を去り、ギレルモ、ビリングハースト氏、其後任となる、知らずビリングハーストとは如何なる人ぞや、

氏は一八五一年を以て生れ、英人の血系たり、ワルパライソ及びペノス、アイレス等に於て敎育を受け、一八七四年以後、政界に起ち、一八七八年始めて秘魯議會に入れりき、智識頗る該博、就中そのイクイク州

の經濟及社會狀態に精通せるため、議院に於ても有用の人たり、秘智紛議に關しても亦た多大の効績ありたりき、而してイクイク州が智利に讓與せらるゝや、氏は智利に聘せられて同地行政を助け、次て秘魯領事として同地に滯在せしが、一八九五年秘魯共和國副大統領となり、名聲大に揚れりき、爾後一時里馬市長として、大に民心を得たりしが、遂に八月の總選擧に際し、大統領に當選するに至りし也、
　資性慈仁に且つ浩量を以て聞ゆ、此人を得たる秘魯國民の幸福、又以て想像するに足る、

米國とニカラグア

　八月下旬、米兵ニカラグア共和國に入る、中米に於ける米國の侵略的政策、着々歩を進めつゝあるを見る可し、
　顧みるに四十二年末にも米國軍隊上陸し、遂に十五年間同國大統領たりしゼラヤ氏も沒落し、中米聯邦成立の希望、夢と消えぬ、爾後エストラダ、假大統領となり次て間もなく新憲法を制定し、自ら正式大統領たらんとせしが、競爭者にメナ將軍ありて、素志を遂ぐる難きを見、之を放逐せんと企てたれども、成らざりき、エストラダ退職後、副大統領アドルフオ、ヂアス大統領となりしが、之れ亦たメナ將軍の希望を忌み、最近大統領選擧に際し、詐略を以て之を陥れ、自ら勝利を博するを得き、而して今回の革命戰亂は即ちメナ將軍が此亡狀に憤慨して、兵を起せるものに外ならず、
　米兵已に上陸す、此兵亂の鎭定、疑惑を容れず、何となればニカラグア國の稅關は米兵に占領せられて、叛軍は軍資を仰ぐ可き金庫なかる可ければ也、然かも同國の獨立は之より益危からん、況んや運河開通後、米國の中米發展策は一層活潑なる可きに於てをや、

共和黨の小勝

　米國共和黨、メーン州選擧に於て勝利を博し、議會に於て二箇の新議席を得、其得意又以て想見す可し、蓋しメーン州選擧の結果は、大統領選擧前に行はるゝが故に、屢〻その景氣に影響する所多く、勝つものは勇氣百倍し、負るものは英氣沮喪す、況んや同州は昨年選擧に際して民主黨に多數を占められたる所なる

に於てをや、

然りと雖も、之等は以て大統領タフト氏の頽勢を救ふに足らざらん、一般人心已に君を離れ去れるを奈何、

ロオスヱルト攻撃

曾つてロオスヱルト氏の味方たりし米國上院議員ラフオレツト氏、猛烈なる攻撃を之に加へて曰く、

ロオスヱルト氏はツラストの最大親友なり、氏大統領に就任せし時にはツラストの數百四十九なりしに、その退任に當つては實に一萬に增加せりき、予は斯る人がツラスト排除の途を發見す可しと信ずる能はず

と、亦た一面の眞理あり、然かも彼は何が故に今春の分離以前に此論をなさゞりし乎

新刊批評

▲家庭醫典

音尾博士編
東亞堂發行

音尾陸軍一等軍醫(博士は著者の名にして學位にあらず)の編著にして菊版七百餘頁の大册なり。一卷を衛生篇治療篇の三大部に分ち、各部を又十數編に分ちて一般の生理衛生より說き起し、數百種の病症に對する應急の手當、看護の心得、治療の大要を述へたり。新聞雜誌に掲げらるゝ衛生問答を集めたる如き嫌ひなきにあらざるも、何れの家庭に備へ置きても重寶なる書也。(定價二圓七十錢)

▲列傳躰明治史

高橋淡水著
東亞堂發行

一名日本新英傑傳と稱するものにして、「維新史」「憲政史」「外交史」「教育史」「軍事史」「實業史」の六編に分ち、各部に最も功勞ありし偉人數氏の評論を載せたり。(定價二圓二十錢)

▲明治天皇御傳

須藤光暉著
金尾文淵堂發行

明治天皇の御崩御以來、御傳の世に出でしものなかなかに多けれど、大抵際物的のものにして、眞面目なる研究の餘に出でたるもの少きは慨すべし。本書の如きも三分の一は御製及び御容態書等にて埋めあれども、然し今迄出でたるものゝ中にては最も眞面目なるものゝ一にして一讀に値す、附錄中澤弘光氏の御肖像甚だ佳し。(定價金弐圓)

▲子供四十八景

巖谷小波著
中西屋書店發行

「いろはスケッチ子供四十八景」は巖谷のおぢさんの新著にして例によ

つてお子供さんの讀物として絕好のものなり。のみならず本書には面白き挿畫を數十個附したれば讀物としても見物としてもよし。(定價一圓)

▲活佛教　井上圓了著　丙午出版社發行

一時妖怪博士の渾名ありしよりして著者井上圓了博士を以て、書物ばかり讀んで居る死學者の如く想像するものなきにあらざれども、そは非常の大間違にして、博士は時務に對しても人生に對しても、生氣潑溂たる意見を有する活學者なり。此活學者が平常蘊蓄する所を傾け來つて活佛教の著あり。讀んで啓發せらるゝ所多し。(定價一圓十錢)

▲南極探檢私錄　多田春樹著　啓成社發行

南極探檢隊の書記長たりし多田惠一氏の著にして、探檢隊の成立事情より、歸著に至るまでの事柄を大略窺ふに足るべし。(定價八十五錢)

▲現代處世指針　中島德藏述　東洋大學出版部發行

社會の各方面より著者に向つて質疑し來れる問題について著者がなしたる解答を集めたるものにして、家庭、職業、結婚、宗教、倫理、哲學其他の部門に起る重要問題についての著者の眞摯なる意見窺はれて面白し。(定價八十錢)

▲朝鮮最近史　戸叶、楢島共著　蓬山堂發行

朝鮮に於ける日清の關係の縺れ合へる頃より說き起して朝鮮の併合に至るまでの顚末を述べたり。朝鮮に對する知識の未だ一般に行渡らざる折柄一讀を値す。(定價一圓三十錢)

▲俠客篇　白柳秀湖著　東亞堂發行

親分子分の第二編にして、町奴、町火消、札差、博徒等の俠客の四種類に於ける親分子分の關係を叙せり。文章例によつて活氣あつて面白し。(定價八十錢)

▲大和民族新發展地事情　菊池[illegible]村編　内外出版協會發行

臺灣、朝鮮、滿洲、北海道、南米、北米等の實狀について其地の事情に精通せる諸大家の研究を蒐めたるものにして有益なる事情書也。(定價七十錢)

▲西鄕隆盛傳　下中芳岳著　内外出版協會發行

南洲翁の一生を何人にも分るやうに書きたるものなるが、四六版の紙質極めてあしき本なるに定價一圓四十錢は甚だ高過ぎるの感あり。(定價一圓四十錢)

▲旅行の衛生　中村時一郎著　東亞堂發行

題名の如く旅行中の衛生を說けり。(定價七十五錢)

（中付二の一）

(中付二の二)

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

明治天皇の勅撰せられたる帝國三千年史

●明治天皇の絶好記念書出づ●

明治天皇登遐せられて以來先帝に關する書籍陸續として刊行せられ全國の新聞紙殆んど毎日の如くに其廣告を掲載す然れども此等の書多くは新聞雜誌の拔萃にして何等の權威、研究なき際物的一夜作りのものたり換言すれば所謂大家名流の談話を糊と鋏とを以て拾輯し雜然之を臚列したる杜撰多き書籍といふを憚らざる也我が文教育會同人は身苟も職を教育に奉じ平素忠君愛國を力說し團體の精華を顯揚するを以て任務とする者今爰に本書を謹刻し六千萬の忠良なる我が同胞諸君に薦めて空前の大聖帝明治天皇を永遠に記念せんとするに方り先づ諸君に對し本書が斷じて美名を冠して衆愚を欺かんとする編纂物にあらざることを聲明し併せて明治天皇の御遺著とも謂ふべき最高最貴の勅撰書なることを聲明し置かざるべからず

宮內省御藏版

勅撰三千年史

大政紀要

菊版布裝釘　函入美本全一冊　定價金壹圓六拾錢　郵稅內地十二錢

明治天皇英姿天縱叡慮宏遠維新の際に誓はせ玉へる五ケ條御誓文の御趣意に基き明治廿二年を以て立憲政治を施かんとし玉ふや先づ其準備として歷朝大權の所在變遷の跡を叙し、開闢以來政治隆替の由る所を明かにするの必要を感じさせ玉ひ、詔を岩倉具視公に下して神武創業より明治十六年に至る歷朝大政の綱要を畧記せよと宣はせ給ふ岩倉公乃ち自ら總裁となり山縣有朋公を監事となし、當時學界の明星たりし故福羽美靜子、故西周氏を編修委員長となし、廿四名の國史國語學大家を編輯委員となし科を設け編を分ち提調纂述、手書本百有卷を作り「大政紀要」と名け謹んで之を先帝に上呈せり先帝之を嘉納し玉ひて玆に

王朝以來唯一の勅選國史を作らせ玉へり

惟ふに我國古來六個の勅撰國史を有すと雖も、其等は皆悉く王朝時代の撰にかゝり一局部一時代の事蹟を窺はしむるに足るは勿論なれども古今三千年を網羅して全局を通觀せしむる勅撰國史は此「大政紀要」を措いて他にあらざるなり學者文人の物せる皇國三千年史は明治の代に幾百となく刊行せられたりと雖も其等は要するに私史にして神聖可不侵の國史にあらず神聖不可侵の帝國史は唯だ「大政紀要」あるのみにして「大政紀要」は實に

歷史界の最高オーソリチー

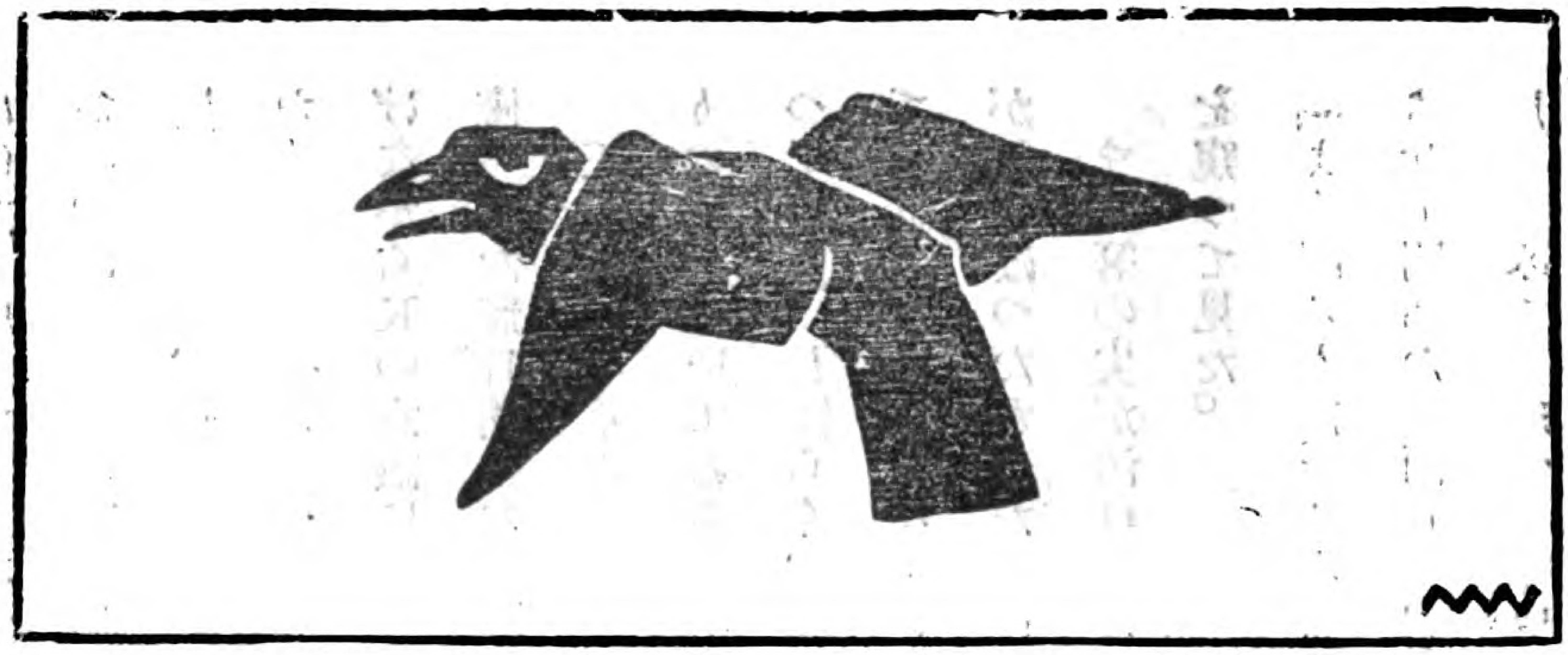
なり國民精神の淵源を知らんとする者國體精華の眞髓を知らんとする者明治天皇の御聖德を慕はんとする者須らく此書を讀んで自ら益且つ之を子孫に傳へて家寶となせよ

●萬民必讀の國家的大寶典也●

（中付二の四）

發行所　東京市下谷區谷中清水町一　文教會　大賣捌　東京神田小川町一　大野書店　振替東京一四一六　電話本局三一五四

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す



白痴

小川未明

一

Kは、職を失つてから、早速生活の途に窮した。長らく居た下宿屋も、遂に彼を見限つて數月間の滯つてゐた宿料を棒消しにして立退きを迫つてから、其後は、彼は、所々方々の下宿屋を歩き廻はるやうな運命に陷つた。

この場末の成たけ知つた人と顔を合せぬやうな、もとより、前の下宿屋の人々に容易に知られさうに思はれない小さな下宿屋に來てから、もう幾日か經つた。而して、毎日のやうに、狹い室の中に、障子を閉め切つて、疊の上に蒲團を敷かずに倒れたまゝ眠りを貪つたのである。

其れは體が非常に疲れてゐるためであつた。暑さのためばかりでない神經の衰弱してゐた爲めである。暫らく眼を閉じてゐると、痺れるやうに、筋肉

は倦怠を感じて、さながら深い溪底に引き込まれて行くやうな不快な眠りが彼を襲つて來た。而して、彼は、此時自分の頸を切られても分らぬやうに、前後も知らずに眠つた。ふと心が何かの怖しい幻影に驚かされて、眼を開くことがあつても、また忽ち本能の力に打勝つことが出來なくて眼を閉ぢてしまつた。晝飯時分になつて、女中が、膳を運んで來て、障子外の緣側に膳を置いて行つた。其の音が、朧ろげながらKの意識に止まつたのであるが、直に起き上つて、飯を食べるといふ氣力もなかつたので、其儘、また幾時間となく眠つてしまつたのである。

正午過になると、太陽が西に廻つて斜めに射し込んで來た。下宿屋の庭には黃色な大きな輪の日まわりの花が咲いてゐる。其の花の上を越して日は緣側の上に當つてゐて、女中の置いて行つた膳が熱くなつてゐる。しばらく、蟬の啼聲がするばかりて四邊は靜かてあつた。二時頃、足音をばたら〳〵とさして、さもだるさうな歩き付きで肥つた背の低い先刻の女中がやつて來た。晝眠てもしてゐたと見えて瞼が腫れぼつたかつた。彼女は、默つて、膳の上を見下してゐた。

まだ箸の尖が汚れてゐる樣子がなかつた。女中は、ちよつと障子を細目に開けて其の間から中の樣子を窺つて見た。

『よく眠る人だ。こんなに眠る人はないよ。』と獨言のやうに言つて、今度は手荒く障子をピシリと音をさせて閉めた。而して、鼻唄をうたつて彼方に二歩、三歩、行きかけたが、また思ひ返したやうに、立戻つて來て、緣側に置いてあつた膳を持つて行つてしまつた。

巴旦杏のやうに爛れた日が、高い町家の蔭に落ちて、もう此の下宿屋の縁側の上に日が射さなくなつた時分になつてから、Kは、漸く重苦しい眠りから眼を醒した。而して意識の不透明な頭で、天井を見上げてゐながら欠伸を二つ三つつゞけてした。室の中は、煮え返るやうに暑苦しくて、一種の悪臭ある炭酸瓦斯に滿たされてゐた。彼は、やつと起き上つて衣物の前を掻き合すと、窓の際に歩み寄つて、北向きの窓の障子を開けた。

窓の前には、僅かばかりの空地があつた。略ぼ三尺ばかりで隣の垣根になつてゐた。此の垣根と窓との距離は、少しばかり體を窓から伸び出して、手を差し出したなら、垣根に指頭が届く程である。しかし其處は、常に日蔭となつてゐて、濕り氣のある地肌の色が黑い。障子を開けると共に冷かな風が何處からともなく入つて來て、心地よく彼の熱した頰に觸れた。而して、古びて、朽ちかゝつた垣根の際には、隣の方から伸び上つた、葉の細かな柘榴の樹があつて、可なり太い枝を此方に垂れてゐる。其の枝に付いてゐる無數の細かな葉が、風があつて、ちら〳〵と躍つてゐる。其の葉の隙間から、みづみづしく冴えた晩方の空が透されて見えた。

彼は、しばらく、窓際に立つてこのうす緑色の空を眺めてゐた。すると、何となく、人懐しい感じが心に萌して來た。

二

Kは、今度は此方の縁側に出て立つてゐた。而して、茫然として何を考へるとなく彼方の町の屋根の

上に引つ懸つてゐるうす紅い雲を見てゐた。何となく、昨日より空が高く見えるやうな氣がして、もはや夏の裏に冷かな秋の物悲しい顏が隱れてゐるのを感じた。

やがて、十月が來るであらう。其頃になると、空の瞳は、益々澄んで、街に連つてゐる電線の上を木枯が吹いて、其の細い金屬が悲曲を奏てるのである。Kは、其の時分には、自分は、何處にどういふ生活をしてゐるだらうと考へた。

彼は、こんな空想に耽つてゐるうちに、空しく、今日も暮れてしまつたことを知つた。毎日のやうに職を求めて歩いて、いろ〳〵な人を訪ねた。紹介してもらつた人から、また他の人へ紹介狀を書いてもらふやうにして、知つてゐる人、知らぬ人の分ちなく、出來るだけの手蔓を探して新聞社や雜誌社などへも行つて見たけれど、直に月給をくれて生活を安全にしてくれるやうな處はなかつた。彼は、まだこれから後も、先方で厭な顏をするのを知りながら、其等の人々の處へ歩き廻つて賴んで見るより他に生活の道を見出す術はないと心で思つてゐた。而して、今日にも、また此の下宿屋の主婦が宿料を催促にやつて來たなら、今夜、逃げてしまふと考へてゐた。此時、彼の心は、あの白く乾いた道の上に走つた。車が通り、人が通つて、白い烟のやうに沙塵のたへず立ち上つてゐる濠端の道を電車にも乘らず歩いてゐる。額際から汗がたくりたくりと足許に滴るのであつた。Kは、かうして毎日のやうに口を賴んで置いて、最も有望に思はれた先輩の家に出掛けて行つたのであつた。遂に、其の方も駄目といふことが、先刻はがきで知らして來た。彼は、其のたび〳〵歩いて行つた道の光景を思ひ浮べたのである。

此時、勝手許の方で、主婦の物を言つてゐる聲が聞えた。Kには、此の四五日といふもの、主婦の聲を聞くたびに心が暗くなつた。其の尖つたやうな物の言ひ振りが、たへず自分に當て付けて他人に向つても物を言つてゐるやうに聞えたからである。Kにとつては、また自分の食料を拂はずにゐるといふことは、消極的に罪を犯してゐるといふやうな氣持がした。而して、主婦が自分とは、全く關係のない他人に向つて話してゐる言葉を聞いてすら責められるやうに胸が躍つた。而して、主婦はたへず自分の拂つてゐない下宿料に對して一刻でも、これを心から忘れるやうな女でないと思つた。かういふやうにたへず自分が此の主婦から疑はれてゐると意識すればする程、此の下宿屋に居惡くなつたのである。

Kは、とう／＼眠つゞけて、晝飯を食べずにしまつたことを、せめては幸福であつたとさへ考へたのである。何となれば、飯を食べる時、最も自分の食べることについて責任を感じた。故なくして、全くの他人が自分に無代價で食事を與へるものでないと知つたからである。同時に、自分を疑つて決して好い感情を持つてゐない主婦の心を直覺することが出來た。其れを免れることが出來たからである。

彼は、主婦に對してばかりから感じたのでない、あの、うすら默つた、よく肥つた背の低い下女にすら何となく氣兼をせなければならなかつた。Kは、自から自分の卑屈を耻ぢた。此の廣い世の中に自分の坐つてゐる場處がなかつたのである。

其れにしても、もう日が暮れかゝつてゐる。何等か此家の秘密を探るやうな考へで、耳を澄してゐると勝手許の方で茶碗の觸れ合ふ音が聞えた。Kは、また、夕飯の時刻が來たことを思つた。飯を食べる

時が來ると、幾たびか心の中でくりかへされた厭な考へや、屈辱とも名づけるやうな感じが、新に頭に上つて來て、どうしても、此時、此の家では、夕飯を食べるやうな氣持になれなかつた。きつと、女中に此の夕飯を自分の室に持つて來さす場合にも、主婦は、いろ〳〵のことを考へたであらう。『果して、此の飯の金を拂つてもらへるだらうか？』と心のうちで幾たびもくりかへし〳〵考へたに相違ない。而して、もし拂つてくれぬなら、こんなにしてお客扱ひにして膳を出すのは馬鹿らしい。そんな理由はないと心憎く思つたに相違ないのである。

それでなければ、もとより自分を憐れむがために、または尊敬するがために持つて來る夕飯でないのだから、社會の習慣律に從つて止むを得ず運んで來る食事といつて差支へないのであつた。それは、かうして泊めて置く限りは、一日に、三度は食事を出さなければならぬといふ掟に從つたのである。人間が、一日に三度食事をするといふ極めて此の社會の普通である習慣に對して、反抗することが出來ずに仕方なしに持つて來る食事であると思つた。

Kは、生きんがらめには、これ位の恥や、外聞は忍ばなければならぬと知つてゐる。けれど、何となく、今日ばかりは夕飯すら食べたく思はなかつた。彼は、默つて、緣側から庭に下りると、日まわりの大きな葉蔭に身を隱すやうにして、裏口から町に出たのであつた。

町に出ると、いろんな人々が、まさに遠く去りかけてゐる。而して來年までまためぐつて來ない夏の夕暮方の赤々とした光線の漲つてゐる道の上を歩いてゐる。Kは、このありふれたもうたび〳〵見た景

色に對しても、何となく其の別れが惜しまれた。而して、同じくこの見飽きてゐる社會の有樣に對して、淡い懷しみと新しい興味を感ぜずにはゐられなかつたのである。

しかし、たとへ自分ばかりが、かういふやうな心で眺めても、是等の人々は、誰れ一人として自分の生活について心配を分つてくれるものはない。また、自分が、誰の袂を捕へて生活の苦しみを訴へて見やうもない、若しあの漠然とした、五千萬の同胞がといふやうな意味の心持からして、自分が、知らぬ人の袂を捕へたなら、きつと道を歩いてゐる人は、自分を狂人だといつて振り放つて冷かに睨んで行くばかりでない交番へ訴へて出るかも知れない。而して、自分は、通行を防害した理由で監禁せられるかも知れない。社會といふものは、すべて其樣に個人的に出來てゐるものである。然るに、なぜ、自分は、是等の人々、殊に女に對して懷しいといふ感じを抱くであらう。Ｋは、自分の心に問ひたゞして、其の原因を博愛といふやうな、道德學者が名づけるやうな美しい意味の感情とは見做さずに、もつと生物にとつて必然の關係ある、性慾の發作と見做したのである。其の性慾の發動は、無自覺で、盲目的のものである。其の極めて、淡い時には、詩歌的情緒となり、最も熾烈の時に於ては、姦淫となり、野獸と等しい、人類の原始的時代に遡つて、殘忍性を帶びて來るものである。

三

Ｋは、財嚢を探つて中を覗いて見た。幾何の錢もなかつた。彼は、限りない淋しさを心に感じた。而して、暫らく、音信を絶つてゐた故鄕の兄の顏を眼に描いたのである。兄の生活に窶れた青い顏を見る

と手紙を出すやうな氣にもなれなかつた。獨り、道を歩きながら、行李の中に殘つてゐる品物を賣ることを考へてゐた。しかし着物といふ着物は質に入れ盡してしまつた。僅かに殘つてゐる數冊の書物は、これを古本屋の店頭に並べて置いたならいづれも賣ることを禁止になるやうな種類のものである。而して、二たび欲しいと思つても容易には手に入らないやうな書物である。

Kは、ある會社につとめてゐる時には、忠實に其の職に働いたのである。しかし、他の多くの人々のやうに自分よりも上位の椅子に腰をかけてゐる役員等に對して諛ふことが出來なかつた。而して、常に神經質の瞳で、其等の人々の顏を見てゐた。これが裏面の原因となつて、いつまで經つても、月給が上らなかつた。而して遂に、職を奪はれてしまつた。

其れからは、Kは、新に職を求める考で所々方々を歩き廻つたけれども、誰れも、親切に其の願ひを聞いてくれる人はなかつた。さうしてゐるうちに、下宿料を拂ふことも出來なくなつた。それどころでない湯にすら幾日も入らないやうな境遇となつた。かうして、彼は、幾たびとなく下宿屋からは追はれて、或る夜など、あてもなく寂然として眠靜つた町の中をぶら〳〵歩いてゐて明かしたこともある。

其樣な晩などには、殊に、なんて人間は此の世界に生れて來たのだらう……もし生れて來なかつたなら、こんな苦しみは受けずに濟んだらう……といふやうなことが考へられた。また、生れて來たものが、食ひ、而して働き、眠るといふやうなことは大自然の掟のやうにも考へられたのである。其れ、

が出來ない社會にあつては、自分が決して惡いのではない、すべての人間が惡い習慣を作つてしまつて、それに惱まされてゐるやうな氣がしたのである。

もう、一度すべての人間は原始に立返つて、生活の道を歩き直して出て來なければ、幸福は、此の世界に於て得られないやうに思つたのである。其れは自分の身の周圍を取り卷いてゐる、重苦しい、而して暑苦しいあらゆる虛飾のための事物や、誤られたる目的て Civilization の造つたものを破壞することてあつた。もう一つは、こんなに苦しい境遇にありながら、たえず盲目の本能が襲つて來て、それがために、足場が、闇となつて狂ふ時がある。いはゞ營養不足て、神經が衰弱して瘦せてゐる體にも、本能の熱火だけは宿つてゐて意地惡く燃える時があるのてある。其のたびに、其の人は、傷ましい人生の姿を露出した。彼れは、また其の一人てあると自からも知つてゐる。

かうして社會の生活といふものに苦しめられてゐる間にも、たへず頭を擡げて、五體の中にうごめき騷いてゐる熱い盲目の性慾の刺激がある。其の刺激が、彼に兩性についての研究を促したのてある。Kは、いろ〳〵と金の工面をして、其の精神的もしくは肉體的の煩悶の起つた當時に於て、經濟學に關する書物と性慾研究に關する書物とを買ひ求めたのてある。而して、尙ほ、此の零落をし切つた最後まて賣らずに殘してあつたものは、最近露西亞の極端なる理想家の悲慘な生涯と彼等の運動とを書いたものと、も一つは、全く肉的な、Sensuous な意味に於て、觸覺に起るべき筈の幻覺を空間的に、視覺と想像力とによつて滿足させるための書物とてあつた。其れは、千九百〇三年に獨逸のベルリンて出版した精

巧を極めた裸體寫眞の大部のものである。これは高價な書物で、これを買ふために書物も着物も犠牲にしたことを覺えてゐる。其れ程、好奇心を誘つた書物である。其他に、もう一冊醫學上より見たる性慾の觀察を書いたものがあつた。

これだけの書物は、どんな場合にも賣るのが惜しまれたのである。常に孤獨な、悲しい心を抱いて街頭を歩るく自分に勇氣をつけてくれたものだからである。また、兩性問題が、全く、人生の秘密になつてゐる感じがするのを科學的に痛快に解剖したり、また虚飾と物質美で眞相を隱してゐる女の肉體を赤裸々に露き出して見せることは、少なくも人生の表面を包んでゐる虚僞の誇りを打破したものである。而して、自分の美に對する憧憬をやはり現實的な醜惡なものとして考へることが、愉快であつた。

美しく着飾つてゐる女を、美として憧がれるよりは、赤裸々にした女を見て、動物として取り扱つて空想した方が生々しくて人間といふものに觸れたやうな氣がする。……自分は、現實主義者であると思つた。

Kには、其等の二三の書物が頭に浮んだがそれを賣る氣にはなれなかつた。

Kは、今、夕暮の町の中を歩いてゐる。空は、微茫として、白い息を吹き込めたやうにどんよりと眠氣を催して、夢のやうに頭の上に流れてゐる。全時に町の屋根の上に流れてゐる。星の光りは、遙かに霞んで瞬きをしてゐる。Kは、いつも書物を賣り慣れた古本屋の主人の顏を目に描いた。鼻の尖つた、眼の落ち窪んだ顏が意地惡く、また頑固さうに思はれたのであつた。

四

四邊は、ほんのりと暗くなつた。町の兩側に點つた瓦斯や電氣の光りは、彼の眼に美しい光りを投げた。

Kには、三年ばかり前に暫らくの間仝棲してゐた女がある。其の女とは、事情があつて、別れてしまつた。お葉といふ名である。彼女が、自分に、いつまでも——また遇ふ時分までの紀念にと——置いて行つた指輪があつた。Kは、今、其の指輪のことを思ひ出したのである。

其の仝棲してゐた家といふのは、古い家であつて、六疊の居間には、西向きの高窓がついてゐた。しかし何となく濕氣のある、暗い室であつた。壁の色までがうす鼠色に塗られてあつた。窓の外は、僅かばかりの庭になつてゐて、庭には、別に何の木も植えてなかつた。たゞ雜草が、丈高く伸びて生ひ茂つてゐる。而して、夏の終り頃に、早くも此處には秋が來てゐる感じがした。

或る日、其の庭を二人で眺めてゐながら、行末のことや、其の日、其の日の生活についていろ〳〵と女と語り合つたことがある。其の時、女は窓に凭つて、茫然として下を向いて、自分の指頭を眺めてゐたが、ふと、左の中指にはめてあつた指輪を拔きとつて、

「これをあなたにあげて置きませう」と言つた。Kは、默つて其の金の指輪を女の掌から受け取つた。もう、庭には日が蔭つてゐて、黃金の指輪には空の殘光が映つて、遠い、昔のロマンチックな物語りが思ひ出された。それは森の中で悲しい戀が、あるプリンスとあるプリンセスとの間になされたといふこ

とてある。其の時、森では、鳥が啼いたといふことだ。……

さながら、逝く夏を悼むやうに、蜩の啼いてゐる聲が、町を越へて、彼方の靜かな夕暮方の森に起つて、西の夕燒の空に響くやうに聞えてゐたのである。其の女と別れた日のことが今でも記憶から忘れられない。いまだにあの、古い家の、あの室の有樣などが目に殘つてゐる。草の風に吹かれてゐた、淋しい庭の面影も目に殘つてゐる。

今は、ちやうど其の夏が三たびめぐり來つて、また過ぎて行かうとしてゐるのである。やはり、あの室に西向きの窓はあゝなつてゐるに相違ない。もし、日暮方の時分にあの窓際に立つてゐたなら、遠くで、やはり行く夏を惜しむ蜩の啼聲が靜かな海のやうな空に響いて聞えることだらうと思はれた。Kは、あてもなく燈火の明るい夜の町を歩きながら、其の指輪のことを考へた。

『あの指輪を賣つてしまふか知らん。』と、彼は、口のうちで言つたのである。而して、眼を擧げて、物狂はしげに往來を通る人々の顏を眺めた。

日は、もう全く暮れてしまつて、此の世界は闇に包まれてゐる。たゞ瓦斯と電氣の光りが人々の顏をほの白く浮き出して見せた。而して、餘程近寄つて見詰めなければ往來を歩いてゐる人々の顏の美醜さへ分らなかつた。彼は、うち濕つてゐる夜の大氣の底に、默つて開いてゐる薔薇の花を思つた。而して、ほんのりと白い其の花の影を見たばかりでは、何となく心に滿足が出來なかつた。近寄つて其の香ひを嗅いで見なければ滿足が出來なかつた。ちやうどこんな憾みはある。しかし、女のいろ／＼の歩きつき

や。妾は、Kの眼にはいろ／＼の想像をめぐらせたのであつた。

Kには、もう二たび、あの女と遇ふことは出來ないやうな感じもした。別れてからいまだに其の行衞が分らないからである。もつとも、分れた當座には、女の方からもたび／＼訪ねて來たり、手紙を寄來したりしたのである。さういふ時分には、Kは、女により多くの未練があつて、自分はつき纏はれてゐるやうな氣がしたのである、さう思ふと、何となく其の女のことを思ふのも、また顏を見るのも厭な氣持がしたので、どうかして、自分は、全く女から無關係になつて、責任を免れたいといふやうな考が起つた。而して、女に、分らせないやうにと度々下宿屋を換へて、自分の行衞を晦ましたのである。女は、二三度Kの勤先へも來たけれど、其の毎に忙しいからといつて遇はなかつた位である。

其のうちに其の年の秋となつた。さなきだに物思ひに沈み勝ちな彼は秋が來ると、ふと、其の女はどうしたらうと考へたのである。すると、是迄忘れてゐた柔しな彼女の眸や、微笑みが目に浮んで、しみ／＼とそれが懐しくなつて、遇つて見たくなつた。其處て、其の女の居處を探して見たが、もう、今迄ゐた處には居ずに行衞が分らなかつた。

やがて、冬が來た。冬になると、Kはよく朝から酒を飮んで、社に出るとストーブの傍で頰を赤くして不平を言つたものである。其の時分から、K自身は會社の方が面白くなかつた。やうやく冬が去つて、まだ花の咲くには早い、尙ほ、乾いた瓦屋根の建物の上を寒い風が吹いてゐる時分に、會社では人員淘汰があつた。其の際、ついにKは、心て期してゐた如く免職となつたのである。それから、かうして毎

日のやうに口を探ねて歩いてゐるが思ふやうな仕事が見當らないのである。而して、此頃しみ〴〵と人生の頼み難ないことを感ずると仝時に、異心を盡してくれた、別れたお葉のことが思ひ出された。彼の心は、あてなく其の女に憧がれ始めた。彼は、切りに其の女の行衞を知りたいと思つた。
「死んてしまつて、ゐないのかも知れん」と、道の上に立止つて、Kは、かういふと限りない淋しさが心に迫つて來た。而して、偶然に、今夜、其の女と此の道の上て出遇つたなら、どんなに嬉しからうと果ないことを想像して、行く女に目を配りながら、悄然として歩いてゐた。

五

明る日、Kは、小さな紫色の箱の中からお葉からもらつた指輪をとり出して眺めてゐた。其の金の指輪には、小さな赤い寳石がはまつてゐる。其の色は、赤いインキのやうな、小指を切つた時に小さな鮮紅な球形となつて湧き出る血の滴れのやうに、すき透つて見えた。而して、この指輪を白い柔かな指にはめて、お葉が膝の上に掌を重ねてゐる時の樣子が浮んだ。この赤い寳石の色はお葉の派手な着物の色を映して紫色を帶んて、ちやうど葡萄酒をコップに入れて透して見る時の色のやうに見えたこともあつた。

Kは、其の指輪を取り出して、自分の顔をこの小さな赤い寳石の上に映してゐた。もう幾日も、人間の濕味の宿つてゐる指に觸れずにあつた黄金の指輪は、さながら、昔のロマンチックな時分の記憶を夢るやうに、ほんのりとうすく息を吹きかけたやうな曇りがついてゐる。彼は、この指輪を紙に包んて下

宿屋を出たのである。

都會の端になつてゐる町の寺の境內には、油蟬の聲が、雨の降り注ぐ聲のやうに喧しく聞えてゐる。氣候は土用も、既に過ぎてしまつて、太陽は二たび遠く地球の上から去りつゝあつたけれど、まだ正午過ぎの暑さは、尙ほ、燒くやうに日は瓦石の上に照りはたゝいてゐる。彼の悄然として道を行く姿は、地上に小さな黑い影となつて落ちて動いてゐた。

Kは、ある鐵工場の横手に來た時塀について曲つた。赤錆の出た煙突が、コバルト色の光のある空に突立つてゐた。大空の下には、低い押し潰されたやうなブリキ葺の建物があつて、其處からは、常に濁みた鐵板を叩く響き音が聞えて來るのであつたが、此日は職工が休んでゐると見えて工場は沈默を守つてゐた。

Kは、壞れかゝつた亞鉛板の塀に添ふて道を曲がりにかゝると其處の隅に內側から突立つてゐた一本の楢の木があつた。枝を切られて、殆んど坊主頭となつて、太い幹が、僅かばかりの枝を差し出してゐる。彼は、この慘たらしい木の光景を見た時に、虐げられたる生といふことを考へさせられたのである。獨り、人間ばかりでない、すべての生物は、生を迫害する自然力に對して、常に苦鬪をつゞけてゐるのだ。

其の木の葉が銀のやうに、蒸し暑い風に翻つてゐた。

彼は、其處を曲ると、遙かに電車の通る響きを聞いた。だら〳〵と疲れたやうな町が眼の前につゞい

てゐる。このあたりには、軒の低い古着屋が幾軒となく並んでゐて、中には色の褪めた古着や、まだ新しい赤い色の巾などを下げてゐた。而して、紺色のものが、一種の重苦しい感じを何物にも感じ易い彼に與へてゐたのである。是等の多くの古着屋の間に混つて、一軒の紋書屋があつた。其の家の前に來ると、何となく乾いたやうな白ちやけたやうな陰氣な感じがしたのである。Kは、自から神經衰弱にかゝつてゐるから、こんな病的な氣分になるのだと思つた。

こゝまで來た時、其の紋屋の向ひ筋に、古道具屋があつたので、Kは、其の店に入つて、懐から金の指輪を取り出して、包んで來た紙を開いて、若い男の前に示したのである。其の若い男は、暫らく、眉を顰めて指輪を眺めてゐたが、やがて起ち上つて奥に入つて、試金石に摺つて眺めてゐた。其の石に摺る音は小さくて聞えなかつたが、Kは、此の瞬間に於てお葉の人格が試驗せられるやうな氣持がして胸がどき／＼となつた。やがて、男は、指輪を握つて奥から出て來た。而して、決して、これは僞物であるとは言はなかつたが、あまり金の性質がよくないからといつて、極めて、踏み付けたやうな安價で買ひ取らうと言つた。Kは、あまり足許を見た仕方に腹立しくなつて其の指輪を奪ひ戻して其の店を出た。

其の次にKの入つた古道具屋といふのは、彼の埃りつぽい鐵工場の塀に向つて道の片側にあつたので、彼が、來る時其の家の前を通つたのである。しかし其時はあまりさびれてゐるので入らなかつた店である。其處では、四十餘りの男がゐて、試金石で摺つて見るやうなことはしなかつたが、やはり安い價を付けたのである。Kは、何となくお葉に濟まぬやうな氣がした。けれど、前の店よりは幾分か價がよか

つたので、Kは、あきらめて其の指輪を賣ることにした。いよ〳〵、賣るといふ時に、何となく、もうお葉の記憶にまでも別れてしまふやうな悲しい氣分になつた。しかし、また、手に入るべき金のことを考へると、現實の快樂に打ち勝たれなく思はれて、直樣其の悲しみは何處へか消えてしまつた。而して、金を得てからのことばかりが考へられた。

十五六になる小僧が、其處の店から、Kの跡につけて下宿屋の前まで來て、金を手渡したのである。店を出る時、四十餘りになる男が、これが、始めての人から物を買ふ時にする、かういふ商買の規則であると言つた。彼は、盜賊と疑はれたやうな氣持がして、不快を感じた。而して、幾何の金を握ると、急いで下宿屋の戶口に飛込んで、自分の室に入ると、疲れたやうに机の前に倒れた。汗が、毛孔から迸つて、顏からも、脊中からも流れてゐる。

彼は、お葉の指輪を賣つた金で、一夜の歡樂を買はうと欲した。彼は、心のうちで、デカダンのお葉の身についてゐた品物を賣つた金で、自分の實用に供するやうな品物や、もしくは、眞面目な生活のために、買つたり、費用するのは、何となく不道德であると考へた。やはり、此の金は、一夜の歡樂のために使ふべき性質の金である。ちやうど始めて、お葉を買つた時のやうに、今夜を、ある女と共に樂しく、また淋しく送つて、而して、お葉の身の上を偲ばうと思つたのである。

六

Kの頭は、此頃病的になつてゐる。體は疲れて、神經が過敏に働いてゐる。而して性慾にしても、性

慾其物よりも、想像力を寧ろ樂しむと云ふ樣に、體力が疲れて、空想力ばかりが熾烈になりつゝあつた。

其の日の午後、Ｋは、下宿屋をぶらりと出た。自分の本能を追ふのは、傷ましい憧がれてあると、思つてすべての物を見れば、其處に幾千年の前から本能に盲從して來た以外には無目的で過ぎて來た人生が其儘になつてゐた。けれども、彼は、尙ほ自からを、所謂世間でいふやうな理想家もあるものだと假定して自分を色情狂だと思つてゐる。たゞ自分は、心で思ふことや、空想したり、想像したりすることを、理性で制し切れずに實行した輩のやうに、女の臂肉を、銳利なメスで剝り拔いたといふやうなことはしなかつたのである。しかし、彼等の心理狀態をよく瞭解することも出來れば、血を見なければ飽かないといふ程な殘忍性すら想像することは充分に出來たのである。彼は、狂ひ猛けるやうな好奇心と、ちら〳〵として焰の如く眩ゆかつたり、昏くなつたりする瞳で、道行く女の後姿を見送つたのであつた。

午後の四時頃の太陽は熟した林檎のやうな色をしてゐる。町の瓦家根がきら〳〵と濕れたやうに光つてゐる。電車道について、人が步いて行く。頭に輕く響くやうな軋り音を立て、黃色く塗つた電車が彼方を夢のやうに通つてゐる。また、橋の上には、車の音が轟いてゐる。自動車が來たり、自轉車が行つたりしてゐる中を女が行く。娘が行く。小僧が行く。また、女が行く。Ｋは、獸物のやうな、惡魔のやうな自動車を憎々しい目で見送つた。而して、ある坂の下の町角の氷店に入つて休んだ。ちやうど其時、店頭には他に二人ばかり客があつたばかりてあつた。Ｋは、がつかりとして、疲れた體をぐつたりと其

處のベンチの上に投げかけた。而して、うつとりとして、女が氷を削つてゐるのを見てゐたのである。

白く乾いた道の上を嘗めるやうにして、涼しい風が、何處からともなく吹いて來て、頰を掠めた。彼の心は、何物かを憧がれて、心地よい觸覺を感じた。其の氷を削つてゐる女は、年頃二十一、二の肉付きのしつかりとした强さうな女であつた。而して、紺ぽい着物が、括つたやうに其の堅い汗ばんだ肉體に纏はつてゐた。此時、Kは、怖しい想像をめぐらしてゐた――銀線のやうなメスが、電の如く赤い無數の腺纎を切つて縱橫に閃めく――同時に肉の緊張といふことを考へると、Kの頭は、ぐら〳〵として眼が眩んだのである。

「おれは餘程、神經衰弱だな。」とKは、口のうちで言つた。而して、眼を傍に外すと、直ぐ、次のベンチの上に女の、束髮の黑色の大きなたぼ櫛が置かれてあつた。Kは、其れを見ると瞳が燃え付くやうに、其の櫛の上に注がれた。黑い、しかも油の光りを含んだセルロイドの與へる重苦しい感覺――これは、あの女の使つたのだと思つたからである。

而して、Kは、次の瞬間には、この櫛を盜みたいと思つた。この櫛は、いかにいろ〳〵の連想を彼の心に呼び起して思ひ惱ましたか知れなかつたのである。彼は、もう、いかにして櫛を盜むかといふことより、心には何も思つてゐなかつた。

Kの眼は、慌しく四邊に漂つた。ちやうど深淵に映つてゐる太陽のやうに、犯罪の自覺に戰きながら、なほ、性慾を追う感情のために火の如く輝いた。而して、耳はガンガンと鳴り始めた。突然、奧から女

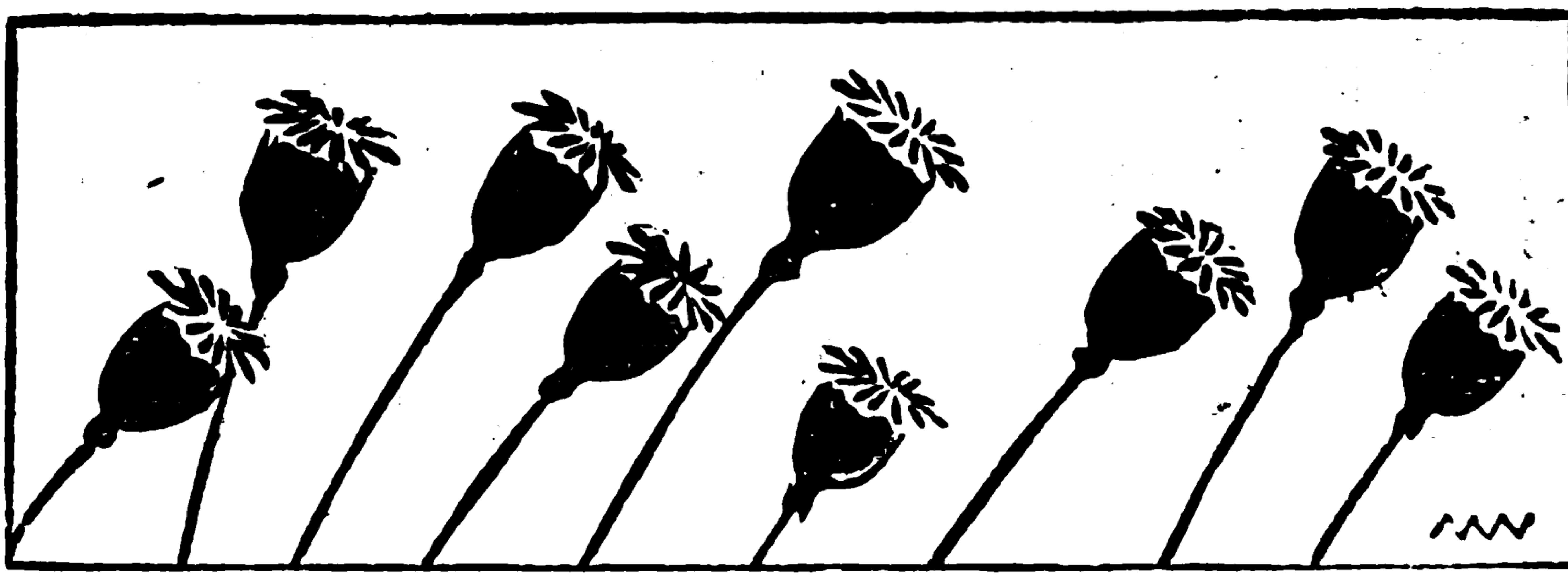
が顏を出して、

「お末、榻を片附けて置きなね。あんな處に邪魔ぢやないか。」と言つた。Kは、覺えず顏が赤くなつた。三十五六の痩せた女の顏がまだ此方を見てゐる。Kは、急に空想から醒された。而して限りない哀愁と自からを嘲り、憐れむ心とが萌したのであつた。――己の心のうちまで、あの女に分る譯がない。偶然にあの女は、あゝいつたのだらう……たとへ、己の心のうちまで悟つたとしても、己の名を知つてゐる譯がない。また、何處に住んでゐるかさへ知つてゐる譯がない。此處を出れば、もう互に忘れてしまふのだ――と考へながら、Kは、殆んど無意識に前にあつた氷の盛られたコップを取り上げて綴り始めた。冷味が、慄然として骨にまで浸み入るやうであつた。此時、店頭を、汚れた鼠色の洋服を着た藥賣が、日に燒けた黑い顏で、手風琴を鳴らしながら、濁み聲で、妙な節で歌をうたひながら行つた。夕暮方の町には、車が通つた。人の歩みが次第に繁くなり始めた。Kは、獨り、哀しげな手風琴の音に耳を澄して考へ込んだ。

手風琴の鳴音と、歌の聲は、互に縺れ合つて、夕暮方の町を遠くに消えて行つた。

「己は、この社會で、生活の途を見出し得ないで、しかも人一倍本能慾の強い白痴なんだ。己は、あんなやうにどうせ旅へ出て終るの身の上であらう……」と、Kは、口の中で呟いた。而して、錢を盆の上に乘せて、悄然として氷店を出て行つた。忽ち、夕暮の町のどよめきや、人影は、小さな彼の姿を隠した。

（一九一二・八・二〇）



興津彌五右衞門の遺書

鷗外

某儀今年今月今日切腹して相果候事奈何にも唐突の至にて、彌五右衞門奴老耄したるか、亂心したるかと申候者も可有之候へ共、決して左樣の事には無之候。某致仕候てより以來、當國船岡山の西麓に形ばかりなる草庵を營み罷在候へ共、先主人松向寺殿御逝去被遊て後、肥後國八代の城下を引拂ひたる興津の一家は、同國隈本の城下に在住候へば、此遺書御目に觸れ候はば、甚だ慮外の至に候へ共、幸便を以て同家へ御送屆被下度、近隣の方々へ賴入候。某年來桑門同樣の渡世致居候へ共、根性は元の武士なれば、死後の名聞の儀尤大切に存じ、此遺書相認置候事に候。

當庵は斯樣に見苦しく候へば、年末に相迫り相果候を見られ候方々、借財等の爲め自殺候樣御推量被成候事も可有之候へ共、借財等は一切無之、某、

厘毛たりとも他人に迷惑相掛け不申、床の間の脇、押入の中の手箱には、些少ながら金子貯置候へば、茶毗の費用に御當て被下度、是亦賴入候。前文隈本の方へは、某頭を剃りこくり居候へば、爪なりとも少々此遺書に取添へ御遣し被下候はば仕合せ可申候。床の間に並べ有之候御位牌三基は、某が奉公仕りし細川越中守忠興入道宗立三齋殿御事松向寺殿を始とし、同越中守忠利殿御事妙解院殿、同肥後守光尙殿御三方に候へば、御手數ながら粗略に不相成樣、清淨なる火にて御燒滅被下度、是亦賴入候。某が相果候今日は、萬治元戊戌年十二月二日に候へば、去正保二乙酉十二月二日に御逝去被遊候松向寺殿の十三回忌に相當致居候事に候。

某が相果候仔細は、子孫にも承知爲致度候へば、概略左に書殘し候。

最早三十餘年の昔に相成候事に候。寬永元年五月安南船長崎に到着候節、當時松向寺殿は御薙髮被遊候てより三年目なりしが、御茶事に御用被成候珍らしき品買求め候樣被仰含、相役と兩人にて、長崎へ出向候。幸なる事には異なる伽羅の大木渡來致居候。然處其伽羅に本木と末木との二つありて、遙々仙臺より被差下候伊達權中納言殿の役人是非共本木の方を取らんとし、某も同じ本木に望を掛け、互にせり合ひ、次第に値段を附上げ候。

其時相役申候は、假令主命なりとも、香木は無用の翫物に有之、過分の大金を擲候事は不可然、所詮本木を伊達家に讓り、末木を買求めたき由申候。某申候は、某は左樣には存じ不申、主君の申附けられ候は、珍らしき品を買求め參れとの事なるに、此度渡來候品の中にて、第一の珍物は彼伽羅に有之、其

木に本末あれば、本木の方が、尤物中の尤物たること勿論なり、それを手に入れてこそ主命を果すに當るべけれ、伊達家の伊達を增長爲致、本木を讓り候ては、細川家の流を瀆す事と相成可申と候。相役嘲笑ひて、それは力瘤の入れ處が相違せり、一國一城を取るか遣るかと申す場合ならば、飽く迄伊達家に楯を衝くが宜しかるべし、高が四疊半の爐にくべらるる木の切れならずや、それに大金を棄てんこと存じも不寄、主君御自身にてせり合はれ候はば、臣下として諫め止め可申儀なり、假令主君が强ひて本木を手に入れたく思召されんとも、それを遂げさせ申す事阿諛便佞の所爲なるべしと申候。當時未だ三十歲に相成らざる某、此詞を聞きて立腹致候へ共、尙忍んで申候は、それは奈何にも賢人らしき申條なり、乍去某は只主命と申物が大切なるにて、主君あの城を落せと被仰候はゞ、鐵壁なりとも乘取り可申、あの首を取れと被仰候はゞ、鬼神なりとも討果たし可申と同じく、珍らしき品を求め參れと被仰候へば、此上なき名物を求めん所存なり、主命たる以上は、人倫の道に悖り候事は格別、其事柄に立入り候批判がましき儀は無用なりと申候。相役愈嘲笑ひて、お手前とても其の通り、道に悖りたる事はせぬと申さるゝにあらずや、これが武具抔ならば、大金に代ふとも惜しからじ、香木に不相應なる價を出さんとせらるるは、若輩の心得違なりと申候、某申候は、武具と香木との相違は某若輩ながら心得居る、泰勝院殿の御代に、蒲生殿被申候は、細川家には結構なる御道具許多有之由なれば拜見に罷出づべしとの事なり、扨約束せられし當日に相成り、蒲生殿被參候に、泰勝院殿は甲冑刀劍弓鎗の類を陳ねて御見せ被成、蒲生殿意外に被思ながら、一應御覽あり、さて實は茶器拜見致度參上したる次第なりと被申、泰勝院殿御

笑被成、先きには道具と被仰候故、武家の表道具を御覽に入れたり、茶器ならば、それも少々持合せ候とて、始て御取出被成し由、御當家に於かせられては、代々武道の御心掛深くおはしまし、旁歌道茶事迄も堪能に爲渡らるるが、天下に比類なき所ならずや、茶儀は無用の虛禮なりと申さば、國家の大禮、先祖の祭祀も總て虛禮なるべし、我等此度仰を受けたるは茶事に御用に立つべき珍らしき品を求むる外他事なし、これが主命なれば、身命に懸けても果たさでは相成らず、貴殿が香木に大金を出す事不相應なりと被思候は、其道の御心得なき故、一徹に左樣思はるゝならんと申候。相役聞きも果てず、いかにも某は茶事の心得なし、一徹なる武邊者なり、諸藝に堪能なるお手前の表藝が見たしと申すや否や、つと立ち上がり、旅館の床の間なる刀掛より刀を取り、拔打に切附け候。某が刀は違棚の下なる刀掛に掛けあり、手近なる所には何物も無之故、折しも五月の事なれば、燕子花を活けありたる唐金の花瓶を摑みて受留め、飛びしざりて刀を取り、拔合せ、只一打に相役を討果たし候。

斯くて某は即時に伽羅の本木を買取り、杵築へ持歸候。伊達家の役人は無是非末木を買取り、仙臺へ持歸候。某は香木を松向寺殿に爲參、扨御願申候は、主命大切と心得候爲めとは申ながら、御役に立つべき侍一人討果たし候段、恐入候へば、切腹被仰附度と申候。松向寺殿被聞召、某に被仰候は、其方が申條一々尤至極なり、假令香木は貴からずとも、此方が求め參れと申附けたる珍品に相違なければ、大切と心得候事當然なり、總て功利の念を以て物を視候はば、世の中に尊き物は無くなるべし、矧や其方が持歸候伽羅は早速焚試候に、希代の名木なれば「聞く度に珍らしければ郭公いつも初音の心地こそす

れ」と申古歌に本づき、銘を初音と附けたり、斯程の品を求歸候事天晴なり、但被討候侍の子孫遺恨を含居ては不相成と被仰候。斯くて直ちに相役の嫡子を被召、御前に於て盃を被申付、某は彼者と互に意趣を存間敷旨誓言致候。

此より二年目、寛永三年九月六日主上二條の御城へ行幸被遊、妙解院殿へ彼名香を御所望有之、即之を被獻、主上叡感有て、「たぐひありと誰かはいはむ末匂ふ秋より後のしら菊の花」と申古歌の心にて、白菊と爲名附給由承候。某が買求候香木、畏くも至尊の御賞美を被り、御當家の譽と相成候事、不存寄仕合と存じ、落涙候事に候。

乍去一旦切腹と思定候某、竊に時節を相待居候處、御隱居松向寺殿は申に不及、其頃の御當主妙解院殿よりも出格の御引立を蒙り、寛永九年御國替の砌には、松向寺殿の御居城八代に相詰候事と相成、剩へ殿御上京の御供にさへ被召具、繁務に被逐、空しく月日を相送候。其内寛永十四年嶋原征伐と相成候故松向寺殿に御暇相願、妙解院殿の御旗下に加はり、戰場にて一命相果たし可申所存之處、御當主の御武運強く、逆徒の魁首天草四郎時貞を御討取被遊、物數ならぬ某迄恩賞に預り、宿望不相遂、餘命を生延候。

然處寛永十八年妙解院殿不存寄御病氣にて、御父上に先立、御逝去被遊、肥後守殿の御代と相成候。次て正保二年松向寺殿も御逝去被遊、是より先き寛永十三年には、同じ香木の本末を分けて珍重被成候仙臺中納言殿さへ、少林城に於て御逝去被成候。彼末木の香は、「世の中の憂きを身に積む柴舟やたかぬ

先よりこがれ行らん」と古歌の心にて、柴舟と銘し、御珍藏被成候由に候。其後肥後守殿は御年三十一歳にて、慶安二年俄に御逝去被遊候。御臨終の砌、嫡子六丸殿御幼少なれば、大國の領主たらんこと無覺束被思召、領地御返上被成度由、上樣へ被申上候處、泰勝院殿以來の忠勤を被思召、七歳の六丸殿へ本領安堵被仰附候。

某は當時退隱相願、隈本を引拂ひ、當地へ罷越候へ共、六丸殿の御事心に懸かり、責ては御元服被遊候迄、乍餘所御安泰を祈念致度、不識不知許多の歲月を相過し候。

然處去承應二年六丸殿は未だ十一歳におはしながら、越中守に御成被遊、御名告も綱利と賜はり、上樣の御覺目出度由消息有之、乍蔭雀躍候事に候。

最早某が心に懸かり候事毫末も無之、只々老病にて相果候が殘念に有之、今年今月今日殊に御恩顧を蒙候松向寺殿の十三回忌を待得候て、遲馳に御跡を奉慕候。殉死は國家の御制禁なる事、篤と承知候へ共壯年の頃相役を討ちし某が死遲れ候迄なれば、御咎も無之歟と存候。

某平生朋友等無之候へ共、大德寺清宕和尚は年來入懇に致居候へば、此遺書國許へ御遣被下候前に、御見せ被下度、近鄕の方々へ賴入候。

此遺書蠟燭の下にて認居候處、只今燃盡候。最早新に燭火を點候にも不及、窓の雪明りにて、皺腹搔切候程の事は出來可申候。

萬治元戊戌年十二月二日

興津彌五右衛門華押

皆々様

○此擬書は翁草に據つて作つたのであるが、其外は手近にある德川實記と野史とが參考したに過ぎない。皆活板本で、實記は續國史大系本である。翁草に興津が殉死したのは三齋の三回忌だとしてある。併し同時にそれを萬治寛文の頃としてあるのを見れば、これは何かの誤でなくてはならない。三齋の歿年から推せば、三回忌は慶安元年になるからである。そこで改めて萬治元年十三回忌とした。興津が長崎に往つたのは、いつだか分からない。併し初音の香を二條行幸の時、後水尾天皇に上つたと云つてあるから、其行幸のあつた寛永三年より前でなくてはならない。然るに興津は香木を熊本へ持つて歸つたと云つてある。(附)

細川忠利が隈本城主になつたのは寛永九年だから、これも年代が相違してゐる。そこで丁度二條行幸の前寛永元年五月安南國から香木が渡つた事があるので、それを使つて、隈本を杵築に改めた。最後に興津は死んだ時何歳であつたか分からない。併し萬治から溯ると、二條行幸迄に三十年餘立つてゐる。行幸前に役人になつて長崎へ往つた興津であるから、その長崎行が二十代の事だとしても死ぬる時は六十歳位にはなつてゐる筈である。こんな作に考證も事々しいが、他日の遺忘の爲めに只これ丈の事を書き留めて置く。

大正元年十月十八日

郊外にて

田山花袋

　二人はいろいろな處に二人の並んで歩いて行く姿を見た。機械の響の喧しい工場の長い塀について歩いて行つたこともあつた。其門の中の廣場には、荷車を運ぶレールが縱橫についてゐて、事務室らしい入口には、自轉車が一臺橫にして置いてあつた。高い窓からは職工や女工がいつも顏を出してゐた。

　長いトタンの塀を外れると、廣々とした綠の野が二人の前にひらけた。大抵は午後の日影が路傍の榛の樹立を斜に照してゐた。

　時には村の中を屈折して流れて行く小川の岸について、何處までも何處までも歩いて行くことなどもあつた。川は深く地を穿つて流れて居た。橋が架つて居たり、瀬が白く渦を卷いて居たりした。別莊の大きな門などもあつた。ある

日二人は、いつものやうにして其處を歩いてゐた。女は銘仙の袷に白茶の帶をしめて、髮をめづらしく銀杏返に結つてゐた。

停車場から歩いて來ながら、女は、

『今日の髮、何う？』

『さうね……今日は日本髮ね、』男は女の頭を見て、

『何うも似合はないねえ、矢張いつもの方が好いねえ』

『でも、束髮だと、人が見てうるさいんですもの』

女はかう言つて笑つて見せた。

一月ほど前にも、女はそれに似たことを言つた。ある日、女は袴をはかずに遣つて來た。男が不思議にして訊くと、

『でも、人目がうるさいんですもの！』と言つて笑つた。それを思ひ出しながら、男は女と並んで歩いた。

それは五月で、小雨が降つたり止んだりしてゐた。二人とも高い足駄を穿いて、傘をさしてゐた。派手な淺黄の蛇の目傘は殊に女の顏を美しく見せた。

丁度、學校の退けて來る時分で、その川に沿つた細い道を、メリンスの海老茶の袴を穿いた女の兒だの、ヅックの雜嚢を肩にかけた男の兒だのが幾群となく通つて行つた。水溜のある處では、二人は兩側

に離れて立つて、それを通して遣らなければならなかつた。ある幼い女の兒は、水溜の中で、下駄の鼻緒を切つて泣いて居た。

其川の岸には白い花がポツポツ咲いてゐた。低い枝の水に浸いてゐるのもあつた。

「何でせう？　あの白い花は？」

「さうね、卯の花ぢやないかしらん」

「卯の花、さうでせうか」

かう言つて、女は川を覗くやうにして見た。

少し行つた處に、それが固つて白く咲いてゐた。女は、一枝折つて見て『さうね、矢張卯つ木ね。好いわね』かう言つて暫しの間、持つたまゝ歩いてゐたが、短い木立の途切れた處に來ると、そのまゝそれを川の中に投げ入れた。白い花は流れて行つた。

橋の袂に半鐘臺があつた。其處で水は折れ曲つて流れてゐた。向ふの岸には茅葺屋根が二三軒水に臨んで並んでゐて、室の中で、赤い帶をしめた幼い兒が二三人無邪氣に遊んでゐるのが見える……。

二人はこの川に沿つた道をよく歩いた。

この道は、二人に取つては紀念の多い場所であつた。

「本當？」

「……え、……」

「……本當?……」

「………」

熱した心と熱した心とは、其處て初めて接觸した。其時のことを男も女も分明と覺えてゐた。……

百姓らしい爺が、其時二人の傍を掠めて通つて行つた。あとには暫らく誰も通つて行くものもなかつた。川の瀬の音が靜かに聞えた。

近所の森ては駒鳥が啼いた。

半鐘臺から一町ほど行つたところに、路が川緣から下へと下りて行くやうなところがある。其處には畠と林とばかりて、人家らしいものはもうなかつた。細い路は二人を林の中へと導いて行つた。

畠から林へ入らうとする處に、百姓が大根や菜を洗ふ堰らしいものがあつた。そこには綺麗な水が湛えられて、綠葉を透した日影がその上に綾を織つてゐた。嘴の赤い鳥が水を飮んでゐたりした。

そこらには低い灌木の林が多かつた。薄や萓なども繁つてゐた。

二人が草を籍いて座つてゐる處からは、向ふの丘の下の路がよく見えてゐた。青い田を隔てゝ、茅葺屋根が二三軒、その前には、灌木の生えた丸い丘がこんもりと茂つて、日が晴がましく照り渡つた。丘の下の路には、牛乳配達のペンキ塗の車が通つたり、野菜を載せた百姓の荷車が通つたりした。麥稈帽子などの通るのも見えた。

二人は其處で一時間や二時間を過した。女はトランプのクインの繪を表紙にした小形の詩集などを持つて來て、それを男に讀んで聞かせたりした。話しても話しても盡きないといふやうな話が續いた。男は女の前には全く服從してゐるものゝやうに見えた。男は女の言ふことに背くやうなことはしなかつた。

男はいつも輕く點頭きながら、やさしい微笑を顏に湛えて、女の言葉に耳を傾けてゐた。時には食ふ物を二人して持つて來ることがあつた。停車場を出ると、其處に場末の田舍町があつた。二人は其處で餅菓子などを買つて來た。

停車場から出て來た女が、「今日はね、向ふから買つて來てよ」などと言ふ時には、吃度シュウクリームなどがその紫の風呂敷包の中に入つてゐた。

男は大抵袴をはいてゐた。麥稈帽子は、草の上に轉つて、半ば日影を帶びてゐた。紫の風呂敷包はいつも長い間その草の上に置かれてあつた。

二人は默つて歩いた。

女は菫色の袴を穿いて居た。小形の白い蝙蝠傘には、午後の日影が明るく照つた。男の麥稈帽子の上には晴れた空があつた。

二人は疲れたものゝやうに、默つて並んで歩いた。

氣が附くと、二人はある通を歩いてゐた。材木屋があつたり、湯屋があつたり、肴屋があつたりする通だ。工場の烟突が薄く黄い烟を吐いてゐる向ふに、新建の家屋が幾軒ともなく連つて見えてゐた。

『あれ、また通るよ』

肴屋の女房がかう隣の洗濯屋の上さんに話してゐた。

これぱかりではなかつた、二人はよくさういふ言葉に邂逅した。『何處に行くんだらう？』『若いものはあれだから困るねえ』などと言ふ言葉をよく耳にした。

暫く行つてから振返つて見た男は、上さん達の其處に立つてまだ此方を見送つてゐるのを見た。二人は顔を見合して笑つた。けれど其笑顔は長く續かなかつた。

二人は默つて歩いた。

男は山手あたりのある下宿屋から出て來た。何日何時——その時刻の一時間前には、いつもかれは家を出てゐた。かれは一度その時刻に親友に襲はれて、斷るにも斷はれず、一方ならず困つたことがあつた。それに懲りて、いつも早く家を出ることにきめてゐた。また誰も知つてゐるものはなかつた。

でも、下宿屋の女中は、手紙の往復からそれとなく勘付いて、『吉田さん、お沓んなさいよ』などと言つてゐた。肥つた方の女は、『一度伴れて來て見せて下さいよ。眼の保養になつて好いわ』などと言つて笑つた。

別れてから逢ふまで――向ふからは手紙が來るが、此方からは遣ることが出來ないので、男は一方ならず懊惱した。一度、こちらへ切れないで手紙を遣ると、幸にしてそれは家の人の手に觸れずにすんだが、その次き逢つた時、女は、『本當に、それだけはよして頂戴よ。もし、知れやうもんなら、それこそ大變なんだから』かう言つて、もう二度とあゝいふ大膽なことをして呉れるなと泣くやうにして頼んだ。

「ぢや、出さない。その代り、度々手紙をよこして呉れなけりや――」

「それは、出すわ」

かう女は言つて男の顔を見た。

何日何時――

それが手紙の中に書いてある時には、男の心は歡喜に向つて躍つた。下宿からある停留場まで行つて、そこから電車に乘つて、その約束の停車場に行くのであるが、その間の心の狀態は自分でも可笑しいと思ふほどはしやぎ切つてゐた。誰も知らない歡樂をかうして恣にしてゐるといふことが一番先に頭に上つて來て、言ひ知れない得意を總身に感じた。續いて、女の顔、女の眼、女の姿が明かに眼の前を往つたり來たりした。

下宿から電車の停留場に行く間は、矢張半は新開町で、半は田圃といふやうなところであつた。東京に來て一年經つか經たない中に、この間の路が、かれに取つて、かうした鮮かな印象を與へるやうにならうとは、夢にも思ひがけぬことであつた。かれは、其間の路をいつも生々した心持て歩いて行つた。か

れは途中で邂逅す爺さんだの、婆さんだの、大きな丸髷を結つた上さんだの、額に大きな黒子のある肴屋のおやぢだの、さういふ人達を總てはつきりと自分でも不思議に思ふ位に記憶してゐる。林のかげにある赤い小さい祠、芝生を前にした凉しさうな郊外の二階屋、谷を隔てゝ向ふに見える丘――かれは女の幻影を頭に浮べながら、さういふ間の路を通つて行つた。

時には時間が早いので、畠の中の祠の境内に入つて見たりする。そこには杉の大きい樹の中に小さな祠があるばかりで、四邊には人氣といふものが殆どなかつた。かれは其處からわざ〳〵路もない畠の中を通つて、好奇にも方向を定めて停留場の方へ歩き出して見たりした。近所にある陸軍の射的場からは、銃の音が空氣を破つて、絶えずヒユー〳〵と聞えて居た。

何うかすると、束髪に結つた女學生風の女を伴れて、男がひよつくり眼の前に顯はれて來ることなどもあつた。さういふ時には、かれは思はず微笑した。かれは自分の女をその女に引比べながら歩いた。開けて行く郊外は、其處此處に新しい家屋を見せてゐた。高い二階屋の欄干には、晴れた日を受けて、紅裏の夜着などの干されてあるのが見えた。

停留場は高いところにあつた。階段の上にある驛長室の周圍には、驛夫達の洋服姿がいつも鮮かに見えて居た。朝など便所の手洗水を驛夫の取換へてゐる時などもあつた。かれは切符を買つて、そしてプラツトフオムに行つて腰を掛けて待つて居た。かれは何んなに深く心の歡樂を其處に感じたであらう？かれは十五分毎に來る電車をさへ待遠しく思つた。

電車はかれとかれの心とを載せて飛ぶが如くに駛つた。

向ふの停留場には、女は大抵は來て待つて居た。晴々したやうな色の白い美しい女の顔は、男の電車から下りるを見ると、そのまゝにつと笑つて、そして先に立つて、改札口の方に出て行つた。男はあとからついて行つた。

「待つて?」

「いゝえ……十分位よ」

かう言ふ會話の取交されるのは、停留場を出て、少し離れた處に行つてからであつた。

時には三十分ほど男が待つて居ることなどがないではなかつた。其時は、男はプラットフオムに腰を掛けて、向ふ側にかけてある大きな時計の針の動くのや、硝子戸の中で驛員達が熱心に事務に鞅掌してゐるのや、退屈さうにして待つてゐる乘客などをそれとなく見て居た。……やがて女の小刻な靴の音は上から聞えて來た。

其日は何うしてか女は遣つて來なかつた。何日の何時――幾度手紙を出して見ても、それに相違ないのに……。何うしたのだらう? 何か事が起つたのではないか? かう思ふと、男は居ても立つても居られないやうな氣がした。驛員達にあやしまれるほど長い間かれは其處を往つたり來たりしてゐた。

この次ぎのにも來なかつたら、もう歸らうと思つた電車も行き過ぎて了つた。かれは猶暫く其處に立つてゐた。

一時間ほどしてから、男の姿は女の寄宿してゐる親戚の家のあたりに見えてゐた。それは見附内の濠の土手に添つたやうな位置にある大きな二階建の家であつた。栽込の梅だの寒山竹だの高野槇だのが外からも見えてゐた。二階の六疊の一間、そこが女の居る室で、そこからは富士が見えたり、士官學校の庭が見えたりすることがよく手紙に書いてあつた。しかし今は障子がピッシャリ閉つてゐた。

まさか訪問することも出來ないので、二三十分、そこをうろついてから、佗しい心持でかれは歸つて來た。

まだ十町もあらうと思はれる處から、雨に降られて、ぬれ鼠になつて、かれはその下宿に驅け込んだ。

荷車だの乘合馬車だの俥だののゴタゴタ通る場末の町の通を二人は歩いて來た。いつもの野の逍遙からの歸途であつた。

角に、壽司の招牌の出てゐる二階屋が一軒あつた。

「あそこの二階は上れるわね」

「何うだか」

「きいて見ませうか」かう言つて、女は男の顔を見て、「あなた、お中が空いたでせう?」

「それほどではないけれど……少しは減りましたね」

「聞いて見ませうね、ね?」

から言つたが、女はヅカヅカとその店前に入つて行つた。赤毛布の緣臺て氷を飮んでゐた客は、態いたやうに眼を瞬つて、女の派手な姿を見た。

「二階が明いてゐて？」

「入らつしやいまし、……明いてをります」

四十ばかりになる主婦は、から言つて心持顏を赧くした綺麗な娘と、前に立つてゐる麥稈帽子の男とを見た。

女は一歩二歩重たい重草履を引摺つて、男の方へ戻つて行つて、何か一言二言言ひ交したが、そのまゝ緣臺の傍を通つて、狹い階梯を二階へと上つて行つた。男もつゞいて上つて行つた。

二階は六疊二間て、それても思つたほど汚なくはなかつた。奧の一間は、田圃に面してゐて、稻葉を渡つて來る風は涼しく軒の風鈴を鳴した。

「割合に綺麗ね」

女はから言つて、さも疲れたやうに其處に座つたが、不圖思附いたやうに、「私、袴、ぬぐわ」

「僕も取らう」

主婦が莞爾した顏を其處に出した時には、二人はもう袴をぬいて、ハンケチて汗を拭いたりなどしてゐた。

すしを二人前頼んでから、

「すこし涼ませて下さいな」
女がかう言つて、紙につゝんだ五十錢銀貨を主婦の手に渡すと、
「えゝえゝ、もうどうぞ御ゆつくり休んで入らつしやいまし。何うせ、この通り明いてをるんですから」
主婦はかう愛憎よく言つて、そゝくさと下りて行つて了つた。
二人は茶を飮んだり、サイダを飮んだりした。田圃から來る涼しい風は、二人の肌に生々した心持を蘇らせるに十分であつた。女は欄干のところにその後姿を見せて、長い間立つて靑々した田圃を見て居た。
その卷帶した立姿を、男は寢ころんで、此方から見て居た。
「もう、野原の散步も暑いわね」
女がこんなことを言つたのを、男はその時思ひ出してゐた。
二人の間にはいろ〳〵なことがあつた。穩かな靜かな仲の好い時ばかりではなかつた。をりをり二人は物爭ひをした。
其日も何うしたはづみか、打解けた氣分になれなかつた。
「それぢや、私の勝手にするわ」
「その方が好い」
「それぢや本當にさうしてよ。…‥貴郞、あとて、何か苦情を言つたッて厭よ」

「そんなことはない」

暑い野道を歩きながら、二人はこんなことを話した。

もう知らない……かう思つて、女はすた〳〵先に歩いてた。

勝手にしろ……かう男は思ひながら、そのあとから跟いて行つた。

引いたり寄せたりする波のやうに、二人の心は合つたり離れたりした。男は歩きながら「歸つて好いと言つたが、果して歸つて好いだらうか。一月なり二月なり、逢はずに居ることが出來るだらうか。またあの女を……男を知つたあの女を一月なり二月なり自分から離して置くことが出來るだらうか？　そんなことは駄目だ。かうなつた上では、もう何うすることも出來ないのだ。離れることなどが、さう口で言ふやうに容易に出來るものではない。」かう思ひながら、暑いヂリヂリと照り附ける田圃道を、かれは女に引摺られるやうな心持て歩いて來た。

前に歩いて行く女は、强い烈しい色彩に似た刺戟を、かれの眼に、心に、肉體に與へた。

眼には眩惑させられるやうな强い光線が來た。心には痲痺させられるやうな烈しい情熱が燃えた。肉體には拘束させられるやうなある恐ろしい力が働いた。暑い日影に蒸された草のやうな匂ひが、絕えずかれの鼻の前にあつた……。

知らぬ顏をして、サッサと歩いて行く女が憎かつた。その時ほど憎いと思つたことは今までになかつた位だ。

「勝手にしろ……」

かれは口に出してもう一度言つて見た。しかしそれと反對に、涙が胸にこみ上げて來た。その長い暑い路を頭に繰返しながら、かれは、欄干のところに立つてゐる女の後姿を長い間見てゐた。

女はやがて此方に來て、自墮落な座り方をして、サイダの殘りを飲んだ。

「僕、一本ビールを飲むよ」

「召上れな」

女は笑つてゐた。長い路を離れ〳〵に歩いて來たことはもう忘れてゐるやうに見えた。何處となく心持好ささうに莞爾〳〵してゐた。

「何い思つてやしないだらうね、……僕は惡かつた！」

こんからかつた心の糸はかうした言葉で見る見る解けて行つた。『何とも思ひやしないけれど……あなたもあんまり解らないんですもの』かう言つた女の顏には、打解けた優しい心がもう十分に現はれてゐた。

二人は顏を見合せて默つて居た。

二人はすしを食つたり、ビールを飲んだりした。女は男のコップを取つて、『私にも一杯頂戴！』笑ひながら、男のついだビールをぐつと一呼吸に飲干した。

上さんも誰も二階にあがつて來やうとはしなかつた。わざと避けて上つて來ないやうにも思はれた。

「割合に靜かな家だね？」こんなことを言つて、男は四邊を眴した。階梯の處から下を覗いても見た。

「何してゝ？」
女は小聲で訊く。
「誰も居ない、上さんも居ない」
男の顏は赤くなつてゐる。
夏の日中の靜けさといふやうな靜けさが暫し四邊を領してゐた。通りには、荷車がガタガタと通つて行つた。
暫してから、今度は男の顏が、裏の欄干のところに見えた。行水の土竈からは、烟が淡く颺つてゐた。おしろい草が毒々しい紅い色を其處に鮮かに見せて居た。
女の顏もやがて其處に來て並んだ。
歸る時、女は帶の間から小さながま口を出して勘定をした。
「國に歸つて來なくつてはならないかもしれないわ」
「何うして？」
「だッて、親類でもやかましく言ふんですもの。何だか、私のことを少し感附いて來たんぢやないかと思ふわ。この間のやうに遲く歸つたりするのが惡るいんだわ」

「何かそんな風な様子があるのかえ」
「いゝえ、まだ大丈夫は大丈夫ですけれどね、……少し惡い方に想像すれば、さうかと思はれることもあるわ」
から言つて、「國に歸るのは、厭だけれど……」
「歸らなくつたッて好いんだらう。」
女は考へて、
「それは無理に歸れとも言はないけれど……國の方からも、度々手紙が來てるんだから……。それに、學校の方をもよく怠けるもんだから、保證人の方に何とか學校から言つて來たらしいわ」
思出したやうに、
「此間も伯父からそんなことを言はれてよ。雪子はそんなに學校を休むのかえ。から言ふから、私、默つて聞いてゐると、そんな筈はないがね、と、から伯父が言ふんでせう。私、仕方がないから、此間中、少し勉強しやうと思つて、休んだことはありますッて、わざと落附いて言つたわ。でも、伯父はそんなに疑つて居ないから好いけれど……此間のやうに遲く歸るのが、一番惡いのよ」
「それは知つてるけれど……」から言つて男は笑つて、「つい、別れるのがいやなもんだからねえ。それにあの夜は好い月だつたから」
「さうだッたわね」

二人は其夜のことを思出した。

二人の前には、明らかな月があつた。池の水には兩側の茶屋の灯影が長くチラ〳〵と落ちて居た。松や杉などの樹立の黒い影の中から、二人つれの男女が幾組となく出て行つた。ハアモニカを何處かで吹いてゐるのが聞えた。二人は池に臨んだ茶屋の奥の一間に遲くまで居た。

「彼處は好いわね。晝間でも好いんでせう、彼處は?」

「それは好いさ」男はかう言つて考へて、「でも金がかゝるからな」

「金なんか、好いわ」

「でも……」

「でも、本當に、此頃は何に金をつかふんだらうつて、思つてるかも知れないわ。」

「餘りつかはん方が好いよ」

「でも、今日は行つて見ませうよ」

「それは行つても好いけれど」

二人は貯水場の裏のやうなところを通つて行つた。

葡萄棚の下には、凉しさうに縁臺が一箇置いてあつた。池にかけた長い橋の上には、束髮の女が子供に金魚を見せたりなどしてゐた。午後の日影は、池に臨んだ凉棚の日蔽ひに照つてゐた。

瀧の音が緣を撼して聞えて來た。

「お風呂は？」

かう言うて、色の白い愛嬌のある女中が浴衣を運んで來た。

「何うです、入りませんか」

男がかう言ふと、

「私、澤山」

「でも、涼しくなりますよ」

一種の眼て、女中に見られるのが、女には辛く不愉快であるらしかつた。風呂に入るなどといふ、さうした暢氣な氣分には容易になれなかつた。

「僕は入つて來るよ」

かう言つて、男は出て行つた。

其間を、女は立つて彼方此方と徜した。思ひもかけない世の中のことが、脅すやうに女の心を襲つて來た。めづらしいやうな、恐しいやうな、樂しいやうな心持……その中になんとなく浸つて了つてゐるやうな不安な心持……男にすつかり騙されて居るのではないかと思ふやうな心持……。

氣が附くと、かうした茶屋にゐる女中の心持などを女はいつか考へてゐた。

「あゝ好い心持だ」

暫くして出て來た男の顏は赤く綺麗になつて居た。派手な浴衣は、一層男の姿を引立たせて見せた。
『入つて來ない？』
『でも、何だか變だわ』
『變なことはありアしないよ』
『でも、ねえ』
『なアに、誰も居やしない』
『凉しさうは凉しさうね』
『だから入つてゐらつしやいと言ふのに』
女は猶暫く躊躇したゐたが、
『ぢや、入つて來るわ』
風呂場は裏の畑の見えるやうなところにあつた。女が衣物を脫がうとしてゐると、女中は其處に浴衣を持つて來て、何彼と世話をして呉れた。白粉などを持つて來て貸して呉れた。
糊のついたゴツゴツした浴衣姿て、女は湯殿に置いてある鏡の前に長い間立つておつくりをしてゐた。
やがて入つて來て、
『變ね』
『何が？』

「だつて、こんな袖ですもの」

かう言つて、女はひらいた袖を男に見せた。二人は笑つた。

「人が見たら、隨分可笑しいでせうね」

「そんなこと思つたッて仕方がない」

「それもさうね」

二人はさうした浴衣姿で、日の暮れるのをも忘れて其處で遊んで居た。

二人が其處を出たのは、暗くなつてから一時間ほど經つた後であつた。途中の足元が惡いからと云つて、茶屋では、女中がわざ〳〵坂の上の往還まで送つて來て吳れた。そしてそこで小さな玩具のやうな提燈を男に渡した。

「貰つて行つて好いのかえ、此は」

「えゝえゝ、何うぞ……」女中はかう言つて、「では御機嫌よう。またお近い中に」

「や、御苦勞」

二人は闇の道にその小さい提燈を振り翳しながら並んで步いて行つた。野の叢には虫の音が雨のやうに聞えてゐた。

秋が來た。

樂しい二人の戀は依然として續いて居た。何等異つたことはなかつた。時には、女が男の顔を長い間見詰めてゐたり、男が女の眼色を讀まうとしたりするやうなことはないでもないが――最早始めの時のやうに私語にのみ戀が耗きて了ふやうな無邪氣な間柄ではなくつて了つては居るが、それでも二人はまだ離れたり覺めたりすることを考へて見たことなどはなかつた。

でも、何うかすると、女は不機嫌な顔をして歩いて居た。何となく沈んだやうな様子をしてゐることもあつた。男はまた男で、同じやうな戀の經過が何だか飽足らないといふやうな心持になつてゐた。

「何うかしたの？」

「いゝえ」

「でも、何だか顔色がわるい」

「少しお中が痛いのよ。何でもないのよ」男から訊かれる時には、女はかういつて、それとなくまぎらした。時にはまた女が男の顔附を氣にすることなどもないではなかつた。

「男ッて言ふものは本當に水臭いわねえ」

「何うして？」

「聞かなくつても、解つてゐますよ。人の心も知らないで……」

「だつて、解かりやしない。言はないで、解りさうなもんだッて、それは無理だよ」

「だッてちやんと解つてゐる癖に……」

「何が？」

「聞くまでもないぢやなくつて……」

女は時々今までの夢から覺めたやうに、「本當に、私達は何うなるんてせうねえ！　考へると心配だわ」こんなことを言つて、男からある滿足な答を待設けた。しかし男は何も言はなかつた。

何うした時のはつみてさういふ心持になつたのか忘れたが、二人はある夜、貯水池の閘門の土手の上に立つてゐたことがあつた。大きな櫟の樹の上には、月がその明るい影を現はして、その光りを廣い野に一面に漲らしてゐた。夕霧が白く田の上に沈んて居た。

二つの影は、月の光の滿ち渡つた土手の上を幾度となく往つたり來たりした。二人は默つて何も言はなかつた。男にも女にも口に上されない苦悶があつた。

閘門に入らうとする處て、餘つた水は一方の堰の方へと凄しい勢て落ちて行つた。渦を卷いた水は月の光を受けて白く泡立つて見えてゐた。

水聲は林を撼して聞かれた。

男は堰の前に立つて、長い間、凄じく碎ける水のさまを見てゐた。「いつそ、二人て死んだならば！」こんなことを考へながら、じつとして立つてゐた。

傍に來た女の顏は蒼白かつた。

「綺麗ね」

暫くしてから、女は始めて口を開いた。「此處から飛び込んだら、死ねるでせうか？」

「それは死ねるさ！」

かう言つて、急に、

「死なうか？」

「死にませうか」女の顏には月の光を帶びた白い笑が漂つて見えた。「別れる位なら、死んだ方が好いわ」

二人は堅く身を寄せた。欷歔が夜の空氣に震へるやうに聞えた。

思ひ出すと、其頃は、二人の戀が外部から段々壓迫されるやうな具合になつてゐた。女は、もう以前のやうに自由に家を出ることが出來なかつた。

國からの女の學資の監督も嚴重になつた。男は女に逢ふための費用をつくる爲めに、自分の唯一の財産だとまで言つた洋書を賣らなければならないやうな境遇になつてゐた。

「本も惜しいが、それよりも生きた女の方が猶大切だ！」

こんなことを男は考へた。

血の出るやうな高い金を出して買つた洋書を、何の價値もないやうに、二足三文に値をつけて買つて行く本屋の顏が此上もなく憎かつた。女からは心の張りつめた涙の痕のにじんだ手紙がよく來た。ある時は、その費用をつくる爲めに、友達に頼んで、衣物を大急ぎて質に典れて貰はなければならないこと

もあつた。
思ひもかけないない障碍が來て、二人のなま温い戀の心持は全く一變した。十日前までは、かうした張詰めた心を女が示して來やうとは男には何うしても思はれなかつた。
今ては、途中のさまぐの光景やら人物やらが、全く異なつた色を持つて、かれを迎へるやうになつた。林の鳥の聲が二人の戀の歡樂を歌ふもののやうに思はれた昔と今との相違を男は深く考へた。
曾て歡喜に躍つた男の心は、今は不安と嫉妬と屈辱とに向つて燃えた。女は國から涌いたやうに起つて來た結婚談を詳しく男に知らせてよこした。
相談がある！●かう言つて其日女は會合の場合を知らせて來た。
いつもの停留場ては、二人の姿はもう餘り親しく人々に知られ過ぎてゐた。二人は遠い停留場を選んだ。
女の白い顏が、さびしさうにして、その停留場の中に見えて居るのを見た時には、男は思はず驅寄つて行つたほとのあつい強い情熱を感じた。
「隨分待つてよ。もう來ないかと思つてよ」
女はかう言つて傍に寄つて來た。
停車場からの路は、廣い野原へと向つてついて居た。二人の爲めには人目のない廣い野原、其處には林もあれば、深い叢もあつた。

女は一伍十什を話した。

『何うしたら好いてせう？』

『困つたね』

『結婚して下さる？』

『それはするがね——』

男の煮え切らない言葉をもどかしさうに、

『本當に、貴郎の心を話して下さいよ。何うしてさう水臭いの？』

『結婚が出來るやうな身分なら、文句はないんだけれど——』

『出來る、出來ないが問題ではないのよ。出來ると言つて下さりさへすれや好いゝのよ。』男の默つてゐるのを見て、『矢張さうね、始めからその積てゐるのね。玩弄(おもちや)にするつもりなのね』

女の眼には涙が滲み出して居た。

『て、結婚するとすれば——』

かう男が歩きながら言ひかけると、

『貴郎がしつかりしてゐて下されば、何のやうにも出來てよ。私、何ういふ決心でもするわ』

『僕だつて、決心してるサ』

『さう……嬉しい』

女は心から嬉しさうな顏附をした。
鋤を荷つた百姓が此方を見い〳〵摩れ違つて行つた。
二人はもうのんきに野原を歩いてゐる人達ではなかつた。話しても話してもその問題は盡きやうともしなかつた。
綺麗な水の湛えてある池の中島に、古い辨天の祠があつた。その欄干に腰をかけた二人の姿は長い間其處を離れやうともしなかつた。
林では百舌鳥が鳴いた。
男は今更ながら、二人の間柄を思ひ廻して見るといふやうな人であつた。其處にも此處にも二人の姿が鮮かに浮んで見えた。女に逢ふことが樂しみて、出かけて行つた時と今では全く心持が違つてゐた。
「もう離れられない」
時々男はかう思つて吐息を吐いた。
結婚——其處まで行かなければ女は承知しないものだと謂ふことをもかれは兼て聞いて知つてゐた。結婚の話が出るやうになつては、歡樂はもうお終ひだ。誰かかう言つたのをも記憶してゐた。
しかし、男と女との複雜した心持は、さうした他人の話や經驗では十分に解らないものだといふことを男は段々意識して來た。男は吐息を吐いた。
「何うかして?」

心配さうに女が訊ねた。すぐ、言葉をついて、『本當に心を話して下さいなね、私、本當に決心しなけりやならないんですから……いゝえ、さうぢやないのよ。國に歸りたいことなどはちつともありやしないわ。』

『でも國に歸らうとも思つてゐないこともないんだらう?』冷かすやうに男が言ふと、女はきつとなつて、

『ぢや、貴郎別れるつもり!』

其日、二人は川に添つて歩いた。川は深く地を穿つて、屈曲して流れてゐた。

『この川は二人には初めから縁があるのね』

『さうね、この川の下流ね、彼處の半鐘のある處の川は?』

『忘れられない川だ!』

『本當ね』

川はさゝやかな音を立てゝ靜かに緩やかに流れてゐた。土手には、薄だの、萱だの、木萩だの、われもかうだのが、一面に生えてゐた。五間位間を置いて栽ゑられた櫻は薄く紅葉してゐた。

『本當に何うして下さるの?』

『そんなことは心配しなくたつて好いぢやないか。今更別れることの出來る間ぢやないし……』

「さう、それぢやさう思つてよ、好くつてねえ?」

男は點頭いて見せた。

女は岸に咲いてゐる桔梗の花を一つ折つて髮に挿した。それから女は別の人のやうになつてはしやぎ出した。

橋の袂に小さい茶店があつた。男は五六年前、其處に來たことがあつた。奥に一寸した小綺麗な一間があるのを知つてゐた。二人が入つて行くと、四十位の上さんが莞爾として迎へた。

其日、女は目に立つやうな派手な扮裝をして居た。白い花のボツボツ出てゐる模様の襟は、ことに四邊に際立つて見えた。

古い錦畫を張つた襖を後にして、白い顏を薄暗い空氣の中に浮出させた女の姿は、いつまでも分明と男の頭に殘つてゐた。

いつも男は停留場で女に別れた。『ぢや、左様なら――』かう言つて、男が停留場の階段を上つて行つた。女は下の電車に乘るのが例であつた。

上のプラツトフオムからは、下のプラツトフオムが手に取るやうに見えた。二人は電車の來る間、互に其處に顏を見交してゐた。男は電柱に身を凭せかけて下を見てゐた。

女の方の電車の早い時もあれば、男の方の早い時もある。女の方が早い時には、女はいつも指を口に

當てゝ、別れのキスの心を示して、そして電車に乗つて行つた。電車の窓から此方を見てゐた。男の方の電車の早い時には、男はもう一度女の方を見て、帽子を取つて、輕く會釋して、そして別れた。

雨が斜に電車の窓を掠めてゐる時などもあつた。

電車て別れて了ふのが惜しいと云つて、もう一度其處等をブラフラ歩いて見ることなどもあつた。其時には、二人はきまつて村の方へと歩いて行つた。

其處には汽車の踏切があつて、レールには明るい日が照つてゐた。年を取つた番人が白い旗を出してゐると、砂利を載せた貨車が幾つも幾つも重さうに地響をして通つて行つた。最後の車には車掌が青い旗を持つて顔を出してゐた。

それから少し行つた處には、小さい川が流れて、其岸では、布を洗つてゐる男などがあつた。レールに沿つた道には、蔓草が一面に蔓つてゐた。

ペンキ塗の西洋造の二階屋だの、周圍に建仁寺垣を結ひ廻した大きな門構の家屋などが到るところにあつた。そこを通りぬけて段々奥に入つて行くと、路は榛の疎らな林のある處に出て行つた。

葎の絡みついた垣の中には、廣々とした綠の草が見渡された。

「御料地だね」

「さう？此處が御料地……好いゝわねえ、淸々(せいせい)して！」

女は垣の中を覗いて見た。

「此處等に住んでゐると好いわね」

「さうだね、……いつそ、此處に一軒、貸屋を見つけやうか」

「さうすれば好いわね」

「でも……」

「さうなさいよ」

女は好いことを思ひ附いたといふやうに、「家を借りて自炊をなさる方が、經濟よ」

「それでも自炊は閉口だね」

「私が手傳ひに來るわ」

こんなことを言つて二人は笑つた。

丁度其處に、御料地の垣に向つて、あたりからかけ離れた三間位の家屋が一軒あつた。通り過ぎやうとした二人はふと貸家札の張つてあるのに目を附けた。

「そら、貸家があつてよ。靜かな好さうな家ぢやなくつて？」

「さうだね」

「見て行きませうか」

「見て行つても好い」

て、二人は其中に入つて見ることにした。大家が遠いので、家を預つてゐる二三軒向ふの四十二三の元氣な上さんが、鍵を持つて來て戶を明けて與れた。六疊、二疊、四疊半――それて家賃は五圓だといふ。上さんは捌けた調子て、「あなた方がお入りになるんなら、それは持つて來いては御座いませんか。近所は喧しくなし、別に煩さい交際もありませんし、本當に、それは靜かて御座いますよ」などと言つた。二人は顏を見合せて笑つた。

女は家といふものが珍らしいといふ風に、押入を開けて見たり、勝手元に下りて行つて見たりした。花壇の跡が庭にあるのに眼をつけて、『元ゐた人は、花を好きな人ね』などと男に言つた。あたりから懸離れてゐるのが、男にも氣に入つたらしかつた。上さんをつかまへて、大家の番地だの、近所の樣子だのを細かに訊いた。

『何うも御面倒てした』から言つて二人はやがて其處から出て來た。

暫く來てから、女は、

「好いわね。あそこをお貸りなさいよ。下宿に居るよりはそれは餘程好いわ」

「鳥渡靜かな家だね」

「隱れ家には丁度好いわ。今はまだ駄目だけれど、段々私も來て手傳ふやうにするは。それまて自炊してゐらつしやいよ」

「國に歸る筈ぢやないか」

男がわざと平氣な顏をして言ふと、

「あんなこと言つて！　誰が、國になんか歸るッて言つて？」

「でも家を持つては今のやうに暢氣てはゐられないからね」

「私も家賃位出すわ」

女はそんな處まで話を持つて行つた。

隱れ家！靜かな隱れ家！それが一番多く男の心を動かした。自炊の面倒を思はぬでもなかつた。女の束縛といふことを考へぬでもなかつた。しかし、世離れた野末の家に、人目を避けて、戀を樂しむことが出來るといふことが、何よりも男には望ましかつた。六疊の一間、四疊半の一間、其處に女を置いて、男はいろいろな想像に耽つた。二人はこれまでにも人目を兼ねることに就いてのみ絕えず心を苦しめて來た。何處に行つても、自由に戀を語ることが出來ないのが何よりも不足であつた。であるのに、世離れたそのかくれ家！

「私も家賃位出すわ」

かう言つた女の言葉をも男は繰返して考へて見た。そればかりではなかつた。其後女からも、度々手紙で勸めて來た。男は何の氣なしに出かけたその散步が、かれの生活の一轉化をつくる動機となつたことを幾度も考へずには居られなかつた。

秋雨のしと〳〵と降る日、新しい桐油をかけた一輛の荷車は、その御料地の傍の小さな家の前に置かれてあつた。小さな木戸は半ば開けられて、勝手元の窓からは、薄い烟が細々と立つてゐた。

車夫は、桐油の上に十文字にかけた細引を解いて、本箱だの、机だの、行李だのを家の中に運んで行つた。上り端には男が立つてゐて、それをまた奥の方へと運んで行つた。

簞笥もない荷物は、時の間に片附けられて了つた。男は机を六疊の床の間の傍に並べて置いて、それに向つて座つて、獨りぼんやり庭の方を見て居た。

勝手元では、買つたばかりの七輪に、火が活々と起きて、土瓶の口から湯氣がく白く颺つてゐた。

賃錢を貰つて、車夫が歸つて行つてから、三十分ほどはかうして靜かに經つて行つた。雨は少し音を立てゝ降るやうになつて來た。

勝手の戸を開ける氣勢がしたので、立つて行つて見ると、それは賴んで來た蕎麥屋のかつぎであつた。「其處と、彼處と、それから向ふが一軒――」こんなことを言つて男は敎へてやつた。

早く來る筈の女はまだ來なかつた。

蕎麥を食はうと思つたが、腹が減つて居ないので、そのまゝそれを傍に置いて、また机の前に座つた。

御料地の大きな樹に降りかゝる雨の脚は長く白く此方から見えた。

やがて格子が明いて、女がにこ〳〵して入つて來た。

『つい、遲くなつて了つて……待つたてせう。出られなかつたんてすもの』
それても急いて遣つて來たと見えて、額には汗が滲んてゐた。
『停留場て、車に乘らうと思つたんてすけれど、生憎、今日はないんてすもの……隨分急いて來たわ』
始めて少し落附いたといふやうに四邊を眴して、『いゝわねえ、靜かて』から言つて、笑つて男の顏を見た。
女には何だかこれが自分の家だと言ふやうに思はれて嬉しかつた。
女は押入を明けたり、勝手の方に行つて見たりした。そこに遣つて來た酒屋の番頭は、竈も釜も勝手道具も何も置いてない、ガランとした臺所に、束髮に結つた派手な銘仙の衣物を着た色の白い女の立つて居るのを不思議にした。
『御近所の酒屋て御座います。元の方にも御贔負になりましたから……』
から言つて酒屋の番頭は新しい帳面を置いて行つた。

近所てはいろいろな噂をした。
『奥さんぢやないんてすッて……まだ學校に通つてゐる女學生なんだッて、あきれたものねえ』
から一人が言ふと、
『この春あたり一緒にそこらをよく歩いてゐた男と女よ、あれは……。私など、よく逢つたわ。いつて

も、向ふの通りを通つて、上水の方に行つたわ」
それと知つてゐる若い娘達はかう言つて調子を合せた。
「それて、泊つて行くの？」
「いゝえ、泊つては行かないやうですよ。夜は遲くなつても歸つて行くやうですよ。その證據には、朝はついぞ見たことがありませんもの……さうね、男はね？　何をしてゐる人ですかね。一日、家に入つてゐて、滅多に外に出ることなどもないやうですよ。」
「何か始終書いてる人だッて言ふぢやありませんか」
傍からかう他の一人が言つた。
「それて毎日來るの？」
「大抵來るやうですよ」
「隨分大變ね。その位なら、一緒になつて了へば好いのに……」
「本當ね」
一人の若い娘は、「學校に行くッて、毎日辨當を持つて出て來るんですッて。そして、お午の辨當はいつてもあそこて食べるんですッて……隨分ね」
面白さうに聲を立てゝ笑つた。
秋は段々深くなつて行つた。夜露が深く草に置いて、虫の音もたえだえになつた。月の明るい夜が幾

夜が續くと、今度は雨がしと〳〵と降つた。時にはあたりが見えないほど深く夜霧の籠めることなどもあつた。二人の戀は依然として續いてゐた。女は停留場から、レールに添つて、毎日そのかくれ家へと這つて來た。

關東大賣捌所

東京神田表神保町 東京堂
仝 神田裏神保町 上田屋
仝 京橋尾張町 東海堂
仝 京橋元數寄屋町 北隆館
仝 京橋西紺屋町 良明堂
仝 日本橋本石町 至誠堂

關西大賣捌所

大阪東梅田町 盛文館
仝 京町堀 太華堂
京都佛光寺 東枝書肆

○定價 金貳拾五錢郵稅金貳錢（海外郵稅拾貳錢 但清國を除く）

冊數／國別	內國	外國	
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢	以上郵稅共
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢	

▲但 新年號春秋二期附錄號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五冊分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替 にて御送金の場合は **本鄉西片町十番地反省社** と指定し拂渡局を **東京市東片町局** と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金 口座は**東京三十四番**なり、これにより御送金の方は外に**登記料一錢**を加へらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵券代用 必ず**一割增**の事

一集金郵便 の便法を利用せらるゝ方は、**座ながらにして誌代の拂込** をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記料金を加へたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに共取扱をなすべし

一金一圓迄 金五錢
一金三圓迄 金六錢
一金五圓迄 金七錢
（集金委托料及送達料）

一受領證請求 は必ず返信料金を要す

大正元年九月廿七日印刷納本
大正元年十月一日發行
（禁轉載）

發行兼編輯人 麻田駒之助
印刷人 藤本兼吉

東京市本鄉區駒込西片町十番地
發行所 反省社
振替口座東京三十四番 電話下谷九一九 電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所 秀英舍第一工場

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By The Hansei-sha Publishing Co., Published Monthly.
Terms of Subscription: annual subscription yen 5.25; Single copy 37 sen including postage. Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告は掲載を謝絶す